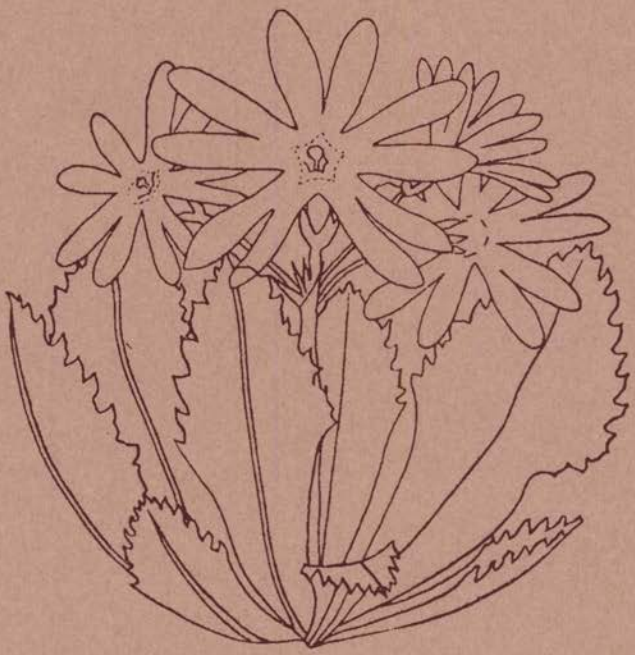
岳山

第二十二年

第一號



奥羽號

第二

奥羽號

第二

山岳

第二十二年第一號　昭和二年十月發行

目次

表紙　ミチノクコザクラ　武田久吉氏筆

本欄

八甲田山の思ひ出　館脇操　一頁
八甲田山植物瞥見　館脇操　一六
岩手山御苗代附近の地形について　武田久吉　五一
岩手山　館脇操　五六
早池峯山紀行　岡田喜一　七七
朝日連峯の縱走　安齋徹　九二

圖版

○雪の中尾根と大朝日岳の絶頂　對頁
○酸ヶ湯の東南蔦道より仰げる八甲田大岳○荒川の上流より右岸の植物景と東北に八甲田大　卷頭

岳を望む　四
○谷池溫泉上手路傍にて積雪の爲め斜生せるハウチハカヘデ及びホヽノキ等○谷地溫泉上手路傍の乾燥地に群生せるオホバショリマ　八
○蔦道小柴森附近のブナ林○蔦湯沼沿岸の小濕原を圍むケヤマハンノキとサウシカンバの林　一二
○通天橋附近蔦川右岸の森林の一部○通天橋附近蔦川右岸の森林の一部　一六
○谷地溫泉の西南猿倉の下方沿道約八五〇米の地點にて濕潤地乾燥して植生に變化を及ぼせる狀態　二〇
○八甲田大岳南面の放射谷に沿ひてオホシラビソ・ナヽカマド・ミヤマハンノキ・サウシカンバ等がハヒマツ帶に突入する狀態○八甲田大岳梯子登りの灌木林　二四
○ウラジロヤウラク○井戸湯沼に面せる裸地に植民するシラタマノキ・ガンカウラン・コメスキとイワウゴケ　二八
○櫻沼附近にてハヒマツに混じて生ぜるチシマザクラ○櫻沼附近の濕性斜面に生ぜるアヲノツガザクラ　三二
○八甲田大岳背面中腹の松島○赤倉岳南面に於ける濕原に生ぜるハヒマツの甲拆　三六
○赤倉沼○赤倉沼上方の濕性御花畑　四〇
○赤倉沼上方火口東南壁に於てハヒマツ・ナヽカマド・サヽ○赤倉沼上方の濕性御花畑が中性草原に變じ更にハヒマツの侵入を蒙る有樣　四四
○八甲田大岳谷地に於けるヒメワタスゲ○八甲田大岳谷地に於けるヤチスゲ　四八
○八甲田山大岳谷地の小水界に生ぜるヌマハリキ○八甲田山大岳谷地に於て小潴水減水して沼澤植物ヒメホタルキの群落中にイハイテフの侵入せる狀態　五二

○八甲田山大岳谷地に於て水界が濕原への運行を開始し沼澤植物減退してイハイテフにホソカウガヒゼキシャウ及びヒナザクラの侵入せるもの○八甲田大岳谷地に於て水界が濕原への運行を示す　五六
○八甲田山大岳谷地に於て小瀦水趾に濕原要素の侵入○八甲田山大岳谷地に於て濕原に侵入せるハヒマツとそれに續くサヽ　六〇
○長沼に於ける沼澤植物ヨシ・サハギキャウ・ミツガシハ等○八甲田大岳谷地周邊の一部　六四
○八甲田大岳頂上北面にてミヤマハンノキ・ハヒマツ・ガンカウランの混生○八甲田大岳頂上北面にて放射谷の源頭に沿ひてナヽカマド・オホシラビソ等がハヒマツ帶に突入する狀　六八
○高田谷地にてキンカウクワ・ミヅギク・ミタケスゲ・ナガホノシロワレモカウ等よりなる濕原○高田谷地にて濕原の周緣に於ける乾性植物の侵入　七二
○高田谷地内の小隆起に生ぜる樹叢○高田谷地の一部にてミヅバセウ・オホバショリマ・アカモノに混じてシラタマノキ・ミネカヘデ・エゾヌカボ(?)等の生ぜる特殊地　七六
○睡蓮沼と高田大岳○睡蓮沼附近の乾燥せる濕原の水路に沿ひてミヅバセウ・サハギキャウ殘留し乾燥地にミヤマヤナギの侵入　八〇
○コバノイスランドゴケと混じて匍匐する短小矮生のミヤマヤナギ○イハスゲとイハギキャウ　八四
○東岩手藥師ヶ岳直下の火口原にて裸地に植民せるハヒマツ・イハスゲ・イハブクロ・シモフリゴケ等○東岩手藥師ヶ岳直下の火口原に植民するシモフリゴケ・イハブクロ・イハスゲ・タカネスミレ・イハウメ・イハテハタザホ等　八八
○東岩手藥師ヶ岳より下瞰したる西岩手○東岩手西腹約一八〇〇米より西岩手を距てゝ黑倉・姥倉及び三ッ石・小畚・源太ヶ岳・大深岳・嶮崖森・諸檜岳南肩の遠望　九二

○東岩手西腹約一七〇〇米より鬼ヶ城の一部を見る○西岩手第一火口原の東に續く森林の内部……九六
○御花圃と屏風ヶ岳の一部○西岩手賽ノ磧附近より大地獄谷の右岸を見る……一〇〇
○西岩手第二火口原より東岩手を仰ぐ○御釜より仰げる岩手山頂……一〇四
○西岩手第二火口原の濕原○西岩手第二火口原の濕地……一〇八
○御苗代の一部○御苗代東岸の小濕原を圍む森林……一一二
○内川目村岳の部落○早池峯山一八〇〇米附近よりの西微北望……一一六
○早池峯山南腹一四〇〇米附近の雜木林の一部○イソツヽジ……一二〇
○ナンブイヌナヅナ・ミヤマヲダマキ・ミヤマシホガマ・ミヤマアヅマギク等の群落の一部○ナンブトラノヲ……一二四
○リシリシノブ○ナンブイヌナヅナ……一二八
○早池峯山頂の東方賽ノ河原附近にてハヒマツ・オホシラビソ・ウコンウツギ等の混生狀態○早池峯山東方賽ノ河原附近よりの東北望……一三二
○小朝日岳の頂上から連峯の一部中岳及び西朝日岳を望む○大鳥池……一三六
○小朝日岳の斷岩と熊越の斷層谷……一四〇
○三月下旬に於ける大朝日岳絶頂と連峯の大觀……一四四
○大鳥溪谷の一部泡瀧○寒江山から東下する侵蝕溪谷の雪谿……一四八
○只見川と大津岐川との合流點より見たる燧岳○未丈岳頂上……一五二
○岩手山御瀑澤より薄暮駒形山・笊森・乳頭・三角山・高倉山・小高倉山等を望む○岩手山大地獄より丸森及び下倉を距てゝ春岳・八幡平・茶臼岳・大黑森の遠望……一五六

○八甲田石倉岳の岩上に地衣殊に Umbillicaria carolliniania の密生せる狀○上圖の一部を廓大して示す……一六〇
○飯豐川○センダク澤○烏帽子岳中腹より見たる石コロミ澤ノ頭○藪尾根二〇〇米の地點より石コロミ澤を望む○石コロミ澤とイリモンナイとの出會より石コロミ澤ノ頭を望む……一六四
○一ノ又小屋より二時間半登りたる地點より前岳を見る○前岳の神神前より向岳を見る○前岳の神社○前岳の神社○阿仁と三枚との間より森吉山を見る……一七六

雜錄

自一〇八
至一七二
○八甲田高山植物園設置に關する卑見(武田久吉)○大島岳と只見川の一斑(黑田正夫)○羽後國玉川渓谷の奥山(沼井鐵太郎)○高山植物雜記(武田久吉)○シラネアヒとシヤクナギに就て(大平晟)○飯豐山彙への一登路(福田昌雄)○羽後の山岳の見方(山本德三郎)○瀧谷溫泉の復活(武田)○閼伽井嶽と龍燈(增淵吉長)○大鳥嶽と只見川渓谷(長谷川孝一)○左岸と右岸及び瀑と瀧(木暮)

雜報

自一七三
至一八一
○秩父宮穗高連峰御縱走○淺間山爆發○下野山岳會設立

會員通信

會報

自一八二
至一八六
○第三十七回小集會記事○事務所移轉○新入會員紹介○會員章再交附○會員の訃報○退會者報告○會務報告○交換及寄贈圖書目○本會規則拔萃○投稿規定

附錄

秋田沿革史に現れたる山岳資料

雪の中尾根（前景）と大朝日岳の絶頂（左方遠景）

安齊　徹氏撮影

八甲田山の思ひ出

館脇操

淺虫にて

街道筋の松並木、浪打際の松林。小丘の間には熟むだドクウツギに夏の陽が眼に痛い。一年振に海峽をわたれば何をみてもなつかしい。久方の旅だね、車窓の自分に自分が話しかけたい氣持ちになる。浦町(ウラマチ)の改札口で「淺虫(アサムシ)へ」と叫むだ自分の聲は明るかつたにちがひない。

善知鳥の隧道をこせば、淺虫の海は、午後の陽を一杯にうけて、藍青にかゞやく。野内(ノナイ)より旅愁をおぼえて、ひとりこの鼻をめぐつたのも今は六年のすぎし方となつてゐる。かつてのことゞも、そして又織りこまうとするたのしい旅。淺虫のまひるを、鷗が飛ぶ。

汽車は海に寄つたいでゆの街に入つた。おゝ。帽子を振られしは武田博士。かたへにニコ〳〵笑ふのは成ちやん山口氏。旅が始まるのだ。久闊といふより何より自分は無性にうれしくなつた。そして貴公子らしく、自ら蒲柳の質と號せられる石館氏に紹介されたのもまもなくであつた。淺虫の宿にくつろぐ暇もなく、東北大學の臨海實驗所に向ふ。

ギザギザに大まかに切りこまれた斷崖や、幾里となき櫛(かしは)の林、うちなびく單一な海濱の草原にならされてゐた私の眼には、このあたりとて、うくるショックはまた別なものであつた。海とはなれて、しばらくは山間の徑をゆき、再び海に出る。地の創造のかほりは、こぼたれて、本州の景勝海岸附近には人工がときめく。人工に不滿を催すのではないが、地の創造の破壞が私には惜しまれるのだ。で

も海を見れば、七月の午後の海の色を見て居れば、海の聲と共に心持ちはいつか晴れやかになる。淺虫の水族館は入口だけを見物、鳥籠のさがつた下のロウンで、みんな長くなる。一休みの後海底水族館もそこそこにして、附近の岩をあるいた。おゝ。ポレヤナギ！　ポレヤナギ（エゾヲグルマ）に幾年かの懷を馳せ給ふ瞳よ。こゝによみがへりくる濃淡の思ひ出よ。岩角にしばし北の海をかたり合つた私達の心は、釧路の荒茫たる海岸線や、流木の無造作にならぶ北見の濱に往來した。海風にまつはりつ、うるほふた空氣が、夕の冷たさをふくまして、私達の氣分を一層おちつかせ爽かにする。岩角に腰下しつ、私達はこゝにめぐまれし、海岸植物園のことなどについても語り合つた。

モーターボートで淺虫へ。夕なぎの海に唯船の波紋だけが大きくなつてゆく。忍路や、錢函や、折々に引合ひに出でくるは、さすがに北の旅である。

風呂に入つて一先づくつろぐ。涼風をふところに入れて旅程の打合がはじまる。地圖をめぐつて眼をひからせながら、早くも日數の延長が話し交される。しばらくは、みんな地圖をはなれない。

地圖をひろげた輿奮のあとを、ひとり欄干によつて海をながむれば、星の世界を靜かに彩りゆく雲が、後から後からやんわりと湧いて、夕方を夜へとひそやかにしづめて行つた。

八甲田の山々へ

靄の峠を越えて酸ケ湯に

いひ知れぬ旅情が芭蕉にさそはれて、くらい屋並の陸奥の街を、はてしまでとおもつた心も、幾年か前のことだ。色白の雪國の娘と、どこかにのびのある馬飼がまだ早い荒川の畔をゆく。私はかつてこゝに抱いた心持を新にしながら、大町から來る乘合馬車を待つた。橋の袂の祭らしいのぼりがひなびた氣持ちをひそめて、そよ風になびく。なまりのはげしい女が、瓜をつむだり、桃の籠をのせたり

して、浦町の河筋に小さな市をひらいた。青森の街は漸く朝の息をはじめる。

馬車が來る。圓太郎としてはかなりに氣持ちが好い。リュックサックや其の他の山行きの荷が、馭者臺にあふれ、みんなのニコやかな顏が窓から出る。簡單な挨拶の中にも、朝らしい新しさと、旅ゆくうれしい氣持ちが流れる。馭者は鞭をあげながら、たづなをひく。輕やかな氣分にさそはれて、馬車は町はづれにとかける。八甲田は雨雲にとざされて、時々うすれ陽がすうと山腹にさす。

さしせまつた街なみつゞきに里の子が、何やらざわめいてゐる。松並木にまつはる藁屋に、商人宿の黑ずむだ立札や、葭簀張りの中に、駄菓子をのぞかせて、澁茶汲むとも見ゆる掛茶屋などが、ぽつり〳〵と街道筋の宿場的なつゞれをよみはじめる。

横内に八時半頃つく。一泊してみおぼえのある家には、今も酸ケ湯案内云々の看板が出てゐた。此處で荷物を輕減し、馬一頭に荷をつける。思へばあの別れ道の庚申塚に、若き日のひとりをかみしめ、夕陽をあみた八甲田に瞳をとられつゝ、芝草の上に小半時寢てゐたこと、言葉の通りにくいこの宿に、暗いランプの芯をかきたて、たよりものしたことなどゝ、又も追憶がいつの間にか一ッの物語をくみたてゝしまふ。

やがてうすぐらい土間に荷をまとめ終へた私達は、九時頃ブラリと出發する。

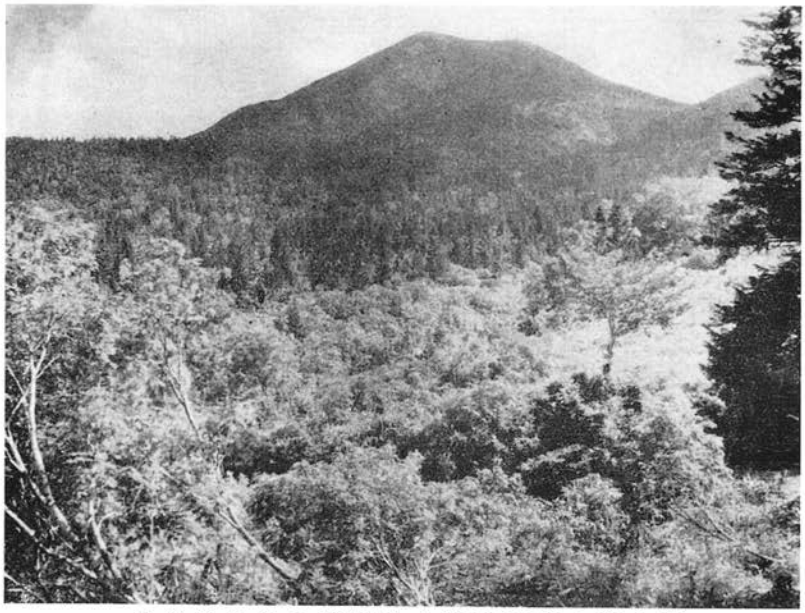
ヤチダモの實の房々する樹蔭には、里人が何やら洗つてゐた。村はづれの社の鳥居が異樣に目に映つたがそれも記憶には薄い。

夏の陽の照りつけるもとを、目茶苦茶になつた山麓の植物群落や草原地の、錯雜さに舌をまいてたどりゆく道すがら、ノイバラの殘花も散りはてゝ、ナハシロイチゴが熟したりしてゐた。ホク〳〵した白い一筋の道には別に木蔭とてない。破壞されつくした裾野から山麓の姿に、やゝこしき人間の熱い息づきを感じ、ともすればうるさくつきまとふ影を追ひはらふことが出來なかつた。とかくする中

に道は明るみの高原に。どこかで郭公がなく。鉢森の裾を展開する草原が、いつか眼の前に開けて行つた。ニガナ、ヒメハギ、カハラナデシコ、イタドリ、モジズリ、アリノタフグサ、ミヤコグサ、トラノヲ、カハラサイコ、イタドリが路邊に咲く側、ムシャリンダウの殘花がちらりほらりと見える。

靄の郷と呼ばれるのは僅かに數戸の峠下の村落である。これから道はゆるりとのぼりだす。八甲田は依然として雲に埋もれてゐる。私達は登り始めの、とある乾草原に身を横にして、まづ一息いれることにした。そして私達をものめづらしげにまつはる二人の子供は、クマヤナギの實で口のあたりを紫にそめ、籠もてしきりと熟した實をあさつてゐた。草原には、ノコギリサウ、カハラナデシコ、ゼンマイ、オキナグサ、アヅマギク、カセンサウ、ノイバラ、シバ、イヌヨモギ、ムシャリンダウ、ヤマハヽコ、キバナノカハラマツバ、アリノタフグサ、ノヂトラノヲ、オホイタドリ、クサボタン、ホソバノヲトコヨモギ、エゾオホバコ、灌木として、タニウツギ、ヤマウルシ、ミヤマヤナギ、イヌコリヤナギなどが數へられ、それにサルトリイバラ、ミツバアケビなどが入り、タランボは意外にも少かつた。所生の植物は新しいが、八甲田に殘雪深い春の日の頃、そはオキナグサ花咲く日、又アヅマギクの日、旅としては一入の趣があることであらう。けれども植物學を少しでも嚙つた悲しさに、この夏の日の乾燥原と矮性林木が、今はやはりさかしい人間の歴史を、悲しげにも私にものがたるのである。

キヨスミウツボなどをさがして、珍しがる間に、いつとなく道は鉢森をまはり、ミヅナラやカシハが生え、そしてクロモジなどの峠路に出る、頂きに立つたのは十二時近い。むし暑い日だがこゝまで辿り來ると、折々涼風が襟から入る。クサボタンやノハナシャウブが綠の萱原に交つて美しい。それから四百乃至五百米前後の尾根をゆく。「青山は國の寶」といふビラのさがつてゐる所で晝飯。こゝらあたりから西面してみると闊葉樹林の滅亡が今更眼痛い。人間の殘逆さと蟲のよさ。「青山」の札も何



一　酸ケ湯の東南蔦道より仰げる八甲田大岳

二　荒川の上流より右岸の植物景と東北に八甲田大岳を望む

右手の喬木はカハグルミ。その下手にあるはサウシカバンカ。稍左に寄つてナブ

武田久吉氏撮影

か喜劇めいた所がある。

尾根をめぐるあたりの樹林は尙日淺いらしく、ホツヽジ、ムラサキヤシホツヽジ、ミヤマクマヤナギ、ミヤマヤナギ、ムシカリ、ナヽカマド、アヲダモ、タラノキ、ヒメヤシヤブシ、ブナ等が生じ、又エビガライチゴやトラノヲなどが生じてゐる。溪による斜面にはホヽノキなどがあり、所に由つては溪に面せる山腹にかけて、マンサク、ベニイタヤ、メグスリノキ、クロモジ、メイゲツカヘデ、リヤウブ、ヤマナラシ、ツノハシバミ、タムシバ、ミヅナラ、ミヅキ、ブナ、コバノトネリコ、ミヤマシキミ、ヒメアヲキ、アクシバ、カクミノスノキ(?)、ハナヒリノキ等が混生シ、樹種とその複雜がやはり林のあたらしさを示してゐた。

ゆく〳〵尙尾根の草原地にはシバが芝生をなせるが如く、その所々はミヅキがこじんまりとした叢を形成してゐた。この圓味をおびた中に、陸奥の馬は群れ遊び、雲のゆきゝのはげしい、折々殘雪をあらはす八甲田を後に、高原の氣分をしんみりさせる。旅情をそゝられて、腰を下せば、蟲の音が聞え初める。ヤナギランが風にそよぐ。前岳の懷遠く炭燒の煙があがる。

この尾根をまはると、程ちかく、お助小屋はさゝやかなる流れに沿つてゐた。水をのみに溪に下れば、トチバニンジンが實を結び、ヤマヲダマキの殘花が、ぽつと眼の前に出る。山の天候はどうやら定つたらしい。たまらない空の蒼い心。人なつつこい山のひろやかな姿。小屋をむさくろしがつて直ぐ前の原に出たどの人の胸もすつかり輕くなる。「何一時ですよ」と失言か何か言つて蒲柳の石館氏が心持顏をあかくし、先生とみんなに何かしきりと釋明してゐる。その後からすぐ愉快相な笑がどつと起る。

酸ケ湯道はひろくなつた代りにどこもこゝも荒れた。ひとりの路に、樹蔭がモットしげみ、そして小鳥のことなど記してある前の鍵掛峠の日記が思はれる。生新らしい切開き、無造作なネマガリのひろがり。一見柳かと思はれる程の楢の若木。バサ〳〵して乾き切つた北見あたりの開墾がひよつと浮び、

出駄羅目なペンキ繪式の色調が、かなり自分をくらくする。午後の陽ざしは道を白く光らしほこりだたして眼痛い。

でも、タモヤチ澤にくるあたりから、昔の姿が出る。溪によつたサハグルミの大樹は、强光に疲れた眼を一入なぐさめる。そして路邊ウスバサイシン、ナラヰシダ、コバノイチヤクサウ、ジンエフイチヤクサウ、オホヤマサギサウ、ツクバネサウなど出で來、喬木林の自然型が眼にふれるにつれて心もおちついてくる。

櫟林に煙はあがる。ゆけばネマガリの燒跡にさゝやかな掘立小屋がある。炭燒竈の前に立つた爺は、不通の言葉に何やら云ひながら、人の好さ相な笑をたゝえてゐる。一寸のより道に、何となき興趣をそゝられ、つひこゝに道草を喰ふ。一面から見れば牧人的な生活が、今尙不思議にもこれ等の人の間には殘つてゐる。かくて山中にあるこれらの人には、資本家の勞働者のといふむづかしい事はなく、唯生活の糧に人達はこの無心的な生活にならされてゐるのである。そしてそこにさゝやかながらの、愛慾の生活を營むでゐるのであらう。人間の微さい息づきよ。じっとした霧の降りくる中に、人間性のいとほしさがしみ〴〵と湧いてくる。

さあ暮れない內に、リュックサックは再び背に負はれた。夕ぐれ迫る頃ほひを、ととのうてきた樹林めでつゝ、道を急いだ。荒川の橋のほとりで一息いれた私達は、尙足早に、いよ〳〵樹蔭の香りゆたかな薄闇を辿つた。大きな最後のカーヴをまがると、酸ケ湯の遠灯が。

八甲田大岳をめぐる

八甲田大岳をめぐる。七月二十六日から八月一日迄約一週間をこゝでおくり、大岳をめぐるの言葉にふさはしい日をおくつた。私達は大岳の頂きを三度ふみ、しかも三度とも倦むことしらぬ

興味を與へられた。私は特にこゝを二編にわかち、一つは山の思ひ出として若き旅人に本編を、一つは同好の士に八甲田植物瞥見として、このまづしき記録を捧げようと思ふ。

思ひ出を語る

（八甲田にて）

八甲田はなめらかな線もて大きく描かれた山である。その單一な線は、個々の山々をもりあげながら、おちつきのある樹林と物語りめく殘雪とをもつてゐる。根據地としての酸ケ湯は、丑湯を除いて、山旅には心よい憩を與へるであらう。

酸ケ湯　酸ケ湯の朝は早い。三時と言へば早立の客が仕度をとゝのへて、濁った馬子の聲などがそれにまじる。今年は丑年の丑湯の三日間にぶつかり、渾沌たる雜音が、いつも旅寢の朝をかきみだした。そして夜は野趣たっぷりな「ウタの會」に出遭ひ、一夜のやどりならばさこそと思ふも、わかる所は一切皆無、哀調をおびた樣な一大騷音は夜の十二時過迄もつゞいた、閑人ならいざしらず、多少の心のはたらきを一日つとめさせられた後、三日通してのこのつどひは、さすがにあてられ氣味であつた。あの無細工な亂調子と、むきだしの野性に原人好きな、死んだ板倉さんがゐたら、きつと默々としした顏に、笑だけをうかべて、このうたと踊りをいつまでも見てゐよう。この人々をして月夜の高原に篝火をたいて、そのもとに歌はしめよ。幾世をか遡つて、そこに釀された影は、再び輝かしく蘇るであらふ。

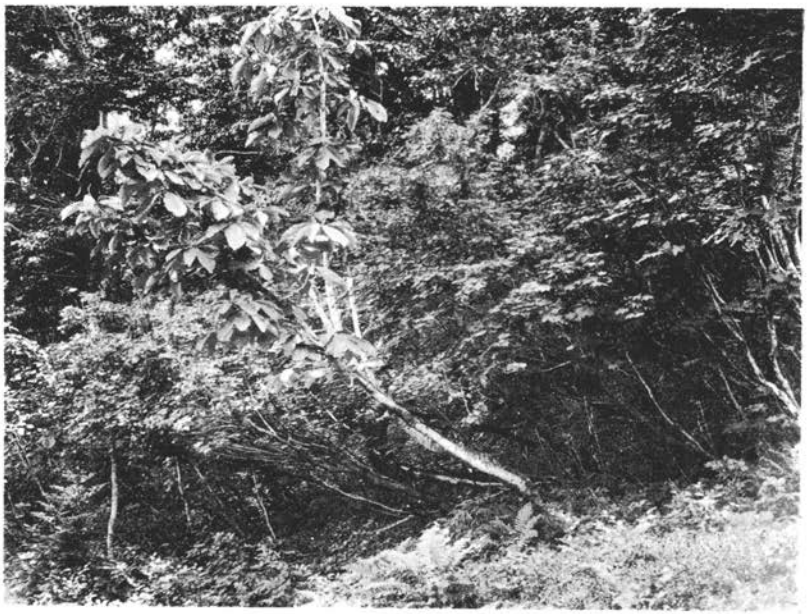
土用の丑湯、それは人達が、先祖返りをして、傳統的にうけた野情を、その祖先に捧ぐるグロテスクなまつりである。田園のめぐまれぬ（敢へて言ふ）生活に、何等の享樂を許されぬ人々には、この三

日こそ、せめての心やりかもしれない。人體林立、みとほしのつかぬ浴場も、混濁はてしらぬその音調も、思へばその殿堂の祭詞である。同じ地の上、異なる殿堂の饗宴場には赤き酒、青き酒、妙なる管弦の園にリラの花降る夜をついで、白き踊子が、もろ肌をぬぎつゝざれてゐるのであらう。人間にまつはる濃淡のかげかげ。ひとつなる太陽のもとに、不可思議な立像。

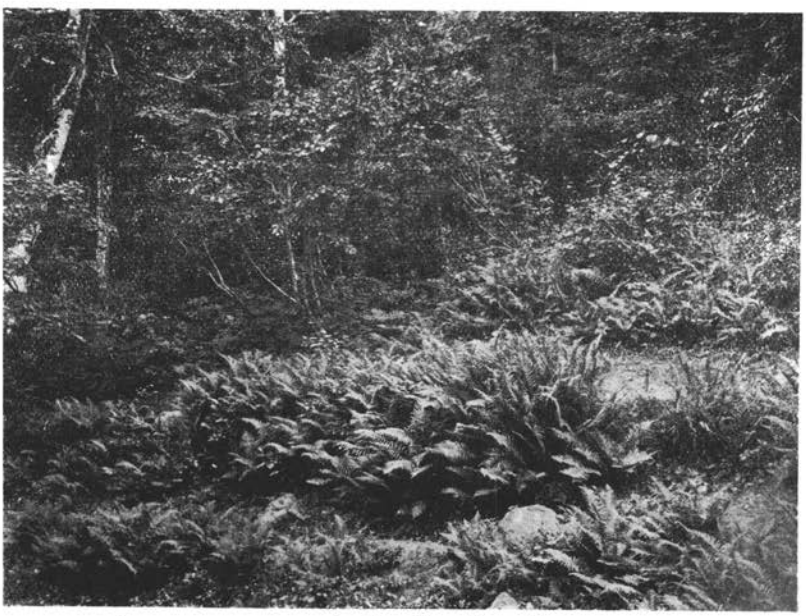
でも、丑湯でない時の酸ケ湯は好い。九百米とはいひながらも、夜になると、八甲田にまつはる霧が靜かに降つて來て、ひやりする。窓越に、霧のうすれに星をかぞへると山の溫泉場らしい氣分も沸く。又一人になるとポーン〳〵と、ゆあみする人の、頭にかむる湯桶の音が、妙に淋しく響いてくる。浴場には、今もランプがうすぐらい。その中から、のど自慢の里人が、ひなめいた小謠を。まはりの人達のアクセントとなまりが、血の多い人には藤村ばりにエトランヂェの感をさへ催させることであらう。全部からうける感じは、やはり東北らしい質朴さである。七月半迄は溫泉場の附近に殘雪を見る。

地獄沼　酸ケ湯の近くには地獄沼だとか井戸湯とか乃至新湯だとかの名勝がある。そのうちでも地獄沼がいちじるしい。飛島の樣に與へられた植物景觀、怪裸な地膚と、湯沼とが、一つのとゝのひをまとめおほせてゐる。そこには、シラタマノキが水玉の實をつゞる側、賽の河原式に、石がつまれ、又素朴な人達の原始的な信仰に石碑がきざまれてゐる。地獄沼の塚に、よく夕方岩木を見に來た。お別れの日など、ひとり戻つてその塚に、はてしない夢追ふ子として、いつまでも、國境に燃ゆる金爛の夕陽影浴みつ、ゆかりにたゆた小岩木の姿に、身も心もゆだねきつて、よろこびともしれぬ、かなしみともしれぬ境に幾時かをすごしたこともある。地獄沼は好い。清秋の明月に希はくは、ひとり更に、こゝで岩木を仰ぎたいものである。

山の眺望　山の眺望は好い。山に寢ころんでゐると、ガンカウランや其の他のものであまれたクッ



三　谷地温泉上手路傍にて積雪の爲め斜生せるハウチハカヘデ及びホヽノキ等



四　谷地温泉上手路傍の乾燥地に群生せるオホバシヨリマ

武田久吉氏撮影

ションが大地の幸と太陽の惠を交へて、コメスヽキの穗の白銀のそよぎに歌かなしとやかな感觸をあたへる。或時はじっと、大岳の中腹から先生と二人、あかず石倉山に續くトド林をながめた。七月の山の明るさに生き〳〵しくもりあがった潑剌さと透明さ。輝く生命の光に森のよろこびが大空に躍る。見よ雲のゆきゝの影々にうきつ沈みつするその綠、森の華かな微笑に思はぬ時をすごしたことも幾度であつたらう。或る夕っ方には、雲の海を隔てゝ、燦爛たる夕陽に匂ふ紫紺の岩木山に、思はず襟を正し、脫帽さへして、山に禮拜したこともある。私達は山に傳ひゆく自らの鼓動をみつめながら、近くは横岳、大岳、櫛形山を初めとし、遠くは鳥海、月山の境まで、(秋の日和には、渡島駒も見えるといふ)お互にはたらく心と心を尊く感じあつた。山口さんがテローズにわかしてくれたコーヒーのかほりは、いつの日にも大岳の三角點の下、あのけだかい思ひ出を、紫の煙の中におどましてくる。

ヒナザクラ ヒナザクラは山のどこにも咲いてゐた。ヒナザクラを見てゐると完全に忘我の世界に入れる。私がヒナザクラと向ひあつてゐる間、學者よ、理性の鄕からやかましく、私に冷い眞理を說いてくださるな。藝術家よ。感情の立場からうるさく、私に熱つぽい眞理をきかして下さるな。私は滿足なのです。理屈なしに、自由に滿足なのです。どうぞ捨てゝおいて下さい。私はこの沈默を愛するのです。無感覺にも等しい樣な感じをこのうへなく好むのです。どうぞ許せるなら、許せる限り、この瞬間の私に無關心であつて欲しいのです。櫻沼、松島、井戸岳、赤倉岳、そこには私の死にもとりいれたいプリミュラが咲いてゐる。プリミュラよ。山々として、お前丈が知るときめき。淋しがりやの旅人にも、こゝにだけは全きよろこびがのこされてゐる。「地上には嘘を吐く生物は唯一種しか居ない。それは人間である。其の他の一切の生物は、眞實であり正直である。何となれば彼等はあるがまゝにさらけ出し、感ずるがまゝに表出するからである。」ショウペンハウエルの言ったひねたことがふと浮んだ。赤倉の肩の草原にねころびながら、山に向つてぼんとうだらうかと問うたら、山はうん

ともすんとも言はず笑つてゐる。人達よ。せつせ自我像を刻するに、淫することなく、どうか自然を對象しての自我像を刻するに精進して下さい。そしてまことの自由の世界に於て、自然をして、自然自ら語らして下さい。井戸岳に霧が霽れると共に、さあっと大岳の殘雪が、駒の形をあらはした。

ある宵、私はみんなから離れて酸ケ湯への道を辿つたことがある。それは多分十日頃の月の出だらう。山にあやされた私の心は、一定の振動の中に、搖籃のうたをくりかへす。仰げば遠きこの宵、岩木の山影、みつむれば後にヒナザクラの微笑。無抵抗に、息づまる情熱にまかれ、何とも知れぬ涙が湧いてくるのを胸におぼえた。トドの森は蒼い夕にしづむ。「どうだい」待つてゐて下すつた先生が私に話しかけられた時、私は急に何をもおこたへすることが出きなかつた。そしてまづ私は、自分の眼鏡のくもりをそとふいた。

殘雪　大岳の北面の殘雪は好い。三ノ戸（サン）あたりからは駒の形に見えるといふ。又この殘雪の消え方で、その年の農作がわかるといふ。老農が鍬をおいて、一服ふかりとやりながら、この山をみあげるのが眼に見える樣だ。大岳の噴火口にも雪は殘つて居た。その側にはお花畑が綾を織つてゐた。櫻沼のほとりには、雪消えにつれて、ヒナザクラが咲いてゐた。霧飛び交ふ池のほとりの一休み、山鶯の谷渡りに耳をとられゝば、チシマザクラが夢かうつゝか無心に散る。

谷地　八甲田をめぐつては谷地が多い。ひどくぬかりもせず、花も澤山咲くし、ジュク〳〵の嫌な山口氏さへ、歩き心地が好いと言つたから間違はない。中でも大岳の谷地は、八甲田きつての名園である。あくとなき人生のねがひもなくなれば、人間も至つて世話はない。ミヤマサギスゲの穗が銀の光を優しく宿す側、ゴロリとして、半日、大岳でもみながら、タバコくゆらすが好い。國立公園も何もない。自然はむき出しの自然のまゝがすてきだ。大岳にむかつて、ヒナザクラを側に、午寢でもしたらその味はよくわかる。溫泉から少し離れて睡蓮沼がある。評判の程でもないが、それでも、決し

て惡い所ではない。石倉(イシクラ)よりに七月までミヅバセウ咲き、ヒナザクラ咲くとつときの所もある。何はあれ午睡にことかゝさぬ場所は無茶にある。そしていづれも理屈なしのうまゐにおちいること受合の所だ。

石倉岳　石倉には千二百五米の所までのぼつた。蔦道へ二十町も行つたと思はれる所に、小徑がある。しかし頂上までは無理だ。登つて登れないこともなささうだが、ヤブはひどくおっくうらしく、ヤブに出でゝヤブに終るのでは、足も出ない。無性さを山口氏に叱られたのも、ヤブの入口であつたらう。夜鷹の巣につられたり、地衣につりこまれたり、二時間餘りは遊んだ。御用のない方は下から見てゐた方がましな所だ。それでも、ゆっくり歩いてさへ居れば、滿足な私達には、何の不足もなかつた。睡蓮沼を下にして、明日ゆく道など語り合ひ、濕原と林地の錯交に尾瀬の日のことゞも忍び、煙草をゆつくりふかしたなどは、仲々に忘れ難い。

亡き人　八甲田酸ヶ湯に憩うた人達に、郡場のおんばさんで通つた、八甲田の一名物、文子刀自はこの七月にこの世を去つた。「うちの寛が」と京大郡場教授を口にされた老の眼を輝した老媼、八甲田の植物を集めて、その友となり山中に晩年を送つた人は今はない。過る年ひとりの若き旅人を心より迎へて、自らいひすゝめられ、又一夕、好むといへるまゝ自らネマガリダケの筍を摘みてもてなし給へるしのびぐさよ。再びまみえんとするその日は、野邊の送りの日であつた。かつての山の處女はいつか人妻となり、無言にかけりゆく時の姿が何となき痛しさをおぼえさせる。

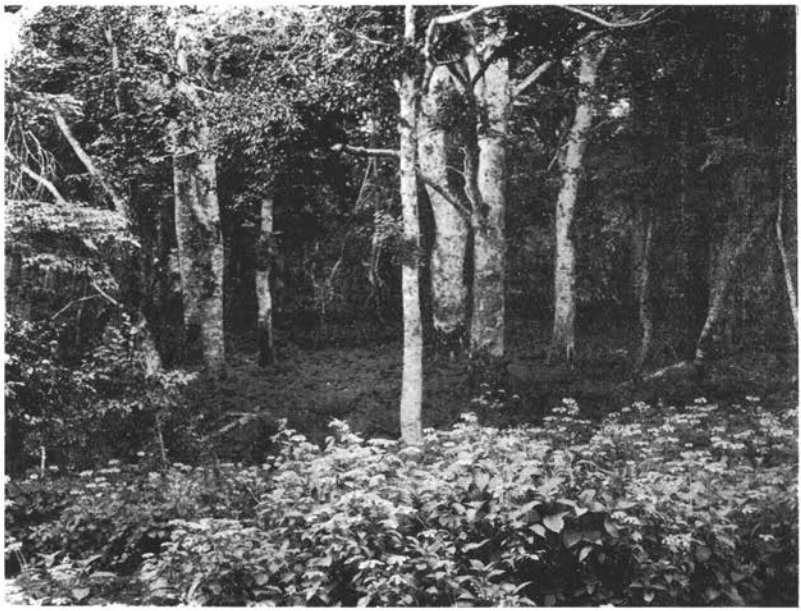
荒川　荒川の上は奇勝に富むでゐる。小さいながら、ハコがあり、瀧があり、柱狀の節理があつたりする。色々と名があつたが殆ど忘れてしまつた。私達は、晴れた日を一日檜の林をみながら、この溪をあさりあるき、三階瀑の上まで行つてみた。岩魚の居り相な淵には、宿の若者が綸をたれてゐた。湯は川沿ひに三四ヶ所湧いてゐる。中にも癩病の湯とかゞ最も心にのこつてゐる。そこは溪から

はづれて、ネマガリの間に細い踏わけがあつた。今は大分に茂つて、おひかぶさる樹蔭が一寸暗い氣持ちをそゝる。湯は二坪位。おどんだにぶい藍青がやどる。側にサビタが咲いて、しづみがちのあの澄むだ癩病の娘の凄艶さをおもはせる。すきとほる樣ななめら石の彫刻の美に、黑い影のヒヽと皮肉な笑。

この溪沿ひを尙下つた尾上の松から新湯への喬木林はまた格別である。林らしい黑土のしめりに、胸深くひそむだ野性がむっくりと頭をあげる。「彼は靜穩と沈默との裡にこそ聲を聞かねばならぬ。何人も此の靜穩と沈默とより、一きは優れた言葉に近づく事は出來ぬ」哲人の言を、そのまゝに森がつげる。私は近づき來る森の精靈に敬虔な挨拶をしつゝ、この林に尊嚴な自由をうたつた。

蔦道

谷地のほとりへ　私達が蔦（ツタ）への午後は曇り勝な定めがたい空の模樣だつた。地獄沼の所で鹿内（しかない）に會つた。昨夜も名殘惜しさうにしてゐた彼は、今別れては何時と判らぬこの一群に口も開けず、朴訥な力强い感激にうちふるひ、私達を注視し、そして左樣ならも言はず、彼の愛する喇叭を口にあてた。山にこだまする別れのその響。私達も一言もない。私はその時彼の眼に浮むだ涙をみのがすことは出來なかつた。私達は唯帽子をふつた。「さ樣ならあなたも達者でお出でなさい。そして山に培ひ得る無邪氣さと素朴をいつまでも失はず、いつまでもいつまでも丈夫でお暮しなさい。」と胸の中で言つた。行く行く石倉の裾をめぐるあたり、今にもと思はれる雲が、横岳あたりをしきりとかすめてゐた。かうして身ごしらへをして歩いてゐると、その日の午頃の氣持ちがおかしくなる。連日のハシゴのぼりに倦むで、一日サボラウと炯眼な先生の眼をかすめ、蒲柳組の二人と山口氏と三人、事八分まで成したのを看破され、やつぱりの炯眼さに、すっかりへこむで、蒲柳の本質を遺憾なくあらはした。ふり



五　蔦道小柴森附近のブナ林

前景は林縁に生ぜるサハグミ。林内の下生は主にシラネワラビ

六　蔦沼湯沼岸沿の小濕原を圍むヤチヤナギとキンポウゲの林

前景はヤマドリゼンマイ・アブラガヤ等

武田久吉氏撮影

みふらずみの空は、いつか雲から細いにぶい放射の線をゆるしたが、荷をかなりに負ふてゐる私達に、暑さをおぼえさせる程でもなかつた。猿倉への道も割愛して下る。猿倉川のほとりで一休みしてゐると、ある心安さが、輕い疲れにしみわたつて、うつとりとさせる。

霧が降つてきた。いつか樵林に入る。霧の海に浮く樹々の影々に、深い水底の藻の林をわけて、眞珠をまさぐる心にひたる。沈默勝に歩きながら、幾度かの休を求めつゝ、私達は、自らの姿に忘れはて、清麗なる森の息に、命の放浪のときめきを靜かに感じた。

「ヤバチクテ、ヤバチクテ」と人の好き相な爺が、しきりと辭む。私達は、ヒドイ掘立式の谷地溫泉で、爺に對してゐる。蔦へ下る時間はある。でも急ぐにはあまりに惜しい森の魅惑ではないか。「ヤバチクテ、ヤバチクテ、何もなくて」と爺は柔和な笑を浮べて、くりかへしてゐる。どう切りぬけたかは知らないが、一室を借りて、一夜の憩ひを得るに定まつた。板のぶつつけてある隣同志をかいま見ることの出來る、そして疊と言つてはない、床の上に荒莚をしいたまゝ、たつた一つ切つてある爐が山のくすぶりをもつてゐる室。やがてみな風呂にゆく。でも浴場丈は小ぎれいだつた。夜は黑味噌に尾瀨魚のだし。山口さんが最も勇敢な小尉振を發揮する。谷地溫泉はほんとうにみちのくの山間らしい溫泉の風味をもつてゐる。そこに入湯の人は皆駄馬に食料を積むで來る。哀調をおびた南部のうたはよく風呂場から洩れてくる。ひぐれがた、夕雲の動きなどに見入つて居る折、斷續的に來る線太い音調は、いつかはてしないおもひにひきこむでしまふ。その時、高田大岳はおそらく、溪の銀線に旅人の瞳をいつとなくうるほして行くであらう。谷地の夜は十四日の月であつた。石館君の姿のみえないまゝに、先生と山口さんと三人、逍遙に出かける。四十分もだまつて下つたらう。そして、倒木に腰を下して尙だまり勝に三十分も休む。結び得、めぐり合うた旅人の群よ。やがて別れ、又永遠のどこかに行かなければならないたまゆらの像なりとも素光にとけこむ夜を知つた群よ。蒼き世界のぬかづ

きの聖曲に、命、光、禱り、歡び、愁、人の世に奇しくも許されたひとしきを、とこしへにの想ひに編むで、ともぐ〜靜寂の灯のかげろふなか、まことよき旅の心を捧げよう。

蔦へ　ドロの細木の二三本たちそろひ、木立びらきの草原に、馬が五頭無心で遊ぶ。まひるさがりの夏の陽ざしも、森の國には龍膽紫のやはらかみをふくませてゐる。谷地から約十町餘、芝生の樣な草原に、艸びろうどをなつかしむで、仰むけに寢る。

病むだ山口さんは一足おくれてどうしたらう。今朝濕原から、ほのぼのわきたる朝の香にひたりながら高田大岳を仰いだ時には、天氣だつた。

森の歩みはつゞいてゆく。森の心の水色のしたたりは、サハアヂサヰにふくまれて地の星めきつ、木蔭にほゝえむ。小柴森の裾、蔦への別れ道の附近には、木の牧柵が、綠の中に浮いて、しきりと心を呼んだ。蔦川の徒渉地點で私達は龍たけくも、淋しい幽けき森をなつかしみ、齒朶のしげみに、光の物思ふしづもりをたづねた。蔦の流れは木立の中を靜かに流れた。塔樓の燭のかげ、ひとり居の心が湧いてくる。

東洋にめぐまれた古典の想影につゝまれて、尙幾時かゆっくり森のしめりをふむでゆく。

蔦湯沼　沼はみえる。闊葉樹の中の夕のたゞずまひ。一つの小波さへたゝずに、かはせみ色の沈默。でもどこかに秘められし山湖の華かさ。先生と荷物が先に渡る。私は、このしづけき華かのなか、幾年か前の私にかへつて、寮歌の一つがくちづさみたくなつた。若い日よ。のこされたメモのかけはしが、ふと眼に。「何かうたつてゐたね？」と後で先生に言はれた時、何だか苦笑したくなつた。渡り終つた所から宿は近かつた。

蔦溫泉　宿に入らうとすると、ヂギタリスが咲いてゐた。「何て不自然だ」とつぶやく。宿の上り口に、フェルトの草履がある。一寸舌うちがしたくなつた。長松おぢいではないが、チイッとばかり腹

の蟲がおき所をかへる。室は滿員。せまい所におしこみになつて、前庭を見ると、みんなで描いてゐた「蔦」は無慙にも破壞される。手前勝手に想像した幻想が、自分に罪造りをする。「桂月もやきがまはつたかな」と飛むだ所に桂月が出たが恐らく文人桂月が愛した蔦は今の蔦ではなからう。まわりの空氣が、自分達に適應してくれない。追ふ所を異にするものが、長居はお互に迷惑と相談一決。奥入瀨の溪流も、あの自動車、そして又道筋の近年の林地荒廢、それに子の口のコーンビーフのシチューとかに、早くもおびえて、山口さんの體のなほり次第、蔦十湖も十和田もふりすて、岩手の頂きに一日も長く居らうとさまる。山口さんの體はどうしてもこゝで靜養を要する事になつた。旅をつゞけられぬ友は、私達のすべての言葉をしりぞけて、たゞ私達に、私達の旅程の遂行を望んだ。私達は山に旅する人の美しい情操をうれしく感じながら、こゝに滯在のことを言つたが、強く拒絶された。かくて私達は病める一人の友達を殘して、行かなければならなかつた。思へばこの旅の參加も、この友に負ふ所多かつたに。この途上の別れは強く私を悲しまし、又いつの日の思出にも、これから先岩手の山々まで君の姿なかりしことが、私にある物足りなさを與へてゐる。

その夜もまた美しい月夜だつた。參差たる櫸の梢をもれる月影をたよりに、湖畔に催された月明の講演に、青森中學生のキャンプ迄行く。やがてそれも終つて、細路を宿に歸る頃月は益々上つた。山口さんの寢しづまつたのをみて、先生と石館氏と散歩に出る。しづもり歸つた櫸の林に、只聞こゆるは蔦川の流れ。清く澄むだ月光は、去年の尾瀨行の時、檜枝岐からの歸り途を偲ばせた。

「大丈夫かい」「うん丈夫だとも、それより仕度は好いかい」山口さんが、床の中で元氣な顏を見せる。到頭別れて、燒山へ。蔦川上部の森林美に、思ふ樣、旅した私達にとつては、下り道は大した感じもなく、通天橋迄下つた。バサ〳〵な氣持のする燒山迄を、時々驟雨に見舞れた。動搖の激しい自動車にゆられて三本木へ。それから十和田鐵道に乘る。八甲田の群山は雨雲から離れて、夕空に重々

しく聳える。十六日の月はみちのくの野にのぼりそめた。馬群る萱野の曠原には、馬の影さへなく、野はひろ〳〵と月明になごむ、車窓ふりむけば、蔦には雨雲は深い。「病める友如何あらん」。月夜を汽車は走る。

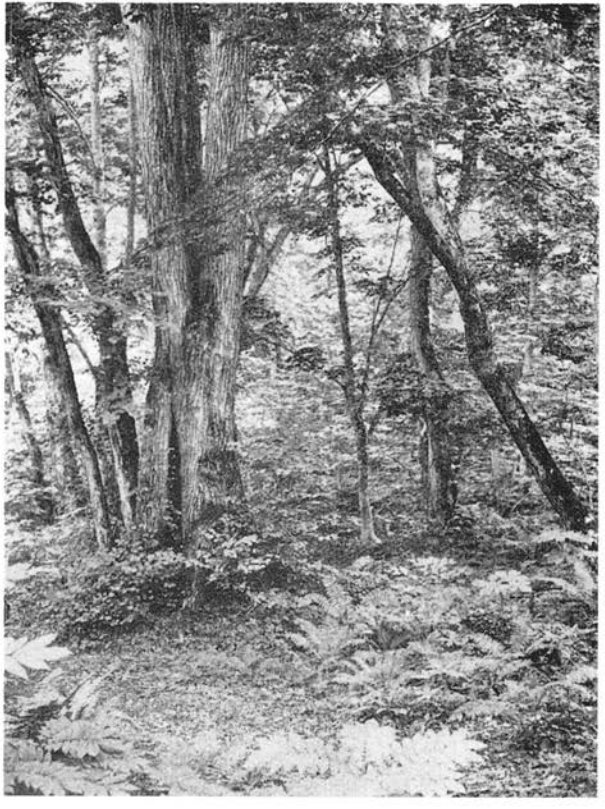
八甲田山植物瞥見

舘脇　操

緒言

本島最北の高山である岩木山が單調で地理的にも亦植物的にも殆ど無味に近いに反し、それから幾何も距らないで而も略同高度の八甲田がかくも複雜でかくも興味ある地域であることは面白い對象である。

大正十四年の七月下旬から八月初旬にかけて、私達はこゝに幾日かの樂しい日を送り、一日として休みなく峯、谷、森林、濕原を訪ね、一面には山岳に對する敬虔な巡禮者となり、他面には眞摯な自然追及者として、私達の謙遜なる姿を見出した。その折の日記は「八甲田山の思ひ出」として別項に掲ぐる通りであるが、植物の觀察を纒めて此處に稍々專門的の事項を記述する。本論文は小局部を除いては難解と稱す可き點もないと共に、植物が山岳を如何樣にして粧ひ、又その粧ひが如何に變化するかといふことに疑問を抱く人々に由つて、大なる興味を以て讀まるゝことゝ信じて疑はない。憾むらくは觀察研究に十分な時間がなかつた爲めに、脫漏と誤謬から全く免かれることは出來ない。然し



七 通天橋附近蔦川右岸の森林の一部
カツラ(左方)、ベニイタヤ(右方の三本)、ヤマモミヂ(横枝)等

八 通天橋附近蔦川右岸の森林の一部
ブナ(左方)、アヰダ(斜陰)、ハツチハカ(デ、トヂ、ヤマモミヂ、ミツナラ(稚樹)、ヲノダ(右方)、ジウモンジシダ等

武田久吉氏撮影

私達は多大な努力を厭はずして、觀察に寫眞に餘す處無からしめんとし、殊に舘脇君の奮鬪は目ざましいものであつた。私は此處に同君を煩して「瞥見記」一篇を得たことを深く感謝する。

篇中記述する處は、主として舘脇君のノートを基としたものであるが、その內容に對しては、私も共同の責任を辭する者ではない。それと同時に、圖版の寫眞說明中重要な點は、舘脇君と協議の上で記入したもので、從つて全篇の責任は私達兩名が共同的に負ふべきものであることを此處に明記して置く。

寫眞は記事に關係深いものゝみを添へることにし、出來る丈けその數を制限した爲め、止むなく省いたものもある。本文の說明用であると共に、記事の盡さゞるを補ふ爲め、寫眞の說明は冗長を省みず詳細に及ぼしたものもある。(武田)

一、喬木林について

八甲田大岳をめぐる樹林の觀察について、私達の困惑したのは、所謂喬木林下部の原始型が、現在の景觀より推して、推思(私として)出來なかつたことである。私に於て科學的に推論を許される所は、實に橅(ブナ)林以上である。故にこゝに喬木林と稱するは橅林から出發するものである。

尙、高田大岳について地圖を見れば判る如く、大岳より南下する尾根は東南にのびて、一部は中里川の源水を育むと共に、一部は蔦川の左岸に沿うてゐる。しかも八甲田裏道として、蔦道は何人も知れる所であるから、燒山迄をこの中に論じて見たい。其上蔦道は靑森道に優つて、美林を有する點から、特に兩面比較のため、こゝに入れたく思ふ。

イ 針葉樹林

夏日八甲田に於て針葉樹林觀察地點は、酸ケ湯から約一千五百餘米なる大岳への登山道を經て、石

倉岳、並びに進むでは小岳に面せる箇所と硫黄岳(石倉岳)とであらう。而して林道を經て林内を探り得るは、前記登山道と蔦道と石倉山との三つをあげる。八甲田全山より推せばその現在有する針葉樹林は、大岳、硫黄岳を結ぶ南北の線を軸として、東面に良く、石倉をのぞいては、西面に美林と稱すべきものがない。好晴の日を利して、展望するに、八甲田山彙をめぐる針葉樹林は、九百米より千二百餘米の間に介在し、時に八百米に下り、千三百米以上にのぼるものもあるが、高處に達すれば、灌木狀となつて、典型な樹林を形成することはない。本山針葉樹林に於て最も私達の注意をひいたのは、アヲモリトヾマツでこれが單純林を成せることの多いことゝ、折々他の樹種を混ずるとは云へ、依然山中何處に於いても、アヲモリトヾマツはドミナントの位置を占めてゐたことである。(中でも大岳よりみる小岳の斜面と、石倉は推奨するに吝ならぬものである。)私は左に林道を經て觀た七月下旬の該林について、記さう。

アヲモリトヾマツに就いては、本誌第二十年第一號に略記し、且つ寫眞を插入しない。又和名トヾマツといふのがこの植物の奥羽方言で、それを知つて居る東北人が松前に渡つてエゾのトヾマツを見て同種と思ひ、矢張り之をもトヾマツと呼んだ爲め、終には北海道のが本當のトヾマツと見做される樣になり、それと區別する爲めに八甲田のをアヲモリトヾマツと新稱する結果となつたのだが、トヾマツの本家は内地ので、北海道に庇を貸して主家を取られたことゝなつたのである。私はオホシラビソの名を選んでアヲモリトヾマツの名を排するが、舘脇君の原文にはアヲモリトヾマツとあるので敢て改めなかつた。(武田)

(一)　酸ケ湯より舊硫黄採掘所迄

ネマガリの多い道路の兩側にはサビタ、ヒメスゲ、オホバスノキ等があり、叢下に、シロバナノヘビイチゴ、ヒメスゲ、ヒメノガリヤス等生じ、一般にネマガリ叢下の植物は種類及び量に於て乏しい。

折々ミヤマヤナギがあり、ネマガリの薄い所には、コミヤマカタバミ、ゴゼンタチバナ、ツマトリサウ、オホメシダ、ヤマソテツ、ミヤマクマワラビ、ミヤマスミレ、シラネワラビがある。途上アヲモリトヾマツの幹、地上一米にして、周二米五のものがあつた。ゆく〳〵闊葉樹としては、ミネカヘデ、ヲガラバナ、ハリブキ、コシアブラ、ダケカンバ、ナヽカマド等を算し、ミヅナラ、ブナを少しく見る。ミヅナラとブナは下部に多く、コシアブラとも上部に於いては量は至つて少ない。針葉樹としてはコメツガの小量を中部以下にみとめるのみである。

(二) 石倉山

石倉山頂附近植物調査は、夏日、短時間をもつて探ることは許されない。私達は蔦道をたどつて、酸ケ湯より約二十町弱のふみわけを、第四のクラまでゆき、こゝに針葉樹林をたづぬることゝした。ふみわけに至る迄の蔦道は、新道開鑿後とて、視察には好都合であるが、路邊林木はおそらく原始のものではあるまい。アヲモリトヾマツに交つて、ミネカヘデ多く、ダケカンバ、ナヽカマド、ヲガラバナ、ハウチハカヘデ等があるが、ミヤマハンノキは少ない。ブナは溪寄に多く、大樹も殘存してゐる。下層群落はネマガリで、タケシマラン、マヒヅルサウ、キソチドリ、アリドホシラン、ツルアリドホシ、ツマトリサウ等があり、路傍著しくモミヂカラマツの生ずる所もあつた。

石倉山に生ずるは、殆どアヲモリトヾマツ、下部に小量のコメツガを見、又山中オンコを混じ、第一のクラに近くダケカンバ、ノリウツギ、ナヽカマド、コメツヽジ、シロバナシャクナギを見、上部にはハヒマツを見る、針葉樹林下に生ずるは、羊齒としてミヤマワラビ、シノブカグマ、シラネワラビ等あり。且樹幹によつてはイハガラミ、ミヤマハンシャウヅルがあり、林内にはハリブキ、幹上にはヤシャビシャクを産する。石倉山上の岩崖には、ヲサシダ、ヒメノガリヤス、ヒメスゲ、コタヌキラン、イハキンバイ、シラネニンジン、イハウメ、コケモヽが見出される。

ロ　闊葉樹林

闊葉樹林に對しての正確なる生態的下降限度は、前述の如く、非常に追究し難く、且つ青森道の裾野の複雜に至つては、短日の旅のことゝて瞑目の外なかつた。横内(ヨコウチ)村あたりでヤチダモの殘木に出會つた時などは、どうかと思つたが、村はづれから、あの高原にさしかゝるあたりで無殘にも破壞された。闊葉樹林の上昇限度は、針葉樹の限界に相當するが、溪谷、山火、伐木の有無に由つて、九百米を越してゆくことも稀でない。現在考察し得る樹林内では、あくまで、ブナが優性の位置を保持してゐる。私達は本山連嶺の觀察地點として、荒川の溪域と、蔦道を選むだが、このうちで何人にもおすゝめしたいのは後者蔦道である。

(一)　荒川に於ける觀察（寫眞版二參照）

酸ケ湯から蔦道をすゝみ、地獄沼をすぎてから、ふみわけに沿うて右に荒川に下る。この道沿ひに百米餘下る間にブナの林が出てくる。そして上部にはアヲモリトゞマツを混じ、降りきる迄に、ヒメヤシャブシ、サハグルミ、ベニイタヤ、シナノキ、コシアブラ、ミヅキ等混じ、尙ほハウチハカヘデ、ミネカヘデ、ヲガラバナ、ナゝカマド、マンサク、クロモジ等を交へ、樹下にタムシバ、ミヤマシキミ、ヒメアヲキ、クロウスゴ、オホバスノキ、アクシバ、オホカメノキ等があり、草木とも、仲々に針葉樹帶の分子を含有してゐる。ネマガリのよく生ずる邊に、シャウキランを産するといふ。

溪に下りきるとアマニウ、エゾニウ、エゾオホバセンキウの如き丈高き草本や、モミヂカラマツ、フキユキノシタ、ヤグルマサウ、イハアカバナの如き陰濕性のもの、並びにオホイタドリ、ナツユキサウ、ゴマナがあり、灌木としてタニウツギが眼につく。其の他樹蔭に、ギャウジャニンニク、カラマツサウ、ネコノメサウ、スミレサイシン、ミヤマタフバナがある。

荒川河岸におりたち、更にさかのぼつて行けば、ブナに交つて、ダケカンバ、ベニイタヤ、ハウチ

遠景は石倉（八甲田山植物警見「蘭葉樹林の項末を參照」）

谷地温泉の西南西の倉猿方下の道沿約五〇米の地點にて濕潤乾燥し植生に變化を及ぼせる狀態

影撮氏吉久田武

ハカヘデ、ヤマモミヂ、ミヅキ等があり。ダケカンバ少なく、イタヤに比すればベニイタヤが甚だ多い。烱眼の山口氏、これが葉の異品、實の角度の種々なるを指摘された。ミヅナラ、サハグルミの大樹などうちながめ、サビタ、ナヽカマド、ミヤマザクラの喬木下に生ずるを見、クルマユリ、シュロサウ、ギャウジャニンニク、クサボタン、ヒメシャジン等を樹下に見出す。ゆく〳〵河岸岩上、岩壁には、イハデンダ、ヒメノガリヤス、コカラマツ、ダイモンジサウ、イハキンバイ、イハオトギリ、マルバノキンレイクヮ、イヌヨモギが生じ、フキユキノシタは細流に臨んでゐた。とある河原の荒地には、イハノガリヤス、オホイタドリ、ノウガウイチゴ、ヤマブキショウマ、オホバキスミレ、エゾオホバセンキウ、ミヤマタフバナ、ヒトツバヨモギ、ニガナ、ヤマニガナ、クルマバヒヨリバナが單獨小群落をつくり又三々五々群れてゐた。河岸に沿うては、ヒメヤシャブシ、ナガバヤナギ、バッコヤナギ多く、クジャクシダ、カラマツサウ、ヅダヤクシュがその下にある。又右岸に、崩壞地とおぼしき所があり、ヒメヤシャブシが盛に繁茂してゐた。タヌキランの群落實を結ぶ三階瀑附近までは、大體に於て、上記の如き狀態で、大差ない。又歸路は往路をかへし、新湯（シユ）への踏分けまで、半里も下つたが、やはり似よりで、前記の外ウハバミサウ、シラネアフヒ、ヤマシャクヤク、エゾノリウキンクヮ、ミヤマセンキウ、ウドが所々に見え、ブナ、シナノキ、ミヅナラの大木が、上流に比して多く、尾上の松と言はれる勝地にはヒメコマツが見られた。途中右岸の崩壞地に、ヒメヤシャブシがオホイタドリを中に挾むで、單列的に、急斜面に沿うて藪を形成してゐた。溪に別れて新湯迄の樅林には、コタニワタリ、イヌガンソク、ヤマソテツ、ジウモンジシダ、ヨシダ、ホソバノタウゲシバの如き羊齒類が生じ、オホバアマドコロ、ミヤマスミレ、トチバニンジン、タニタデ、クルマムグラ、ツルアリドホシ、ソバナ、ミヤマニガウリの如き、蔭地性の草本が隨所に生じてゐ、イヌガヤなども見えた。新湯の畔に限つては、ヌマトラノヲ、カハラスガナ、タマガヤツリが生じてゐる。更に酸ケ湯に

進んで、ネマガリの繁みが深くなる頃、注意すれば、シャコタンチクの一品を得やう。附近又、ウダイカンバの小量を混じてゐる。

要するに、この道筋に於ては、櫟林をさぐり得ると共に荒川上流河岸の林地、草本もさぐり、そこに自づと生態的觀察を下し得やうし、蔦道とも異なる點あるより、暇あらば、惜しみなくこゝに一日を割愛しても不足のない所であらう。

（二）蔦道（寫眞版一、三一九參照）

蔦道に於いて、闊葉樹林の觀察は猿倉（サルクラ）への岐路下部より谷地（ヤチ）を經、蔦溫泉附近迄である。殊に美林と稱し得べきは、淵澤（フチザハ）に至る道路が蔦道と分岐する稍々上部から、蔦川徒涉地點前迄の處で、櫟林の端正なる姿が林地終極の林相を示して、吾人に感歎の聲を發せしめずにはおくまい。奥入瀨（オイラセ）の溪流漸くに原始の姿を失ひ、八甲田青森道亦想外の荒廢に吾人の眼を痛ましむる時、私達が、この樹林を見、この樹林に接し得ることは、私達の大なる喜悅である。希くばこの林地の荒廢を、單なる打算の上に導かしむることなかれ。自然のときめきと、幽玄なるかほりを親しみ得るこの美林に人類として許さるゝものゝ限りを與へよ。

猿倉の附近には、溪畔、ミヤマハンノキ、ベニイタヤ、ミネカヘデ、アカツゲ、シロバナシャクナギ、ムラサキヤシホツヽジ、コヤウラクツヽジ、ムシカリ等多く、尙針葉樹林中の要素の名殘をとゞめ、ヤマソテツ、モミヂカラマツ、ダイモンジサウ等を見る。谷地に近づくにつれて櫟は益々多く、溫泉附近に到れば、ホヽノキ、サハグルミの大樹がある。樹下、サハアヂサヰ、ハウチハカヘデ、（多量）ミネカヘデ、エゾニヅリハ、コヤウラクツヽジ、オホカメノキを生じ、下つてはツノハシバミがある。樹蔭には、ヤマドリゼンマイ、シヽガシラ、ヲシダ、シラネワラビ、ヒカゲノカヅラ、マヒヅルサウ、トチバニンジンを見、陽地にはタニウツギ、乾燥地にはミヤマヤナギ、シラタマノキ、アカ

モノを見、路邊には、ミノボロスゲ、オトギリサウ、チドメグサ、オホバコ、ハンゴンサウ等を見る。谷地溫泉を少しく下れば、シナ、ミヅナラを見、センノキ、トチノキ、ブナに混じ、樹下、リャウメンシダ、シラネワラビ、ミヤマベニシダ、ヲシダ、イヌガヤ等があり、濕地には、ミヅバセウ、溪畔には尙ヤグルマサウがある。七百米前後で、ホヽ、ヤチダモ、アヲダモ、ニガキ、ハリギリ等を櫟の間に見出し、乾燥草原にタニウツギやドロを見た。更に下つて蔦への分岐點に近い小柴森あたりでは、櫟林はその極致の美を見せ、僅かに樹間にウハミヅザクラ、イヌエンジュ、ヒロハノキハダを、蔦川附近では、シウリや、トチノキを見た。樹下群落は一般に簡單で殊に極致の櫟林では、ネマガリ、而してネマガリの少ない所には、前記羊齒類である、蔦寄りの所々ネマガリダケの群落が非常に荒廢した所が、さく處最近十年間放牧の結果牛の蹂躪によるものであるといふ。

蔦溫泉附近についてみるに、單一なる櫟林は次第に亂調子になる。湯沼の附近には、ケヤマハンノキ、サウシカンバの若木の頗る多い所もある程になつてゐる(寫眞版六參照)。蔦より燒山に赴く途次蔦川の橋迄は、林内、決して醜くはないが、ホヽノキなど多くなり、サハグルミが出て來、ハウチハカヘデ、ヤマモミヂ等が入り、ムラサキシキブさへ出てくる。更に通天橋に近づいては、アサダ、ミヅナラ、カツラ、サハグルミ、トチノキ、シナノキ、ハウチハカヘデ、ベニイタヤ、ヤマモミヂ混じ合ひ(寫眞版七參照)、櫟は減じ、ツノハシバミや、サハフタギなどをその下に見た。そしてこれらの樹下には、ジウモンジシダ、ツヤナシヰノデ、ヲシダ、イヌガンソク、イヌガヤ、アカソ、コミヤマカタバミ、スミレサイシン、ウマノミツバなどを見受けた(寫眞版八參照)。この地點通天橋を渡る所で全く闊葉樹林の觀察を終るので、川越しに、右岸に林地を見て行くのであるが、それも、今迄の所には較ぶべくもない程である。

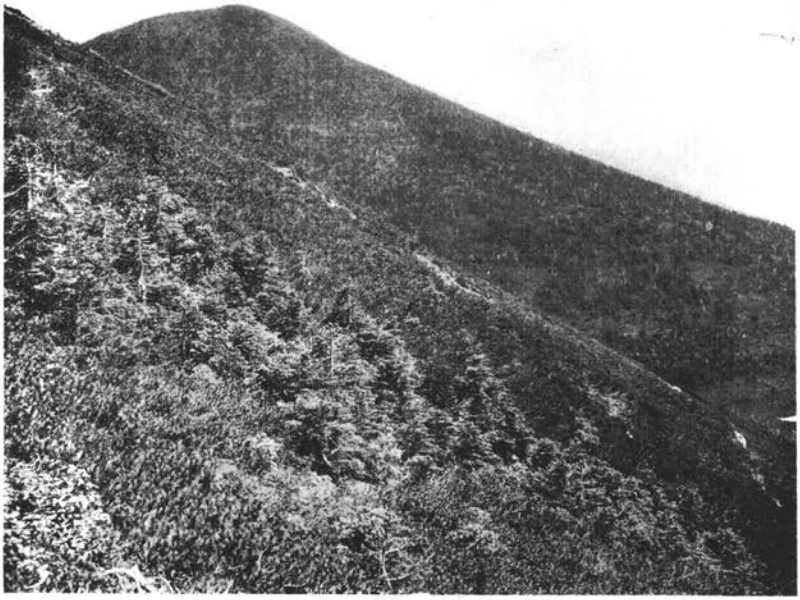
一驚を喫することは燒山迄の路傍若木の樹種である。私達は、サハシバ、クリ、アカシデ、アカダ

モ、オヒョウ、ヤマザクラ、ケヤキ、イタヤ、ヌルデなどを見、こゝ數日間出會ざりし樹種に接し、且つ、その生育狀態の渾沌たるを見、かの櫟林に於て、櫟の若木が、林邊に唯一種をもつて藪の如き層をなせるに比較し、少からぬ興をおぼえた。

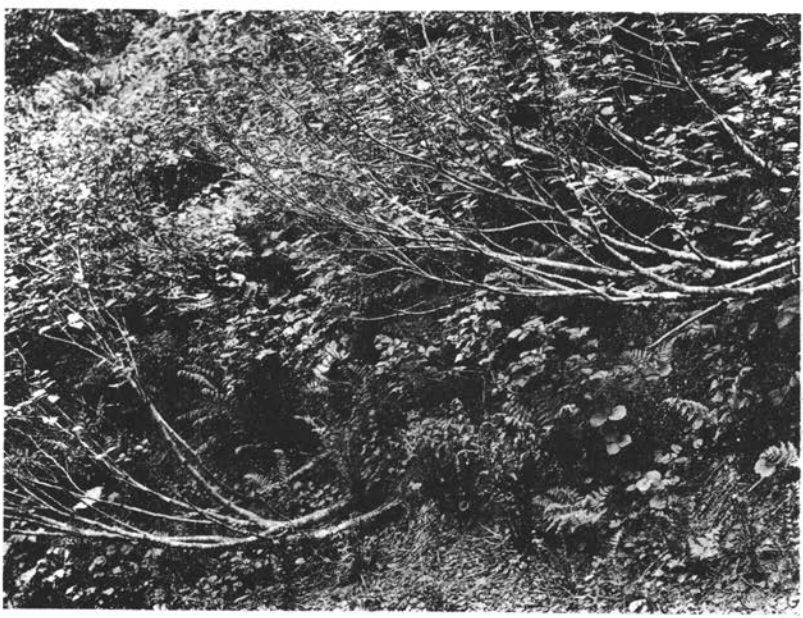
闊葉樹林の章を結ぶにあたる前に、猿倉下部、約八百五十米前後の地點に出できたる特殊地に就いて記述しておかう（寫眞版九參照）。そこは現在、道筋に沿うて存在する乾燥地であるが、ミヤマヤナギ多く、ミヤマヤナギとヒメシダと混生し、ワラビ、アキノキリンサウなど生じ、メイゲツカヘデ、ノウガウイチゴ、ヒメスゲが見出さるゝかと思ふと、オホバショリマがあり、又ヤマハハコ、ノイバラがあるかと思へば、ミヅギクとチヽコグサが相竝むで生じ、ヤマドリゼンマイ、ネバリノギラン、イヌツゲ、甚しい所には、ミヅバセウのある所さへある。種類を見てこれを案じ該地についてこれを考察するに、この周緣は櫟林にして、アヲモリトヾマツを混じ、其の他の接觸地點は現今の谷地溫泉附近に介在するものと略同じく、濕潤地であつたのだらう。然るに今乾燥性となつたもので、前代景觀の遺物として、ミヅギク、ヒメシダ、ミヅバセウ、ヤマドリゼンマイがのこつてゐると推せられる。

此の猿倉の東北高距約八五〇米の地は森林生態學から見て非常に興味ある所であるが、不幸にして吾々一行にはこれを精細に觀察研究する時間が與へられなかつた。寫眞はその一部を示すに過ぎないが略平坦な地で、現今では著しく乾燥してミヤマヤナギが跋扈し又タニウツギやハウチハカヘデが目につく。ブナの林を拔け出でゝ急にこの開けた地に足を踏み入れるのだから、誰しも直に氣のつく所である。

周圍はブナとそれに混ずるオホシラビソ（アヲモリトヾマツ）で圍まれ、その林緣には枯損した樹木の下部が立ち又その下生であつたに違ひないエゾユヅリハが殘存して日に曝されて居る。その間には前記のミヤマヤナギ、タニウツギを初めとして、イヌツゲ、コヤウラクツヽジ、ナヽカマド、



十　八甲田大岳南面の放射谷に沿ひてオホシラビソ・ナヽカマドミヤマハ
ンノキ・サウシカンバ等が帯ツマヒハ突入する狀態　遠景は八甲小田岳



十一　八甲田大岳梯子登りの灌木林　樹下の草本はエンレイウサ・ウカエフ・
マヤキノデ・ミヤマメシダ等

武田久吉氏撮影

ハウチハカヘデ等の好陽性で而も乾燥に耐へ得る植物が侵入して行く。かと思ふとヤマドリゼンマイ、ミヅギク、ヒメシダ、ミヅバセウの如き好濕性の種類が見出される。

此處には過去の記錄がないから推定に甚しい困難が伴ふが、思ふにブナ林の一部平坦で水の溜り易い樣な地形であつたものが、多濕となると共に土壤が酸性に傾き、終に林が破壞された爲めに下生が强光に曝露されて、その最初の犧牲となつたものは已に絶滅し、比較的近頃この狀況の下に置かれる部分が林緣に近く殘存して居るのではなからうか。又、喬木の倒壞と共に增加した日射の結果として乾燥に傾き、ミヤマヤナギの侵入跋扈となつたものではあるまいか。とに角疑を存して他日の精査探究に俟つ。(武田)

以上この道を見るに、三つに大別せられる。卽ち

1. 猿倉附近から谷地溫泉
(針葉樹林との限界として)
2. 谷地溫泉から蔦を經て通天橋まで
(闊葉樹林の觀察地、中に代表的なるものあり)
3. 蔦川の通天橋から燒山迄
(闊葉の二次林)

總じて林地考究者にとつては、靑森道に比してこの道は興味多く、且有益なる資料を得べき、價値ある區域である。

二、高山帶について

針葉喬木林以上を高山帶として、こゝに論ずる。或る人は寒地植物とこれを呼むでゐるけれども、

寒地の定義とて高山植物の定義と同樣に、數學的の限定に依つて定義できるものではない。これが比較的徹底を期するなら、群落を單位として論ずるより外に仕方があるまい。まだ見ぬ寒地を云々するよりも、こゝに私は高山帶の名を敢て採る次第である。本山彙に於ては大體ハヒマツ群について平行して現れるので、標高千四百米以上、灌木林を入れると千三百米に下る。けれども特殊な場合もあり、地獄沼附近の如き所は、その所で記さう。

イ　灌木林について

（一）　大岳梯子登り

大岳の梯子登り（大岳直下南南東の溪）は灌木林の好觀察地である。約千二百五十米より二百米の登高は、空澤沿ひで、灌木林中を歩むのに等しい。最も多きはミヤマハンノキで、ダケカンバこれにつぎ、ヲガラバナ、ミネカヘデ、ミヤマヤナギ、ミネザクラ、チシマザクラ、ナヽカマド、ムシカリ、オンコを混じ、樹下に、ベニバナイチゴ（花）、マルバシモツケ（花）、コヤウラクツヽジ（花）、ムラサキヤシホツヽジ（花）、シロバナシャクナギ（花）、下層草本としてはシャウジャウスゲ、キンチャクスゲ、ヒロハノテンナンシャウ、ヌカボシサウ、ミヤマチドリ、ヒメイチゲ、ミヤマスミレ、オホバキスミレ、サンカエフ（花）、シラネニンジン、ゴゼンタチバナ、タニギキャウ、アキノキリンサウ、其の他百合科植物多く、エンレイサウ、シャウジャウバカマ、オホバノタケシマラン、マヒヅルサウ等をあげ得る。羊齒類としては、ヤマソテツ、シラネワラビ、ミヤマワラビ、クマヰノデ、ミヤマメシダがある（寫眞版十一參照）。これらの植物は融雪の遲速によつて、ある箇所では花開き、又ある箇所では實を結むでゐたものもある。

尙、この梯子登りの入口の溪流畔には、ヨツバシホガマ、ミヤマキンポウゲ、ヤマブキショウマ、シラネニンジンの咲き亂れた所がある。又廢坑附近の荒地にはコメスヽキ夥しく生じ、マルバシモツ

ケやハコツヽジの發育極めて良好なる所がある。これは次に記す地獄沼附近と同様に、嘗て爆發及び噴烟の結果に外ならない。

本灌木林について觀察するに、その草本に於ては特有のものなく、針葉樹林帶のもの多數を占め、折り〳〵上部よりの分子を含むにすぎない。殊にその發達は溪谷に沿へる細い帶狀の部分である。尙本山には、他山の尾根、峯頭近くに見るが如き Betula 屬の優性を保つ灌木林を見ない。

（二）地獄沼附近

地獄沼は酸ケ湯を去る數丁、九百五十米前後の地點である。硫質噴氣孔を有して、本火山中最後に爆發せし處。（『日本の火山』四二四頁）。植物の生態をみるに、他の同標高を有する地點と著しく異なり、飛島の感じを抱かせられる。これにつゞく井戸湯沼も殆ど植物景觀同じく、こゝに兩者を併せて觀やう。

地獄沼附近は他の地點から論じて行けば、正しく針葉樹林であらねばならぬを、爆發によつて地形と林相の破壞された結果、俄然灌木林を現出し、而して、ハヒマツさへ生じてゐる。今附近アヲモリトドマツの森林を越して、兩沼をめぐりて生ずるものを擧ぐるに、ミヤマヤナギ、ダケカンバ、ミネカヘデ、ヲガラバナ、タカネナヽカマド、サビタを初として、シロバナシャクナギ、オホバスノキ、ウラジロヤウラク、クロウスゴ、ハナヒリノキ、コヤウラクツヽジ生育し、中でもウラジロヤウラクは滿開で、蕚の變形が、しきりに見出された。尙樹下には、ミヤマクロソヨゴ、シラタマノキ、イハカガミ、キソチドリ、露出地にはガンカウラン、ヒメスゲがあつた。又灌木狀のアヲモリトドマツが見事なる結實をすましてゐた。泥砂上、ハヒマツの小群を生じ、その小群の周緣に、コヤウラクツヽジ、シラタマノキ、クロウスゴを生じてゐた所もある。井戸湯の沼には濕原があるが、これは濕原の所に記さう。

以上は極く普通なる、何人の眼にもふれやすきものゝみであるが、これ等の種類が織り出してゐる植物景觀は全く針葉樹林のものでなく、高山帶のものである。そして硫質噴氣孔を有する爆發地たるに起因する、卽ち特殊なる裸地に編まれた、新しい植物景觀に外ならぬのである。しかし、かく地獄沼附近裸地は、よく高山ハヒマツ帶中に平行してあらはれてくるお花畑に類似してゐるが、其の所生要素は北地高山に普遍的なコスモポリタンが多く、單純群落がお花畑式になつてゐるので、草本の種類をみれば、針葉樹林所屬以外のものは極めて少ない。

附　大岳に於けるハヒマツ群落と境について（寫眞版十參照）

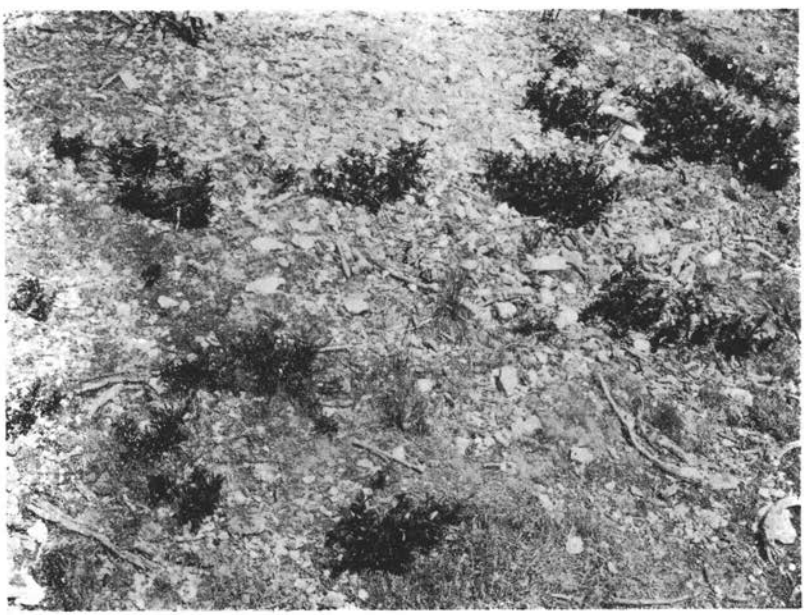
好晴の日を利して、大岳山頂附近を四面にむけて逍遙したら、明かにアヲモリトゞマツの限界を知り得やう。而も不思議にも、溪谷の上部にあたつて、切れた樣にそのあとを斷つであらう。更に眼を放てば、山頂を中心に放射的に出る溪谷に沿うてこれを見るであらう。ハヒマツは溪谷を殘して、山脊を蔽ひおほせて下降する。例へば舊大岳硫黃採掘所附近では、千二百米下にまで山脊に沿うて下つてゐるのに、同じ道の溪谷ではその溪谷のはてし、千四百米以上で、初めてハヒマツになるのである。

私達が高地を旅してゐて、最も普通に出會ふのは山背ダケカンバ林を見て、次にハヒマツに出合ふのであるが、山に依つては大岳の樣な景觀をもつ所にも出會ふ。接觸地點に迄のぼるものには、闊葉灌木として、ナヽカマド、ミヤマハンノキがあり、アヲモリトゞマツも灌木狀となつてゐる。そしてこれ等の地點迄、シロバナシャクナゲがのぼる。又溪谷に沿うて、ハヒマツ海中を下る闊葉灌木林は、殆ど溪谷兩側に限られ、アヲモリトゞマツは山上よりみる時、これに線的に沿ふに過ぎぬと言つても好い位である。

ロ　御花畑について

（一）概論

二十　ウラジロヤウラク（大岳谷地にて）



三十　井戸湯沼に面せる裸地に植民するシラタマノキ・ガンカウラン・コメスゲ、キとイワウゴケ

武田久吉氏撮影

八甲田のお花畑は、乾性、中性、濕性の三つの形態をそなへてゐる。乾性の代表的なものは、八甲田大岳(殊に山頂)並びに井戸岳にこれを探るべく、中性のものは、大岳鏡沼各噴火口内、濕性のものは、大岳櫻沼附近、並びに赤倉岳に窺ひ得やう、標高はいづれも千三百米以上の地點で、ひろくみればハヒマツ群中の一部に生ずるものである。

「大岳」 梯子登りを終へて頂上に至る、千四百米前後より上部には、乾性のお花畑が出る。ハヒマツ以外に、コケモヽ、コメバツガザクラ、ミネズハウ、ガンカウラン、イハウメ多く、シラネニンジン、マルバシモツケ、チングルマ、ミヤマキンバイ、コメスヽキを混じ、濃緑のクッションは、東面より東南面をうづめつくしてゐる。而も灌木、小灌木は、いづれも個體としても見事に成育し、群落としても、良好なる發達をなしてゐる。屢々あらはれてくる岩塊の直面には、イハウメ岩隙をえらびつゝ懸垂して最も多く、上面にはガンカウランとハヒマツが多い。アキノキリンサウはこの邊より上部頂上附近迄にも侵入してゐる。頂上近く礫地には、その外イハギキャウ、ホソバノイハベンケイ、イトキンスゲ、キンチャクスゲ、井戸岳よりにはタルマヘサウがあり。駒形の雪田寄りには、雪解につれて、イハイテフ、ヒナザクラ生じ、アヲノツカザクラの群をなしてゐる所もある。

鏡沼(一五五〇米)の周縁は、稍〻趣きを異にしてゐる。ミヤマヤナギ、ミヤマハンノキ、ナヽカマド、チシマザクラ等の灌木があり、シロバナシャクナギ、オホバスノキ、コヤウラクツヽジ、ウラジロヤウラク、ミヤマホツヽジ、マルバシモツケはそのもとに、又ウサギギク、ヨツバシホガマ、シラネニンジン、ハクサンバウフウ、ウメバチサウ、ハクサンチドリ、ネバリノギラン、シャウジャウバカマ、シュロサウが、交錯群生して華麗な花叢をなしてゐる。イハイテフはこのあたりの水汀近く濕地に、マヒヅルサウ、ゴゼンタチバナ、イハカヾミは、前述灌木のもとに多く見出される。

大岳の噴火口内の群落は種々の型にわかれ、群落移動の階程も色々目擊される。大岳山巔南方、東斜

面の草原分子は、鏡沼附近の草本とあまり異ならないが、灌木が少ないから一層美である。三角點直下の岩壁には頂上礫地に少ないムシトリスミレがあり、其の他イハギキャウ、コメバツガザクラ、ミヤマヲダマキ、ホソバノイハベンケイ、ミヤマキンバイ等が附着してゐる。三角點東南方の斜面には、イハノガリヤス、コバイケイサウが多く生じて居、オホバショリマの群れてゐる所もある。噴火口底には、チングルマ、ミネズハウ、コケモヽ、又イハノガリヤス、ネバリノギラン、ヲタカラカウ等を見、ハヒマツ、ナヽカマドが散在してゐる。噴火口壁東面には、群落形成の新しい所も觀察される。卽ち、シモフリゴケに次いでチングルマ、ガンカウラン、コケモヽ、ミネズハウ、コメバツガザクラ等の小灌木入りきたり、隨所に小群落を形成して後、ネバリノギラン、チシマニンジン、ハヒマツの更に入りきたるを觀察するであらう。尙本斜面乾燥地には、ヒメスゲ、イハギキャウ、Saussurea, マルバシモツケ、ミヤマヤナギ等生じ、植物景觀の稍〻安定型に進むでから、ハヒマツが群生の運行開始の緒についてゐる所もある。

濕性のお花畑は、大岳については南面櫻沼附近が好例である。該地は一帶緩傾斜をなし、山中大なる殘雪を有する所である。その主要種はヒナザクラで、イハイテフこれに亞ぎ、イハカヾミ、シャウジャウスゲ、ヒメイハシャウブ、コバイケイサウ、ハクサンチドリ、タカネトンボ、ミヤマキンポウゲ、ダイモンジサウ、ウサギギク等を混じ、八月も尙殘雪と對して、鮮麗な花莚を編む。櫻沼をまはつては、ハヒマツ、ミヤマヤナギ、チシマザクラ、ナヽカマドがあり(寫眞版十四參照)、下にコヤウラクツヽジ、マルバシモツケが生じ、汀にはイハイテフ、ヒナザクラ、アヲノツガザクラ、コバイケイ等がある。尙附近ハヒマツの下には、オホバショリマ、ミツバワウレン、シャウジャウバカマが生育してゐる。稍北してのぼれば、アヲノツガザクラ、チングルマの旺盛なる發育を見、ミヤマキンポウゲ、ミヤマキンバイ多く又クロウスゴの群生せる所もある。就中アヲノツガザクラのある者では、一

株にて、高さ〇・三米、横徑二・二米、縱徑一米に達せるものすらあつた（寫眞版十五參照）。

松島は大岳裏面にある小池の中に小島を有する濕性のお花畑である（寫眞版十六參照）。所生植物としては、チングルマ、ヒナザクラ多く、マルバシモツケ、イハカヾミ、アヲノツガザクラ、クロウスゴ、イハイテフ等がある。尙大岳山頂寄りの斜面地には、シャウジャウスゲ、コバイケイサウ、シュロサウ、ミヤマキンポウゲ、シナノキンバイ、ウラジロタデ、ヤマブキショウマ、アザミの一種等が、美麗なる花莖をひき、上述の種類の少ない所には、ヒナザクラ、イハイテフ、チングルマがあり、總じてこゝは、好濕性のものが多い。上部崖上には、ミヤマワラビ、イハスゲ、ネバリノギラン、チングルマ、イハウメ、イハヒゲ、イハカヾミ、ムシトリスミレを見られる。

「井戸岳」　井戸岳の南面下、大岳との鞍部に近く、高砂の座敷と稱せられてゐる所がある。一面のシモフリゴケ（方言スナゴケ）で、中に最も多いのは、ヒナザクラ、これについでチングルマが所々に生じてゐる。而してチシマニンジン、コメバツガザクラのいくらかを點在させ、顯花植物群の着生未だ年が淺いのをおもはせる。まはりにアヲノツガザクラの生ずる所あり、ミヤマヤナギもあるが、大體においては、ハヒマツに包圍されてゐる。

井戸岳に於いても山頂礫地をのぞいては、ハヒマツ帶中では、大岳にひとしい。ナヽカマドなども千五百米附近にまでのぼり、ハヒマツに混じて、やはりミヤマヤナギ、ミヤマハンノキなどがある。山頂礫地とて、大岳北面の礫地に大差はないが、今主なるものをあげれば、コメスヽキ、ヒメコメスヽキ、ヒメスゲ、コタヌキラン、イハスゲ、マヒヅルサウ、ネバリノギラン、マルバシモツケ、エゾマルバシモツケ(?)、イハオトギリ、シラネニンジン、コケモヽ、ハナイカリ、ヨツバシホガマ、イハブクロ、アキノキリンサウ等がある。中でもイハブクロ、コタヌキランの如きは、本山彙中で、他の追從をゆるさぬものがある。井戸岳噴火口壁に立つて、案内鹿内の言を聞くに、十五年前には、この爆

裂火口底には殆ど何も存せず、群落の運行はシモフリゴケに由つて始まつたと言ふ。今これを見、案ずるにシモフリゴケに次いで、所により、ハナゴケ入り、顯花植物（草本及小灌木）の發生を見るに至り、次いで灌木としてはハヒマツが多いがミヤマハンノキも生ずる。他所に於てよく群落開拓、若くは群落侵入の第一線に立つチシマザサは、こゝでは遙におそく侵入する。火口内北斜面に現時、シナノキンバイの著しく生ずる所があるが、これもこの二十年間に見事なる發達をなせしものと鹿内は告げた。井戸岳に於ても濕潤なる所には、ミヤマキンポウゲ、アヲノツカザクラ、イハイテフ、ヒトツバヨモギ、ウラジロヨモギ、ウサギギク等あり、乾燥の程度稍〻大なる所には、チングルマ、イハノガリヤスが、相當に良好な發育をなしてゐる。

「赤倉岳」　赤倉岳のお花畑は南南東の赤倉沼附近より頂上尾根へかけての斜面地である。こゝについては群落變遷についての所でのべる。赤倉岳に普通みらるゝは、ハヒマツは言ふを待たざる所とし、アヲモリトドマツの灌木狀をなせるものが鞍部附近上迄到達してゐる。灌木としては、ミネカヘデ、ナヽカマド生じ、ゆくゆくオホバショリマ、スギカヅラ、マヒヅルサウ、ヒメイハシャウブ、ネバリノギラン、ホソバノキソチドリ、ハクサンバウフウ、イハカヾミ等をみる。その他場所に由つては、ミヤマリンダウ、アカモノ、コヤウラクツヽジ、ウラジロヤウラク等があり、南南東斜面をのぞいても濕地には、ヒナザクラ、イハイテフがあり、やゝ乾燥氣味の所には、チングルマが盛に生じてゐる。赤倉の沼の南方に濕原があるが、これも赤倉のものと共に記載するが、附近のハヒマツの下、ゴゼンタチバナ、ツマトリサウ、コケモヽなどに交つて、イソツヽジのあることを示し、且本山に於ては、イソツヽジが、比較的後に移住し來り、その量も、現在多くないことを附記しておく。

（二）　特に群落變遷について

八甲田のお花畑は前述の如く、種々なる形式をもち、且つ二十年にあなる日の概略ながら正確な觀

四十 櫻沼附近にてハヒマツに混じて生ずるチシマザクラ

五十 櫻沼附近の濕生斜面に生ずるアヲノツガザクラ（左右二・二米前後一米高さ〇・三米）

武田久吉氏撮影

察者である案内の鹿内氏の存在と、人爲による變化の極めて少なきとにより、生態學上、忽に出來ぬ所が多々ある。私は、これらの群落の轉移に少からぬ興味を與へられ、こゝに武田博士の周到なる實地御指導のもとに、現在移動中の一端を探査するを得、特に三ッの地點に就て記さう。たゞ十分の時間が許されぬ爲めに、一端の一端なる探査なることを重ねてお斷りする。

イ　大岳谷地（寫眞版十三、二十二―二十九、三十一參照）

八甲田大岳の南面下、小岳の東面、高度約千二百米の所、大岳としては針葉樹林の限度に介在するお花畑がある。面積は廣いとはいへないが、内に植物群落變遷中の種々なる階程を有してゐる。酸ケ湯から行くと、大岳南面の梯子登りにかゝる澤を左にみて、東に踏分けをたどれば好い。

この濕原中には、小瀦水、小瀦水趾、小流があり、又從つて植物の變化にも富むでゐる。小水界には、ヌマハリヰ（寫眞版二十四參照）、ヒメホタルヰ、ヤチスゲ（寫眞版二十三參照）が生じ、小瀦水趾にはヒナザクラ、ミネハリヰ、ホソカウガイゼキシャウ、イハイテフがあり、沼畔、流畔には、ミヤマサギスゲ、シャウジャウスゲ、キンカウクワ、トキサウ、ミツバワウレン、ヒメツルコケモヽ、ツルコケモモ、イハイテフが見られる。濕原中には、ワタスゲ、ミネハリヰ、Calamagrostis, ヌマガヤ、カハヅスゲ、ネバリノギラン、コバノトンボサウ、マウセンゴケ、ミネズハウ、ウメバチサウ、チングルマ、ミツバワウレン、ミヤマリンダウが見出され、稍〻濕潤の度の高い所には、コバイケイサウ、シャウジャウバカマ、ミヅギバウシュ、ホソバノキソチドリ、ツルコケモヽ等が觀察される。これらをめぐつて、アヲモリトヾマツ（高さ二米に達せず）、ハヒマツ、ミヤマヤナギ、ナヽカマド、ミネカヘデ、ヲガラバナ等生じ、下層の小灌木は地獄沼附近と大差なく、ネマガリダケが林下の大部を占めて、濕原に對當してゐる。私達は更に仔細に觀察を試みたので、以下その生育狀態を說かう。

小水界は七米と三米半の徑を有するものから、一米半と一米の徑を有する樣なものあり、その形も

楕圓、圓形、瓢形(ひさご)等種々ある。これ等のものは、水生植物を有せず、沼澤植物から始つてゐる。卽ちある池にはヌマハリヰ、ある池には、ヒメホタルヰ、又ヒメホタルヰとヌマハリヰ、稀にヤチスゲのみ生ずるものさへある。一般にこゝでは一ツの池については、沼澤植物の種類が錯交せずに、單一な群落をつくり勝である。次にこれらの池が減水した場合、好濕性の植物としてミネハリヰ、ホソカウガイゼキシャウ、ヒナザクラ、イハイテフが侵入し始める(寫眞版二十六參照)。そして左の群落が小潴水趾上に明に觀察出來る。

(1) ミネハリヰとホソカウガイゼキシャウ

(2) ヒナザクラとミネハリヰ

(ホソカウガイゼキシャウの入ることあり)

(3) ヒナザクラとイハイテフ

(4) ヒナザクラとホソカウガイゼキシャウ(寫眞版二十七參照)

(5) ヒナザクラ、イハイテフとミネハリヰ

この内でも群落の先驅をなしやすいのは、イハイテフでヒナザクラこれに次ぎ、周邊の狀態に由つては、ヒナザクラが代ることがある。又(1)の如く、ミネハリヰ、ホソカウガイゼキシャウのあることもあるが、この二種は前記二種の後に入り來る場合が多い。而してこれらが濕性の植物群落に赴く中間階程として、沼澤植物群落と混入し合つてゐるものが見られる。卽ちヒメホタルヰとイハイテフであるとか(寫眞版二十五參照)ヒメホタルヰとイハイテフ、ヒナザクラであるとか、色々のコンビネイションの階程が發見される。今最も簡單なるイハイテフとヒメホタルヰの群落について、三米半の徑を有する小潴水の、ライントランセクトを左に示さう。

0——2.0 R
イハイテフ
2.2——3.0
ヒメホタルヰ
3.0——3.2
イハイテフ
3.5
ヒメホタルヰ
3.9——4
イハイテフ
4.7——6.3
ヌマハリヰ
6.5——8.4
ヒメホタルヰ
9.
イハイテフ
10.5——11.5
イハイテフ

前述の沼澤、並びに先驅濕性植物群落に接するものは、水蘚、カハヅスゲ、シャウジャウスゲで、同時にチングルマ、次いでワタスゲ、ミヤマサギスゲ、而してヌマガヤが生じてゐる。

濕原も小さいながら前述の如く複雜であり、大體には所謂中間泥炭の景觀を保つてゐる。そしてその中に、シモフリゴケ、ハナゴケの小群や、ミヅゴケの小叢さへも有してゐる。シモフリゴケの上には、ミネハリヰ、ヌマガヤ、チングルマ、コメバツガザクラ、ミネズハウが見出され、チングルマと、ミネズハウが最も多い。水蘚の上にはマウセンゴケ、ワタスゲが多く、イハイテフ、カハヅスゲ、ヌマガヤ、ウメバチサウ等があるが、水蘚の發達は良くはない。ハナゴケはシモフリゴケに隣り、又單獨に出てくる場合もあるが、とりたてゝ云ふ程のものでもない。濕原は場所に由つて群落をかへるが、或る部分では、チングルマが最も優勢を保ち、ワタスゲこれに次ぎ、ミネハリヰ、ネバリノギラン、コバノトンボサウ、ウメバチサウ、マウセンゴケ、コミヤマリンダウ等混じ、濕原が多少乾燥する傾向を示してゐる。又緣邊によつてヌマガヤの小群落につゞき、ヤチヤナギをへだて、Calamagrostis の群落に至つて、中性草原への委を示してゐる所もある。或はキンカウクヮ生ずるあたりには、ネバリノギラン、ミヤマイヌノハナヒゲ相交り、チングルマがかなりの量に混じたり或はイハイテフとキンカウクヮが小群落を形成してゐる。通觀すれば本濕原はチングルマ——ヌマガヤ濕原と稱し得やう。

最後に濕原に對する周縁植物の侵入であるが、最も興味をひいたのは、本濕原が、アヲモリトドマツ樹林限度附近にあるにもかゝはらず、木本の移入先陣をうけたまはるはハヒマツである。私達は濕原を縱横に歩いて觀察したが、私達の觀察の許す範圍ではハヒマツであつた（寫眞版二十九參照）。尚ネマガリが直ちに濕原に接する所もあるが、これは大體に於てはハヒマツにつゞいて横列直線的に前進してゆく。今ハヒマツの進入を正確にせむが爲、選地の上、三十米のライントランセクトをきつた結果の大體は次の如きものである。

尺
0——8
キンカウクワ
イハイテフ
8——10
チングルマ
* 10——29
キンカウクワ
イハイテフ
31——38
ヌマガヤ
38——41
ハヒマツ
41——47
ヌマガヤ
47——54
ハヒマツ
54——60
ヌマガヤ
60——68
ハヒマツ
68——79
ヌマガヤ
（イハイテフを混ず）
79——88
ヌマガヤ
（中に笹の侵入あり）
△ 88——92
ハヒマツ
（下にネマガリ、アカツゲあり）
92——97
ハヒマツ
（ネマガリ、シロシヤクナギ）
95——99
アヲモリトドマツ

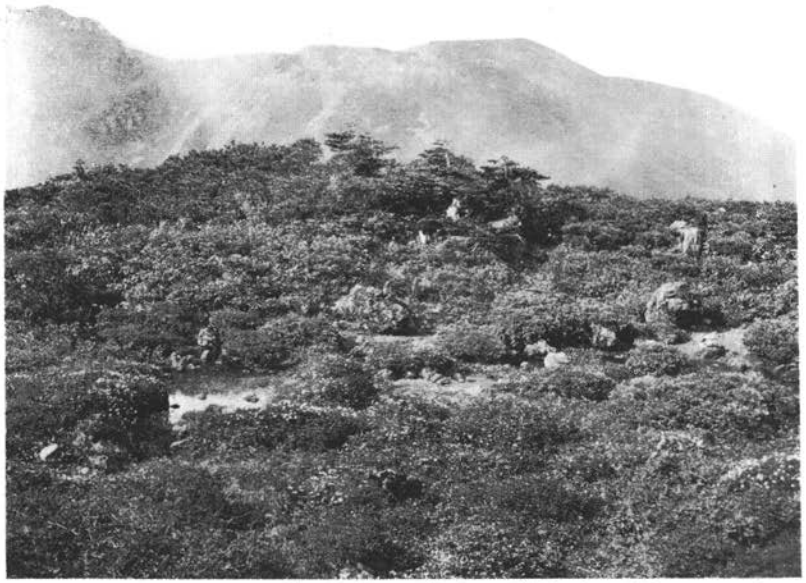
* 11——29の附近にハヒマツあり。
△ 87以下には附近にベニバナイチゴ、ハナヒリノキ、アカツゲ、クロウスゴを見たり。

ロ　大岳山頂附近北斜面（寫眞版三十二、三十三參照）

大岳山頂附近は、ハヒマツ群落に平行して、乾性のお花畑を有する。而も北斜面には裸地が多く、如何に植物群落が安定に固定してゆくやを見るに絶好な場所である。私達は今千五百米前後の地點に得た結果を、こゝに載せてみたく思ふ。

ハヒマツの山頂を下降してゆくと、所々に裸地がある。生ずる植物はコメスヽキ、ヒメスゲ、ホソバノイハベンケイ、チングルマ、ガンカウラン、シラネニンジン、イハウメ、マルバシモツケ、コメバツガザクラ、ミネズハウ、イハギキャウ等、それにハヒマツである。今如何にこれ等が結合して、砂礫地には小叢をなすかといふに次の如きものがある。

（1）　チングルマ



六十　八甲田大岳背面中腹の松島（背景は井戸岳）

シロシ・ウフウバンサクハ・ラクザガツノヲア・ラクザナヒ・マルグンチ
ず生ゑ等ソビラシホオ・ツマヒハ・ギナクヤ

七十　赤倉岳南面に於ける濕原に生ゼるハヒマツの甲拆

りあ等ラクザナヒ・マルグンチ・フテイハイ・キリハネミ・ウハズネミに圍周

武田久吉氏撮影

(2) チングルマとコメスヽキ
(2′) チングルマとコメスヽキ（中にハヒマツ生ず）
(3) チングルマとコメバツガザクラ
(3′) チングルマとコメバツガザクラ（小量のシラネニンジンとハヒマツを伴ふ）
(4) チングルマとイハウメ
(5) イハウメ
(6) コメバツガザクラ、ガンカウランとイハウメ
(6′) コメバツガザクラ、ガンカウランとイハウメ（中にハヒマツ、シラネニンジンを混ずる）
(7) チングルマ、イハウメとガンカウラン
(8) コメスヽキとコメバツガザクラ
(9) コメスヽキ
(10) イハウメとホソバノイハベンケイ

これに由つて按ずるにハヒマツが直ちに群落先驅たることはあつても寧ろ稀で、それは(2′)や(3′)(6′)に由つても推理し得やう。チングルマ、イハウメ、コメスヽキの外に、時としては他の單獨小群落もある。多くの場合は前記の十種である。更にこれらが時の經過と共に、一時複雜なマットをつくり、遂には天變地異のなき限り、最終群落のハヒマツの姿に達することは明である。こゝには、比較的複雜なるマット、卽ち、先驅から一層進むだ群落狀態を示すため、同所に於て切つたトランセクトの一を示さう、

（ある群落の縦斷相）

尺
0——1
チングルマ
1——1.2
コメバツガザクラ
1.2——1.4
ハヒマツ
1.4——1.5
チングルマ＋ガンカウラン
1.5——1.6
チングルマ
1.6——1.9
コメバツガザクラ
1.9——2.1
イハウメ＋ガンカウラン
2.1——2.4
ミヤマハンノキ
2.4——2.5
ガンカウラン
2.5——2.7
コメバツガザクラ
2.8——3.1
ハヒマツ
3.1——3.2
ミネズハウ
3.2——3.4
ガンカウラン＋イハギキヤウ

更に附記したいことは、コメスヽキのもとに、ミヤマハンノキの實生を見たことである。而して精細に附近をみれば、複雜型の中にも又ミヤマハンノキを見ることである。參考までに、其の内の斷面一つを示さう。

尺
0——3
ミヤマハンノキ
（高さ約 0.5 米）
下にシラネニンジン
3.5——5
ハヒマツ
5——10
ガンカウラン
10——11.1
コメバツガザクラ＋イハギキヤウ

ハヒマツが生じ、安定型の一部が推せられる頃には、アカツゲ、コスギラン、スギカヅラがその下に見られ、ヨツバシホガマ、ミヤマスズメノヒエ、折にウメバチサウ、ネバリノギランさへ見うけることがあり、又ミヤマヤナギ、マルバシモツケの入り來ることもある。

ハ　赤倉沼（寫眞版十八、二十一參照）

赤倉崩れの頂き東南方、赤倉沼への東斜面に、濕性のお花畑がある、地は約千五百米。その植物群

落は、大岳谷地とも異なれば、こゝに大要を記述する次第である。

この草原地に生ずる主なるものは、オホバショリマ、タカネヒカゲノカヅラ、イハノガリヤス、ネマガリダケ、シャウジャウスゲ、シャウジャウバカマ、ミヅギバウシュ、マヒヅルサウ、ハクサンチドリ、チングルマ、シラネニンジン、ハクサンバウフウ、アヲノツガザクラ、ミヤマリンダウ、イハイテフ、エゾシホガマ、シホガマギク、ウサギギク、其の他ミヤマヤナギ、クロウスゴ、コヤウラクツヽジ、ハナヒリノキ、ウラジロヤウラク、シロバナシャクナギ等がある。上記の内、灌木は、山頂尾根通り近くと又草原を挾むハヒマツ群落に近く生じてゐる。イハノガリヤスは斜面上部に多く、チングルマは中腹に、イハイテフ、ヒナザクラは殊に下部濕潤の地に群る（寫眞版十九參照）。

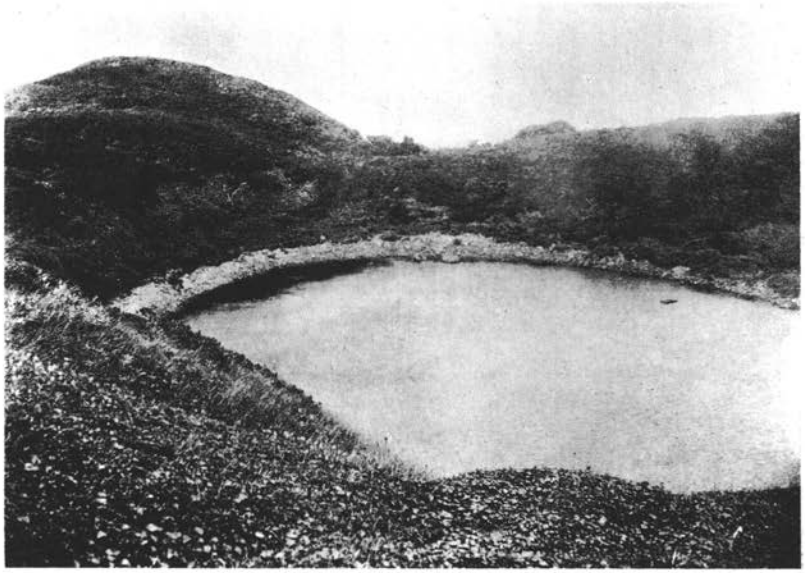
この濕性お花畑に立つて、詳に其群落の生育狀態を見、考察するに、濕性から中性のお花畑を經、ハヒマツの群落に至る一つの經程が明になる。卽ち下部にあたつて出づるヒナザクラ、イハイテフは相次いで、濕性植物群落開始の第一歩を踏み、こゝにヒナザクラ、イハイテフの群落を現出すれば、やがてにチングルマ群落運行の開始は觀察され、チングルマ出づるにあたつて、叢中ハヒマツ實生の生ずるを普通に見出され、シラネニンジンも前後して入り來る。而してチングルマの群落の安定ならんとするに伴ひ、お花畑上部よりは、イハノガリヤス群落が所々にハヒマツを伴ひつ尾根筋より下向せむとしてくる。そして初めに記述した色々の分子が、色々にそこに入りこむでくる。中でもヨツバシホガマ、エゾシホガマ等は相當後より入り來るものである。ハヒマツの小群が固定すれば、これに伴ひ、マヒヅルサウ、クロウスゴ、コヤウラクツヽジ、ウラジロヤウラク（寫眞版十三參照）などが生じてくる。

更にこれを實證せむがため、こゝに尾根近くより斜面中腹にかけ、イハノガリヤス群落中下部に當りハヒマツの生じてゐる附近から出發し、チングルマ群落を主としてヒナザクラの出でたる地點に、二十米餘の斷面をひき、その實測結果を參考にまでに記さう。

* 49.8—53.4
（タカネヒカゲノカヅラ混入す）
53.4—53.8 イハイテフ
54—56.4 チングルマ
（中にハヒマツの實生あり）
56.8—57.1 イハイテフ
57.1—57.7 チングルマ ＋ ハヒマツ
57.7—58 イハイテフ
58—58.7 チングルマ／イハイテフ／シラネニンジン
58.7—59.9 チングルマ
60—60.5 ハヒマツ
60.7— イハイテフ
60.8—61 ハヒマツ
61—61.2 イハイテフ
61.2 シラネニンジン
61.5—61.8 イハイテフ
61.8—63 ヒナザクラ
（中にチングルマ、イハイテフを混ず）
63—64.4 チングルマ
64.4—64.8 シャウジャウスゲ
64.8—64.9 イハイテフ
65—65.5 チングルマ
65.6 イハイテフ
65.7—65.8 チングルマ
65.9 シャウジャウスゲ
66 チングルマ
66—66.4 チングルマ ＋ イハイテウ
66.5—66.8 ハヒマツ
66.9 ミヅキバウシュ
67—67.4 イハイテフ ＋ チングルマ
67.4—68 ミヅキバウシュ／チングルマ／エゾシホガマ
68.1—68.2 イハイテフ
68.2—69.0 チングルマ／イハイテフ／シラネニンジン
69—70.2 チングルマ

尺
30.3—33.4 チングルマ
33.4—33.8 ハクサンバウフウ ＋ イハイテフ
33.8—36 チングルマ
（所々にイハノガリヤス）
36—37 チングルマ
37—38 チングルマ／イハイテフ／ミヅギバウシュ／チングルマ／イハイテフ
38—38.6 ミヅギバウシ
38.7—39.2 イハイテフ
39.2—40.9 ミヅギバウシュ／チングルマ／イハイテフ／チングルマ
40.9—41.1 イハノガリヤス
41.2—41.6 ハヒマツ
41.6—44 イハイテフ／シラネニンジン／ミヅギバウシュ／イハイテフ／イハイテフ／チングルマ／ハヒマツ／チングルマ／イハイテフ／シラネニンジン
44—45 ハヒマツ
45—46 チングルマ／イハイテフ／ハヒマツ（實生）／シラネニンジン
46—47.3 チングルマ
47.3—47.7 イハイテフ
47.7—48 チングルマ
48—48.9 チングルマ／イハイテフ／チングルマ
48.9—49.8 チングルマ
49.8 イハイテフ
49.8—50.4 チングルマ
50.4 イハイテウ
50.5—50.9 チングルマ
50.9—51 イハイテフ
51—53.4 チングルマ

尺
0—4 ハヒマツ
4—4.6 イハノガリヤス
4.7—5.3 ネマガリダケ
5.3—7 イハノガリヤス
7—8 ネマガリダケ
8—9.8 ミヤマヤナギ
9.8—11.2 イハノガリヤス
11.2—12.2 ネマガリダケ
（この間に附近、ミヅギバウシュ、ハナヒリノキ、ミヤマヤナギ、シロバナシヤクナギ生ず。）
13—14 ミヤマヤナギ
14—17.4 イハノガリヤス
17.4—18 チングルマ
18—19 チングルマ／ハクサンチドリ／ミヤマヤナギ／ハクサンバウフウ
19—21 チングルマ
21—22.2 ハヒマツ
22.2—23 チングルマ
23.7—23.8 イハノガリヤス
23.8—24.0 イハイテフ
24.0—24.2 チングルマ
24.2—24.7 チングルマ
（アヲノツガザクラ及びイハノガリヤスを混ず）
24.7—25 イハイテフ
25—25.5 イハイテフ ＋ チングルマ
25.5—25.7 イハイテフ
25.7—26.2 チングルマ
26.3—26.5 イハノガリヤス
26.5—27.4 チングルマ ＋ イハイテウ
（シャウジャウバカマ、アヲノツガザクラを混ず）
27.4—28.0 チングルマ
28—29.2 チングルマ
29.2—29.9 イハイテフ／エゾシホガマ／イハノガリヤス／イハイテフ
29.9—30.2 ハヒマツ（實生）シラネニンジン



赤倉沼　八十

赤倉沼上方の濕性御花畑　九十

主にイハイテフとヒナザクラ

武田久吉氏撮影

70.2—70.7 R イハイテフ ＋ チングルマ
77.7—71 ハヒマツ
（イハノガリヤスを混ず）
71.1—71.4 ハヒマツ
71.4—72.2 イハカヾミ ヒナザクラ イハイテフ
72.4—72.8 イハイテフ
72.8—73.8 チングルマ
73.8—74.2 イハイテフ ＋ ヒナザクラ
74.2—74.5 チングルマ
74.5—75.2 イハイテフ
75.2—75.7 ハヒマツ
75.7—76.3 チングルマ
76.4—76.6 イハイテフ
76.7—77 チングルマ イハイハフ
77—77.3 シャウジャウスゲ ＋ ヒナザクラ
77.4—77.9 チングルマ シャウジャウスゲ、イハイテフ
77.9—78.2 ヒナザクラ ＋ イハイテフ
78.2—78.9 チングルマ ＋ イハイテフ

これを簡潔にして考へると次の如き群落の一斷面が考られる。

ハヒマツ
↓
イリヤハスノガ
↓ ↑
チングルマ
↓
イハイテフ
↑
チングルマ
↓
イハイテフ
↑
チングルマ
↓
ヒナザクラ
イハイテフ
↑
チングルマ
↓
イハイテフ

最後に前記赤倉沼の略南方にあたり、約千五百米地點に介在する小濕原について一言しやう。面積は極めて小さいが、ヒナザクラとイハイテフの關係の考察が出來る場所である。生ずるものに、ワタスゲ、ミネハリヰ、ホソカウガイゼキシャウ、ネバリノギラン、チングルマ、マウセンゴケ、イハカガミ、ヒナザクラ、イハイテフ等があり、ハヒマツが包圍してゐる。ワタスゲの生ずる緣邊について觀察するに、ワタスゲにつゞいて、チングルマがあり、それにハヒマツの群落が接して、又濕潤地にはイハイテフが直ちに接してゐる。濕原中濕性群落開拓のヒナザクラがミネハリヰを伴ひ、又は單獨群落を形成し、後濕潤なればイハイテフに壓倒され、乾燥に赴けば同時に又はやゝ後れてチングルマの入り込み來るが、明に觀察せられる所がある。大體に於ては、本濕原は、乾燥に赴く高山沼野が、濕性のお花畑をよぎつてゐる時を示すもので、同時に中性草原への運行が起つてゐるのである。今更

にこれを示さむがため該地に於いて、錯交せる所の一つをとつて、茲に、その群落横斷面を示さう。

0—1尺	イハイテフ（チングルマを混ず）
1—1.5	チングルマ（イハイテフ少量を混ず）
1.5—1.8	ミネハリ井
1.8—2	イハイテフ
2—2.3	チングルマ
2.3—2.4	ミネハリ井
2.5—2.9	イハイテフ
2.9—3.3	ミネハリ井（チングルマ入る）
3.4—3.7	ミネハリ井
3.7—4.0	ヒナザクラ
4.1—4.2	ミネハリ井＋ヒナザクラ
4.2—4.3	ヒナザクラ
4.3—4.5	ヒナザクラ＋ミネハリ井
4.5—4.6	ヒナザクラ
4.7—4.9	イハイテフ
5—5.3	ミネハリ井
5.4—5.5	ミネハリ井
5.6	ネバリノギラン
5.6—5.9	ミネハリ井＋ヒナザクラ
5.9—6.3	ミネハリ井＋ヒナザクラ＋チングルマ
6.3—6.6	ヒナザクラ＋ミネハリ井

濕原中上部に、横徑九・一米、縱徑二・四米、高さ二・三米の小丘がある。ハヒマツ、ナヽカマド、クロウスゴ、クロマメノキ、チングルマ、ガンカウラン、ミネズハウ、アカモノ、コケモヽ、アヲノツガザクラ、マヒヅルサウ、ゴゼンタチバナ、イハカヾミ等を生じてゐるが、ガンカウランが最も多く、これについでは、乾性小灌木が、優勢の位置を保つてゐる。

かくて私達が觀察に際しては、濕原は大部、乾燥に向ふ群落變遷の行程を辿りつゝあるを示してゐた。

三、濕原について

八甲田をめぐつては濕原が多い。曰く田茂谷地、曰く毛無平（ケナシダヒ）、曰く睡蓮沼、曰く谷地溫泉の谷地、麓には田代谷地及び蔦。又附近をめぐる駒ヶ峯、乘鞍岳、櫛ヶ峯にも夫々の濕原をもち、且つ山上に於ても、八甲田といふ名の示す如く、所々にこれを有してゐる。私達は、睡蓮沼近傍に存在し、睡蓮沼谷地と總稱せらるゝ部分に、中心をおいてこゝを調査し、尙酸ヶ湯溫泉附近、並びに谷地溫泉、湯沼南緣についての觀察を記さう。

石倉岳に登つて東南方睡蓮沼地帶を見れば、樹林の錯交に由つて、濕原が種々に區分されて居る。事實又私達がその地帶を踏むでも、地形は濕原としては複雜な方である。

(一) 高田谷地 (寫眞版三十四—三十七參照)

酸ケ湯に最も近い濕原で、私達は舊道をえらんで、その地を觀察し、殊に濕原と樹林の接觸地點に、殊更の注意を拂つた。本濕原には格別ドミナントの種類がなく、强ひて言へば、キンカウクヮ、ヌマガヤ濕原とでも名づくべきで、恐らく所謂中間泥炭の景觀を具備してゐるものであらう。濕原中には、ヌマガヤ、ミカヅキグサ、ミタケスゲ、キンカウクヮ、ネバリノギラン、ミツバワウレン、ウメバチサウ、チングルマ、マウセンゴケ、ツルコケモヽ、イハイテフ、ミヅギク、ヤチヤナギがあり、中にハヒマツ、イヌツゲの叢ある所があり、周邊には、ヤチカハヅズゲ、アブラガヤ、ミヅバセウ、ミヅギバウシュ、コバイケイサウ、ミヅギクが多く、コオニユリのある所もある。樹林の緣邊より濕原に接しては、ウラジロヤウラク、ミネカヘデ、シロバナシャクナギがあり、やゝ後方にミヅナラ、ナヽカマド、クロウスゴ、エゾユヅリハ、アヲモリトドマツを生じてゐる。今樹林外緣近くより濕原に向つて、六米餘のライントランセクトを作つた結果に次の如きものがある。

尺 0.—2.4	ミネカヘデ モミヂカラマツ
2.4—3.8	ミヅバセウ
3.9—5.2	ナガボノ シロワレモカウ
5.4—6	ヤチカハヅスゲ
6—6.5	ミヅギバウシュ
6.8—7.0	モジズリ
7—7.6	ミヅギバウシュ
7.6—7.9	ヲタカラカウ
8—8.2	ヤチカハヅスゲ
8.2	ミヅギク
8.4	ミヅギク
8.5—8.9	ナガボノ シロワレモカウ ススキ ナガボノ シロワレモカウ
9 9.3 }	コオニユリ ヤチカハヅスゲ
9.5—10	ミヅギク ＋ ヤチカハヅズゲ
10	コオニユリ
10.3—10.7	ナガボノ シロワレモカウ
10.8	コオニユリ
11.	ミヅギバウシュ
11—12.5	ウラジロヤウラク
12.5—12.7	ヤチカハヅスゲ
13—15	ウラジロヤウラク コバイケイサウ
15.2—15.6	ミヅギク ＋ スヽキ
16	ナガボノ シロワレモカウ
16—16.7	ヤチカハヅスゲ ＋ ナガボノ シロワレモカウ

前記のものは、コオニユリを含むだ緣邊の一例で、コオニユリは濕原が乾燥せぬ限り、決して其の中心部には出ない。

更にレンゲツヽジの生ずる附近の植物の種類を知らんがため、林内より漸時濕原に向つて、追うたものを左に記さう。

尺	
17—17.3	ミヅバセウ （ツルコケモヽ）
17.4—17.7	ヤチカバヅスゲ ナガボノ シロワレモカウ
17.8—18	スヽキ
18—18.4	ナガボノ シロワレモカウ スヽキ ナガボノ シロワレモカウ
18.4—18.9	ヤチカハヅスゲ
19	ミヅギク
19—19.3	キンカウクワ＋ ツルコケモヽ
19.5—20	キンカウクワ
20—21.3	キンカウクワ ミヅギク スヽキ ヤチカハヅスゲ ナガボノ シロワレモカウ ツルコケモヽ
21.5—21.8	ミタケスゲ
21.8—22	ナガボノ シロワレモカウ マウセンゴケ
22—23.1	ミタケスゲ

樹林の末端より

アヲモリトドマツ
ナヽカマド
ミネカヘデ
ハナヒリノキ
シロバナシヤクナギ
ハナヒリノキ
ギヤウジヤニンニク
モミヂカラマツ
アキノキリンサウ
コバイケイサウ
シロバナシヤクナギ
コヤウラクツヽジ

接觸地點

ヤチカハヅスゲ
ナガボノ
シロワレモカウ
ヤチカハヅスゲ
コヤウラクツヽジ
ナガボノ
シロワレモカウ
レンゲツヽジ
ヤチカハヅスゲ
ナガボノ
シロワレモカウ
キンカウクワ
レンゲツヽジ

ナガボノ
シロワレモカウ
ミヅバセウ
ヤチカハヅスゲ
ナガボノ
シロワレモカウ
ヤチカハヅスゲ
ナガボノ
シロワレモカウ
ナガボノ
シロワレモカウ
ヤチカバヅスゲ
ミヤマイヌノハナヒゲ
ツマトリサウ
ツルコケモヽ
マウセンゴケ
↓
濕原へ

現在の高田谷地は、濕原が樹林へ向ふと云ふよりも、樹林が濕原に向つて侵入移動の行程をとつてゐる。尚前記アヲモリトドマツの出てくるあたりから、反對方向にすゝめば、マヒヅルサウ、キソチドリ、ヤマソテツ、ミツバワウレン、シラネワラビ、オホバタケシマラン、ミヤマシキミ、イハナシ等相次いで出で、アヲモリトドマツの林中（折々コメツガあり）に入つてしまふ。

二十　赤倉沼上方火口東南壁に於てハヒマツ・ナヽカマドヽサ・ヽ
ツマヒハるせ入侵に原草は景近

二十一　赤倉沼上方の濕性御花畑が中性草原に變じ更にハヒマツの侵入を蒙る有樣
チンクルマ群落内にハクサンバウフウ・ギバウ・ユシウ・イハノガリヤヒス等侵
入し更にミヤマヤナギ・ヽサ・ヽハヒマツの侵入となる

武田久吉氏撮影

俗稱高田谷地の東にも谷地がある。まはりはアヲモリトドマツで、折々ハヒマツがある。南よりの斜面地にヒナザクラの滿開の所があり、中腹にヒナザクラ、イハイテフ混生し、下つて、なだらかなる濕原に接する點、イハイテフの側に、花咲くミヅバセウ出で來たり、Juncus が混ず、しかし尙イハイテフ、ヒナザクラの群落を保つことがあり、それに Juncus の多少うちまじることもある。この斜面中ではヒナザクラ最も早く次に雪解につれて、イハイテフが混入してゆくらしい。濕原中に小沼池がある。水生植物としては、ヒツジグサ、ウキガヤ、沼澤植物として、ヌマハリヰ、ホタルヰ、ミツガシハを生じてゐる。濕原中殊に濕潤なる箇所には、ヤチスゲ最も多く、所に由つてはミヅバセウ又ホタルヰ生じ、サハギキャウが混じ、ヤチカハヅスゲも仲々に多い。

水生植物と沼澤植物の關係を見るに、乾燥に伴ひヒツジグサ減少するか、又はヒツジグサに向つてミツガシハ侵入し、兩者の混淆群落が、ヤチスゲに依つて驅逐せられ、次いでサハギキャウ、多くはヤチカハヅスゲが進行してくる。そして稍〻乾燥した所には、ワタスゲがあり、又 Juncus-Rynchospora 群落現出し、もりあがりとも稱すべき、乾燥小塚には、ナヽカマド、シラタマノキ、レンゲツツジ等がある。本濕原中濕原植物としては前述の外にヌマガヤ、ミカヅキグサ、ミヤマイヌノハナヒゲ、エゾホソヰ、ネバリノギラン、ホソバノキソチドリ、コバノトンボサウ、ナガボノシロワレモカウ、マウセンゴケ、ツルコケモヽ等が最も普通で、ヤチランの稀に生ずることもあると聞く。ミヅギバウシュ、モジズリは緣邊に多い。この低地沼澤に觀察せらるゝは、ヤチスゲ——ミツガシハ沼澤に、ヤチカハヅスゲ、若くはミヤマイヌノハナヒゲが入つて、濕原への移動行程を示してゐる所があることである。以上これらを通じて生態的に分類すれば、本濕原は(1)ヒナザクラ——イハイテフ濕原、(2)ヤチカハヅスゲ——ミヤマイヌノハナヒゲ濕原、(3)ヤチスゲ——ミヅバセウ沼澤とも爲すべきであらう。

本濕原を歩いてゐる內に、私達は、シラタマノキの群落に出合つた。興を感ずるまゝに、そのやゝ

高きシラタマノキの生ずる所を見ると、シラタマノキの外ミネカヘデ、ナヽカマド、アカモノ、ミツバワウレン、エゾホソヰ、ミヅバセウ、オホバショリマ等を生じてゐる。こゝに其の縦斷つくりし測定結果の一を參考にまで示さう。

尺 0—0.4	エゾホソヰ
0.4—4.6	ミツバワウレン
(2.3—3.4	の所に ミヅバセウ生ず)
4.6—15	シラタマノキ
(7.6—8	13—14 オホバシヨリマ)
15—15.6	アカモノ
15.6—19	オホバシヨリマ

この小塚の示す如く、濕原中の小面積上に、生態的に異なるべき種々の分子が、混入し合つてゐるのは、實に奇とすべきものである。

終りに記すが、本濕原の高度に比して斜面上部高山的氣分を味はしむるは、この地の殘雪に起因するものと思ふ。

（二）　睡蓮沼谷地（寫眞版三十、三十八、三十九參照）

睡蓮沼附近には長沼其他の小沼が三つある。睡蓮小沼と稱する中には、水生植物としてヒツジグサがあり、沼澤植物としてミツガシハがある。而して沼畔近く、ヤチカハヅスゲ、サハギキャウ生じてゐる。沼澤植物群の運行は未だ新しく、ミツカシハにつゞいてサハギキャウが進む。沼をめぐつては、Rynchospora—Carex 濕原とも稱すべく、要素は高田谷地のものと大差ない。尚この地點に於ても、レンゲツヽジのある所に注意して觀察を試みた。その結果を左に記さう。

アヲモリトドマツ
↓
ミネカヘデ
アヲモリトドマツ
ミヤマクロソヨゴ
アヲモリトドマツ
ヒメヤシヤブシ
ツリガネニンジン
ミヅナラ
レンゲツヽジ
ミツガシハ
ヤチカハヅスゲ
↓
Carex—Rynchospora Moor.

睡蓮沼に於ては、現時、ヒツジグサは尚沼心に向ひ、ミツガシハはヒツジグサにつゞき、ヌマハリヰ

はミツガシハと前後してヒツジグサの後を追ひ、ヨシは沼畔に生じて、或る箇所では沼面に前進せむとしてゐる。睡蓮沼、中沼をめぐる濕原に普通なるは、ワタスゲ、ミカヅキグサ、オホイヌノハナヒゲ、ミヤマイヌノハナヒゲ、ホロムイスゲ、ミタケスゲ、カハヅスゲ、ミツバワウレン、マウセンゴケ、ツルコケモヽ、ヒメツルコケモヽ、ヒメシャクナギ等で、沼畔に水蘚よく生育してゐる所もあり、中には浮島狀に沼面に浮出して、水蘚を主として、ホロムイスゲ、ミカヅキグサ、ツルコケモヽなどをのせてゐる。

睡蓮沼の奥にも濕原があるが、カハヅスゲ、ミヅバセウ、ネバリノギラン、ナガボノシロワレモカウ、ツボスミレ、シロバナスミレ等生じ、乾燥したる所にはナガボノシロワレモカウ多く、其の他雜草の入りこむもの多く、又ニレ、ミヤマヤナギ侵入し來る所もあり、ミヅギバウシュの多い所もある。しかし濕原俗に谷地眼（マナコ）と稱せらるゝものゝ中に、逸品ホロムイサウを產するものがある。又これらの谷地眼の中において、乾燥のため既に、ヒツジグサが滅亡して、ホタルヰ殘り、そこにミヅバセウが入り、沼畔から漸時 Rynchospora—Carex 群落にをされ氣味の所がある。又濕原中或るゆるい斜面に沿うて、降雨多き節は水路とみられる樣な地に、線狀にミヅバセウ（最多）ミツガシハ（多）の群落が出て來、中にホタルヰ、ナガボノシロワレモカウ、ツボスミレ、サハギキャウを交へ、殊に、ミツガシハ、サハギキャウは水の停滯し相な箇所に多い。場所に由つて、同じ停滯水の起り相な所にヰの生ずるのも見うける。最後に前記諸濕原に對し、樹林開拓の始めをなすべき種類をあげると、レンゲツヽジ、ハヒマツ、ミヤマヤナギ、コヤウラクツヽジ、ミネカヘデ、イヌツゲ等で、終局森林をなすアヲモリトドマツが、後れて濕原に入りきたることは注目すべきである。こゝに濕原と接觸地點の觀測を蛇足ながら附記する。

イ

モミヂカラマツ
ギャウヂヤニンニク
コオニユリ
コバイケイサウ
ミヅバセウ
ミヅギク
ヤチカハヅスゲ

↓

濕原

（縁邊）

ロ

アヲモリトドマツ

↓

ブナ
ナヽカマド
アヲモリトドマツ
イヌツゲ
ハウチハカヘデ
ミネカヘデ
コヤウラクツヽジ
モミヂカラマツ
ミヅバセウ

↓

濕原

（樹林末端と接點）

（ロ）の場合
既にミネカヘデの幼樹が濕原に入るを見たり。

睡蓮沼の東方、蔦道側にも小沼がある。今其一つについて見るに、沼の中心に向つてウキガヤが生じ、つゞいてヒツジグサがあり、又タヌキモ、コタヌキモを產する。沼岸より先驅をなして行くのは、ミツガシハでホタルヰが後からつゞく。ホタルヰの中に沼畔よりサハギキャウが侵入し、ミツガシハ更に進み、ホタルヰ亦侵入すると共にミツガシハは一層進み、ヒツジグサの群落を侵す。

睡蓮沼谷地を通じて、水蘚濕原の代表的となるものはなく、大部は Carex-Rynchospora Moor であること、高山帶といふより針葉樹帶中の濕原形を保つてゐること、尠くとも本年の視察時は、濕原は乾燥の傾向を示してゐること、從つて植物群落移動經程が觀察される。

（三）酸ヶ湯附近

酸ヶ湯の對岸に濕潤の度のひどい谷地がある。惜しいことに近來、酸ヶ湯泊の乘馬駄馬を放牧するため、植物景の自然推移は、こぼたれてしまつてゐる。故にこゝでは單に植物をあげておこう。ヒメシダ、ヨシ、ヤチバウズ、オホイヌノハナヒゲ、ヰ、ヒラヰ、ネバリノギラン、コバノトンボサウ、マウセ

二十二　八甲田大岳谷地に於けるヒメワタスゲ（北海道以外に未だ見ざりしもの）

二十三　八甲田大岳谷地に於けるヤチスゲ

武田久吉氏撮影

ンゴケ、コケオトギリ、ツルコケモヽ、エゾシロネ、サハギキャウ、ミヅギク等で、ヒメシダ、ヨシ、ヤチバウズ、ミヅギクは周邊に多いものである。濕原をまはつての灌木としては、ミヤマヤナギ、ナガバヤナギ、ミネカヘデ、ハウチハカヘデ、サビタ、ミヅキ等あるが、全體としては針葉樹林中のものと見るが至當である。本山彙を通じて容易に見らるゝ濕原中、ヒラキなどの生じてゐるのは、こゝであるから、ならうなら、放牧せずに、自然狀態を保持させておきたいものである。

又井戸湯の沼附近にも小濕原がある。その顯花植物要素は簡單で、イハノガリヤス、カハヅスゲ、ワタスゲ、サギスゲ、エゾホソヰ(?)、ガンカウラン、マウセンゴケ、ツルコケモヽ、ツマトリサウを見る位のもので、シラタマノキの混ずることもある。エゾホソヰが小群落をつくるの外は、大低二三のものが寄つて、群落を點在させるにすぎない。この濕原などは時間的には、永續性を有する濕原でなく、濕原としては恐らくは、一時的偏在のものにすぎぬのではあるまいか。

（四）谷地溫泉濕原

谷地溫泉の東部に小濕原がある。地は東西に長く、南北に短く、東西を軸としてゆるやかな斜面になつてゐる。高差四十米、本濕原を見るに大部は Rynchospora—Triglochin 濕原で、上部にヒラギシスゲ濕原がある。

池には、フトヰ、ミツガシハがあり、ヒラギシスゲ群落は上部にあつて、濕潤の度高く、中に、水蘚の小塊を介在させ、水蘚の上には、ヒメシャクナギ、ツルコケモヽ、ミカヅキグサなどがある。Rynchospora—Triglochin 濕原中、殊に停滯水分の多い所には、ミヅバセウ、ホソバノシバナ、ミツガシハ、サハギキャウ、ヤナギトラノヲがあり、濕原を通じてみらるゝは、ヒメシダ、ミタケスゲ、ヤチカハヅスゲ、カハヅスゲ、ワタスゲ、ミヅバセウ、ヒラキ、ミヅギバウシュ、キンカウクワ、ヤチラン、モジズリ、コバノトンボサウ、ウメバチサウ、ナガボノシロワレモカウ、マウセンゴケ、ヒメ

シャクナギ、ツルコケモヽ、ミヅギク等である。又前に比してやゝ濕潤の度の低い所には、ヒメシダ多く、ヤマドリゼンマイ、サハギキャウ、其の他、ネバリノギラン、コバノトンボサウ、ナガボノシロワレモカウ、ヲタカラカウ、ミヅギク等がある。小沼中、フトヰ、ミツガシハの生ずる所は、排水溝のために、乾燥に向ひ、Juncusが侵入し、ミツガシハ、ホソバノシバナの生ずる部分には、ミヤマイヌノハナヒゲが入り、又周りのある一部から、特にヒメシダ、サハギキャウが中心部に向ふ形勢を示してゐる所がある。濕原中、小高い所にはレンゲツヽジがあり、灌木として、こゝで先づ濕原に入りこむは、ミヤマヤナギである。

本濕原は、ブナ林中に生ずるのであるが、附近のブナ林中にはアヲモリトヾマツが混じてゐる。そして接觸地點には、ミヤマヤナギ、ミネカヘデ、ハウチハカヘデ、ミヤマクロソヨゴ、ハナヒリノキ、オホバスノキ、イヌツゲ等を生じ、バイケイサウ、モミヂカラマツなどが、眼にいる。

この濕原も、黑森への道路の開鑿のため、短い小いながらの排水溝をほったため、濕原は、徑のまはりが乾燥への方向をとつてゐるけれども、上部ヒラギシスゲの群落から、その下方にあたつて、仲々濕潤の度が甚しく、停滯の惡息の甚しい所がある。

蔦湯沼について略記しやう。湯沼にはウキガヤやミヅニラの外に、今回武田博士に依つて發見せられたるチシマミヅニラがある。又蔦湯よりには、ヤマドリゼンマイ、サトメシダ、ヒメシダ、ハクサンスゲ、ミノボロスゲ、アブラガヤ、オホヤマサギサウ、沼畔にヌマトラノヲ、ミヅオトギリ、ヒラギシスゲ、ヌマハリヰ等生じ、川沿ひにオホカサスゲ群生し、ドクゼリ、又ニガナ、オトギリサウ、ゲンノショウコなどがうちまじつて、植物景觀は混亂し、附近、ケヤマハンノキ、ダケカンバ等が純群落をなして生じてゐる所がある。私達は蔦に滯在して、蔦十湖を探り、且つその周緣を精査する筈であつたのを、日數の都合と天候等によつて、果さざるに立ちいたつたのは、遺憾である。

岩手山御苗代附近の地形について

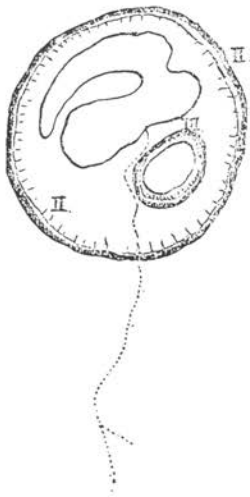
武田久吉

岩手火山彙の地形や地質に關して最も詳細且つ廣汎に亘る記文は、明治三十六年八月に發行された『震災豫防調査會報告』第四十四號に及ぶものはない。これは故理學士櫻井廣三郎氏が、理科大學に在學中、明治三十一年の夏期にこの地方を踏査して觀察した結果を記述したものであるが、夏期の跋渉には非常な困難の伴ふあの地方の山川を探檢したその際の苦心は想像するに餘りある。されば榛莽荊棘路を塞ぎ、目指す山巔に到達することの出來ない場合もあつて、唯僅に望見して臆斷を下した箇所もあつたようである。とは言へ同氏の所說は後人も均しく引用する所で、本誌第二年第三號と第三年第一號に亘つて揭げられた志村氏の簡潔明快な岩手紀行も、櫻井氏の記事に負ふ所多大である樣だし、又大正九年七月の發行に係る『巖手山記』にもその大部分を抄出して揭げてあるに見ても、本書が如何に岩手山の地形や地質に關する權威として見られて居るかを窺ふに足らう。

尤も斯の如き廣い區域に亘る研究は、そう再三出る筈のものでないから、類書はざらに在る譯はない。と言つて局部的に地形を取扱つた論文はといふと、當面の問題——卽ち御苗代又は御釜に關して書かれたものは、私の寡聞なる他に存在しない樣である。そこで盲蛇に怖ぢざる素人觀察を揭げて、讀者諸賢の御叱正を乞はうとする次第である。唯遺憾なことには、一昨年登山の際には、目的が他にあつたのと一つには又時間の餘裕がなかつたので、重要な地點の踏査觀察さへ十分に行はず、昨年も本年も再探を期し乍ら遂にその機を得ざる爲め、分らぬ乍らも自分の得心の行く程度丈にでも確めて

から筆を執る譯に行かず、主として望見によつて得た知識――然し寫眞によつてこれを立證して――を基として一説を提供し度いと考へる。

岩手山は盛岡の停車場から仰いだ樣な單一な火山ではなくて、舊くて低い西岩手（志村氏の所謂舊岩手）と、その東方にその一部を蔽うて立つ東岩手（卽ち新岩手）とから成り、盛岡方面からはこの東岩手のみが見ゆるのである。斯く東西の二部に分れた上、その各は更に二重式火山をなして居る。加之西岩手の方は、內圓錐の中央更に第三の噴火口を有し、三重式となつて居るのである。故に西岩手には第一、第二の火口原が存在する譯になるので、これは已に櫻井氏が道破された所である。



西岩手の內圓錐略圖
（櫻井氏に據る）

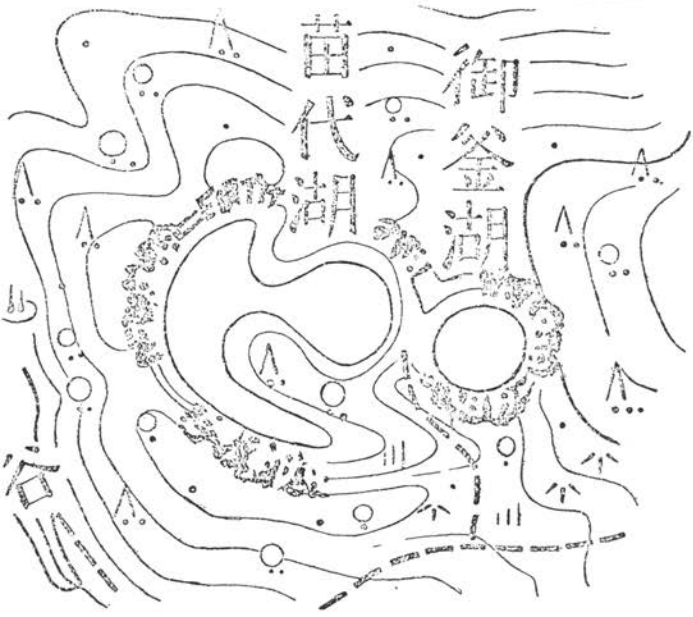
西岩手には二つの湖がある。一は御苗代（オナシロ）と稱するもので、一は御釜（オカマ）と呼ばれる。櫻井氏の見解に從ふと、御釜といふ小い方は第三の火口に水の溜つた火口湖で、その西にある大きな不正形のもの、卽ち御苗代は、この御釜の外側に位する火口原湖であるといふのである。その位置を櫻井氏の圖を借りて示せば（插圖參照）、IIと記したのが內圓錐の火口壁でIIIが第三の火口卽ち御釜、その西北に當つて略馬蹄形をなすのが火口原湖の御苗代だといふのである。櫻井氏はこれをどの位の程度に探撿されたのか知らないが、恐らく常人の通行する小徑によつて、兩湖畔に達した丈けで、御苗代は廻周さへもされなかつたのではあるまいかと推測する。それ以上には東岩手山頂から下瞰されたのに過ぎまいと想像する。

次にこの地方の地形圖として最も詳密正確なる「陸測五萬」の地形圖（大正五年測圖）から、問題の部分を一目明瞭ならしめんが爲めに廓大して見ると、插圖の如き工合である。尤もこれは初めから一

四十二　八甲田山大岳谷地の小水界に生ずるヌマハリゼキ（沼澤植物群落）
時と してヒメホタルキの之代に ころあ りと

五十二　八甲田山大岳谷地に於て小水減水潦し沼澤植物ヒメホタルキ
（驅先の〜原濕）態狀入侵のフテイハイに中落群の
影撮氏吉久田武

萬分一の梯尺に出來たものでないのだから、廓大の爲めに正確度は却つて失はれるが、それでもこれを見れば、御苗代の周圍にある火口壁の輪郭や、御釜の位置を、前の圖よりは明瞭に認識することが容易である。この圖と圖版として插入した寫眞とを比較すれば、地形圖が可なりに正確であるのを知ることが出來よう。此の圖の御釜は實際よりも大に失する憾はあるが、これは前述の通り五萬分一の梯尺に描かれたものから引伸した爲であるから、恕さなければならない。



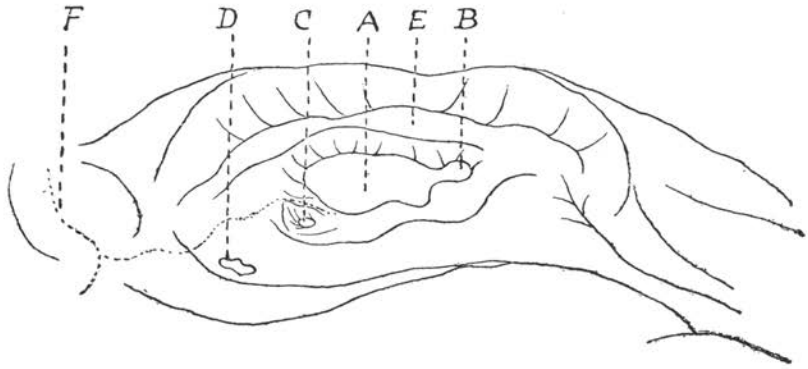
「陸測五萬」の圖より御苗代御釜附近を約五倍に引伸して兩湖の位置を明示せるもの

ところで、大正十四年に撮影した寫眞と、明治三十一年に調製された櫻井氏のスケッチマップや大正五年に測圖された五萬分一地形圖とを比較すると、御苗代の水量に著しい變化のあることが認められる。則ち圖上の御苗代は半島を有して約馬蹄形をなすのに、寫眞ではこの「半島」の外側には水がなくて、唯内方のみに水がある。これは測量當時實際湖をなしてゐたものか、夫共降雨融雪等の爲めに一時的に水を湛へて居たものか不明であるのは甚だ遺憾である。而も此處は實地踏査を試みなかつたので斷言は出來ないが、若し半島の兩側共湖であつて而も

連續して居たものだとすれば、現在の湖面はその當時よりは餘程低まつたに相違ない。それにしては御苗代湖畔の植物の生へ工合が、僅々最大十年間の減水としては良く繁茂し過ぎて居る樣に思はれる（圖版に掲げた寫眞參照）。この點に關しては年々山頂に登る神職又は道者或は案内人夫等について質して見ると共に、その地點を探つて水位の差と殊にこのくびれの附近の地形や植物生育の工合を精査した上でなければ、斷定的の說をなすことが不可能であるから、今は唯疑を存して後來の研究を俟つことゝしよう。何はともあれ、この「半島」の外側の現狀は濕原であつて、決して湖の一部でない丈けは確實であるし、又この濕原は湖の水面より高いことは、圖版の寫眞からでも明に看取出來る。

次に起る問題は、御苗代の形狀が圖に示された通りであらうと、又寫眞に見る通りの現狀であらうと、これが火口原湖であるかないかといふ事である。櫻井氏のみならず、此の邊の地形を觀察し又櫻井氏が多少の疑問を存したらしい所謂「八ッ眼」についてそれが火口原湖の乾燥したものといふ考に裏書して居る志村氏ですら、御釜を火口湖とし御苗代を火口原湖と認めて居るが（『山岳』第三年第一號一五頁）、私はこの考に對してどうしても贊意を表することは出來ない。

理由は東岩手山頂から下瞰した寫眞によつて明瞭に看取出來るが如く、又それを基として描いて此處に插入した略圖によつても推定出來る通り、現在の御苗代（A）はその周圍が假令低い乍らも略圓形の堤防狀隆起で取卷かれて居る。卽ち前述の「半島」並びにそれに續いて御苗代を圍む隆起地帶は、地形圖にても見られる通り、明に火口壁であらねばなるまい。左すれば火口原湖と見做された御苗代は實は火口湖である。然らば御釜（C）は何かと言へば、これは西岩手の内圓錐中で掉尾の勇を奮つた爆裂火口で、最内圓錐の火口壁を破つて噴出したものに相違あるまい。私は復實地踏査を經てこそ居ないが、略圖上の（B）としたものも、恐らく爆裂火口で、その爲めに御苗代の概形が不規則にされたものかと推測する。そしてこれは御釜よりは古く爆裂したものではなからうかと想像する。



東岩手山頂より瞰下したる西岩手の内圓錐（説明は文本にあり）

御苗代の東岸、普通探勝者が下り立つ湖畔は遠淺になつて居る。然しこれからして直に御苗代は淺い平底のものと推斷することは許されない。思ふに御苗代の深度を測つた人は未だこれ無く、又その廻周を試みた人も恐らくあるまい。東岸の淺いのは御釜の爆發に因るもので、それによつて多量の土砂を此處に堆積された爲めに相違ない。

斯く觀じ來れば、御苗代は西岩手第三火口に水を湛へたもの、そして略圖上(E)の符號を附する地は、第三火口と第二火口との間に介在する火口原（假に呼んで第二火口原といふ）で、嘗ては此處も火口原湖の態をなして居たらう。そしてその時の火口瀨は明に東北に開き、末は北面の第一火口壁の南側を西流して、今の地獄谷火口瀨に合したに相違ない。

この第二火口原の一部、通路から樹林に隔てられ、御釜の稍東方に當つて小潴水がある(D)。私達は終にこれをも踏査する餘裕がなかつたが、これは火口原湖の遺物たる小池溏であるか、夫共一小爆裂火口の埋まつたものか不明であるが、恐らく第一火口原（卽ち第一火口壁と內圓錐との間にある火口原）に見る谷地眼（やちまなこ）と類似のものであらう。

この第一火口原(F)は櫻井氏の說く通り、嘗ては火口原湖を成したものらしく、東岩手の噴出やら第一火口壁から流下した土砂等が

堆積した爲めに、現今の如く平地となつたものに相違なく、そこに湖の遺物として殘る小水界（谷地眼）も、漸次乾燥に傾いて終に草野となり了らんとするは、別項に舘脇君の述ぶる通りである。

櫻井氏の記文以來、『巖手山記』の如きものにまで、此處を八ツ眼と記してあるが、これは恐らくは谷地眼を聞き誤まつて、八つ眼と宛字したに職由するものではなからうか。舘脇氏の記事中には假にそれに從つて置いたが、私は寧ろ谷地眼の文字を配するのが正しからうと愚考する。

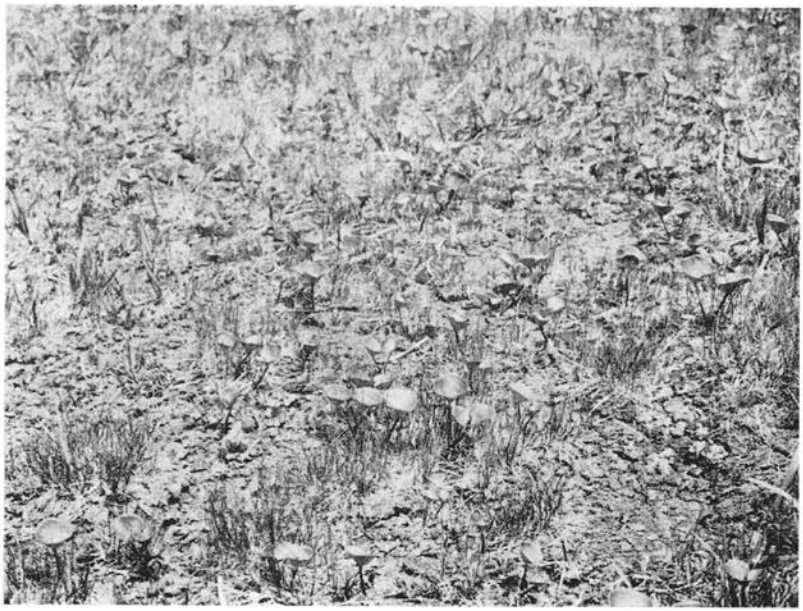
西岩手は東岩手に比して遙に古い丈に、草木よく繁茂する爲めに踏査が容易でない。東岩手から往復するのでは時間が不經濟になるから、どうしても地獄谷のどこかにでも假泊して、探撿を試みなければならない。然しそれ丈け、地形にしても亦植生の狀態にも興味が深い。私も他日再探の心算であるが、山岳の研究に熱心な讀者諸君にもその精査を御勸めして止まない。

岩手山

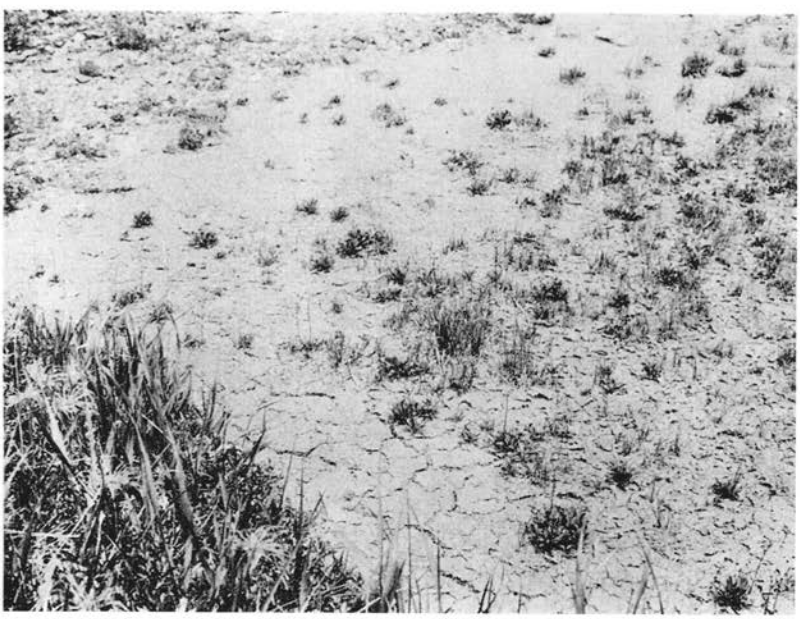
舘脇　操

盛岡より柳澤へ

北上の高原が雪に埋れて、冬には珍しい日和、赤松林の見えがくれに、馬橇が一臺走つてゐる。夜行の疲れの頭を冷さうがため、一寸ヴェスティビュールに出た。汽車は厨川（クリヤガハ）を過ぎたばかりであらう。その時、大空に白銀の貌を悠揚迫るなくおいて、私に接したのが岩手である。それから北行南行の途次に幾度かこの山を仰いだ。若綠の野に、黑土の香のなつかしまれる頃、淺き陽炎ににほひ立ちし山、



六十二 八甲田山大岳谷地に於て水界が濕原への運行を開始し沼澤植物減退し
てのもろせ入侵のラクザナヒび及ウヤシキゼヒガウカソホにフテイハイ



七十二 八甲田山大岳谷地に於て水界が濕原への運行を示す
狀ろせ生混のウヤシキゼヒガウカソホとラクザナヒし少減フテイハイめ爲の燥乾
影撮氏吉久田武

すゝきの穂先にしのびよる影に、北國の秋は早く、高原を通しての赤膚の頂き。なだらかではあるが、あの太い力强い輪郭線が、その度にいつも私の心を捉へてゐた。

盛岡ではとう〳〵岩手の山をみなかつた。東北の色彩を最もよく備へてゐる街の中を、私達は殆ど半日歩きまはつた。そして三時の汽車で、瀧澤へ。

瀧澤驛前の部落と言つても僅か三四軒の家があるのみである。盛岡の林野局で聞いた何とか言ふ運送店に立ちよつたが、荷を柳澤迄運むでくれる傳手は得られなかつた。私達はかなりにこたへる荷を肩にせざるを得なくなつた。用捨もなく照りつける陽に汗ばみつ柳澤に向ふ。岩手の裾は廣い。裾野らしい感じに包まれ、落葉松の間をぬけたり、草原の丘陵を越したり、赤松林を縫うたりして進む。分に出る前にゆっくり裾野氣分を味ふために一服する。裾野は依然として複雜である。私の樣に北海道の山野で、比較的原始型を保つてゐる植物景を見なれてゐるものには、裾野と言ふものが非常に錯雜し、且つ一言のもとに、又數時の旅行に簡單にかたづけ得ぬ（私の不才の然らしむる所）ものを多々有してゐる。

でもヲミナヘシ、マツムシサウ、オホバギバウシュ、スゝサイコ、ツリガネニンジン、カウゾリナなど、一面に咲き揃うた所では、私は十年前も近い日の私に呼びもどされ勝であつた。くらさを知らなかつた少年の日の富士の裾野など、今更に私に蘇る。裾野の明るい感傷と憂鬱は、心に軟くせまる。年はすぎてもいつまでも老いない旅人であれ、自らに念じつゝ行く北上の高原。

學校の所で一休み。養蠶時とて、室内は一杯に散らかつてゐた。草原の上にごろりと横になる。夏の空は廣い。人工林に自然要素の混淆した樹林は尙こゝから暫くつゞいた。ちらりほらり、下山の人達に逢ふ。私達はぶらり〳〵としながらこの裾野につき語り合ひ、且つ、落葉松、多くは赤松の林に入つてくる闊葉樹に、非常な興味を感じて進むだ。

山畑は夕近い。人なき水車小屋に、水車はゐぐり、きしむ音が、心にしみる。異つたモンペ姿の小供に、北國の淋しさを知れば、柳澤の里はひらかれる。知らぬ間に豫定より早い位部落に入る。夜は社務所の歡待にうちくつろぎながら、明日のことゞも語らひつ、床に就いたのは午後十一時。

柳澤より山頂へ

朝三時に起床。少しく早目に出發。夜はほのぼのと明けかゝつてはゐるが、殘んの星の光が、なほほのかにかほる。山は、深い雲に埋れてゐる。見はてぬ旅の夢の疲れは私にしみてゐたのだらう。醒むるとなき、眠るとなき境地が裾野のまだき朝につゞいて行つた。不意に足音がする。はつとすると放牧の馬が「お早う」と言ひたげの顔をして去る。

心が冴え冴えしてくる。再び山を見やれば、山は、依然雲に埋れてねむつてゐる。山旅の幸汲む泉は、不斷の流れの樣に、今日も今はつきりと、波うちだした。私は靜かにはたらきたる旅心をめつ、徐ろに面をあげた。

黎明の光は、華やかに瞳をなげ始めた。陸中、北上の高原と高原をめぐる山々は、靜動の境に、生命の力强き蠢きを輝やかす。今日の日への創造の悅びである。太陽は稜衣の中に、いま再び地上にまみえむとしてゐる。曉の鐘は鳴る。旅人よ。命の高き潮に合せて、もろ〳〵とよろこびを高らかにうたへ。この日への生命の樹立は、お前にも亦尊きことほぎの響であらう。

尙カシハの多い、それにタニウツギなどの路傍近く入りこむでゐる原を歩く。馬返より少しくのぼりになつたが、やはり裾野といふ感じが鮮明である。解體坂(ゲタイザカ)のほとりから山らしくなるが、坂を下りてから、改所(あらためじよ)への澤には、いやに、ネマガリがしげつてゐた。

志村氏の記行に見える改所は今も存在してゐる。チョンマゲをのせた時代離れのした老人が、言葉

少なに一人につき五錢、申しうける。老人は、小さな小屋の中にもく〳〵してゐる。蠟燭の灯に生とも死ともつかない樣な姿、時代錯誤などと考へるにはあまりに靜かな山中の閑日月、時間と空間のふしぎなもつれ。影の呼吸に浮いた奇しきながれ。泉はその側に滾々と、無關心に湧きつゞける。霧の深くなつてゆく中を、遠くの方から、山鶯が啼く。私達はさゝやかな朝餉を終つて、改所を後にした。

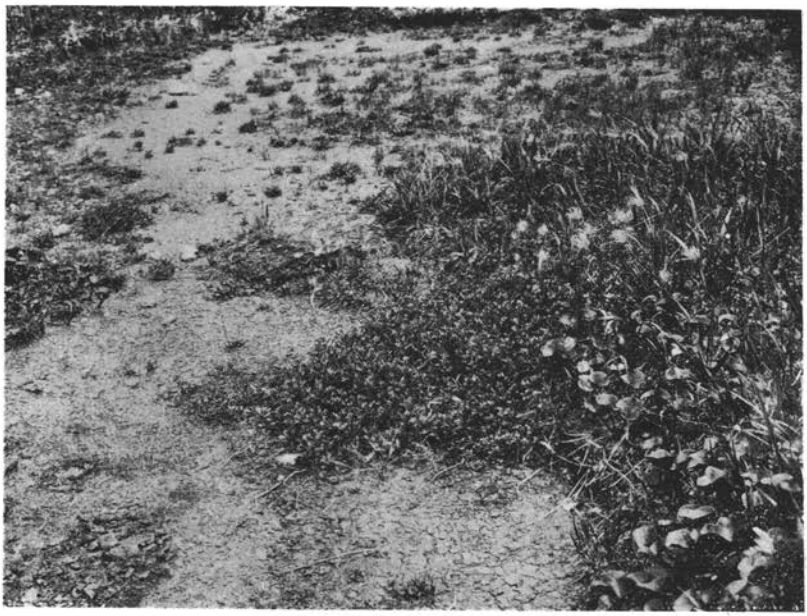
解體坂より樹林（森林とは言へず）を見るがこの請取坂をあがつて三合目迄の植物觀は、かなりに痛快である。小堀澤よりの斜面を注意してゆくと、サウシカンバ、ホヽノキ、シナノキ、ナヽカマド、アヲダモ、ヤチダモ、クロモジなどが生じ、ムラサキヤシホ、ムシカリ、クマヤナギなどが混じ、クルマユリ、シュロサウ、シャウジャウバカマ、マヒヅルサウ、又早くもイハテタウキなど崩壞地に出でくる。更にゆく〳〵、ウリハダカヘデ、メイゲツカヘデ、ベニイタヤ、ミヤマザクラ、チャウジザクラ、シウリ、サビタなどが見え、シュロサウ、オホヤマサギサウ、シラネアフヒ、イヌヨモギ、ウスユキサウ等生じ、樹下にはヒメアヲキやエゾユヅリハがある。注意すべきは尙ミヅナラの存在し、多少のブナが交つてゐることである。一合目をすぎて、一合五勺に行く間には、大した差もなく、オホバタケシマラン、ツクバネサウ、タマガハホトトギス、ミヤマハンシャウヅル、ミヤマタニタデ、ウメガササウ、シホガマギク、ヒトツバヨモギ等生じ、亞高山帶の氣分が濃厚になるが、針葉樹のないのが此のあたりについて最も意を留めなければならぬことであらう。小堀澤に添ふ一合五勺と二合目の間で、ミヤマハンノキ、ミヤマヤナギ、マルバシモツケ、クロヅル、タニウツギ等に出合ひ、押出による砂礫地には、イハテタウキや、オヤマソバが多い。高山的灌木種の下降は、草本の種類と共に針葉樹林の現存せぬこと、又今迄きたりし間の闊葉樹種と結びつけて、津々としてつきない興味をひいて行つた。尙三合目迄の間に、熔岩礫地に、タカネスミレをみれば、一層思を深くするであらう。

卽ちこの地點迄に於て、火山礫地に依る高山分子の下降や、又草原、或は灌木林の形成、それに、喬木林構成の初期が、間に繰りこまれてゐるのを觀察するのである。三合目の小屋に休み、火を焚く。この時、外は霧の海に白み切つて、風さへ加つてきた。そして、觀察旅行には最も不愉快な、不利な天候に變つてしまつた。煙にむせびながら、柳澤へもどらうかとの話まで出る。しかし續行に一決する。各人の荷はこゝにとかれて、濕氣のおそれのあるものは全部、整理しなほされ、丹念に火の始末をしてから、又登りにつく。

四合目の附近迄に、クロミノイハゼキシャウ、キンカウクヮ、ネバリノギラン、ハクサンチドリ、クサボタン、マウセンゴケ、イハテハタザホ、チングルマ、イハキンバイ、コメバツガザクラ、ウスユキサウ、ヤマハハコ、ミヤマカウゾリナ、コメツヽジ、オホバヘビノボラズなどを見た。草本の種類は、色々の分子を含有してゐる。四合目をすぎて、岩礫の濕地にムシトリスミレを見、ガンカウラン、アカモノ、イハヒゲ等の矮小灌木は又よく岩隙礫地に生じてゐる。そしてクサボタンは尙この地點に散在し、ミヤマヲダマキの片影すらなきにエゾヤマヲダマキが頗る多い。

風は愈々加つて、霧は愈々深く、四合目上部よりは、山は荒天の相にまかせて、觀察は、自己の歩く徑より許されなかつた。旅果てし日にも心殘りにおもふは、本來喬木森の最終地點であらう、御倉石へかけての植物景觀である。そして再びあの裸地が、大堀澤への群落轉移である。私は又の日を期するにあらざれば、筆をとることを許されない。六合目附近ミヤマハンノキの多い小溪凹地をたどる時には、他の山にみると同じ樣な姿が展開されて行つた。風は林木のために多少弱められてゐるが、荒天の相は依然、人間を、小さなものにしてゐる。御成清水の附近では、殊に草本が美觀を極めてゐたが、天候は、すべてを割愛させて、私達を九合目の小屋に急がした。

（この斜面詳しくは小原兄麿氏著『巖手山記』を見られたし）



二十八　八甲田山大岳谷地に於て小瀦水趾に濕原要素の侵入

二十九　八甲田山大岳谷地に於て濕原に侵入せるハヒマツとそれに續くサヽ
ヽ　前面にはイハイテイフ・チンクルマ等密生す　武田久吉氏撮影

九合目の御不動平の小屋に着。ひとりのおぢいが、まめ〳〵しく働いてゐる。「何歳だい？」と聞くと、ゆつたりとして、八十と答へる。小屋の隙から、しのびこむ霧にも、山の旅らしさがにじむ。おぢいはひとしきり、焚き木をくべてくれる。火がパッと燃えさかる。熱い味噌汁にやつとおちついた氣分にひたる。これから上の觀察は明日。ゆつくり憩をしてから日の暮れぬ間にと出發。霧は舞ひつ狂ひつ、山は鳴る。幻の影々幾重にも生き來り、山のあらしに奇しくも浮く旅人の瞳のほゝえみ。濛々として、山は怪奇な巨大な偶像をよこたへ、何物とも知れない咆吼の中に透明のほゝえみが光る。一升目か。小さな祠と、數多きつみ石。

濃霧と烈風に、噴火口内の神社の石室の所在は皆目不明であり、一升目の標杭見當らず、その上薄暮のことゝて噴火口壁の瘠尾根の徑のみ見えて、下りのふみつけが、わからない。でも先生の「カン」によつて、一足の損もなく鳥居の所に出ることを得た。ソフトフォーカスの鳥居につゞいて室のうす灯が、ぽつと浮いた時に、私はホッとせざるを得なかつた。

石室は、九合目の小屋に比しては頗る完備し、又社務所の好意で、仕事をするにも充分な場所を與へられ、且豫期しなかつた布團さへも拜借できて、山としては、過分な待遇を與へられた。私達はストーヴにあたり、ゆっくりひとあたゝまりした頃、このあらしになりかけた夕暮をおかして登つてきた、親子連の人を見た。親は盲目、つきそふ子は十六七。やがてに盲人は子にひかれて、うや〳〵しく神前に禮拜して、高らかにのりとをあげはじめた。外には混然としてあらしのたけき狂ひ。ざざざあ、ざざざあ、ふきまくりふきめくる中に、その聲はいよいよ清く澄むで行く。子は父の側にうづくまり慎ましき默禱を捧げる。痛々しくも森嚴なる山の聖劇よ。私達三人も思はず、居ずまゐをなほして、眼をつむる。何か知らぬが熱い涙がにじんでくる。素朴なる山への信仰は、このめしひし人の胸の火の感激と共に、歡喜と清純、熱情と敬虔とに燃えさかつてゐるのであらう。神殿の御あかしのさ

ゆらぎに、やんごとなく浮ぼりになつたこの二人の姿は、又となく尊い。拍手をうち終へても去り難い神前の盲人に、私達はその幸を祈らないではいられなかつた。純な情熱の輝きに山の底しれぬ力が、ひし〳〵と迫る。夜はあらしにつゞいた。

頂上附近

「岩木が見えるよ」といふ聲に、出發の準備にとりかゝつてゐた私達は、うき〳〵した。ひいやりする風に、小屋の外に出ると、たまらなく山の朝が私達をひきしめる。

晴れた。晴れた。噴火口内は紫の影を濃くして、陽の輝きが大空の中にすきとほる。山々に爽やかに今日の挨拶をすれば、山々はにこやかにこの日を壽いでくれる。うれしい限りぢやあないか。今日は妙高、藥師をまはつて、九合目で晝食の豫定。そして行けたら鬼ケ城の上部の溪に行かうと言ふ。

岩手山頂の植物の種類は頗る簡單である。中央火口原に最も普通なるは、イハスゲ、タカネスミレ、タルマヘサウである。今御内院中央火口丘妙高についてみるに、イハスゲ、タカネスミレ、タルマヘサウの外に、イハテハタザホ、キクバヂシバリを產し、藥師に對する面にはイハスゲが多い。三角點を有する藥師岳附近を、内壁にと見れば、礫地には、イハスゲ、タカネスミレ、タルマヘサウ、イハギキャウを生じ、コマクサ、オヤマソバがある。岩壁や岩塊の下には、ガンカウラン、イハヒゲ、コメバツガザクラ、ウスユキサウが、又所に由つては、既にハヒマツ、ミヤマヤナギが着生してゐる。火口原内の所生植物も上記のものと大差なく、礫地、岩塊に由つて、夫々の群落を構成し、イハスゲの中に、ハヒマツやミヤマヤナギの若木の生じたのを見た。

妙高から北方、火口原内の凹地には、火山礫の乾燥性裸地を征服して、徐々に草野たらしめんとする先駆をなす綠原がある。就いて之を視るに、ミヤマワラビ、ミヤマヒカゲノカヅラ、ハクサンチド

リ、ミヤマハンシャウヅル、ガンカウラン、ミヤマカウゾリナ等多く、中性草原への分子を含みはじめ、又ミヤマヤナギが多い。附近岩上には、イハウメ、イハヒゲ、コメバツガザクラ、それにクロミノイハゼキシャウと思はれるが如き一品があつた。御室(オムロ)にも入つてみたが、植物には著しい變化もなく、イハスゲ、イハテハタザホ、タカネスミレ、イハウメ、タルマヘサウ、イハギキャウの外に、場所に由つては、前述の小灌木を交へてゐるに過ぎない。

岩手山頂の植物の主要種は、種類少なく、乾性を好むものであり、其の個體の密生度は薄きも、面積に對して、疎ながら、一種が、大なるものを占むることあること、植物群落の上から云へば、妙高は最も新しいものである。次に本山頂を通じて、群落の先驅をなすはタカネスミレであり、タルマヘサウ、次に入りきたり、イハスゲこれと前後し、イハギキャウはこれよりもおくれる。本山山頂に於て、小灌木は、一般にイハギキャウの出現と併行するか、又はこれよりも少しく後れると觀察される。コマクサは單獨に、礫原礫斜面に出できたる。概括するに、顯花植物群落の形成は、その山容の有する地形岩礫に待つ所多しと雖も、灌木の現今發生を考慮すれば、比較的新しいものと言はなければなるまい。

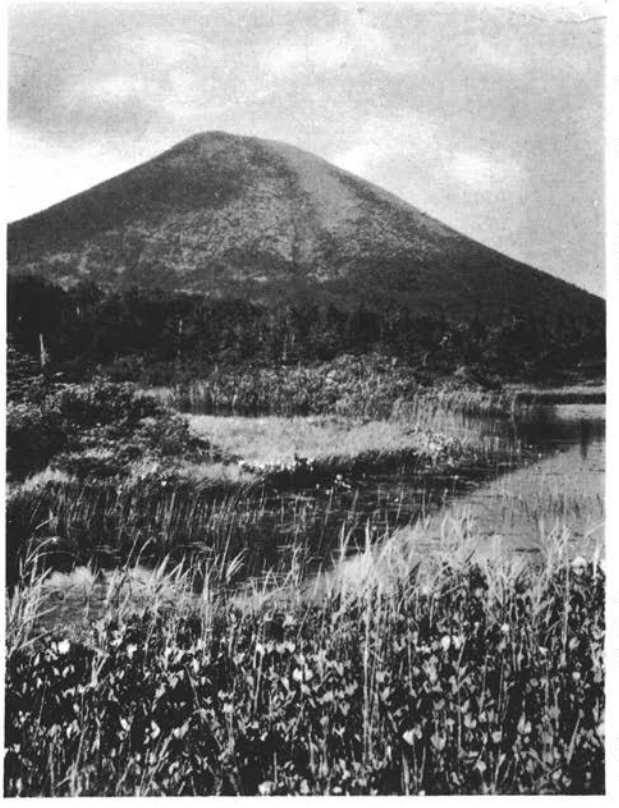
私達は晴れし日の火口原や火口壁に、暖な陽にひたりつゝ、觀察と享樂とを共々に許された。藥師の頂上で晝飯、今しゆっくりとうけたコマクサの新鮮な夢に生きながら、古典的な香りに包まれた樣な、火山型にみいつた。

九合目の小屋へ。雲は少しく動きそめた。大きな黑い影を山體にのこしたかと思ふと、又すうと影が這ひ動いて去つてしまふ。昨日に變る今日の心安さ、不動平のおぢいの所迄にも仲々足がはこばない。砂礫の斜面から、溪らしい淺い襞に入つたり、亂れ咲く草原の明るさに誘ひこまれたり、ハヒマツの枯跡につりこまれたりして、小屋に入つたのは、午後二時近くであつたらふ。

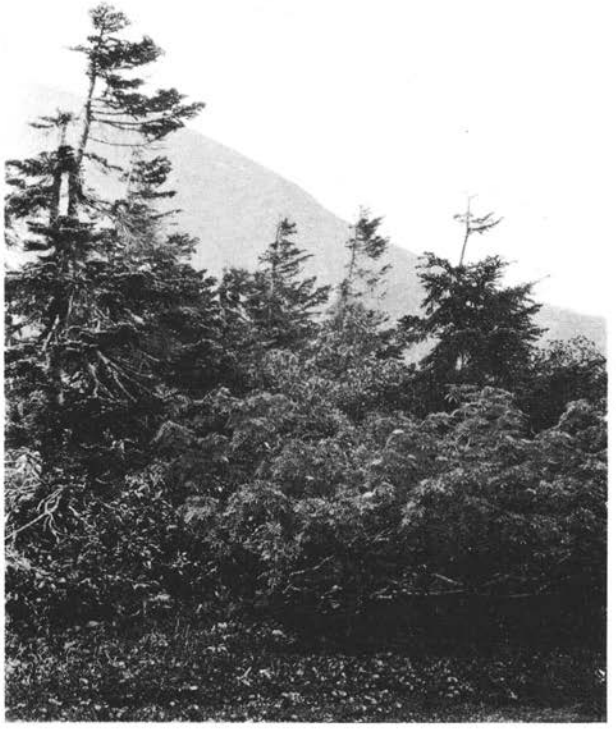
斜面のゆるやかでない山頂附近から上部礫地にはお鉢と同樣であるが、オヤマソバなどは量が多く、キンチャクスゲ、イハスゲ、タカネニガナを交へ、下るにつれて、アキノキリンサウ、ミヤマハンノキ、ミヤマヤナギ、ダケカンバ多く、襞狀小溪にミヤマハンノキが殊に多かつたのは、興味深く、灌木はこの凹面の地について多くのぼり、八甲田と同樣に、ナヽカマドなどはその最終地點迄のぼつてゐた。九合目近くなると乾草原が出て、ヒメノガリヤス、キンチャクスゲ、ミヤマハンショウヅル、ミヤマカラマツ（少なし）、ウメバチサウ、ミヤマキンバイ、ガンカウラン、イハテタウキ、コケモヽ、ヨツバシホガマ、ウスユキサウがあり、かなりの美觀を呈してゐる。礫地には、依然イハスゲ、ガンカウラン、タカネスミレ、イハギキャウ等生じてゐる。ハヒマツは枯死せるもの多く、純群落を構成するには到つてゐない。ハヒマツ枯死せる跡に多きは、ガンカウラン、Calamagrostis これに次ぎ、キンチャクスゲ、ミヤマハンショウヅル、ガンカウラン、アキノキリンサウを見、又ミヤマハンノキの生ずる所をも見た。

九合目で一休み。驟雨に逢ひ、晴れ間を待つ、昨日で顏なじみになつた老人は、ニコ〳〵と私達に新しい茶などを入れてくれた。「狹霧こむ石室の夜のうすあかり、室のおやぢは八十と言ふ」、私の旅日記の一端になぐり書にしてある言が、たまらない程老人に親しみをおぼへさせる。もし參詣客の騷音なく、仕事の整理が出き相にもない混雜がなければ、多分この室に居据つたかもしれない。この石室と老爺の調和頗る心をひき、霧深む夜を、傳說の氣分に生きたい氣持も、隨分に湧いた。一時間許で雨は晴れる。

九合目から雫石道に沿ふと、直ちにお花畑に出會ふ。道の邊にコバイケイサウの花白うほのぼのと咲き、ハクサンチドリの艶姿多く、オホバキスミレもある。この斜面地を歩けば、ヒメハナワラビ、コスギラン、ミヤマチドリ、キソチドリ、ネバリノギラン、シュロサウ、ミヤマカラマツ、シラネワ



三十　長沼に於ける沼澤植物ヨシ、サハギキヤウ、ミツガシハ等（背景は高田大岳）



三十一　八甲田大岳谷地周邊の一部
オホシラビソ、ナ、カマドとその下生のサ、

武田久吉氏撮影

ラビ、エゾヤマヲダマキ、タカネタウウチサウ(?)、キバナノコマノツメ、ハクサンバウフウ、ヨツバシホガマ、オホバヨツバムグラ等の草原美に心うたるべく、間々、ミヤマヤナギ、マルバシモツケ、ベニバナイチゴ、エゾツヽジ、ミヤマホツヽジ、シロバナシャクナギ、ウコンウツギ等の灌木があり、草原は中性から稍濕性への傾向を示してゐる。岩壁には、エゾツヽジが眼さめるあざやかさを競ひ、クロミノセキシャウ、ダイモンジサウ、シラネニンジン、ヒメイハカヾミ、イハウメ、ムシトリスミレ、ウスユキサウ等を着生させて、草原と待ち、頂上附近に於て、最も美麗なるお花畑を示してゐる。

鬼ヶ城上部の東側面、御瀧(オダキ)の澤に向ふ。雫石道の下りかけで、一峯頭に行つたが、ハヒマツの純群落で、岩上にも大したものなく、歸りがけ唯ハヒマツ中にシロシャクナギやイソツヽジを見た程のものであつた。御瀧の澤の下りかけ、岩石、礫地にはタカネスミレ、ホソバイハベンケイ、イハウメ、コメバツガザクラ、ムシトリスミレ多く、斜面草地には、シュロサウ、チングルマ、マルバシモツケ、ミヤマキンバイ、ヨツバシホガマ、ウスユキサウ、アキノキリンサウ、ミヤマキタアザミ、それにハヒマツ、ミヤマハンノキが所々に生じてゐる。このあたりは山らしさをおびて居て、七月殘雪の輝やく日には、殊に興深きものがあらう。尙この日、こゝまでに至る間に武田博士は山中から、ヲノヘラン、タカネサギサウを見出された。

夕暮近く寒むさが多少身にしみる。石館氏は風邪氣味と言ひ殘して先に九合目迄もどる。全く暮れぬ間にと私達は暫くしてから歸途につく。すばらしいたそがれのひとゝきである。駒から須川、乳頭(ニユウヅムリ)、笊森(ザルモリ)、模糊として、永遠の姿を表示するは烏海、嶄然として、せまるなき統帥は、さすが東北の一重鎭たるに恥かしくない。一點の焦點にあつまりつゝも、然も奇しくも、樣々の貌なす線のたくみは、きらびやかながら尊きしぶみのあるおちつきをふくむで、韻律の香り高きに流れる。ぬかづく夕つかたよ。自然對象の古代信仰は、今も人類に傳りつゝあるのではないか。理論ではない。主觀でもな

い。客觀でもない。この音なくとけこみゆく心境こそ、私達が山に來、山を眺むるものなのである。

九合目で石館氏に會ひ、つれだつて小屋に歸る。一升目に來た時はうすやみであつた。早池峯が、星光りそむ中に逝く日を送つてゐる。八合目に火があがる。聞けば明日の山祭りに、精進し來つた白衣の青年の群が、一夜をそこに明すのだといふ。たき火の煙になつかしみをおぼえてゐると、山への聲のコーラスがおこつてくる。星の夜、美しきその讃と希ひは、ひた〳〵に私に迫る。若い人達、この夜の心を人生によろこばしく記憶してくれ。さとりきつた樣な怜悧さに、小ざかしく生きるよりも、鈍重とも見える生活から精進して、そのまゝの魂を山に朗にうたつてくれ。生え抜きの人類に傳はる心を、強くこゝに輝して、底にぬくもる光を山に依つてこゝにひからしてくれ。

其の夜の室はにぎやかであつた。神殿の燭も一入の明るさがあつた樣だ。夜、仕事をしまつて、外に出たら、下弦の月は、山を蒼くぬむらして、ゆつたりとしづもつてゐた。急にせきこみたる旅情にとらはれて、私は自らの影をなつかしみながら、旅人らしくひとり火口壁にのぼつて行つた。火の山の遺跡はひつそりとして、音なき淵にしづむ。青水晶の離宮の如く、遠くには早池峯が浮ぶ、私はどつかり腰を下して何を感ずることも出來なく放心に目つむつた。

御苗代大地獄をさぐる

今日も好晴、祭の混雜せぬ間にと出發。白衣の行者達の姿が、早くも御内院を行き交ふ。拜殿には、幾群かの若い人達が、山におろがむのりとをあげる、九合目まで、寄り道をせずに下る。草鞋をとりかへてもらひに小屋に寄つたら、室は雜然として人の頭で黑く埋つてゐた。でも「ハー〳〵」とおやぢは愛相よく、人の上から草鞋をさげてくれた。

千俵岩（センベウイハ）の近くには、シロバナノシャクナギが、一際目だつて雅麗な姿を示してゐた。こゝらあたり

から這松の群を見、又御釜への樹林をながめて、表口柳澤道を回想する時、言ふに言はれぬ興趣をおぼえきたる。大地獄への道は、山嶺西側の溪をゆくので、溪沿ひの灌木林觀察には絶好の所である。まして新岩手の定りない植物景觀に接した人は、是非ともこの道を網張(アミハリ)に下つて舊岩手の植物景觀に接するか又は、後述する北口大更(オホブケ)道を取るべきである。唯、この溪谷を下るに際し、好晴を利して、該方面の林相を豫め觀察考究しておけば、更に得る所があるであらう。

灌木林の本斜面下降は恐らく千七百米から千六百米ではあるまいか。主要種類はミヤマハンノキ、ダケカンバで、稍下るとミヤマハンノキが多く、千七百米になれば、アヲモリトドマツも出で來り、御釜上部に於ては、全くの針葉樹林となつてしまふ。樹下には、ミヤマワラビ、オホメシダ、オホバショリマ、ミヤマカラマツ、モミヂカラマツ、ミヤマヤマブキショウマ、オホバキスミレ、フキ、シロバナニガナ、ミヤマキタアザミ、カニカウモリ、ヨブスマサウ等があり、エゾニウも盛に生じてゐた。岩壁岩上にはホソバノコケシノブ、コタヌキラン、イハカヾミ等がある。又所々ユキザサ、マヒヅルサウ、サンカエフ、ヅタヤクシュ、ゴエフイチゴ、テウカイゼリ、コバノイチヤクサウを見る。灌木としてはマルバシモツケ、ゴエフイチゴ、ミネカヘデ、ウラジロハナヒリノキ、ウコンウツギ、ベニバナイチゴ等が見出され、ハリブキもかなり上部迄達してゐた。これ等種類を見るに、多くはハヒマツ群落下部より針葉樹林帶のもの多く、高山寒地に共通のものなきは、明かに新岩手南、東部よりも植物の安定を語り、且舊さを示すものであらう。本下降路に際してはウスユキサウも少ないし、當山に多産すと言はれるイハテタウキの如き、表口と同標高の地點に見出し得ない。

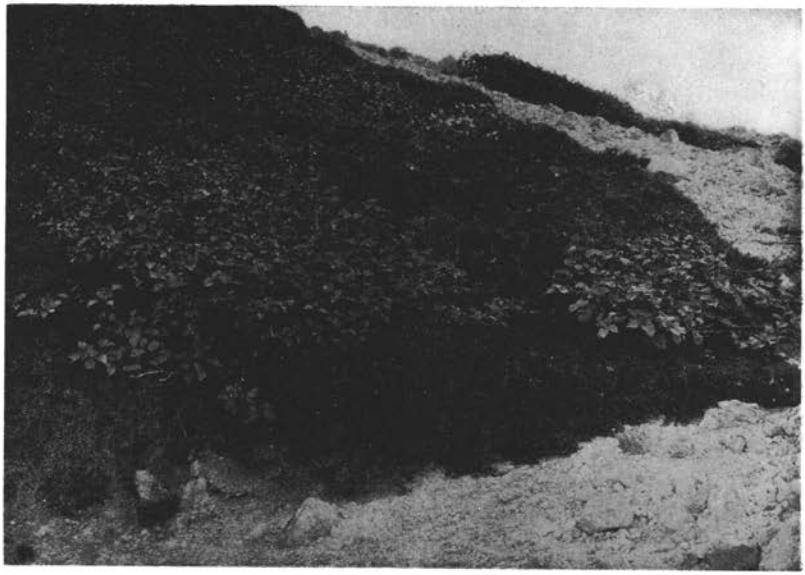
後記する八ツ眼(ヤツマナコ)を右にして尙下れば、暫くにして大地獄である。途上オホイタドリ溪流に沿ひて群生し、樹林の減少と共にネマガリが密生してくる、溪畔荒地にはヒメノガリヤス、イハノガリヤス、コタヌキラン多く、裸地には、ガンカウラン、ハクサンバウフウ、イハカヾミ、シラタマノキ、イソ

ツヽジが生育してゐる。又この附近の斜面地には、ダケカンバがよく生じてゐる。其の他、下降の時お釜附近に於て減少したベニバナイチゴ、ウコンウツギは再びこゝにあらはれてくる。大地獄近くとなれば、灌木、小灌木優勢を保ち、前述の種類の他に、ミヤマハンノキ、ナヽカマド、マルバシモツケ、ミヤマホツヽジ、ウラジロヤウラク、クロウスゴ等が盛にある。千四百米附近で對岸を見ると、尾根よりアヲモリトドマツが下降し、中腹上部で、ダケカンバとなり、ネマガリの群叢をへだて、更に溪に近く、ハヒマツを生じ、植物群落が、安定型を保つてゐる所とは全く反對の現象を呈し、分布考究上に好資料が存在してゐる。蓋し大地獄の爆裂等によつて、植物景が攪亂されたものに相違あるまい(插入寫眞參照)。大地獄にもかく別のものとてなく、アカモノ、ミネズハウが入り、裸地の群落先行は、コメスヽキ、ガンカウラン、イソツヽジなどがつとめてゐるのを見た。

大地獄よりの左岸に、エゾホソヰの純群落のある所があり、つゞく水蘚の上に、ネバリノギラン、ミツバワウレン、ツマトリサウ、オヤマリンダウ等が生育し、まはりにはクロウスゴが多かつた。

黑倉山、姥倉山を前にして、夏の眞晝は心おきなく晴れ渡つた。大地獄の硫氣孔に下り、又七瀧の上に、燒切澤のアレを見、おぼろげに知る火山の歷史をおもひ、山容をながむる時、人生の一塊として浮ぶ旅人の胸には、感慨無量のものがあらう。こぼちては崩し、崩してはきづく、一瞬の休みもなき自然の歩みを見て、この山彙殿堂樓閣の一角に立つては、一片の石、一粒の砂よりして、草木に至るまで、各々の呼びきたる生命史に、それ〴〵の生存とよりきたれる存在を意義深く意識するであらう。流るゝ時と有機的にむすびつくもろ〳〵のすがたに、眞理探究への科學に突進する心は、信仰にも等しいつゝましきよろこびにみたされて、この山角に生くる。

大地獄の一角に立つて、絶好の展望に、西方一帶をみやる。丸森(マルモリ)背後の岩壁に、兼々淺虫以來お聞きした怪異な地形に心を奪はれる。蛇が浴客によくなれて、浴槽に迫るてふ松川溫泉は、前面に落ち



三十二　八甲田大岳頂上北面にてミヤマハンノキ・ハヒマツ・ガンカウラウンの混生。少量のチングルマをも見る

三十三　八甲田大岳頂上北面にて放射谷の源頭に沿ひてナヽカマドヽ・オホシラビソ等が帶ツマヒハに突入する狀附近の斜面にはハヒマツにまじりて混生チングルマ多し

武田久吉氏撮影

こむ溪谷に間近なのであらうし、丸森の櫓と思はれる密林が、ひどく魅惑的である。此處の眺めと、千俵岩の稍下手からの遠望、さては前の日の夕、御瀧澤の上からの眺矚を、地圖に照して、源太、大深、諸檜、奈と國境近くから國境への山脈を追ふ。茶臼は、松尾より近く國境連嶺の眺望に絶好と聞いては、その山に又心は奪はれ勝ちである。南にかへつて三ッ石山の東北鞍部に殘雪が光る。乳頭、笊森、と指される中に、又殘雪は細く輝く、駒から須川岳への眺めも一入である。更に見る、ふりかへつて西北の方、あくまでゆるやかに膨大の尾根の線をひくはこれぞ聞くなる八幡平。雙眼鏡もてその山呼べば、針葉樹林の山腹に沿へるが心に答へる。炎の狂ふにも似し歡喜よ。この山に導き給へる先生も亦、快心の笑を浮べられつ、この山のあたりを凝視される。口も開けないうれしさ。この復なき眺めの中に再び入りこむ。幾時たつたかしらない。

雲はゆるかに走る。夏の山は翠嵐の息にむせむで、殘雪のときめきがふくよかに照る。この永遠への閃光の底にたゞ一つもの足りない心地がしたのは、この山を見むとこの山にいたらむと、私を先生と共に誘うてくれた山口氏が傍になきことであつた。友病むと云ふ今、この夢交はす術なきや。この半日のよろこびの大きなのにつれ、私はその希望の深からざるを得なかつた。

再び、山頂の小屋へ、歸る道すがら、御苗代、御釜、八ッ眼附近を探勝、觀察する。私はこのほとりをお花畑と俗稱されるまゝ、このあたりのことゞもにつき、私のみたことを少しく記してみやう。八ッ眼の入口にあたつて、チングルマの多い乾燥濕原がある。莎草、コバイケイサウ、ネバリノギラン、イハシャウブ、シャウジャウバカマ、コバノトンボサウ、ホソバノキソチドリ、ハクサンチドリ、ミヤマキンポウゲ、シロバナタウウチサウ、ガンカウラン、イハオトギリ、ヒナザクラ、オヤマリンダウ、アキノキリンサウ、ナンブタカネアザミ、タカネニガナ、ミヤマカウゾリナ等を生じてゐる。最近迄池沼とおぼしき所には水蘚あり、エゾホソヰあり、又ママウセンゴケ、ヒナザクラがある。流れ

に沿うては、ミヅギバウシュを產する。周圍はめぐらすに、アヲモリトドマツを以てしてゐるが、濕原と接する附近には、濕原に向つて、ハヒマツ、ミヤマヤナギを生じてゐる。そして濕原の方向に、ヲタカラカウ、コバイケイ、シロバナタウウチサウを經て、チングルマの群落に入つてゆく。この濕原は漸時乾燥に赴いてゐるので、灌木は中心に向ひ、遂に恐くは草原としての存在を許されなくなり、アヲモリトドマツの森林と化するのであらう。沼澤より濕原への變遷は、八甲田のそれに似てゐるが、最も著しいのは、イハイテフの姿をみせないことである。

この乾燥濕原を後にし北に樹林を距てゝ第二火口原に足を入れると、そこにはカハヅスゲとキンカウクヮの多い濕原が展開する。中に乾燥せるシモフリゴケの小群落があつて、カハヅスゲ、ヤチカハヅスゲ、キンカウクヮ、ヒメイハシャウブ、チングルマ、ガンカウラン、イハカヾミ、アカモノ、ミネズハウ等があり、アヲモリトドマツの芽萠えが生じてゐた(插入寫眞參照)。又濕原上部に純粹のキンカウクヮの群落存在し、附近に、マウセンゴケ、ミツバワウレン、シロバナタウウチサウ、ガンカウラン、ヒナザクラ、イソツヽジ、オヤマリンダウ等生じ、このキンカウクヮに接して、ヒナザクラが群れ、多少の Juncus を生じて居た。此のあたりを低地から考察するに、先づヒナザクラ、Juncus 生じ、普通は莎草が入り來り、次いで、キンカウクヮとなるのであるが、キンカウクヮが優勢を保つて前記の如くになるのである。

又シモフリゴケ、ミヅゴケの相次で生じ、且、ハナゴケの混生する所がある。生態單位が非常に複雜であり、この一斑を見むがため、横斷をつくつたのが左に示すものである。

この附近を歩くに、先づ濕原中の乾燥地にシモフリゴケ入り、次にハナゴケ入るものにして、シモフリゴケ、ハナゴケ勢を得れば、濕原要素としてはヤチカハヅスゲ、キンカウクヮ最も後に殘り、ヒナザクラは早く減退するものと見られる。又シモフリゴケの侵入と共に、チングルマは優勢を保ち、

こゝにマウセンゴケ、ヤチカハヅスゲは激減するものである。

水蘚

0—1尺
マウセンゴケ
ヒナザクラ
マウセンゴケ
キンカウクヮ
ヒナザクラ
エゾホソヰ
1.1 アカモノ
1.3—1.4
ヒメハナシャウブ
1.5—1.8
ヤチカハヅスゲ
2. キンカウクヮ
2.2 ヒメイハシャウブ

ハナゴケ

2.2—3.0 シモフリゴケ
3—3.1 キンカウクヮ
3.6 コバノトンボサウ
3.7 ガンカウラン
3.8—3.9 ヤチカハヅスゲ
3.9—4.0 アカモノ
4.1 オヤマリンダウ
4.4—4.5 ヤチカハヅスゲ
4.7 ヤチカハヅスゲ
4.8—5 ミネズハウ
5.1—5.3 ナンブタカネアザミ＋ヒナザクラ
5.3—5.4 ヤチカハヅスゲ
5.8 ヒナザクラ
5.9—6 ムシトリスミレ
6.1— ムシトリスミレ
6.2—6.3 ヒナザクラ
6.5 オヤマリンダウ
6.4—6.6 ヤチカハヅスゲ

尙本濕原の下部にあたつて尙濕潤の所にはワタスゲを産し、ミヤマヒカゲノカヅラ、ヤチカハヅスゲ、ネバリノギラン、マウセンゴケ、チングルマ、ミネズハウの混生する所もあるし、ハヒマツと共に、タカネヒカゲノカヅラ、コイチエフラン、ハクサンバウフウ、ヒメイハカヾミ、コケモヽ、アカモノ、イソツヽジ、ツマトリサウ、ミヤマカウゾリナ等の生ずる小丘（塚といふが可？）などもみられる。

この邊一帶は、群落移動中のもので、群落は幾つかの括弧によつてくゝられたものゝ總和である。故に一つの優性種類を決定すること困難で、私は以上に、その要點を括弧的にくゝつてみたのである。

御釜湖は地圖でみる程植物には面白くない。めぐらすにアヲモリトドマツの他に、ダケカンバ、ミヤマハンノキ、ナヽカマドなどがある。岩手の影を浮べて、靜穩の藍青が、まはりの綠の濃淡と共に、無氣味な程に澄む。

お釜に近きお苗代東岸には、マウセンゴケ最も多く、エゾホソヰこれに次ぎ、それ〴〵群生し、折々に混生し、濕潤なる所には、ネバリノギラン、ヤチカハヅスゲ、カハヅスゲ、コバノトンボサウ、

シロバナタウウチサウ、マウセンゴケ、オヤマリンダウを産するに過ぎないし、所に由つては、イハシャウブ、ヒメイハカヾミ、イソツヽジ、ヒナザクラ、ツマトリサウのある所がある。濕潤地中に生ずるマウセンゴケが、オホバスギゴケ(?)におされて、次第にSanguisorba, ネバリノギランの生ずるに至り、つゞいて、ガンカウラン、チングルマ、イソツヽジ、ミヤマカウゾリナの生ずる所もある。又、マウセンゴケとエゾホソヰと接觸し、エゾホソヰが斷然、マウセンゴケを逐つてゐるのを明かに觀察出來る場所もあつた。アヲモリトドマツに交つては、ミヤマヤナギ、ナヽカマド、タニウツギ等があり、濕潤地と接する點、モミヂカラマツや、樹下ハリブキがあつた。裸地への樹林押出は、クロウスゴ、イソツヽジを先にして、ハヒマツこれにつゞき、ナヽカマド、ダケカンバなどがこれを追ひ、後にアヲモリトドマツが生じてゐる。お苗代西岸には、エゾホソヰの純群落がある。又小部分オホバスギゴケが中に入つて、オヤマノリンダウ、チングルマの侵入してゐる所もある。お苗代の沿岸は、一帶に植物群落の構成、樹林を除いては、遲々として進まず、濕原の如きも、濕原としてみとむべき單位なく(とれば、西岸のエゾホソヰ)、一時的の濕潤地とみなした方が適當ではなからうか。

私達は最後にこのお苗代に出て、こゝに荷を下して、觀察後、山旅の日の終りをゆつくり味はうとした。ゆく日とて、いつの日も、自らの心をたづね、自然の相(すがた)をおとなひ、又旅する人は旅する人の心を知つて、悠久の時の歩みに、自らのかそけき足跡の近づきゆくをおぼえ、一歩にしてはかへりみる感興と旅情をなつかしむだ。空のひろやかな蒼い胸、ゆくりなく流浪する白雲の群々を見つゝ今この上に私達は何にひたつてゐるのであらう。吾と我事自ら訝りつ、やがてはそれも一切の中に音なくとけこむでしまふ。空にして空を知るも、吾にして吾を知りつくし得ぬ不敏さは、この融然とせる境地にあつて、融然さそのまゝをいとほしみめづるのであつた。

かへりしな、八ッ眼に一寸よつて、小半時の後出發、そして、八甲田大岳のハシゴを思ひながら頂

四十三 高田谷地にてキンカウワクウ・ミツギク・ミタケスゲ・ナガホノシロワレモカウ等よりなる濕原

五十三 高田谷地にて濕原の周緣に於ける乾生植物の侵入

武田久吉氏撮影

上にかへる。九合目で、老爺に別れをつげ樣と小屋に寄る。扉をうてば空洞である。空洞をたづぬれば闇である。闇にさぐりあへばそれが不思議もない人生である。おぢいさん、さ樣なら。火口壁にたどりつけば、陽は全く沈むで、駒と須川が、雲海に浮き、早池峯が、遠い。星の世界がまたきた。私達が小屋に入る頃、急につゞいてガスの夜がせまつた。

仕事をし終へると、既に室はヒッソリとしてゐた。ひとりで外に出る。いつか霧は去つて、弦月の夜がひらけてゐた。私は昨夜の樣に、ひとりひつそりと火口壁にのぼつて行つた。

大更へ下る

霧が深い。それに風さへ加はつてゐる。再び妙高から御室へゆく。風が強いので、寫眞をと思はれてゐる先生の困難は一方でないらしい。御室の中さへ、五分の一秒の靜止を見出すことは極めて難いことであつた。御室の中で雲の動きを見てゐると妙にしんみりとなる。空の圓天井に星をちりばめて、火口壁に廻廊をめぐらす火山の殯葬場の夜、去にし日の聖僧の姿などものしづかに描かれてくる。かくしてしばし、時間的現象と、空間的本體とむすびつけながら、思索と冥想の交響が生きて來る。

「眞理は學者の有にあらず、僧侶の有にあらず、たゞこれを愛する者の有なり」かの有名なる言葉は今は私へ、この美しい韻となる。

九時頃室へ歸る、荷物をとゝのへて、出發。室の高橋さんや其の他の人達に別れを告げ、大更へ下る。天候は全く定つて、大更口不動平に着く頃迄には、蒼い空に高く白雲が飛むでゐた。不動平斜面への途上、上部には、イハギキャウ、タルマヘサウ多く、オヤマソバ、タカネスミレを混じ、タカネスギカヅラ、コスギラン、シラヲイハコベ、ミヤマハンシャウヅル、ガンカウラン、コバノイチヤクサ

ウ、コケモヽ、アキノキリンサウ、ウスユキサウ等を見る。灌木としては、ハヒマツ、ミヤマハンノキ多く、ダケカンバ、ナヽカマド所々にうちまじり、アヲモリトドマツも千九百米を突破して生じてゐたが、喬木型ではない。不動平近くなれば、ミネザクラが出できたり、マヒヅルサウ、シュロサウ、ヒメイチゲなどがある。ハヒマツの純群落中を見れば、下に、マヒヅルサウ、コミヤマカタバミ、ミヤマスミレ、コケモヽを見るにすぎず、群落の周邊に於ては、路傍に見る如く、更に、ガンカウラン、ヒメスゲ、タカネスギカヅラ、ミヤマハンシャウヅル、コケモヽ、アキノキリンサウなどが多く出てくるのを見うけた。不動平の小屋附近には、ミヤマキンバイ、シラネニンジン、ミヤマカウゾリナ、エゾヤマヲダマキに眼がついた。今去らむとし不動平の小屋の側に立つて、あの柳澤道、九百米前後にまでの灌木林の下降、並びに西面大地獄谷側アヲモリトドマツの千九百米に及ぶ上昇、又今下りゆく大更口を考へては、山旅又多幸と言はなければならない。

三日の山頂の生活、思出あたらしい山體は尨大の姿をよこたへて、爽かの風に、名殘を惜しむ。今この溪沿ひに下りゆけば、その頂も旅の日のかけはしの思にのこる夢繪の影々となるのであらう。山去りゆくと叫むだ時、この旅の終りの地であるこの山は、水際立ちてきらびやかに、夏の空にそゝりたつのであつた。西岩手の火口壁を見れば、お苗代、お釜は、翠綠の中廣重の藍にむせび、遂に樹林のために行程を失つたお釜につゞく濕原は、全容を樹間に、うかゞはせて、精査なくては臆斷をゆるさない數々と、復の日の岩手を私達に約させるものゝ如くである。

不動平を後にすれば、やゝ溪ぞひにして、ハヒマツ群落より、灌木林へ、それも昨日と大した變化はなく、山腹をめぐり出す。五合五勺の三十六童子の岩石には、イハスゲ、チシマゼキシャウ、ダイモンジサウ、ミヤマキンバイ、イハウメ、イハヒゲ、ムシトリスミレ、ミヤマキタアザミ等があり、エゾオホバセンキウも昨日にくらべて多い樣に感じた。五合五勺より下ると、ダケカンバが增した。

この邊山腹めぐりの樹林のことゝて、眺望皆無、殊に霧も下り始めて、下りきるまで、樹林層を明確に觀察し得なかつた。霧の中で一休みする。やつぱりじつとしてゐると、山の森閑さを味はされる。私達は、ダケカンバの樹膚に見入りながら、菓子などほゝばつて時をすごした。

駒形神社の上でアヲダモが出、オニシモツケなどがあらはれ、三合目近くでアヲモリトドマツが聳立し始め、稍下つてアヲモリトドマツ林に入る。灌木として、ハウチハカヘデ、ミネカヘデ、アヲダモが混ずる。樹下、ヒメスギラン、マヒヅルサウ、ツバメオモト、タケシマラン、オホバタケシマラン、アリドホシラン、コバノイチヤクサウ等現はれ、こゝに、幽邃なる針葉樹林は、クライマックスの壯姿を、私達に接せしむるに至る。而して二合目上にて、コメツガが混じ始め、降れば、アヲモリトドマツは、コメツガの樹林と變り、依然として幽邃なる樹林はつゞいて行く。樹下、ヒメミヤマウヅラ、アヲフタバラン、アリドホシラン等を産する。尙尾根をはづれては、ネマガリダケ、其の他、ミヤマエンレイサウ、ミヤマスミレ、ミヤマシキミ、ツルリンダウ等があり、闊葉樹としては、ミヅナラ、ウリハダカヘデ、ミヅキ、オホカメノキがあつた。このコメツガの林の半以下から、ホヽ、ミヅナラ等が多くなり、樹林は漸次不整形となつて、惑亂の狀態をほのめかし始め、遂ひに原始型をもてる闊葉樹林に入ることなく、亂雜なる林相を經て、渾沌たる裾野に至るのである。

私達はずり下りる樣にこの斜面をはせ下つたが、この針葉樹林には、望外の歡喜を味はされた。そこには何里とつゞく壯觀こそなけれ、蔦道の闊葉樹林で味はされたおちつきが、ゆくりなくもこゝに丹念に描き出されてゐた。私達は行く先の時間がいくらか氣になつても、コメツガの林などでは、殊更に自分の足の先に出ないのを隨分に感じさせられた。名香の薫じゆく寥しみと物言はぬなつかしみ、許された幻想の聖堂はひろくもふかいしゞまにつゞく、人の世に今はあまり望みもたぬ子なれど、晴れた日の山のいたゞきと、霧降る森のいこひとは、與へられたい彼のさゝやかなる冀ひごとで

ある。

針葉樹林をはづれると、雜木の林に入つて、上坊迄下る。途上バッコヤナギ、ナガバヤナギ、ミヅナラ、ダケカンバ、ホヽ、アヲダモを見、又シナノキ、ハンノキなども出できたり、ヤマブダウがこれにからんで、路邊、イハノガリヤス、バイケイサウ、クルマユリ、クサボタン、アキカラマツ、ヤマブキショウマ、オホバキスミレ、シホガマギク、マルバキンレイクワ、ツリガネニンジン、カウゾリナ、シラヤマギク、乾燥地には殊にスヾラン、ウツボグサ、ヲミナヘシが多い。灌木としては尙サビタ、ミネカヘデ、タニウツギ、ハギ等が所々に交り、下降するにつれて、ダケカンバ減少し、カンボク、エゾシホガマなどが、突然あらはれてきた所もあつた。

上坊近く、スズラン、ミヤママヽコナ、カハラマツバ、タチコゴメグサ、カセンサウなどのある草原に出た所、ふとふり仰いだら、いつか霧も晴れて、岩手の山は應揚に聳えてゐた。白樺光る中を尙下つてゆくと、スズランの多い草原になつて落松葉の林が出はじめた。ミヤマヤナギ、カシハ、レンゲツヽジ、タニウツギなどが、林内歩道に沿うた乾燥地に生じ、私は近づきたる旅の終りを鋭く感じた。

上坊に一休みしてからは落葉松と赤松の單一な植林をくゞりつ、わかりにく相な林道を里人に導かれて、大更へのトロ道迄出る。トロ道は半里以上もつゞいた。氣になりかけてゐた雨雲は岩手をおほひ、遂に驟雨は私達に迫つた。桑畑に一時はさけはしたものゝ、時間の許さぬために、ぬれて歩く。しかしまもなく晴れる。名殘惜しむためにもう一度ふりみ仰げば山は青くぬれたまゝ、私達に迫つた。「いつまでもこうして歩みたいね」と最後に言はれた先生のお言葉は同時に私のお告げしたい言葉であつた。私達はもう一度熱い瞳を山にむけ、さ樣ならをくりかへした。私達は、岩手の麓、姫神の裾をめぐり、瀧澤で人夫に別れ、盛岡の夜の街に入つた。

六十三　高田谷地内の小隙地に生ぜる樹叢。ミネカネヘデ・オホヤマツ・ビラシソ・ドマカヽナ・ゲツヌイ・ギナクヤシロシ等ゴスウロク・クラウヤロジラウ・ゲツヌイ・ギナクヤシロシ
草原地にはナガホシノロワモレカウ多く又ゲンレツヽジ生ハシガツミはに中水畔池
ず

七十三　高田谷地の一部に生ぜる特殊地
てじ混にノモカア・マリヨシバホオ・ウセバヅミてに部一の地谷田高
地殊特ぜる生の等(?)ホカヌゾエ・デヘカネミ・キノマタラシ
影撮氏吉久田武

海峽をわたる

靜かな旅の終りです。おごそかな海の落日です。
螢光と紫光とさゝやかなうねりに船自らの影がゆらぎます。
私の行衞です。私のみまもる所です。海峽は、たとへない程の夕なぎです。
あるかなきかの私の姿です。默禱の聖典です。たづねる所もないそのまゝの言葉の貌です。首をうなだれます。輝しい、力强い悲しみの陽の線です。
私の心は甲板にうつる私の影に聲をのみます。
一つの世界の今日の別れです。
それ丈を知つてゐます。
私の旅は終るのです。
さ樣なら。旅行きし人、旅にありし人、旅にやどりし韻。
陽は海峽にしづみました。（大正十四年八月十日、聯絡船にて）

早池峰山紀行

岡田喜一

來る年も來る年も今年こそはと思ひながら、いざ行くと云ふ時になつて何かと故障が出來て果し得ずにゐる山が數々あるのに、ふと思ひ立つたまゝに出掛けて思ひ掛けない山へ登つてくる機會に逢着

することが少くない。此度の早池峰行も此例に近く兼々行きたいとは思つては居たが今年行く氣になつたのは突然で、從つて準備も三日ばかりの間にまとめ、四日目の七月十六日の午前七時二十三分には石鳥谷(イシドリヤ)の驛に下車してゐたといふわけで豫備智識に遺憾な點の多かつたのは是非もない。

石鳥谷　大迫町　岳

十六日。石鳥谷の驛の出口には例に依つて乘合自動車の客引がうるさい程たかつてゐた。一人旅にしては荷が勝すぎてゐたし、雨降りの多い此山のことであるから晴天の中に少しでも早くと思つたので、誘はれるまゝに乘車と定め七時四十分發。

珍らしく晴天つゞきであつたため田が干割れ、稻が立枯れになつてゐる、それが進むにつれて益ゝ多く、農家には非常に氣の毒に思ひながら一方自分には雨の山、早池峰へいゝ時に來たと內心ひそかに喜んだ。淋しく松林を控へて點在する東北の農家を迎へ送つて東北へ稗貫(ヒエヌキ)川の右岸に沿ひつゝ大迫(オホハザマ)町の郵便局前へ着いたのは八時少し過ぎ。車中で聞いた土地の者の話はさすがに難解極まるもので、もうそろ〳〵江戸辯の不通を感じ出した。ズンドウサのオスマイが自動車の終時間を意味する言葉であつたことをやゝ考へてわかつた等は其一例である。

局の附近は商家は相當あるが人夫は生憎一人もゐず、弱つたが、幸ひ內川目村へ行く駄馬が一日置き位に行くことを敎へられたので、郵便局の筋向ひの小道を東北へ一町弱行き難なく馬の嘶きに依つて其家は見當つた、ではなく聞當つたが、生憎今日は岳(タケ)まで行く序がないとの返事に、特に一頭仕立てゝ貰ひ、荷を兩側へ割振り、鞍上には座布團を敷いて體まで乘せてしまつた。馬の口取りは、池田貫太郎と聞いた此家の親方の妻君で見るからにたくましい者であつた。親方殿も途中まで行く用事があるとて白米をつけた馬を引いて同行した。出發午前九時十五分。

道を岳川の左岸沿ひに行くこと略〻一町、大迫の町家のやうやく斷續的に並ぶ樣になつた所、道の左側に一社あり、早池峰神社とあつた。更に、澤の部落に入つては左側に赤松に圍まれて田中神社といふのがあつた。これは早池峰神社々記に依れば藤原鎌足の後裔藤原實房の子兵部卿成房、大同二年三月八日東子岳の麓より奇鹿を追うて山巔に達し金光燦爛目を眩する瑞相を拜し下山して大迫郷の眞中に一宇を建立して瀨織津姫命を勸請し眞中明神と崇めたるを後世之を訛りて終に田中明神と書すとあるものである。

更に雲南の部落を過ぎ大償に入る所右へ大償社に通ずる分れ道があり、大迫から馬で一時間弱であつた。十時三十五分、立石に入り小又川を渡る。右角に立石小學校を見る。此附近で人家の檐に横に巣口を開いた燕の巣が五つ六つ並んでゐるのを馬上チラリと見うけたが恐らくコシアカツバメのそれであらうかと思つたが緯度の上から考へて疑ないでもない、もしさなくばイハツバメであらうと思ふ。

鈔野の邊りからは人家も疎に散在し、水田稍〻あり、畠に煙草（葉二三枚位が程度）や麥を作つてゐた。

楢花を經て數丁、オヤクラ澤が左手より合する。此稍〻上流で岳川を右岸に渡る。十一時九分。川を渡つてすぐ山裾の出鼻を曲ると山の神の祠があり、此邊り川幅稍〻廣く、淺く流れ緩やかになり、柳の大木など岸邊に茂る。眼前の山峽緩やかに裾を引いて馬上見渡せば煙草の畑遠くまで點在し、左岸白岩にまで開け、小呂別といふ。氣のせいか北海道の僻村の感じがする所である。

オロベツ澤を過ぎてガクマリ澤との間、岳川の左岸は概して草山で、ガクマリ澤合流點の南の山腹にある小社の三四本の杉と鳥居の前の一軒家が目立つ位である。右岸は雜木林で、小呂別から約四町行つた所、道と川との間に杉の植林して十四五年と思はれるものがある位で概して利用されてゐない。

覺久廻澤の落口の所で道は著しく迂曲して東走する。橋の手前に駄菓子屋外一軒あるだけで、澤の上流に名目入、猫底、折壁などの部落のあると思へない程淋しい所である。これは恐らく折壁峠や五右衞門峠の道は通つても覺久廻の方へ來ることは稀であるためと思はれた。覺久廻澤も上流に一ノ字澤、折壁澤が右左より合した澤が更に名目入澤(右)、猫底澤(左)の合流した支流を合せてくるのであるが其割に水量に乏しい。

狼久保までの間、稍〻著しい澤は對岸即ち、右にヒトナカビ澤、稍〻下流にコンヌキ澤の岳川に合流するを見る位である。僅かの杉に圍まれた小社がコンヌキ澤の對岸とヒトナカビ澤の合流點の上流約一町即ち岳川の左岸とに二つ目立つた。狼久保に來て人家があり、間もなく久出内澤を渡る。道邊に天王と記した木標があり續いて鳥居を見る。午後十二時十五分。此處で白米を積んだ貫太郎の馬は久出内澤について行つてしまつた。行くこと間もなく老杉の中に入り左手石段高き所に一社を仰ぐ。八坂神社と讀まれた。神社の老杉をぬけて、初めて右に森林に頂上まで包まれた三角頭の藥師岳と左に頂に僅かに岩を見せた鷄頭山を遠望した。

ブスノ澤を渡つていくばくもなくして分教場の前に出る。ホンヌケ澤が上岩山より來るを對岸に見る。

トミナイ澤の岳川に合する邊りからは人家も思ひ出した樣に一軒二軒と點在してをり、スンザンガハ澤(毛無森の西、一一〇八米の峯より發す)を渡る前後に五六軒集つてゐる。此處に又々小社の鳥居が澤の前後、道の左側に二つあつた。

正一時、岳へ十八町の木標に會ふ。間もなく道の左小高き所に早池峰社の鳥居あり、一時二分七折瀧への道の分岐點に到着。對岸にクザアサハ澤及び稍〻下流にセイロク澤が各〻地竹山(岳の里人、ヅダケヤマといふ)に發して合流する。

ギナヤマヤミの生矮小短る寸匐旬てじ混とケゴドンラスイノバコ
（てに原口火の背北岳高妙手岩東）

（てに原口火の背北岳高妙手岩東）ウヤキギハイとゲスハイ
影撮氏吉久田武

一時五分水量やゝ多いナナオレ澤を渡り、續いてキフタギ澤。中貝の二軒家を經てボンナリ澤、カネヤマ澤、クマノ澤、對岸にクマノ澤とほゞ向ひ合つてチヽクラ澤、下流にヂタケ澤（カネヤマ澤、ボンナリ澤間の對岸）の合するを見る。一時二十分岳川を渡つて左岸に移り製板所の側を廻れば人家が散在するのを見る。此處はすでに十五軒（其中小國姓を名のるもの六軒）より成る岳の部落で兩側に檜を並べた人家の中をぬけて早池峯神社石段下鳥居の前、小國重治方で馬を下りた。一時二十五分。

此處で歸りの時の迎への日を約して馬を返した。此小國重治といふ家は宿屋ではないが友人の紹介もあり旁〻たまには旅の者も賴んで泊ることもあるさうで、生憎重治氏は花卷へ行つて留守であつたが心よく旅裝を解くことが出來た。しかし丁度養蠶が一段落付いたばかりのところにて、取散らした中を跨ぎ通つて結局煤けた、天井の思ひ切り低い屋根裏へ破れよごれた屏風と同居となつた。といつて取つて置きの敷莫座を敷のべたり、新しい草履をそろへたりなにかするところを見れば萬ざら虐待のつもりでもないらしいが居心持はすこぶるよくなかつた。荷をほどく早〻にこの尾根裏をぬけだして、一時四十分鷄頭山へと向つた。丁度案内をしてもいゝと申し來た者があつたまゝ伴ひ行くことにしたが、此者慾張り一方の男で山の名などは殆んど知らず印象のすこぶる惡い者で姓名を聞きをく價値もない。岳に入つての初印象は重ね〴〵よくなかつた。

道は部落の中をぬけて製板所に行く少し手前、小國屋といふ宿屋兼菓子屋について岳川に出で假橋に依つて對岸に移り左に斜に小道を辿つて、クマノ澤の稍〻下流からの道に合した。稍〻登つて山道は二分し左は七折ノ瀧、右は鷄頭山に通ずる。二時六分疊石と稱する高さ三四尺、二間に四間の上面平らになつた磐岩を右手に見る。岩上に少憩の後行くこと間もなくヒモカヅラが澤山露岩についてゐるのに會つた（高距約八〇〇米）。ミツバワウレン、ミヤマスミレ、ミヤマハンシャウヅル（開花）等目につくと思ふうち體を沒するネマガリダケの中に入る。足下に道の跡はあるが上が茂つてゐるためとも

すれば、間違易く、且歩きにくいので結局這つて通ることの容易であることを見出した。途中ツバメオモトの葉に美しく白斑の入つたものが目についた。又、ネマガリダケの開花に會つた。五時十七分ミヤマハンノキを押分け登つてハヒマツのある岩石狼籍とした所に出た。ウスユキサウ、ミヤマシホガマ、ミヤマアヅマギク、イハキンバイ、ムシトリスミレ、ヒメコザクラ（稀少、花期過ぐ）、マルバシモツケ、イソツヽジ、ミヤマハンシャウヅル等があり、僅かながらハクサンオホバコのあることを確かめ得た（開花前）。此處を稍ゝ左へ曲りながら登り、二つの大岩が左右から迫つて僅かに人を通ずる樣にせばまつた間をぬけて右へ曲つて行き五時鶏頭山の西南の一峯の岩角に立つた。（約一四〇〇米）。途中イハハタザホ（開花少し）、ミヤマシキミ、イチエフラン（開花）、ダイモンジサウ、ヤマウキキャウ、マルバシモツケ、ウシノケグサ、ヒモカヅラ、ヨツバシホガマ、ヒメコザクラ等目についた。此處から鶏頭山の頂上は直ぐ近くに見えるが途中藪がひどいと聞いたし、時間も不足なので引返しと決した。此山は途中少しも飲料水を得られぬ所で、歸りには右へ草を分けてボンナリ澤へ出て喉を濕した。そして陽の入り早い山峽をぶら〳〵下つて宿に歸つたのは七時頃であつたらう。浴後早速天井裏の巣へ戻つた。

岳　河原坊　早池峯山

十七日。晴天を樂しみに寢た眼は午前三時頃にもう覺めて、早ゝに仕度し前夜約束した案内人鳥居脇の小國軍十郎を呼びに行く。軍十郎の仕度のため稍ゝ遲れたが四時五十分には出發も出來、天候は大丈夫と見たので、すが〳〵しい朝霧の中を元氣に滿ちて、早池峯山へと向つた。

宿の道ぐ前の石段を登り切つて社前に額づき、社の後に作られた岳川の左岸の登山道を辿つた。岳の部落から直接に岳川沿ひの道もある樣であつたが社裏の道は登山者のために作られたものらしく、

幾分近い樣にも思ふ。川沿ひの道と合する邊りの對岸にマギアサワ澤を見る。此澤の稍〻下流卽ち、神社の對岸に寺ムカヒ澤があり、左岸の神社裏のをトリア澤と云ふ。五時十八分カサヅメ澤を渡る。すぐ右手に石浮彫の高さ一尺位の笠詰不動尊を見る。對岸にアサダ澤あり、カサヅメ澤と對する。下流右岸にワラビ澤、オホノ澤があり。オホノ澤とマギアサワ澤の間岳川の對岸にジゾウ澤あり。カサヅメ澤との間にオホゾレ澤を挾む。五時二十三分所謂「萱野」の一部に入る。昔時は此邊は一面の茅原で年々火を入れたが今より約二十年前より中止したさうで今はトチノキ、ノリウツギ（方言ニンベ）、ハンノキ、ミヅナラ等茂り樹下にトクサ、路邊にオホバギバウシュ（方言ウレイ）やワラビの大きなのを見る。行くこと五分の後、尺餘の石標に茅野一合目とあり、これと並んだ木標に「從是上り木立（キダチ）三十里と云ふ實測里程一里五町、從是下り萱野十里といふ實測里程十六町」と記されてゐる。

六時三分水少きナメリ澤を過ぎる。途中ザッコ澤あり、對岸にこれに對してタンヌキ澤、同じく右岸アサダ澤と並んで上流に清三郎澤を見る。此邊りミヅナラ、オホカメノキ（方言ヒトツバ、巖手山にても同じ由武田博士の言）、イタヤカヘデ（方言イタヤ）等の大木鬱蒼と茂り、クロモジ（方言ヨジキ、楊子木の略ならん）、ヤグルマサウ（方言ヌスビトノカサ）、ホヽノキ（方言ホンノキ）等盛んに茂るのを見る。キツヽキ（方言テラヅキ、寺突（てらつ）きの意ならん）の敲木の音をしきりに聞く。

ナメリ澤を渡つて行くこと五分、二合目の石標あり、六時三分コゾウ澤（案内軍十郎のホウゾウ澤といふはナメリ澤を指すものゝ如し）に至る水可成あり、小憩約十分。更に行くこと五分マダノ澤（軍十郎オホビャクシと云ふ恐らく誤ならん。此者農を業とし、云ふところの澤の名、信じ難く、小き澤は名を知らず）に至る。六時二十四分道の左手に笛貫瀧入口の標に會し、荷物を置いて見物に行く。森林中を下ること六分で岳川の左岸に到着。瀧は對岸にかゝり十有餘の小瀧を左右に伴つてゐるが偶〻水量の少ない時に見たためかとりわけ立派とも思はなかつた。五分の休憩の後本道に引還し早

々にして出發。途中大樹の地上約六尺の所にキツネノチャブクロの澤山ついてゐたのが目を引いた。六時五十分三合目の石標を見て、七時十三分四合目の石標に至る。途中オホビャクシムカヒ澤の外無名の一跨にもたりない小澤は十近くもあつた。此邊りから花期を過ぎたヲサバクサがびつしりあるのに目を引かれた。

單調な林道つゞきではあるし、霧深くして早池峯山は中腹さへ見えず少々飽きてきたので軍十郎がしきりに話をしてくれた。測量の話、獵の話、外色々するが純粹の東北辯のことゝてさつぱり分らず、こつちから云へば怪訝な顏をして分らないまゝに默つてをり、たまに答へれば飛んでもない見當違ひな返事をする。お互にわかつた樣なつもりで會話をする位、面白くないものはない。でも盛んに話をしてみたものゝ通じないのはほと〳〵弱つたよりむしろ心細くなつた。七時二十分カシラナシ澤を過ぎたが軍十郎の云ふのはカレハナシ澤としか聞えなかつた。それもまづさうだらうとの推測である。

小白澤（コシロ）、シンリ澤を過ぎる頃シロバナシャウジャウバカマ（花期過ぐ）、モミヂカラマツを多く見た。シンリ澤とオホビャクシムカヒ澤の間の對岸にワサビ澤、下つてカンサク、オホビャクシの二澤がある。河原坊についたのが七時三十五分、坊といふものゝ目下は鬱々とした林に圍まれた土間の掘立小屋にすぎない。入口の右端に木札あり、「快賢と云へる上人弘法の爲め奥州を巡遊し大迫鄕に來りけるが此山神に詣し其の神域なるに感じ山麓に一寺を創し川原の坊と號せり（中略）寶治元年八月十六日大雷暴雨一晝夜に亘りて寸間なく山崩れ岩落ち洪水汎濫川原の坊亦流失し云々」と記してある。坊の左前に五合目の石標があり、別に「從是上り虎杖立（イタドリタチ）一里といふ實測里程十町、從是下り木立三十里といふ實測一里五町」の木標立つ。正八時出發。行手には霧立罩めて山腹さへ見えない。

坊の前から北へ岳川へ稍〻急斜面の岩のごろ〳〵出た下りにくい道を下つて岳川を河石傳ひに飛んで對岸に移つた。これから「虎杖立」でタケ川本流の左岸に沿つて行く間、流石にイタドリは一間に

東岩手藥師ケ岳直下の火口原に地裸てに植民せる
ハヒマツ・ハイスゲ・ハイブクロ・シモフリゴケ等

東岩手藥師ケ岳直下の火口原に植民せるシモフリゴケ・ハイブクロ・ハイスゲ・
タカネスミレ・ハハウメ・ハハテハタザホ等

影撮氏吉久田武

近い高さのが盛んに生立ちタケカンバの巨木が點在する。登るに從つてアキノキリンサウ、アヲヂクスノキ、タチカメバサウ、クカイサウ、シャクナギ、クジャクシダ、クルマユリ、ミヤマウラジロイチゴ等目に入る。八時半左へタケ川に下り右岸に移る。途中センジュガンピの白花美くしく咲亂れてゐる。

八時五十八分例の掛値澤山の木標があり「從是上り石跳(イシハネ)七里と云ふ實測里程四町、從是下り虎杖立一里と云ふ實測里程十町」と記す。附近ハクサンチドリ(開花)、キバナノコマノツメ、ミヤマヲダマキ(開花)、カライトサウ(未開花)等數へられる。更に登ること十餘分の頃にはイブキジャカウサウ、ミヤマハンシャウヅル、マヒヅルサウ、タカネニガナ、イハハタザホ、ヨツバシホガマ(花)、マルバシモツケ、ハクサンチドリ(花盛り)、ミヤマヲダマキ、シャウジャウバカマ、クヂャクシダ、アキノキリンサウ、ミヤマホツヽジ、ミヤマヒゴタイ(?)、コバイケイサウ、ミヤマアヅマギク等が美しく砂礫や河邊を飾つてゐた。こゝで一寸面白く思はれたのはクジャクシダが小溪の側の石間の向陽の地に盛んに生育してをりしかもこれから上方可成の地點まで上つてゐた。更に上ること稍々して岳川西方の小溪の左岸に移つて行くと「從是上り御坂七里といふ實測里程九町」と書した木札があつた。時に九時十五分で、此邊りには前記の草本の數々に加ふるにカトウハコベ(少)、ヒメコザクラ、ハヤチネウスユキサウ(開花、稍々多)等の珍種やタカネアヲヤギサウ、チングルマ、イタドリ、ネバリノギラン、ウスユキサウ、ムシトリスミレ、イブキジャカウサウ等多い。此邊り千三百米前後の所でさへ此樣な草本が多いが同高度の道の左方及び右方タケ川の左岸にはハヒマツ、タケカンバ、シンバク、ヒバ等一面に覆つて著しい相違を見せてゐるが、恐らく後者が此緯度に於ける高度のノーマルな林相で、前者はたゞ此處が砂礫地であるため前記の樣な木本の生育に適さない爲め、此等の多くの草本が孤立的の群落を保つてゐるに過ぎないと思はれた。頂上附近のものが砂礫につれて低下してきたのかとも初

め登りながら思つて行つたが頂上奥宮附近に行つて見ると、上記の草本は殆んどなくして、たゞ本山の特産と言はれるナンブソモソモが一面に敷つめた樣に盛んに生育してゐるし、登るに隨つて一時又斷續的ながらハヒマツ、シンバク、イソツヽジ等の灌木群落になつたり、頂上から東へ尾根づたひに所謂寒の河原附近へ行つてもハヒマツ、ミネザクラ、オホシラビソ、ウコンウツギ等が低く匍匐狀になつてゐて、草本は岩間、岩罅に見る位のものとなつてゐる所から見ると此山は各種の高山帶の植物はありながら高度の上からは亞高山帶の上部で終つてゐるものと想像もするが素人であるから尙更輕々しい測斷さへ許されない。とにかく風變りな山であることは確で、此千三百米位の所では所謂草本帶の植物と灌木帶の植物が同高度の地に見られる奇觀に接し得られる。所で又登ること五分で「頭垢離」と記した木標及び七合目の石標のある所へ出た。此處は東側が急な砂礫の崖となつてタケ川に臨む崖頭に當つてをり、これから道はこの崖に沿つて暫時行く樣になり、コバノツメクサの大きな株やムシトリスミレ、タカネナデシコ、ミヤマアケボノサウ等も加はり又、ナンブイヌナヅナ、ナンブトラノヲも初めて目に入つた。かくする中に道は先刻左岸に移つた小溪の源を又右岸に横切るが此邊りは、もはや水はなく溪と云つても南北に走る細長い窪地に過ぎない。道はかくしてタケカンバ、ハヒマツ、ヒバ（アスナロの北方品型）を主とする灌木林と前記の高山帶の景觀を呈した砂礫地の境の所を行く樣になつてゐる。從つてこのあたり千四百米前後の所ではイソツヽジ（開花）、マルバシモツケ、シンバク、ミヤマネズ、ヒバ、ハヒマツ、コメツガ（矮小）、ウラジロヤウラク（花）等の一尺前後の高さをした灌木が斷續的に群落をなしてゐる。それで草本もハクサンチドリ、ムシトリスミレ、ミヤマヲダマキ、ハヤチネウスユキサウ等が少しづヽ見られる位で概して貧弱である。十一時二十五分、道の右に上が扁平となつた巨岩が目についた。これを吳座走岩といふさうである。高距は約千六百米位の所と思ふ。此邊り稜角多い岩塊が重つてをり從つて植物の數量共に減少して、石の元、岩の割目に

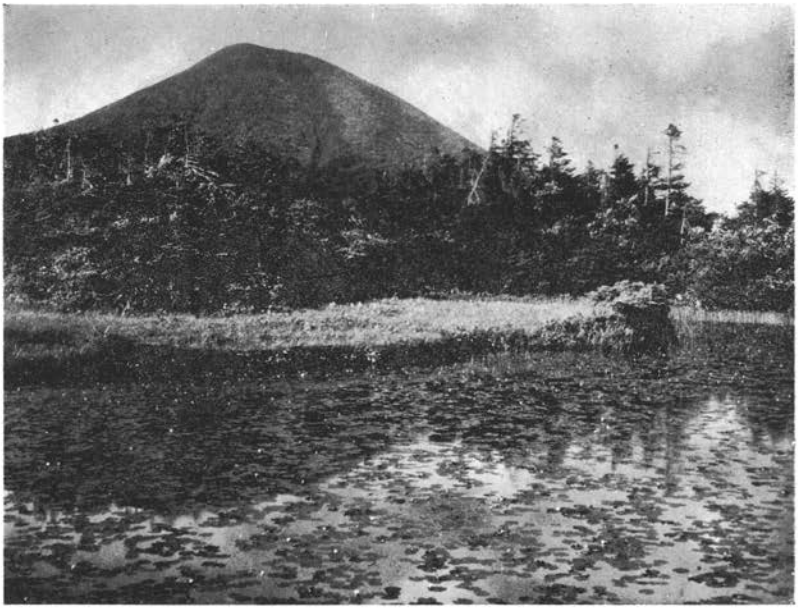
各〻孤立的に陣取つてゐるものが多い。かくするうち登つて行く前方に才槌頭をして孤立した巨岩が著しく目についてくる。道は丁度其左脇へ出る樣に踏めてゐて、これは此邊りでは際立つて大きく高さも二丈はたつぷりあると思はれるものである。これを打石とも佛岩ともいふさうだ。此岩へも東側から攀ぢ登つては快哉を叫ぶ者が少くないさうであるが、小生には其心理狀態は分らない。十一時四十分着。早々にして此處を出發。山頂は依然として霧に包まれてゐるが頂上から西へ中岳へ續く尾根が折々霧間に隱見し其尾根に僅かに殘雪が見える。ミヤマウキキャウ、イハウメ、タカネスミレ、チシマアマナ、ミヤマタネツケバナ、タカネクロスゲ、ミヤマキンバイ等が目につく。ハヒマツも岩の窪地に點在して枝を張り、枝下にツルツゲ、マヒヅルサウ、ウメバチサウ、ヒメイチゲ等がこんな上にきて生育してゐる、もつともヒメイチゲは本州中部でも二千八百米位の高所のしかも向陽の地に見ることもよくある。赤石岳の大聖寺平でも見られる、北海道では大雪山の雲の平で經驗した。

正十二時、限洗水と稱する此邊唯一の飲料水に出會つた。勿論湧水ではなく、緣結び岩と稱する巨岩の東側が平らになり、しかも內側に入込んでゐる岩壁の所に當る霧が凝り、雨滴が集つて一所に溜つたもので量は一升足らずで柄杓が添へてある。タカネヒカゲノカツラ、キバナノコマノツメ、ナンブトラノヲ等稍〻多く集つてゐる。晝食を終へて出發が十二時四十分、すぐ九合目の石標が目につく。此處から又頂上の平の直ぐ下まで草本が又群落をなしてゐる。ミヤマヲダマキも丈僅か二寸位で、紫の濃い色の花をつけ、ナンブイヌナヅナ、ナンブトラノヲ、ミヤマアヅマギク等は丁度此處の所が花盛りであつた。タカネウスユキサウ(稀小、草丈は赤石山系で見るものより大きい)、ウラシマツヽジ、ミヤマヤマブキシャウマ(稍〻少)、コメバツガザクラ(少)もこゝで目についた。其他ガンカウラン、イハウメ、ミヤマネズ、ミヤマシホガマ(開花、高さ十四糎、一株三花莖をつくるものあり)、ヨツバシホガマ、ミヤマヌカボシサウ、ミヤマハンシャウヅル、コタヌキラン等をのがじし思ひのま

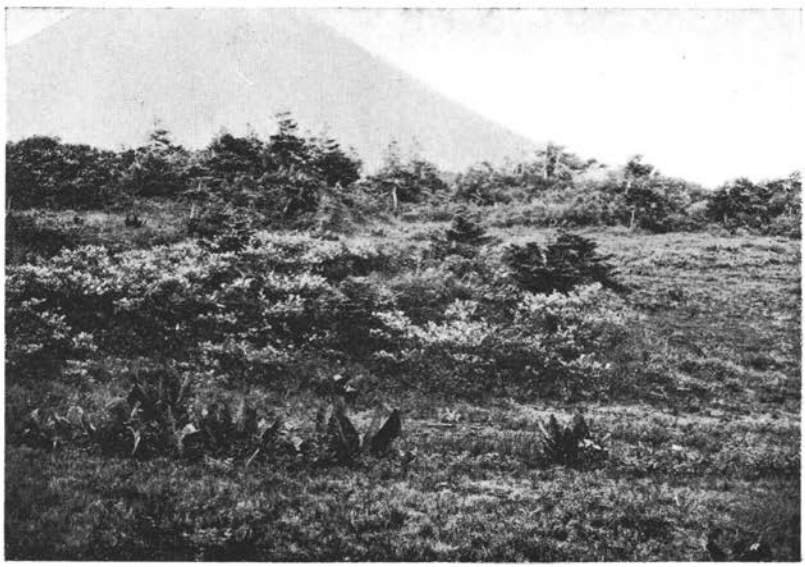
まに所を占めて、時を得がほに咲き亂れてゐた。

此處まで來る迄も寫眞撮影で一般の登山者より大層時間がかゝつてゐる所へ、これからは更に進みも遲くなり頂上に到着したのは午後一時十五分となつた。頂上は巨岩が所々に突立つた樣に散在する間に早池峯神社の奥宮と其右前に若宮（建物の背後に三角點がある）の二宮があり、内部は賽錢箱の前が六尺餘の土間になり、若宮には周圍に狹い床が出來てゐて、宿泊することが出來る。然し燃料は不足である。飲料、炊事の水は西へ一丁足らず行つた所に徑二尺位の溜り水があり慶明水と稱する。頂上に二社同じ樣な建物が並んでゐるのは不思議に思つたが早池峯神社々記によれば大同二年奇鹿を追つて東子岳（早池峯山）に來た藤原成房と遠野から來た四角（又は姑閣）藤藏の二人協力して翌年六月山巔に木材を運んで一宇を建設して姫大神を勸請して東子岳明神と崇めたといふのが今の奥宮となり、後に快賢上人山麓には河原の坊を建て山巔には祠堂を新建して之を若宮と號したに由來するといふ。序ながら早池峯なる山名について同じく社記に依れば山巔に小神池があり、炎暑に涸れず霖雨に溢れず、不淨を忌み、掬せしめず又人影を映ぜず、若し人、之を掬し之に映ずれば忽ち涸渴し、其人懺悔して奉齋者に乞ひて祈願すれば復湧出すること前の如くにして其涸渴湧出の早速なるに因つて山を早池峯と稱へ云々とある。

山頂奥宮に到着して參拜後、若宮に移つて荷を解いて小憩、人夫に宿泊、食事の準備を命じて早速附近の見學に出掛けた。先刻から强風と共にしきりに去來してゐる霧は此時段々と濃くなつて來て折々行手を閉すこともあつた。東へ尾根を稍下つて行く間もなく左へ安倍穴への道がつた。巨岩のゴロ〳〵したのを越えて行つて見たが凡人にはたゞの岩穴としか見えない。恐らく安倍貞任が隱れた所だとでも云ふのであらう。こゝへの分れ道の附近、道の左側に一面に丈二三寸になつたタウウチサウがあり、穗はまだ出てゐなかつたが恐らくナンブタウウチサウであらうと思つた。右手には丈三尺に滿



八十三　睡蓮沼と高田大岳



九十三　睡蓮沼附近の乾燥せる濕原の水路に沿ひてミヅバセウ・サハギキヤウ
ウヤキギヤナヤマヤミに地燥乾、し留殘
入侵の

武田久吉氏撮影

ない位になつたミネザクラの白花が丁度盛りで美しい。チングルマ、アヲノツガザクラ、ハクサンチドリが僅かに地を得ては咲きほこつてゐた。マヒヅルサウ、ミツバワウレン、ハリブキ、アキノキリンサウ、ヒメイチゲ、シャウジャウバカマ等も目についた。しかし大部分、ことに東北面はハヒマツ、タカネナヽカマドや灌木狀になつたオホシラビソ等が一面に擴がつて亞高山帶の上部を想はせ、ウコンウツギ（高さ一米前後）が淡黃色の花を澤山つけ點々として之を飾つてゐた。霧がしきりに來るので撮影が意にまかせないが諦めがたくしてゐるうちに、天候益々惡くなり、終には霧の中でもやたらに寫して夢（霧）中の撮影となつてしまつた。

かくするうちに小雨折々來たので賽の河原まで行つて若宮に引返した。途中ルリビタキのあの鉦をたゝく樣な透んだ聲がしきりに聞えた。夕食の後に風いよ〳〵強くなつたが雨は一時止み僅かの間ながら北の方向が晴れて、門馬（カドマ）の人家から、南に近く三角形をした藥師岳、西南に小白森、野澤額山方面の山から東北に遠く宮古の灣まで見渡せた。然しこの眺望も間もなく以前に增した濃霧と氣味惡くうなる强風に吹消された。そして寢た頃には雨が又やつて來た。よく〳〵早池峯は雨の多い所と見える。

頂上　河原坊

十八日。濃霧、風依然として續いてゐたが折々雨の止むのに一縷の望みを繫いで午前七時頃まで出滯つてゐたが、軍十郎の云ふに、とても今日は晴れぬ、この樣子では二三日晴れまいと。折角此處まで來て、雨も目的の一つとした劍ヶ峰、中岳の見學も出來ぬのは此上ない殘念ではあるが、晴れる日を待つまでの燃料や食料の不足を來す恐れがあつたので、止むなく即日下山と決した。氣溫華氏五十六度。

然しまだ豫期してゐた物が數々あるのでせめて見るだけもと思つて午前中だけ西へ走る尾根附近へ

と心ざした。荷物の大部分を若宮に殘して西南へ下ること約一丁、西へハヒマツを越え、岩を飛んで斜に西北へ、中ノ岳への尾根へと進んだ。途中珍らしくエゾイタチが目前三尺位手のとゞくかと思はれる所に現れ、二人を中心に近づいてはあはてゝ離れ、巨岩の下をくゞつては足もとに後に横に縱横に出て來て、暫時止まつて人を見ては急に走り廻りながら逃去らうとはしない。二回までこれに會つて人氣のない霧の中に見る氣持は餘りよくなく何かの暗示ではなからうかとさへ思はれた。

又この途中やうやく探しあぐんだリシリシノブの自生地を見付け得た。黑岩の岩上、ハヒマツの僅かに上を覆ふ所、九株あつた。撮影せずに過ぎるに忍びず又〻霧中撮影。最も大きな株は 25c.m.×14 c.m. あり見事であつた。尾根へ出てからリンネサウやカトウハコベの大株に出會つた。カトウハコベは株は直徑一尺に近いものであつたが花は極く少く、夕張岳や至佛岳で見た趣はない。シロシャクナギで花色の淡紅色のものがあることを知つた。ウスベニシャクナギとは恐らくこれのことであらうか。

尾根傳ひに東へ頂上へ歸る途中 25c.m.×25c.m. 十五本の花をつけたハヤチネウスユキサウの大株と 30c.m.×28c.m. 九本の花を捧げたナンブトラノヲの大株は霧の中を急ぎ歸る者の足を止め、驚きと喜びを與へて無理ながら撮影までさせるに至つた。慶明水に近くなつた尾根の上に横たはつた巨岩についた黑い細かい地衣に目を引かれ、恐らく Ephebe であらうかと思つたので雨中で鑿を働かして數片を得た。（歸京後、朝比奈博士の御教示に依つて Ephebe pubescens, Wain. といふことが知られ、八ケ岳に次での新産地になつた）。雨に折〻見舞はれて霧の中を急いで頂上に戻りついたときは正午稍〻過ぎてゐた。食後早々にして下山と決定。結束して出發したのが三時六分。河原坊へ下るまで、佛岩の東側を廻つて見た位で大たい往路を戻つた。イタドリ立の稍〻手前で草が三尺位の幅に川沿ひに薙倒した樣に靡き臥してゐた所に出會つた。軍十郎の云ふに熊の仕業であらうと。

五時十三分河原坊に到着。濡れたものも多いし雨中のことではあるしするので此處で一夜を過すこ

とゝした。小屋の建方は不完全ではあるが焚木が豐富に得られ、中で焚火も出來て、溫かく寢ることが出來た。

河原坊　岳　大迫　石鳥谷

十九日。夜來の雨は朝になつて益〻繁く午前六時十五分坊を出發、クモキリサウ（少）、ヲサバグサ（稍〻多）、ウハバミサウ（方言、ミヅ、煮て食用とす）等、送り向へられて八時二十分往路を戻つて岳に着いた。

小國方に荷を解いて、迎への馬を待つ間、雨の晴間を見ては附近を歩く、マタヽビの花が美しかつた位で格別の印象はない。岳川は二日間の雨に水量を增して濁つた流れは岩に激し、キセキレイが尾を振りながら岩を渡つてゐた。

此岳川は此邊りの川幅は數間にすぎないが川魚は中〻多いさうで鮎は毎日一人で七十匹とるものもゐるさうだ。迎への馬も正午にはきた。雨も幸ひ止んだので、午後一時十五分發、途中馬上撮影といふのを試みながら往路を大迫へ戻り、大迫町へついたのが五時三十八分。もう石鳥谷へ行く乘合自動車はないと云ふ。しかしこんな所に泊るも愚であるからなんとかして九時十五分の列車に間に合はさうと又〻此馬子に掛合ひ込んでやうやく六時半此處を出發、夜道を馬の脊にゆられながらやつと間に合すことが出來た。

附、此方面から登られる方は岳で泊られるなら小國屋と云ふのが比較的良いと思ふ。案内は神社前の小國重治がよいと思ふ。標準語の通ずるだけでも心強い。頂上の神社は泊るに適さない。夏期此山は雨天の多いのに頂上には焚木が殆んどない。盛岡口は一日一回乘合の便があゝだけとのことで不便が多い。石鳥谷口も上りの自動車は大迫を四時限り、馬子は夜道をさせると難當代、提灯代、割增等盛んに要求する恐れがある。

早池峯山參考文獻（順序不同）

札幌博物學會會報　第七卷、第一號　飯柴永吉氏
博物之友　第七年　同
植物學雜誌　二百五十九號　同
博物學雜誌　二百二十六號、二百三十一號　田中貫一氏
博物學雜誌第四十三號及五十六號　鳥羽源藏氏
山岳　第十七年第一號　沼井鐵太郎氏
日本園藝雜誌第十七年第九號　加藤泰秋氏

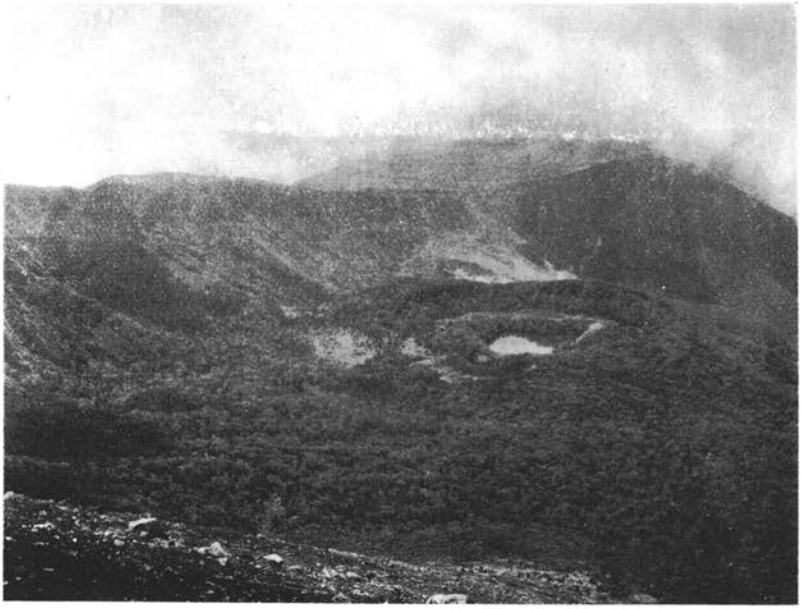
朝日連峰の縱走

安齋　徹

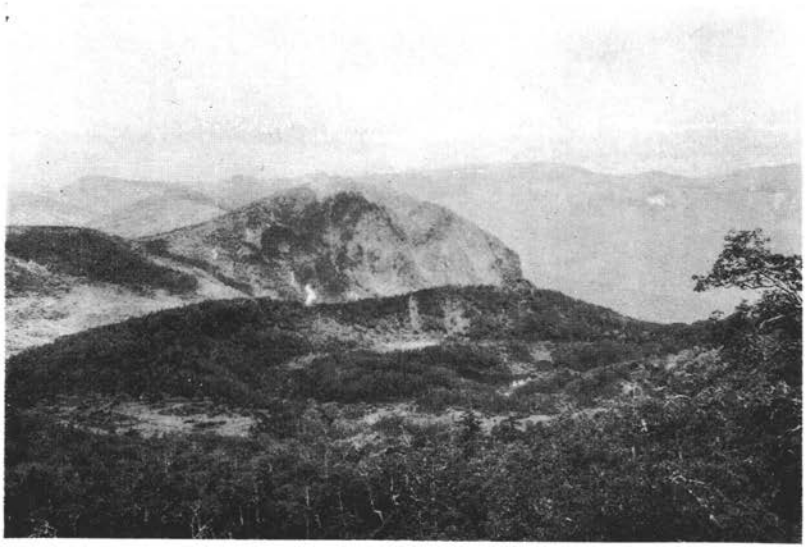
羽越の國境に連聳して從來其の地理的位置を認められなかつた連峯が朝日である。然し最近の登山に關係ある雜誌の多くは、悉く朝日の記事を載せる樣になつて、東北に新たな登山地が開かれたことは、恰も米國に於て最近アラスカに登山地が開かれたと同樣な感じがする。

斯うした新天地のことであるから、既に多くの登山縱走は試みられ、其の記事は遺憾なく揭げられ今更ら私達が新に筆を起こす必要はないのであるが、朝日に就ては科學的事項の興味あるものが少ないので、敢て此記事をものせんと企てた次第である。

朝日連峯が世に知られる樣になつたのは、大正十一年の夏私達が處女縱走に成功してから後のことで、其後は長い間のキャムピングや、寒河江營林署の中村氏によつて開發された林道開鑿や、沼井鐵



東岩手薬師ヶ岳より下瞰したる西岩手(御釜・御苗代・圓花御・大地獄・黒倉等)



東岩手西腹約一八〇〇米より西岩手(御苗代等)を距てゝ黒倉・姥倉及び
三ツ石・小畚・大畚ヶ岳・深岳・森嶋嶮・諸檜岳南肩の遠望

影撮氏吉久田武

太郎氏或は別宮遞信技師の冬季登山等によつて著るしく發展して來たものである。更らに之を學術的方面よりするならば、連峯の秘水大鳥湖の成因調査や北日本地體構造論の根據たるべき隆起陸塊の研究地として、日に〳〵其の趣味と價値とを揚げつゝあるのである。

朝日連峯の構造を見るのに、越後山系の最北部に位し、北西から南東に亘る基幹山脈が五里餘に連り、それに直角な支脈は兩側に數條走つて居る。

連峯一帶の地質は越後山系の本體である古生層の中に逆入した花崗岩であつて、基幹山脈の南端なる盟峯大朝日岳は標高一八七〇米、他は概ね一七〇〇米の高度を保つて居る。兎に角朝日山塊は支脈を併せて廣長な地域を占めて居るが、大體に於て南北に長い花崗岩のみの地質から出來て居る。

西方には鷲ヶ巣山脈平行して走り、其の北部は古生層の山地である駒ヶ岳に起り、鷲ヶ巣山、光兎山等の花崗岩山地を連らね、飯豐山塊に續くのである。更らに其の西方日本海岸に峙つ葡萄山脈は之も前者と平行した花崗岩山地であつて、何れも越後山系に屬するものである。

私達は縱走の道すがら種々なる觀察を試みつゝ此稿を進むることにしよう。

陸地測量部五萬分の一地形圖荒砥圖幅を手にして、奥羽線赤湯驛から長井線に乘換へ、鮎貝驛に下車すれば、驛前の左側に朝日鑛泉案内所がある。案内所の主人は古川政治氏で、鑛泉に旅館を營んで居る關係上、毎日鑛泉との間に物資運搬の常用人夫を備へてある。從つて此處に依頼すれば荷物などは容易に鑛泉迄運ぶことが出來るし、更に縱走用の案内者を要する人は此處で世話してもらふことが出來る。鮎貝から黑鴨まで約一里の間は平坦な道であるが、黑鴨で實淵川の橋を渡ればそれから急阪路に變る。此邊は傾斜の强い第三紀頁岩層露出して居て、其の表層には河床礫が乘つて居る。阪路は相當の難行で、中平を過ぎ日影まで一氣に續いて居て、殊に夏の日はかなり苦痛を感ずる。日影から先は人家全く絶え、行手の尖山を右にして山路を辿れば、鳥取場と云ふ鞍部に達する。此處は眺望頗

るよく、前面には月山や朝日支脈の障子岳などが遠く望まれ、過ぎ來し方を見返れば米澤平野から曲流する最上川を瞰下し、吾妻や藏王の諸火山を仰ぎ、清風を孕んで一息するに好適の所である。

夏の山路は烏取場から頭殿山の腹部を卷いて約一里、花崗岩の表層を透して來る清泉を味ひ乍ら極めて愉快に進むことが出來る。そして頭殿山の西側に週つた頃から連峯の雪嶺が私達の双眸を引付けてしまふ。若しも冬から早春にかけて雪の連峯を踏破せんとならば、烏取場より少しく進んだ夏道から岐れて全く尾根傳ひに雪庇を渡り、頭殿山の絕頂を越えねばならぬ。

頭殿山から尖山附近にかけての積雪時は日影を根據とした良好のスキー場であつて、沼井氏などは殊に愛好されて居つた樣である。

頭殿西腹端から逆落しの樣な鑛泉澤の溪谷を五百米の脚下に見下ろすことが出來、然も其の中に朝日鑛泉を指摘することが出來る。鑛泉澤を圍繞する山嶺は五萬分一地形圖朝日岳號に於て見られる樣に、烏原山から小朝日、大朝日、平岩山、御影森山と屏風の樣に立つて居て、全山の喬木帶は殆んど山毛欅の巨木に覆はれ、灌木帶獨り白雪の殘斑を被れる樣、譬へ難い美觀を呈する。山路は之から五百米の急阪七十餘折、隨分呆れる程の下降を續けねばならぬ。若しも積雪中の折ならば、山毛欅の原始林を縫ふて雪中を降れば、尻辷りの興一瞬にして滑降することが出來る。斯うした愉快さは雪中の登山に限られるものであるが、本年姫路高等學校の山岳部員三名を迎へ、私は東道の役目をしながらそのよろこびを共にすることが出來た。

七十餘折の林道は朝日川に終つて、それから鑛泉への橋を渡れば此邊の原始林は我等に言ひ知れぬ深山の感を與へる。朝日川の流れに添うて宮宿方面から通じて居る山路は橋際で相會し、それから七丁の間緩やかな登りを續ければ朝日鑛泉に到着する。鑛泉は旅館が二軒であるが、下流の方に新湯と稱するのが一軒ある。朝日川の上流は清く流れて密林之を覆ひ、鑛泉の夕支度から立上る煙を見て無

上によろこぶ私達は、其の谷の奥に夕映をうけて碧空に聳ゆる大朝日の劍頭峯を仰ぎ、只之れ歡喜の心を以て茅屋鑛泉の宿に草鞋を脱ぐのである。

朝日鑛泉は自然に湧出する炭酸鐵泉で、炭酸石灰や酸化鐵の沈澱を夥く生ずる。浴漕は之を汲みとつて沸かすもので腸胃病には特効がある。

旅館古川屋の主人房吉氏は稀に見る山岳通で、連峯縱走大鳥川の徒渉や、秘郷三面（ミオモテ）を探らんとする人々などは大抵房吉氏の案内によるのである。鑛泉から連峯の盟主大朝日岳に達するには二つの順路があつて、その一つは一昨年營林署の努力によつて開發されたシヽ小屋道で、他の一つは鳥原山を經由する從來の登山路である。

私達は夏の縱走者に後者をすゝめ、冬のスキー登山には前者をすゝめる。夏の縱走は天候の關係で二泊四日の間に成功することもあれば四泊六日間にして漸く大鳥の村落に達することもある。

何れにせよ四日以上の準備品を整へて出發する必要がある。先づ鑛泉から出發すれば山毛欅の林を縫ふて登ること四百餘米、五葉松の大森林を透して大朝日を仰ぎながら第一の尾根を越ゆれば小溪に出る。溪水は鳥原山の頂上から流れ來るので清澄喉を潤すに適し、綠陰以て登山者を慰める。

小溪から更らに一時間の努力をつゞければ、山路は益々急になり、疲勞頓に甚しからんとする時、我等は忽然として高原の濕地帶に出る。此處は連峯の縱走基點にして大井澤口や柳川口より來れる登山路を會し、高原の西南部には朝日岳神社を祀れるクロベの丘が目立つて居て、祠は數人の登山者を容るゝことが出來る。

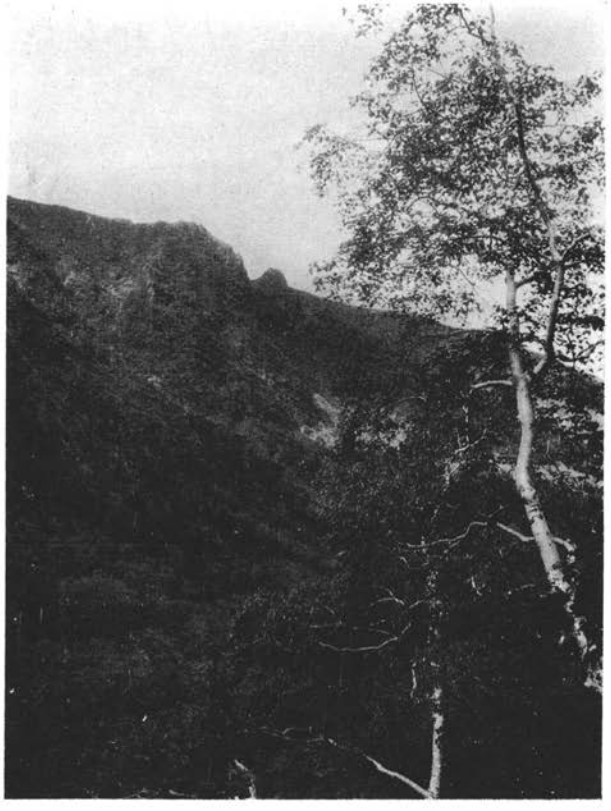
鳥原の高原はツンドラ式の泥炭濕地であつて、お花畠の美觀がある。大正十四年の夏に私達の企てたキャムピングは此地であつたが、神社の後ろの清流は夏尚ほ絶ゆることなく、高地の北隅には御田（オダ）と稱する池水があつて風致をそへ、朝日岳神社の森を背景にして、天幕生活をやるのは極めて愉快で

ある。御田の中にはミヅカシハ繁茂し、周圍の濕地にはモウセンゴケが密生して居る。

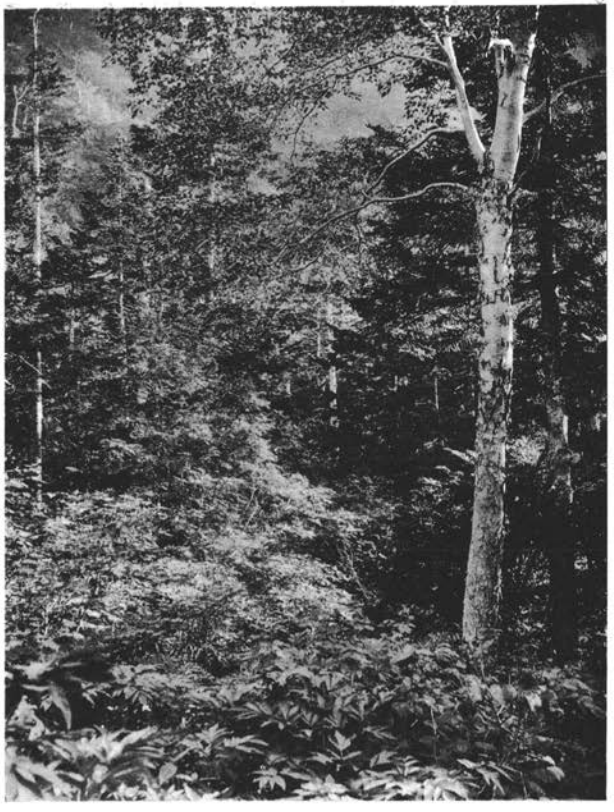
御田は登山者や案内者の信仰地で、若し徒らに池水を弄せんか、山神忽ちに怒りを發して山谷荒るると傳へられて居る。斯樣な御田は何うして出來たものであらうか、兎に角連峯縱走の道程には之と成因を同じうする小池水が澤山あつて特異の地形をなして居るから、此處に御田の成因を記して見よう。連峯の尾根傳ひには幾多の鞍部式地形を成す處、又は山頂にても傾斜の極めて緩やかな處は、地下水の花崗岩に對する化學的分解が著るしく、そして之等の分解表土は流水や雪崩等に作用されないから、殘積表土となつて其の厚さを益々增加する。斯うして春の融雪季に至れば殘積表土は地下水に飽和せられ、其水は或る地點を中心として滲集し、其處に自然の湧出を起す樣になる。積雪は次第に消失して池水の周圍に植物繁茂し、其中凹部の池に滲集した地下水は、年々同一な處に同一現象を繰返し遂ひに御田が完成される。即ち殘雪の五月と盛夏に於ける御田の狀態を比較すれば此事は明瞭に了解される。

御田から登ること百米餘、其處には鳥原山の三角點があつて連峯を望むに好適の處である。そして冬には絕好のスキースロープとなり、朝日又澤のシヽ小屋から暫時にして登り來ることが出來る。鳥原山から約一時間、自慢の健脚を驅れば尾根道傳ひに小朝日岳へ出る。小朝日は海拔一六四八米、其の南西一帶は斷崖骨を露はして、冬と雖も山膚を被ふことなく一名黑岳と稱する。斯うした絕壁の下には熊越の谷と云ふのがあつて、黑俣の溪谷と共に連峯中有數の深溪をなして居る。

小朝日山頂の眺望は恐らく連峯第一と稱することが出來る。即ち相呼應せんとする大朝日はY字雪溪を透して雲際に仰ぐべく、藍青の幽溪となりて脚下の斷崖に迫る黑俣澤、遠くは西朝日、寒江、以東岳等の雄姿が美しい雪溪の斑を日光に輝かして居る。近くは行手の松葺雪が山峻を分つて、朝日川系と寒河江川系との分水嶺をなし、その松葺雪や中岳（ナカダケ）の蛤貝雪などの融水は集つて根子（ネコ）川の水源とな



東岩手西腹約一七〇〇米より鬼ケ城（南面の外輪壁）の一部を見る
（右手の樹木はサウシカンバ）



西岩手第一火口原の東に續く森林の内部（オホシラビンとサウシカンバ、
（下生は主としてヲガラバナ）

武田久吉氏撮影

る。中岳より岐れた小さな尾根と西朝日及び中岳の中間から走り降つた尾根と、西朝日から岐れた支峯の三者が順次にヨコマツ澤、アカクラ澤、石ヤラ澤の三谷を刻んで、それが朝の陽光に照らされた光景は隨分美觀である。

小朝日岳の西側面は殆んど四百米の斷崖をなして連峯中特異の地形を呈するのであるが、其斷崖下の溪谷には急峻な大雪溪が一千米餘の間殘つて居て、一見氷河の樣な感じがする。斯うした大絶壁や懸谷の偉觀は縱走者の悉くに快哉を唱へしめるのであるが、其の地質的變化の考究は私が處女縱走を試みた時からの問題で、其後鳥原山キャムピングの機會を利用し、山岳部委員大里正夫君等と之れが探檢を企てたのであつた。

熊越から大雪溪を瞰下することが出來ても、其の雪溪の頭部が尾根に續いて居ない時期では中々此の谷へ下る事は困難である。私達は岩頭の樺の一木に結んだ三百尺餘のロープを傳うて雪溪へ降りそめた。先づ雪溪の上端に着いて露出された谷の兩側を仔細に調査して見ると其處は幅五尺餘の溝狀侵蝕谷で然も其の侵蝕が一大斷層線に沿うて居ることが知られた。斷層の走向は殆んど南北、熊越の溪谷と同一走向を示して居る。多少西へ傾斜はして居るが急角なために殆んど垂直と思はれる。私達は年來の疑問であつた熊越谷と小朝日の斷崖とを此の斷層線によつて解決することが出來た。そしてかかる斷層は小朝日山塊の岩膚に幾條か認められるが何れも小なるものゝみである。

何れにもせよ大朝日岳と小朝日岳とが分嶺するに至つたことは少くとも熊越斷層を考慮に入れねばならぬ。熊越の雪溪は金カンジキとロープとによつて辛うじて下降することが出來る。そして其の雪溪上には崖壁から崩落した岩塊が點々と散在して地形變化の急速なることを示して居る。

熊越から大朝日に至る尾根は東西に走つて居て、松茸雪の畔りにある銀玉水の露營地までは殆んど緩やかな勾配で上つて居る。地形は尾根の南側に於て絶壁をなし、黑俣澤の溪谷を瞰下して左に熊越

右にY字溪、兩側から氷河の樣な雪を推下して機械的侵蝕を逞うし、年々歳々只之れ峻嶮を加ふるのみである。大朝日岳の東側に刻まれたY字雪溪は金カンジキを穿つとも之を攀登し得ざる急勾配であつて、然も谷は切込みの猛烈なV字溝をなし、雪溪は越年するを普通とする。從つて萬年雪としての雪蝕作用は連峯中最も甚しい處である。斯くの如き雪溪の發達は、西と北とが遮られて黑俣の深谷が東部にある關係上、冬季の積雪は此處に集積され、尾根の南側には大雪庇が出來、それが崩れて谷を埋め、殆んど夏季の蝕雪期間中に消失せしめることの出來ない分量に達するのである。

私達は火山や成層山塊の侵蝕地形を見るよりも、同質花崗岩地に刻まれた侵蝕地形は殆んど雪蝕作用に基くものであるのを見て、更らに興趣を深うする。我國に於て花崗岩山塊として純なる雪蝕地形を見らるゝものは飯豐と朝日であるが、雪蝕の研究には朝日の方が遙かに便宜である。山の嶮峻なるをよろこぶ登山者にして、其等地形の發達を考究しようともせず、高山の色彩美を形容し乍ら高山植物の名稱を一つだも知らざる人々と共に自然界の旅を同じうすることは好まない。卽ち飯豐山と朝日連峯とは何から何まで比較すべき性質を持つて居るが、漫然とした比較は何等の價値を有しないと云ふのである。朝日への冬の登山は、山容や森林の美觀と雪膚の變化に接するのみでなく、今日の朝日嶮峯を彫り出した雪刻の狀況を知るにある。

冬の積雪期に於ける山容は、地表の雜木を被ふて風向による雪庇の發達や、森林による雪蝕保護の狀態や、悉く地形の變化を說明するの資料となる。

小朝日の頂上から一時間餘にして、熊越を通り銀玉水に着く。此處は大雪溪松茸雪の上部であつて海拔一千六百米、殆んど年中涸るゝことなき淸泉を流して、其ほとりにはシナノキンバイが黃蝶の群れの樣に亂れ咲き、泉はダイモンジサウに覆はれて居て天幕露營には好適の地、將來登山小屋の建設候補地と目されて居る。

更に登れば傾斜は強く忽ちにしてハヒマツの繁みに入り、再び緩かな尾根を傳ひて裸岩の上に至れば、其處に積石もて包まれたる小祠がある。附近一帶にミヤマウスユキサウの群落とチングルマの群落とがハヒマツの翠陰を彩つて頗る美しい。

裸出した岩は花崗岩であること勿論であるが、大朝日の頂上附近の樣に片麻岩狀を呈して居ない。

小祠のほとりから劒頭峯を仰げば、人影小さく見え呼應の聲音が達する距離にある。銀玉水から大朝日の絕頂へは一時間餘、さしたる困難なくして攀登することが出來る。

大朝日の頂上は南北に細長い嶺をなして、其の西側は四十度の斜面を垂れて千仞の谷に臨み、東側は約五十度の急斜面をなして黑俣澤の谷底に達し、南端は岐れて南西に走れる平岩支脈と、南東に降つて行く中尾根とになる。中尾根には鑛泉奥の黑俣澤と朝日又澤との交點に位するシシ小屋の前に通ずる登山路が開かれて居て、烏原山を經て來るよりも三時間早く登山が出來る。

平岩支脈は更らに岐れて大玉山、祝瓶山等の嶮峯を起せるものと、御影森山の支脈とになる。

祝瓶山は岩骨峭立して頂上に攀づべき方面は僅か一方に限られ、消雪後に於ては登山困難であるが、曾つて國民新聞の渡邊君と日刊山形の佐藤君が處女踏破をやつた記錄がある。

大朝日の絕巔に立つて眺望を試みた記事は、山岳奥羽號(一)に盡きて居る。然し私達は前途五里餘の縱走連嶺を眺めて其の地形的特異に驚異を感ぜざるを得ないのである。

抑も連峯の地質は花崗岩であること既に述べた通りであるが、大朝日以北に於ては黑雲母花崗岩が一部動力變質を受けて片麻岩狀となり、それが花崗岩に接近するに從つて片麻岩理不明瞭となるのである。然し連嶺の中には龍門山の樣に輝長岩で出來て居る處もある。

花崗岩は黑雲母花崗岩と角閃黑雲母花崗岩との兩種があつて、前者は主に正長石、黑雲母、石英から成り、後者は更らに角閃石や斜長石を加へて居る。岩質には粗粒のものと中粒のものとがあつて、

以東岳附近は花崗斑岩と呼びたいものがある。

連峯一帶の地は全國的に最大降水量の地方であるから、蝕刻には氣候的に優位置と云はねばならぬ。然して稍々南北に走つた主脈や尾根は其の西側は日本海に面し、東側は中央凹地帶に臨んで居るので、日本海方面より吹き來る定向西風は連峯の西側に强襲し、烈しき雨滴のための蝕刻を受ける。然し西側面の中でも尾根に近き部分は雨水の集合力卽ち流水の作用が少いので花崗岩風化の表土は運搬せられずに殘積し、高山性の灌木類は次第に地表に矮生して山膚を保護する樣になる。之れがために尾根の頂部から少しく西面に降つた處迄は比較的に緩傾斜をなして灌木密生し、到底通過し能はざる植物帶を構成して居る。然るに西側面の中腹以下は溪流發達して流水の蝕刻激しく、到る處懸崖絕壁をなし、殆んど涉るべからざる地形を成して居る。斯かる西面の深谷底には三面(ミオモテ)の秘鄕があつて、平家の落人が隱れたる處と傳へられて居る。

蘯つて東側面卽ち中央凹地帶に面した方を見るに、平靜なる無風地帶であるが故に其處には雪の營力に基く削剝作用が極めて著るしい。

卽ち我國最大降水量地方にある本連峯の冬の降雪は、定向性の西風によつて烈しく運ばれ來り、連嶺を越ゆれば俄かに無風平靜な東側面の大氣中に沈落して、其處に異常なる積雪を見る樣になる。從つて連峯の雪谿は悉く東側に發達し、しかも雪田の深大に至つては鳥海や月山のそれを凌ぐものも少くない。海拔一八〇〇米の山地とは云へ雪谿の發達狀態に至つては、優に二八〇〇米以上の高山地貌を表して居る。

斯くの如く積雪の多い結果として、風雨そのものゝ破壞作用を受け難い東面側は、夏季に於ける融雪の流れに作用され、或は急斜面に添うて滑動下降する準氷河式の雪谿により著しい削磨破壞を受け、常に山膚を裸出し些少の表土をも止めない樣になつて居る。從つて灌木の發生は遮られ、蝕刻は

御花圃(西岩手第一火口原)と屏風ヶ岳(西岩手外輪壁)の一部

右手の突起は倉米(?)

西岩手寨ノ噴積附近大地獄谷の右岸を見る

(遠くはに前のそ、がソビラシホオ、林のバンカシウサはに前の、落群のケダリガマネ

と前面にはツマヒヤの叢生する注意)

武田久吉氏撮影

益々烈甚となる。連峯東側面は山嶺の分水界より直ちに積雪甚しく、一般の斜面は之等の積雪による準氷河式削剝によりて極めて急峻となり、又其の溪谷をなす處は積雪下面より融出する水の集りによつて流水の量を增し、其の流路は更らに一條の蝕下線を作り、深刻なる急傾斜の谷を穿つ。分水界をなした尾根から發達した之等の蝕刻谷は、日毎に深さを增し、冬季の降雪は夫等の凹地に更らに大量積雪を來たして、殆んど一年を通じ融解消失の機をなからしめる樣になる。斯うした狀態の處は尾根の近くに於て東側斜谷の頭部をなし、所々萬年雪の形式を作つて居る。之等の萬年雪式殘雪は卽ち雪蝕を逞くしてカール式の地形を作る樣になり、地形が愈々凹蝕されて來ると積雪の量も增し、地形の變化に及ぼす雪の力が一層加はつて行く。然かも斯うした雪の營力が等質花崗岩の山塊に作用するのであるから、其處には類似したタイプの地形が澤山出來る樣になる。

連峯の鞍部式地形をなす處、又は山上にて傾斜の極めて緩やかな部分は、雨水の地下潴溜を來たし、其の地下水は花崗岩を化學的に分解せしめ、表土を發達せしめる。そして分解表土は運搬されずに植物の密生を促すことや、御田の生ずることは既に述べた處であるが、斯うして發達した連峯の地形を知ることは縱走者にとつて頗る重要なことである。私達はこれから主脈の尾根を渡つて以東岳に向ふのであるが、大朝日の絕巔に立つての眺望と、連峯一帶の地形や小國の低地を越えて南西に聳ゆる飯豐山塊の壯大を望み、更らに日本海の方へは鷲ヶ巢、葡萄と順次に低下した花崗岩山脈が連走して居るのを見る時、此連峯の成立に就て再び考へざるを得なくなる。北方には月山や鳥海の獨立火山が屹立し、東には藏王火山群南には吾妻火山群と云ふ樣に雄大な火山山地で圍まれた中に、越後山系の古生層と其中に逆入した花崗岩塊で出來た飯豐と朝日とは、全く特異の山相を呈して夏の雪斑の美を恣ひまゝにしてゐるので、私は斯うした古生層花崗岩地帶の山地が朝日と飯豐と一對になつて、連峯若くは群峯をなすに至つたことを、辻村敎授の說明の樣に、越後山系の準平原化時代を想像したり、

荒川流域小國低地帶の地溝成生などを想像したり、從來の地質學的考察に就ては細大注意を拂つた所であつた。兎に角古生層地帶が二〇〇〇米以上の山地を造つたのみならず、その山稜が準平原面であつたとしては、花崗岩山塊を被ふて居る粘板岩質古生層の褶曲傾斜が單純過ぎる樣に思はれる。朝日と飯豐山塊の成立に就ては少なからず思を錬つた處であるが、はしなくも大橋教授の隆起陸塊說や出羽山脈構造論の高唱によつて漸く一道の光明を得る樣になつた。然し之等の新說に就て私は此處に重ねて說明を試むるよりも、地理學評論第三卷第二號並に第四號に詳說された原文を讀まれんことを希望する。

前に詳しく述べた連峯の地形發達は、準平原化後の二次的輪廻によると見るよりも、花崗岩地の上昇隆起と見ることの至當なるは明瞭であつて、此點に於ては連峯縱走の興味殊更に多いのである。

山岳の成立や地形發達の概要を考へた私達は、ハヒマツさへ繁らない頂上にミヤマウスユキサウやミヤマシホガマなどの美しい色彩を踏んで、愈々主脈縱走の途に就く。大朝日から以東岳までの間には中岳、西朝日、龍門山、寒江山、三方境、狐穴等の高嶺凹地があつて踏破は決して容易でない。先づ大朝日から其の北方へ下ると極めて心地のよいハヒマツを踏み、その處々にはムシトリスミレとマツムシサウの群落が無心の者の心さへも引きつける。更に下れば中岳と大朝日との鞍部に胡桃實雪（クルミ）と云ふ大雪田があつて雪蝕地形の特色を呈し、雪解の附近には雪かと見ゆるハクサンイチゲや嶺に近くは日光キスゲが山腹を黃彩して居る。胡桃實雪からは中岳を越えるのであるが、其の稜線をこぐことは不可能であつて、山の東北面の灌木を涉つて蛤雪（ハマグリ）と稱する急峻な雪溪を橫斷して西北面に廻ると、其處は行手の尾根路に向つて百米餘の急崖をなして居る。急崖を下ることは其の危險、其の困難餘程の注意を拂はねばならぬ。崖を下れば蟹蛯と續く尾根東側の雪溪頭部は、恰も大道路を步むかの樣に安樂なコースである。斯うして二三の難關はあるが西朝日の南東鞍部にある御田の畔りに出れば、此

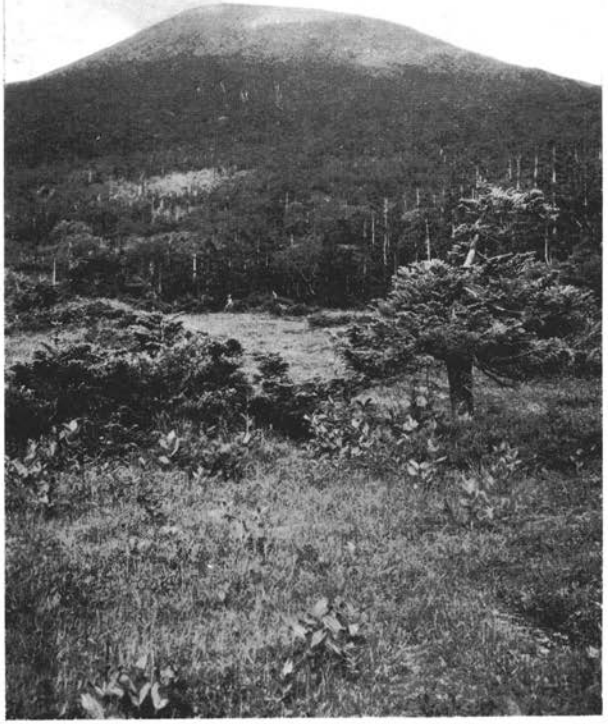
處は夏の登山者の露營地に好適の處、朝日鑛泉から朝に出發した人達は此處に一泊するのが普通である。私は處女縱走の時、烏原山を出發して西朝日を越え、少しく北方に降つた尾根の陰に露營して、村山平野を埋めた雲海の壯觀を恣にしたことがあつた。西朝日は頂上から更に西方へ高峻な支脈が走つて、大朝日から見た光景は頗る雄大である、そして其の支脈の岩骨は削立して山腹の登攀など思ひもよらぬ處である。西朝日の雪谿の大なることも其特色の一つで、高山植物は目を引く樣な景觀がない。何れにせよ曉天の雲海を西朝日より瞰下するの快は、蓋し連峯の最大偉觀と云ふことが出來よう。西朝日から北走して下れば龍門山との鞍部に出る、此處は根子川の源流アカクラ澤や石ヤラ澤の上流雪谿が甚しく發達して、龍門山の東側は到底急崖のために通過不可能と思はれたのであつたが、今では兎に角通過することが出來る樣になつて居る。私が處女縱走の折には連峯縱走の最難所として龍門山の灌木踏破を擧げたのであつた。卽ち一見した處では龍門山の東面は岩骨裸出して然かも斷崖狀を呈して居る爲めに、尾根の頂上か或ひは少しく西面に下つた處を分け行く樣になる。此邊は地形の特異として既に述べた通り表土の發達と灌木密生とに遮られ通過の困難一通りでなく、多くの縱走者が艱難刻苦する處であるが、近頃東側を傳ふことが出來る樣になつて困難の程度は少しく樂になつた。更に最近寒河江營林署の手で縱走路が開發されることになつて居るから一層容易な山路になるであらう。龍門山は輝石の巨晶に富んだ輝長岩で出來て居て、其の北側からは淸太岩への支脈が分岐して居る。淸太岩支脈は大井澤からの登路が開かれて其の山路の終點は龍門から寒江山への鞍部百畝畑(ヒヒクハタ)にある、此處は露營地に適した處で、銀玉水か烏原山を朝に出發した登山者は此邊に露營するのが普通である。之から先は比較的容易な尾根傳ひであつて、間もなく寒江山に出る。寒江山は南寒江と北寒江とに岐れ、草本のみ繁つて灌木は殆んどなく、シラネニンジン全山に群生して居る。然して連峯の重點地を構成し、此處から西南に走つた大上戸、相模山の支脈と西北に走つた二ッ石、障子岳の支

脈とは連峯に十字交叉をなして居る。其の西南支脈は昨夏日本醫專山岳部の高槻君等によつて踏破せられ、三面への通過を決行されたが、西北二ッ石障子の支脈に至つては幾度か縱走企畫をなされたにかゝはらず未だ完全に成功されて居ない。寒江山の東側雪谿は融けて見附川の源水となり、大原目木、タカマツ澤、トウヌシ澤等の急峻なる雪谿を形成し、西は岩井又澤の深谷を穿つて居る。寒江から更らに北西に尾根を傳へば、三方境のハヒマツ帶を通過し、それより著るしく降りて以東岳の東南側鞍部狐穴に達する。斯うした尾根や支脈は悉く花崗岩であつて、殊に狐穴附近は地形が緩斜凹地帶を構成して居るために、粗粒の花崗岩分解による砂は厚く殘積表土となり、雪田の發達は勿論清水の湧出等頗る心地よき環境をなして居るが、灌木少きために露營の燃料等に不便である。然しメターの如き燃料を持つた登山者にとつては無二の好露營地と云ふことが出來る。

狐穴からは以東岳東面の大斷崖を仰ぎ、此れより流れ行く出谷川は狹谷をなして北走し、西には中俣澤、金堀澤が深く刻まれて居る。

狐穴から愈々以東岳に登るのであるが、尾根は全く圓滿な緩斜面となり、小笹や雜草が茂つて居る丈けである。そして此邊には所々斷片的電光形の登山道路跡が明らかに殘つて居て、笹に被はれては居るものゝ道型丈けは否定し得ない人工の跡である。然し以東岳の中腹以上と狐穴以南に於ては全く其の連絡を考ふべき痕跡が發見されず、人々をして頗る疑惧の念を深うせしめるが、こんな山路の歷史的觀察否な研究は興味あることゝ思はれる。以東岳は部分的に花崗斑岩が露出し、長石類の巨大な斑晶を分解遊離して特異なる殘積表砂を形成してゐる。以東岳は五萬分一大鳥池圖幅にあつて海拔一七七一米餘、絕頂は南西から北西に引延ばされた長い峯を形成し、何れの點が頂上であるかを知るに苦しむ位である。頂上から北に走つた茶畑山支脈と西に走つた化穴（バケアナ）支脈とは互に相擁して圈谷を造り、其の谷底に大鳥池の秘水を湛へて居る。

御釜より仰げる岩手山頂（東岩手）



西岩手第二火口原より東岩手を仰ぐ

武田久吉氏撮影

朝日連峯が登山地として興趣を引く要素の一つは、大鳥池の幽境を包藏するからである。何れの地からするも以東岳に登ることは決して容易でなく、人里から全く離れた此嶺は地理的存在をすら認められて居らなかつたのである。幸にして大正十一年の處女縱走に成功した私達が、日本アルプスを明治四十五年頃に踏破した經驗に比較して、東北にこんな淨風脫俗の仙境あるを誇らずには居られなかつた。爾來連峯の開發に努力を續けた結果、今や多くの人達の登山趣味を滿すことの出來る樣になつたことを喜ぶのである。大鳥池に就ては不思議な傳說こそ多けれ、それを調査した人々がないので私は頻りに湖水の成因を研究せんと欲したのであつた。大鳥池は以東岳から八百米の谷底に鏡の如く光つた幽水であつて海拔九六三米、以東から湖畔に下ることは至難である。最初瞰下した處では殆んど困難なしに下り得ると判斷する位であるが、中腹以下は灌木と篠藪の密生、更らに下れば楢や山毛欅の喬木茂つて、通過の困難は勿論殆んど周圍の地形や進路を見ることが出來ず、自然に谷へ下山路をとる樣になる。湖水に注ぐ谿流は主なるものが三條あつて、最も大きいのが東澤、次が中澤それから西澤である。下山の途中私達は中澤へ出たのであつたが、中澤は花崗岩の節理面に添うて蝕刻された狹い峽谷をなし、剩さへ瀑布が階段的に無數あるので、此の澤を下ることは絕對不可能であつた。殆んど死力を盡して谷腹の樹枝を傳ひ、峯に登り日暮れて進退谷まつたのが此谷へ出た失敗であつた。然し今では東澤へ出なければ下山が困難であるからと、注意を促して來た私達の努力の甲斐は認められ、度々の縱走者によつて一木二木と伐り拂れた下山のコースは、兎に角下山路のしるべとなる樣になつたが、近く寒河江營林署長中村氏の非常なる努力は、遂に大鳥湖畔への縱走路を開くべき實現を見られる樣になつて居る。

大鳥池は地形圖で見ても異樣な形をなして居て、其の排水口や七ッ瀧などの奇觀は決して普通の湖沼と見ることが出來ず、然かも全地域凡てが花崗岩である丈けに其の成因研究の興味を惹き易い。私

は處女縱走以來の願ひであつた湖水の研究を仙臺の齋藤報恩會研究費補助によつて昨年から實行することが出來る樣になつて、連峯開發には更らに新光明を得た樣に思はれる。

百畝畑か狐穴に露營した縱走者は、以東岳を越えて東澤の川口近くに下り、其處で湖畔に露營をするのが便利である。湖水に注ぐ谿流に於ては岩魚の棲息夥しく、釣漁の興趣は殊の外深いものがある。昨夏研究用の小舟を泛べて湖深測量をなした結果、最大深度六五・八米、そして六五米の湖底は廣い平坦地をなして黑泥の堆積に蔽はれて居る。泥土の中には硅藻や蟲藻類の生存夥しく、湖水の周圍は斷崖が多いので僅に西岸の山腹を越えて北岸に出ることが出來る。湖の北東隅から流れ出す排水口は北岸にある千米丘の山毛欅林を迴つて流れ、七ツ瀧と云ふ狹谷百米の深底を泡なして落下する激水は七段の累高二百四五十米、壯觀極りなく人外境の自然をなして居る。湖水は夏の正午に於て氣溫二三度、水面は一七・五度、それより殆んど一米深くなる毎に一度下降して水深一七米以下は低溫攝氏四度になつて居る。從つて溫帶湖に屬するのであるが、湖水に繁殖して居る原生魚なる岩魚は湖邊の淺い處又は谿流に棲息して居るのである。

大鳥湖の成因に就ては不日研究の結果を公にするの機あることを信ずるが、今は概略の說明に止むることにしよう。

湖畔の岩魚は實に面白く釣れる、人に接せざる山間の魚族は餌を漁つて著るしく釣人を興がらせる。幽潭の淸遊は將に岩魚釣りによつて其値を高くすることが出來る。

大鳥湖畔からは大鳥川に沿うて狹谷下りをせねばならぬ。湖畔を朝に出發して夕に大鳥村へ出づるには、天候の良き日を選んで川の徒涉を勇敢に決行すべきである。若しも天氣不良の日又は雨後增水の時などは激流である川下りは十分注意せねばならぬ。卽ち湖畔から泡瀧迄は全く川筋傳ひに徒涉するので下腹部以下は常に水浸り、然かも花崗岩の圓塊が纍々として河底に橫り、轉落、滑倒の危險殆

んど寸時の油斷も許さない。

泡瀧迄の狹谷は兩岸絶壁をなして河段丘式の地形は全く認められず、將來に於ても河岸に通路を造ることは至難と見られる。連峯の縱走は主脈を渡るの困難は一通りで無いが、更らに大鳥川の徒渉下流に至つては非常な困難を覺悟せねばならぬ。（完）

雜錄

○八甲田高山植物園設置に關する卑見

武田久吉

八甲田に高山植物園が出來るといふ噂は、去る大正十三年頃已に耳にしたことであつた。翌十四年の夏八甲田に遊ぶ途次、青森でその詳報に近い話を聞き、その無謀なるに驚いた。といふのは、八甲田山中に小區域を限つて各種の高山植物を植付け、それに名札を立てゝ一見素人と雖も高山植物の知識を得られる樣にすると共に、青森酸ケ湯間の道路を改修して自動車を走らせ得る樣にし、誰でも高山植物を研究し度ければ、容易に自動車で往復し、數時間内にその目的を達することを得られる樣にしようといふのだと、尤もこれは所謂又聞ではあるが、可なり信憑し得る筋から聞いた時には、呆然たらざるを得なかつた。

いくら青森縣廳の人達の計畫だとて、傳ふる如くんば餘りに馬鹿氣て居る。左樣なものならば造らぬ方が遙にましである。何といふ愚案だらうと自分の耳を疑つた程である。

酸ケ湯に登つて更にその話を聞かされた。然し此處ではそれ程具體的な事柄ではなくて、唯その下調べとして東北帝國大學の去る專門家が見え、一兩日を費して全山を跋渉されたと云ふことである。そして今にも基礎工事が始まりそうに傳へられて居たにも拘らず、地元では何等の施設も見ることなく、唯先年溫泉の經營者とかが類似の計畫をなし、溫泉附近の斜面を刈拂つて何か植付けたら、そこへ筍が一面に生えて終つたといふことを聞いたに過ぎない。それでこの植物園が出來上れば、青森縣から東北帝大に寄附して、その經營に一任するのだそうで、その爲め同大學から專門家が出張されたのだといふ話である。されば縣廳の案が愚劣なものであつたにせよ、相當改訂されて

西岩手第二火口原の湿地に混じてケゴナハ・ケゴリフモシてに原湿の原口火二第手岩西
ワクウカンキ・ウサチウウタナバロシ・レミスリトシム・ラクザナヒ・ウダンリノマヤオ
ンチ・ノモカア・ナガニナバロシ・ミヾカハイ・マルグ
のもろぜ生の等ンラウカンガ

西岩手第二火口原の湿地に内域區小るたれま圍にケゴリフモシてに地湿の原口火二第手岩西
ンラウカンガ・ノモカア・ウハズネミ・ウサリギトオ・ワ
クウカンキ・ゲスヅハカチヤ・ミヾカハイ・マルグンチ
のもろぜ生の樹稚のソビラシホオにび竝等ナガニナバロシ

影撮氏吉久田武

立派なものが出來上るだらうとは誰も豫期する處で、幾分胸を撫で下ろしてもよいかと思ふ。

とは言ふものゝ、高山植物の研究や高山植物園の設置といふことは、從來本邦に模範とするに足るものがない爲めに、大抵の人は名案が無い處でなくて概ね誤つた考に捉はれて居る樣に見えるから、此機を利用して聊か私見を述べて當局の參考に供し度い。

高山植物園として歐洲に設けられた名あるものも、多くは高山植物が自生して居ない低地に築造されたもので、其處に各地から拉し來つた高山植物を栽培し、その形態や性狀を研究しようといふので、從つて自生地とは多少なりと異つた狀況の下に培養された草木を見るので、場合によつては低地栽培の結果著しく異つた形態を示すものも出て來る。それも亦研究の一端として結構なことであるが、斯かる高山園では出來る丈け自生地の狀態を模し、高山に生じたと同樣な高山植物を栽培するのを本義とする。

本邦では日光の植物園が則ちそれである筈なのだが、設置以來二十餘年を經過するに拘らず、未だ十分にその目的を達して居ない樣である。これは經營費等の關係にもよるのだらうが、管理者にその人を得ないのが第一の缺點だらうと、考へるのは私許りではない樣に思はれる。

本邦では高山植物の培養法が存外幼稚であると共に、困難は歐洲に於るよりも遙に多大である。斯樣なことから低地培養が容易でない事情もあるし、又低地の種類を高山に植付けてその變化を見るには、相當の高度を有する山上にも試驗園を有することの必要なるは言を俟たないから、先年も日光の植物園を湯本に移し、白根山をもそれに包含させようといふ議案のあつた折にも、その有利なる可きことを私は斷言して置いた。然し遺憾なことには今日この案は實現されぬらしい。

それは偖置いて、八甲田の如き複雜で變化の多い一つの山彙を、その一部なりと高山植物園として經營するといふことは、學問上甚だ有意義なことで、その施設の良否によつて、結果に多大な影響を及ぼすから、餘程愼重な態度を以て事に臨ま

なければならない。

植物の上から見た八甲田が如何なる所であるかは、別項舘脇農學士の「八甲田山植物瞥見」によつてもその一般を推すことが出來よう。換言すれば八甲田の中腹以上は、それ自身已に高山植物園である。これ以上一定の區域を限つて高山植物を植付けるとなれば、それは八甲田に產しない種類を、洋の內外を問はず、蒐集して培養する丈の話で、八甲田山中諸地に自生する種類を一定の區域內に集めて、札を立てゝ陳列棚の商品宜しくとすることは策の得たるものではない。勿論東北帝大中誰一人斯樣な時代錯誤の權化とも見る可き案には耳を藉される筈はあるまいとは思ふが、敢て一言して置く。

八甲田山が持つ特色の一つは、目ざましい植生の變遷で、複雜な地形と相俟つて、本邦の高山中他に類例が乏しい。內地では立山、北海道では大雪山彙あたりが漸くこれに匹敵する位であらう。これで高度がモウ五百乃至一千米も多ければ、高山植物研究上世界有數の研究園として申分がないのだが、これ許りは人力の如何ともなすことが出來ない。

已に山彙の大半が天然の高山園であり、比類なき研究材料の提供者である以上、園中更に小園を設ける必要は斷然ないが、今後の施設としては、酸ヶ湯附近に完全な研究室の設立と、山上必要なる箇所——例へば櫻沼附近、井戸岳南方の鞍部、高田谷地の如き——に小規模の宿泊所を設けて、日々研究室から往復するの煩と累とを避けしめれば、あとは出來る丈け自然を攪亂しない方針を樹てれば足りる。若し夫れ試驗地として稍々廣大な面積を要するなれば、石倉の一部地圖の硫黃岳と記す一峯は甚だこの目的に適當である。それと共に森林の研究に供せんが爲めに小岳から高田大岳の頂上に達する步道の設置は、或は第二期の事業に讓るとも、當然開設すべきものである。

斯くして八甲田山彙植物研究の根柢的施設が成就した曉に、最も困難を感ずるのは管理者の人選である。高山植物に連關して山地植物の生態的方面に具眼の士は絕無でないにしても、本邦で學問

の研究に常に禍するは事務官の定めた制度で、その爲めにとかく合理的な企圖も合法でないとの爲めに否定される。斯樣な重要なそして多岐に亙つて廣汎從つて困難な事業に當り、研究所を管理して有意義ならしめるには、十分の學力を具へた人物を要するものである。それに制度の缺陷から又は不幸にして情實から、怪し氣な人物を採用するとでもしたら、俗に云ふ佛作つて魂入れざるものとなり終るは必定である。

上記の私案によれば、素人をして一目の下に高山植物の名稱を覺えしむる目的は殆ど滿されない。これはかゝることを目論むのが已に適切でない證據で、百や二百の名稱を斯くして記憶した所が、それは高山植物研究の眞諦とは相去ること遠く、その目的には他の方法を擇ぶ可きものと愚考する。

門外の人はとかくに名稱を知ることが植物學の全般であるかの如く誤解し易い。これは本邦では一木一草の正しい名稱を知ることすら容易でない爲め、それさへ知れば先づ一と安堵して、研究の大半は成就したかに思ふ滑稽を演ずるが、名稱を知るは一擧手一投足の勞にて足りる歐米の事情に思ひ較べ、又植物研究の本義に考へ及べば、名稱研究は唯基礎的事業にして窮極の問題でないことが氷解出來よう。草木の名稱を暗んずることが、非常なる優越權として考へられる本邦では、第二段第三段の研究に進むに避く可からざる難關を突破しなければなるまい。從つて一部の學者はこの難關を回避するか、左なくばそれに捉へられて身動きも出來ない現狀である。從て一箇の完全な植物學者たることは容易でない。然も斯かる人にして初めて山地植物の研究を遂行する事が出來るので、左もないと所謂虻蜂取らずに終ることになる。餘事の樣ではあるが、實際に當つて關係の深い問題であるから一言して置く。

八甲田高山植物園の議が起つてから少くも三四年を經過して居る。當局は着々その事業の進歩に努力されて居るに相違ない。そして吾々好事家がその恩惠に浴する日も遠くはあるまいと思へば、尙更一日も速にその實現を冀つて止まない。それ

と共に青森酸ケ湯間の道路も、更に合理的に改修されんことを希望する。吾々一行の旅した大正十四年には、當時の青森營林局か夫共營林署かの施業方針宜しきを得ないで、通路は別項に舘脇君が記される樣な亂暴な狀態であつた。路の改修といふ事は、徒に幅員の增加のみではない。山路は山路らしく、その風物を相應せしむることを第一義として念頭に措く可きものであらう。

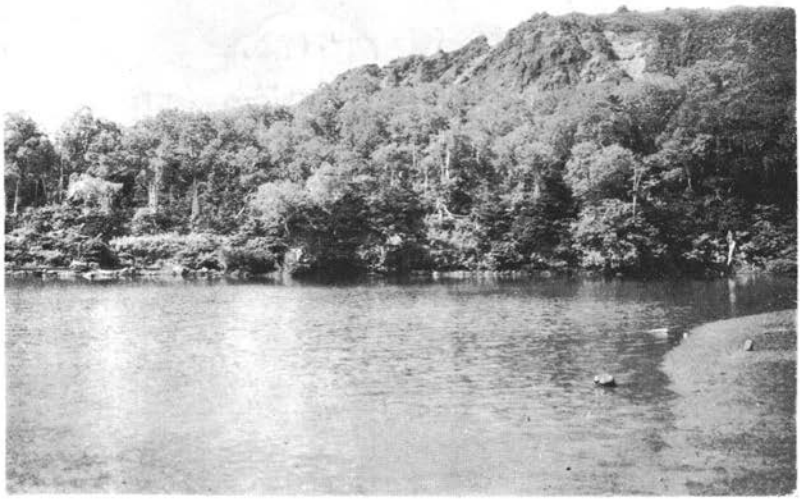
○大鳥岳と只見川の一斑

黑田正夫

秋の日は麗らに越後の野に輝やいてゐた。稻は刈りいれられて、畦の立木から立木にわたした丸太にひつかけられて、黃色い衝立がみわたす田の面に夕陽を受けて光つてゐた。直江津から汽車は、小さい潟や松林をもつた砂丘の間を走つて行く、既にとゝに覆はれた漁舟のかげからは蒼い日本海の沖もちら〳〵に見え始めた。毒海川、鯨波の岸を食む波には吹雪の頃の遠い思出が浮ぶ。紫のおこそ頭巾に大きな眼のみをあらはした若い女と吹雪の中を長い信濃川の橋をわたつたのもいつの頃であつたらうか。彼も今は母となつて北鮮にわびしく若さの逝くのを喞つてゐることであらう。

遙けくも清水の峠を越えて沼田からやつて來たのもその頃であつた。岩菅の時雨になやんだときにも、この野を信濃川について下つたことがある。淀む水に漿をやる罟師に送られて、霙まぢりの雨に、既に刈り取られた田の面のぬれゆくを見つゝ與板の水郷さして訪れたのも、その秋であつた。

秋は思出の深い時、それにこの越後の野、信濃の川は殊に曾遊の昔に想を走らす。黃金の光にみとれて、幻の如くその頃を想つてをるうち、小千谷も過ぎて、魚野川の谷にはいつてゆく。隣にゐた村の靑年小出も近づいたとき、東に大鳥の連山の望めるのを敎へてくれる。大鳥の連山、殊に只見川に沿つて蜒〻として長い脊稜をつらねてゐるのを地圖でみつけたのも同じ頃のことであつた。しかし、その近くに人家もなく、黑又の谷が、そ



御苗代の一部（背後は屏風ヶ岳の一部

御苗代東岸の小濕原を圍む森林（前に低き ほゝヤマヤナギ・ナヽカマドミヤ
マハンノキ　背後は ササウカンバにして中景に三二のオホシラビソを交ふ）

武田久吉氏撮影

の前に深く喰ひこんでゐるのを考へて、關東の吾々に到底近づけぬ所と諦めてをつた。

今度の旅も、之にはたゞ憧れの心を懷くのみで明神峠から遙かにその深い谷の様子でも眺めておいて、まつすぐに銀山平にはいるつもりでゐた。栃尾又指してゆく三人——山口珪次氏、初子——の長く伸びた影が地にうつつたのは淡い夕陽の既に山に落ちやうとする頃であつた。その中に七日位の半月が佐梨川の谷の南の尾根に高くかかるやうになつた。

谷も狹く月も冴える頃、釣竿かついだ一人の山人にあふ。未丈岳に憧れてゐる話をすると、譯なくゆけさうなことをいふ。未丈を越えれば只見川のふちに、銀山の飯場の跡に尙泊まれる小屋がある。夫から川について銀山平までゆけるといふ。そのためには栃尾又に泊るよりも大湯の方が便利だと勸められて、大湯の東榮館に宿をとる。主人に尙確めたところ同じくゆけるといふ。川沿ひのあるため案内をたのんでおく。

用意をたのんでおいて、慕つて來た山の湯につかつてはみたが、想像したやうな、星の影、月の影も湯の面にはうつらず、又湯氣にランプの光淡く霞むかと思つたのも裏切られ、電燈の光冷めたくタイル張りの湯舟を照らしてゐた。

信濃川の野に見た秋の光は山にはとゞかない。山は既に、日本海からの雲氣を集めて、雨となし雪となして、營々として冬の用意をいとなんでをる。昨日の朝も未丈は雪に白く彩られたといふ。

僅かな露頭も見逃がさじと索めまはつた頃、未丈の裏に、銀の鑛脈を得て、孜々として經營にあたつた痕は、朽ち果てた釣橋、ざれ落ちた山腹の道に殘つてをる。しかし、廢坑になつた後でも只見の川の獲物はこの道を尙修繕せしめてゐる。迂遠なる役人の開いた銀山平への道も同じくこの道を利用してゐるが、官僚の設計は清水越、草津峠と同じく今は中尾峠以南全く廢せられてある。この頃殘雪をいたましく抱いて、かすかに、新雪をまとつた駒、中ノ岳が右の方に望まれた。今朝も亦暗く曇つてゐる。一日の陽はこの雲を散らして

くれるだらうといふ果ない望を抱いて四人――案内は銀山平細越の上重二郎作――は黒又の谷へと中尾の峠にかゝる。

靜かな谷にたちこめた二階立の栃尾又の湯は、北陸の溫泉を偲ばせる。八時に之を過ぎる。すぐ裏から湯澤の谷は迫つてくる。黄葉せる木々は、御影の肌も露はな山の脊にからくもまとひついてゐる。長い、平らな、直線的の尾根である。地圖に不思議に見える會津の朝日の尾根もこんなものであらうと想像される。

三十分も谷に沿つて登ると澤は二分する。北側のが湯ノ澤の本谷で道は南側の南澤について登つてゆく。こゝに釣橋の朽ち果てゝ釣つた針金から桁がぶらさがつてゐるのなど、廢坑のいたましさを偲ばせた。その下に懸つてゐる丸太橋をこえてからも、道は數十米高いところをからんでゐる。此の谷には、はいれないといふ瀧もあるといふ。風化した花崗岩の平について(ひら)ゐるため徑はさまで痛んでゐない。相不變黄葉はきれいであつた。長い直線的の尾根もつゞいてゐる。うすら陽がさし始めた。

峠はいくつにも入りこんだ谷の奥にある。道はその谷を一つ一つ同じ勾配で上つてゆく。遂に峠の尾根に立てば、未丈が正面に望まれる。未だ紫に霞んで今日の行手の遼遠なるを思はせる。

道は三叉口に落ちこむ細澤(コツザハ)について下つてゆく。澤は花崗岩を抉つて次第に深まつてゆく。僅か一二間の幅もつたこの小さい澤に、鱒の游いでゐるのにも驚く、二郎作は之を捕へんとさはぎまはつたが、鱒は幸にも大きな岩影にかくれて再び姿をあらはさずに、その壽を全し得た。

澤は益々深く刻まれて、之をたどる徑は殆どその跡を洗はれて止めない。南岸に徒渉して(此の邊で地圖の徑にあふ)少し下つて後澤をはなれて一つの小さな尾根の將に盡きむとするをこせば、黒又の本谷に下る。紅葉に輝やいた兩岸の平は平面的な傾斜を以つて秋の美しい空を限つてゐる。その裾はゑぐられて、露はな岩肌をむき出す。直角に錯交した直線を以つて切り殘された鼠色の岩壁は、阿賀野川の本流の雛形のやうである。この

岩壁の最迫つたところに橋がわたしてある。太い木を三本ならべて、横に小さな丸太の「さん」をうつて足場としてある。餘り氣味のいゝものではない。橋を渡つて左に三叉口の小屋にゆく徑がある。一度水頭(ムツガシラ)の谷に下りて之を北に渉つた向岸にある。水の最後の處といふので早いが午飯にする。十一時。

愈大鳥の上りである。もどつて水頭の澤の南のやせ尾根を登る。地圖にある獨立樹は切られて大きな株を殘してゐるが、その前後には之を偲ばす五葉の松の立木が、黃葉した雜木の若木の尾根にぬきいでてゐる。ゆるい單調な尾根の上りに三時間を費やした。頂上から百米も下つた處に四十峠の尾根(一二六一・六米三角點のある長い尾根)の出だすあたりに大きな岩頭が三つ並んでゐる。三岩(ミツイハ)といふ。徑はこの間をからんでゐる。第一の岩の下から清水が湧いてゐる。この邊から黃葉に燃えたつてゐた四十峠及び大鳥の長い尾根の後に毛猛群山の突兀たる山容が望まれた。しかもその奥には飯豐、大日、烏帽子の連脈が青空の中に眞白に雪をかぶつて浮んでゐた。徑のまゝ肩をこせばゆるい尾根には新たに切り開かれたいゝ道がついてゐた。顧みれば未丈の頂上の東側には軟らかな草原が、夕暮の光に包まれて靜かになびいてゐる。風もあるわけではないが、眞草の一つ一つの線が細かくそろつて、美しい階調を形造つてゐた。その後には赤川の谷が、紫紺にかすんで、燧や會津の駒が紺青に聳えてゐるのが望まれた。

西側の上りの餘りに單調なのに、憧れて來た未丈岳に愛憎をつかさむとしてゐたけれども、この夕暮に光る東側を見て、うれしさが溢れ出した。わが山の旅の最も美しい印象の一として永く殘ることであらう。

この草原の盡きるあたりに小さい池がある。更に下つて、本尾根と分れて東に下れば、地圖に記載された池がある。大鳥の池といふ。暮色はその水の色を限りなく誘惑的にする。之を北側にまはつて、少しそのまゝからんで下つたが、尾根をこえて未丈の頂上から出てゐる大鳥澤の出口に向つて急に下る。下り終つた處に小屋がある。小屋に

は三人の漁師がゐた。午後六時といへば既に暗く、居爐裏の焔のみ赤く輝いてゐた。

三人の一人は宇津野の星丈太郎といふ有名な山男だった。磊落な颯きんな彼は蜂蜜、舞茸などを出して快よく振舞つてくれた。

鑛山の飯場の殘していつた、はらのきれた煎餅蒲團、鼠に食ひ破られた赤毛布もかういふ小屋では有り難い。ゐるりの火も消えて了つたが、朝までぐつすりねこんで了つた。うつらうつらに雨の音をきいては、はね起る元氣もなくぐづ〳〵してゐたが、小降りになつたのをきつかけに出掛けることに決めて小屋を去つたのは午前八時半であつた。

晩秋の雨はいぶし銀の世界をつくり出す。小屋の前に流れてゐる大鳥澤を渉るのさへ冷めたい。落口の平らには大きな雜木の木立があつて赤川はそれをまはらなくては見えない。細雨に煙る赤川は滔々として大河の趣がある。對岸さへ定かには見えない、瀨もなく、瀞もなく、悠〳〵として北流してゐる。大鳥澤落合の上の地圖にある巖壁は殆ど云ふに足りないものであつて、そのしるしのある處は三四十分で通つて了つた。水に沿つて歩ける。ちよつと岩を攀ぢたが、考へる程のこともなく、三角點一〇七六米から地圖のきれ目に出てゐる大深澤の落合まで二時間で着けた。

雨は尙霏〳〵として對岸の黃葉をぼかしてをつた。大深澤をこして赤川は深く右に曲りこんでゐる。前の悠〳〵としてをつた姿もこの邊に來て漸く深く何物かを藏してをるやうに兩岸も迫つて來た。右折する所に突き出た萱戸の尾根の北側を大深澤の小屋場といふ。この邊の尾根は晩春に蕨、ぜんまいを盛に出すので、雪解を待つて、それを採り來る。その爲に道も出來、小屋掛けも出來る。この小屋場もそのためのものである。それで夏をこせば、道も、小屋も、殆どわからなくなつて了ふ。この山にかけては右に出づるもののない丈太郎でさへ、こゝの入口を見付け得ず丈餘の眞草を押しわけて上つた。若木の藪にはいつて徑を漸くたどることができた。徑はこの小さな尾根をこし

早池峯山一八〇〇米附近よりの西微北望（遠景は頂上より中岳へ連る尾根の一部　近景にミヤマアヅマギクの點在するを見る）

内川目村岳の部落

岡田喜一氏撮影

て、その裏に流れてゐる小澤に下り、少し澤をつたつて後左側の尾根の木立のとぎれたあたりに上る。この邊から次第に判然となつてゐる。時に正午、丈太郎は歸るといふのをその下にある小深澤まで下つて、辨當たべて別れた。この澤は赤川に瀧をなして落ちこんでゐるらしく、徑は赤川より百米程上をからんで、その下は絶壁らしく、澤の兩側には高い岩が聳えてゐる。之から八崎の池へは上り氣味にからんで、池の赤川側に下りこんでゐる。池は火山湖に特有な汀まで平地もなく周圍の山から同じ傾斜がつゞいてゐる平凡な感じなものだ。この邊では、鴨の下りるので有名である。

霏〻として秋の雨は稍もれて衣をうつ。闊葉樹の大きな幹はぬれて、黄葉した草は蠟色の池をとりまく。四人は鴨のとびたつのを眺めて足を止める。羽音は曇つた空に消えてしまふ。

この邊から徑はよく蹈めて、その導くまゝに、銀山平へと近付く。三つの小澤をこえて、小さな尾根を曲ると、眼前に須原口の高原はひらける。足下は岩よりなる絶壁ともいふべき急な尾根。そのつくるところには仕入澤の落口の原が横つてゐる。一本の闊葉の大樹がその中央につつたつて、之にからむつたは曇つた空の下にも紅に輝やいてゐる。その向ふに北ノ股川が、滔〻として赤川に流れこんでゐる。その落合の左右には「白板岩」の廣大なる平岩が紅葉をまとつて輝やく。赤川と北ノ股川との間に横はる須原口の平原には尚青緑なる葦のしげみがいぶし銀の光をもつ。時は尚ほ午後三時。時雨はあがつて秋日は既に夕色を示し、藪や林をくぐつて來た旅人はこの岩貌に矚目の快をむさぼる。

仕入澤を渉れば、岸に臨んで小屋があり、開墾地の大家族は一つ棟にわびしく暮してゐた。

桑畑——それも磽确たる土に、苦むす古びた古木が雜草のうちに殘存してゐる——をぬけて北ノ股川に出れば數町の幅をもつて流れてゐた。斜に石をもつて堰かれた鱒の「やな」をつたつて渡らむとする。やなには鱒が、鱗もなく、皮もむけ、赤肌も白くたゞれて、産卵のなやましさを醜くも尊く殘してうちたへてゐるのが、行人の目をさへ

ぎらせた。北ノ股川の水勢は堰をも崩して一枚の凝灰岩よりなる岩底を洗つて迸つてゐた。

須原口には開墾事務所があつて、若い女の子が糸をとつてゐた。しかしそれは既に、現代の工場組織によつてなされてゐた。細越山の麓に赤川が殘していつた薄野は畑となつて、所〻にぽつんとたつてゐる小屋は、開墾の情趣を深くしてゐる。

浪拜の野の中央に、假宿泊所がたつてゐる。婆さんが一人で留守してゐた。疊もなくむしろをしいたその家は、人足でもとまる、渡者相手の荒れたものかと泊めてもらふことを逡巡したが、尙四里もある鷹巣平まで行く元氣もなく、遂に洗足する。午後四時。

日が暮れて家のものが歸つて、むさくるしさが暗い燈によつて覆れるやうになつて次第に山家の趣がわいて來た。そして、案じた食物が反つて非常にうまい野菜によつて裏切られた時、泊つたことを喜んだ。しかも食後湯から出て、村中の人——湯に集つて來る十人ほどと共に分たれた丸うでのかぼちやの數切れの味は忘れられないものであつた。

秋の陽は浪拜の野に漂つてをつた。一日かゝつて鷹巣平までゆけばよい。浪拜の野の北端にある赤川の湯にはいる。この邊は凝灰岩の一つの塊であつて赤川は、この上に少しの土壤を運んでは野をつくり、野をうがつては洗ひ去る。その流れる所はその岩を以つて自ら石だたみの道を作つてゐる。その石だたみの一つのわれ目から透明な湯がにじみ出てゐる。

浪拜の野を通る道からは見ることは出來ない。一つの小屋を叩いてみると小供が二人出て來た。十三四のと十位との男の兄弟である。湯を聞けば案内してやると弟をおぶつて出て來る。道〻、きけば父親と三人東京の王子から五年前に來たといふ。此地苛政無し乎。

湯に入つて仰げば黄葉した闊葉の大樹の梢が秋の晴れた空に聳えてゐる。そよとの風に黄葉は舞ひ上り舞下つて赤川の水の面に落ちて來る。瀨もたてず、淀みもせず、音もなく流れてゐる赤川は、

空をうつして澄める水の上に一つ一つの葉を浮べて逝く。

この邊より山は迫つて黄葉が眼につく。徑ばたの少しの薄の中に古き石塔が五六傾いてゐると思へば、徑の上をも熔滓の小粒が、覆つてゐる。石碑がある。熔滓の山がある。澤が落ちこんで來て少しの薄野がひらける。碑には河村瑞軒が經營した銀山の跡もかいてある。この澤も傾城澤といふ。夜々鑛夫とたはむれた女たちもゐたのかと思ふ。その女たちはあまりにも鑛夫を惱ますといつて瑞軒は山の上に追ひこんだら一夜にして道が開けたといふ。

今は少し離れて一軒の開墾者がゐる。地面についたやうな床には孤が布いてある。にはかにおそつて來た夕立の雨やどりを乞ひつゝ、「とうきび」の御馳走になつた。

大津岐が岐れてからは再び谷はせまる。ハヤ瀧（地圖の灰瀧、鮠は此の瀧で遡れなくなる）は花崗岩の絶壁を下つてをる。その下二三町は「廊下」をなしてをつて、その終つた所に尙一つの瀧がある。途中に岩が突出してゐるため水勢は一層激しく見える。しばらく木立の中をゆけば段丘は又ひらけて、大木の切り株が地上五六尺に殘されて、開墾の苦心を語つてゐる。午場のこの野にも二三軒あるのみだ。再尾根をめぐつて出た野が鷹ノ巢平で、四五軒の家がかたまつてある。（地圖檜枝岐、北魚沼の沼の字の下）

前からきいてゐたそして手紙で紹介しておいた星清四郎なる家に案内を乞へば、ぶしつけなる挨拶にがつかりして紹介された小椋一郎氏にゆく。多くの若い兄弟たちに歡待されて、案内のことなどたのむ。星清二郎をたのむ。やつとのことにゆくといふので安心してゐる。

翌日は朝來の雨に滯在ときめる。川沿ひに三丈から、尾瀨にでやうといふので、一日をのばす。しかしその夕刻清二郎の妻持病をおこして明日は出られぬといふ。しかも秋の短いこゝいらでは今日此頃の一日を千金にもかへがたいといふ。便々とのばすわけにもゆかない。明日は、仕方なく撫

平こしに尾瀬にでることにする。

明れば雪、案内にことはられた者にとつてはうれしいことだ。岩の廊下をへつるにこの雪ではと諦めがいい。自分等にとつての初雪にうれしく樵平へと出かける。只見川を遡る徑がある。一里ほどいつて左岸へうつる。

大杉岳から西に出る二股の澤（北をヒロ澤、南をトクサ澤）について赤川とわかれる。わかれるところに、へぎの小屋がある。

雪は益々降つて來た。澤は地圖に示されるより遙かに平らな所を流れ、どこに澤があるか一寸見分けられない位であつて、ヒロ澤のトクサ澤に落込む口さへさだかには定め難い。その廣い平らな谷には闊葉樹が茂り徑は雪にしなだれた笹に埋もれる。冷い。そして思つたより遠い。落合のあたりに魚釣の小屋があり、澤にわかれるところにがは師の小屋がある。午飯を食ふ、午前十時半。十一時半まで休憩する。

雪とぬかるみとに冷え切つた足も焚火で漸く暖められて、かすかに生氣を通じる。大杉岳の西に出た尾根の鞍部（地圖深澤の深の字の北）にとつついて、少し尾根を登つてから深澤（高石澤と鷹巣平で教へられた）をからんでゆく。

雪と雲との間から燧の尾根が陰顯する。黑木立は雪をつけて、美しさを增す。

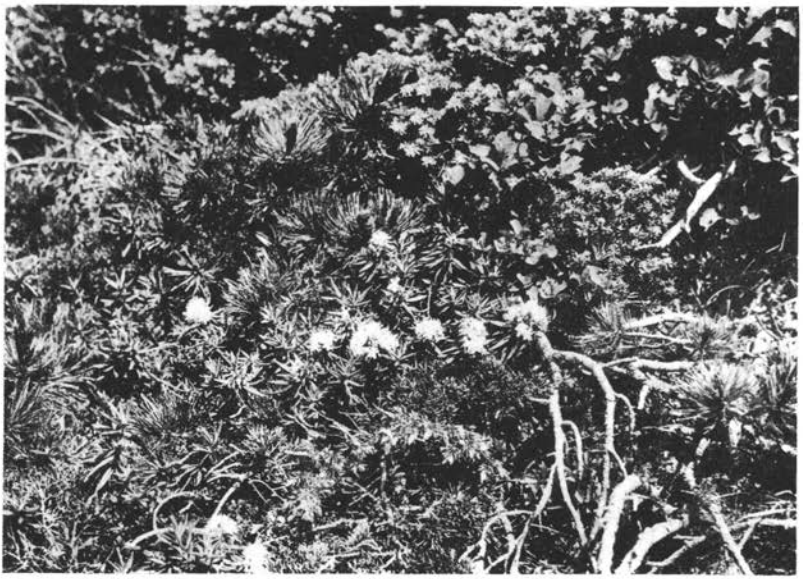
御池は枯草に淡雪がつもつて周圍の黑木にとりまかれて、冬の景色を呈してゐた。

靜かに降る雪は行手をけむらせて、荒涼の感を深くする。午後一時。

池をはなれて少し黑木の間をゆけば、樵の大樹は今を盛りと黃葉してゐる。燃ゆる炎の如くあたりをたちこめる。しかも徑は雪によるぬかるみ。笹は雪を負つて膝、股をひやす。夕色も迫つたのでこの間を默々として急ぐ。初子は後に回顧していふ。

地獄の鬼に炎の中、氷の上を奈落に導かれてゆくやうだつたと。

しかし黃葉の炎は燃えたち、笹の雪はつめたく林は靜寂であつた。



早池峯山南腹一四〇〇米附近の雑木林の一部（イヅツジ・ハヒマツ・シンバルマ・クバ・ツルシモケツ・ミヤマネズ・コメツガ・モケコ等よりなる）

イヅツジ（早池峯山南腹一四〇〇米附近にて）　岡田喜一氏撮影

七入についたのは四時、小屋を叩いて婆さんにとうもろこしをせがむ。三十分ほど休んで出る。秋の陽は沼山峠にかゝる頃とつぷりとくれてゐた。しかし峠を半ば登つて、最後のばんの粉な粉なになつたくづをかきあつめて食べた頃月が出たのであらう。向ひの尾根は白く輝やき出した。

雪を負つた黒木の尾根をよつてゆけば、月光は猛々光をさえ、疲れた體もその美しさに、苦痛も忘れ勝ちであつた。

沼山峠にたてば尾瀬の池にはもやがたちこめ、笹原は雪に覆はれて輝やき、切り殘された黒木はまつ黒な影を投げてゐた。夢の國、夢の國、

何年とその名をきいてゐたが、何となし尾瀬といふ處は、一種の「さざ」さを與へてゐた。しかし今この景色をみて、普通の「尾瀬」と遠く異なるものを與へられたやうにも感じたが、蜒々たる大道をあるいたとき「國立公園」の感に再び豫期を裏書させられた。

八時半長茂を起こして、いろに向ふ。

片品谷の紅葉、之も亦長年木暮氏より傳へきいた「日本一」の憶れであつた。(秋の鬼怒沼及び尾瀬雜談參照。)しかし檜平の炎を見た眼にはどこに紅葉があつたかと思はれる位のものである。「冬」の中にゐたものには寧ろ薄のゆらぐ秋の陽がうれしかつた。

自動車は月に照らし出された山〻を後にして、惜げもなく上州の野に向つて走つた。

○羽後國玉川溪谷の奥山

(大深澤、八幡平、燒山、栂森を訪ふの記)

沼井鐵太郎

大正九年八月二十一日—同二十七日

田澤湖畔春山—田澤村—正神峠—鳩峰神社—玉川部落—大深澤又口小屋—玉川林道—後生掛—熊澤ノ蒸湯温泉—八幡平—又一硫黄鑛山—燒山—鹿湯温泉—栂森—比立内—

參照地圖　五萬分一　雫石、八幡平、森吉山、田澤湖。
　　廿萬分一　秋田。

（一）緒言

大正九年夏、「北上山地の旅」（山岳十七年一號所載）を終へた私達は、盛岡を去つて岩手山と駒ヶ岳を訪ね、其山腹の網張（アミハリ）溫泉、國見溫泉に浴したりして、八月二十日といふに、田澤湖畔春山の宿舍に入つた。

岩手山と駒ヶ岳（駒形山）とは名山の部類に入るべきものであつて、其等の紀行や學術的の調査は決して少くない。けれど其等は、私が其年の東北地方横斷旅行中主要な目的とした陸羽國境山脈（玉川溪谷の奥山）の展望に關しては何等教へる所が無かつた。私は此の奥羽中央分水嶺――山は圓（まと）かに谷は深く森高くして密なる原始の姿――を、先づ初めは外面より觀察し、次で玉川の溪谷から野獸の如くさまよい入らうと豫定したのであつた。然し私達は天候に災ひされて、僅に岩手火山外輪の最高點藥師岳（二〇四一米）から、北西に當る松川の谷と、松川溫泉道附近にある數箇の小湖と、國境を東に外れた上倉山（一三六二米）、中倉山（一三七三米）、下倉山（一一六七米）、丸森（一一五二米）の東面を瞥見したに過ぎなかつた。駒岳では全然頂は曇つて、頂點の男岳（一六三二米）からは最高點の女目岳（一六三七米）、蓬萊沼（男岳女目岳間の平にある小湖）すら朧氣で、只横岳から田澤湖と烏海山方面、又其前日仙岩峠（八九四米）から駒續（カヒ）きの湯ノ森（一四七二米）、笊森（一五四一米）、三角山（一四一九米）等を眺めたばかりであつた。此の駒の連脈は私の場合にはさして重要でも無いが、羽後玉川の上流大深澤湯田（カツコンダ）又川の水源の山々（東側卽陸中側は松川及び葛根田（タヒ）川の水上（みなかみ））――八幡平（一六一四米）から畚岳（モッコ）（一五七八米）、諸檜（モロヒ）岳（一五一四米）、源太（ゲンタ）ケ森（標高不明）、嶮岨森（一四四八米）、大深岳（一五四一米）と連る陸羽國境分水嶺の殆ど一斑をも見る事の出來なかつたのは遺憾である。

次に文獻に就て一言する。先づ手近にある「山岳」第一年第一號から通じて、諸氏の岩手、駒等の紀行から、多少なりとも私の求める事に關した記事を拾つて見ると、志村烏嶺氏の「奥の富士」（二年三號、三年一號）、山本巔坊氏の「羽後の森

吉山」（四年一號）、千葉草水氏の「岩鷲登山記」（四年二號）、山本德三郎氏の「津輕富士岩木山の話」（六年一號）等を擧げ得るが、其記事を讀むと國境連山に相當注意をされながら、或は天候不良の爲に眺望を得られなかつたり、又は遠大な展望を得ても、不幸にして「何れを夫れと定め難い」のであつた。これは精確なる地圖の無かつた當時としては蓋し止むを得ない結果であつたらう。確に今日では平素都塵の中にあつて先づ正確な地形圖により種々推測研究する便宜があるのである。

此地方の五萬分一地形圖は大正七年に完成された。それで日本本州に取殘された市販地形圖は唯要塞地帶のみとなつた。換言すれば八幡平（ハチマンタヒ）附近（以北と言つた方が適當かも知れぬ。）の山地は最後迄取り殘された暗黑地ともいふ可きであつたのだ。そして私が其等を悉く集め得たのは大正九年の春であつた。

偖て次に秋田沿革史を見ると、大澤岳、玉川、八幡平、硫黃山等の記事があり（本號附錄「秋田沿革史に現れたる山岳資料」參照。）、尙ほ卷末に掲げた「秋田縣全圖」に八幡平、モロビ臺、大深、モロビ嶽等の地名を見る。モロビの名を持つた所が大深（大深岳？）の南北に存する事は、今後他方面から詮議する必要がある。

最後に日本山嶽志は、安比嶽、燒山、八幡平、硫黃山、大深嶽を擧げてゐる。八幡平にハチマンダヒラと振假名がしてあるが、平はタヒラではなくてタヒである。或は岱の字を當てた方が適當ではあるまいか。

以上は手近にある書籍に就て記したのであるが、更に多くの文獻を渉獵する必要がある、然し今は一寸其機會を得ないので以上に止めた。要するに八幡平の名は昔から相當に知られてゐたものらしい。

熊澤ノ蒸湯（フケユ）で聞いた話では、昔八幡太郎源義家が安倍氏征討の折に通過したので八幡平といふとの事であつた。隨分怪しい話であるが、中には之を本統にする者もある。八幡平には其折の金むくの記念碑が立つてゐるといふ浮說を信じて、長年の間山中を彷徨した老奇人の話などある。

又、大深岳といふのは現今五萬分一地形圖八幡平圖幅に表された山を示すのか、或は大深澤から來た水源山地の總稱であるかは不明であるが、私の考では、地形圖の記名は其位置と標高、山體の大さから考へて正當であると思ふ。けれど大深の名は山名としてよりは谷の名と見る時に始めて其眞性を合點する事が出來る。

其他、硫黄山(燒山?)、澁黑川、玉川溪谷の下流、田澤湖、駒ヶ岳連山等は以上の二山に比すると、書物に現れた記事も少くないし、又多少烟霞の癖ある人なら位置位心得てゐる筈である。其故私は以上の他總論めいたものを一切省き、これから直ちに旅の印象記に移らうと思ふ。

(二)　玉川溪谷に入る

國見溫泉から駒ヶ岳を越えた時に岩永良三君は足を痛めたので、私は一人で行かなければならなかつた。そして私の銀側時計はこはれてゐる。岩永君のもとまつてゐる。湖心亭の主人のも遠い町へ修繕にやつてあるといふ。私は止むを得ず太古の人の感覺にかへつて旅立つのである。私は宿の主人が深切にも書いて呉れた、玉川分敎場の先生に宛てた紹介狀を懷にして歩んだ。其は八月二十一日の朝の事であつた。

雪の白濱から十町ばかり進んで、私は辰子潟のなごやかな光の緣を離れた。一條の草路が三百四十五米の峠を登つてゆく。大きな孤松が其頂にあつた。私は其處から漣の立つ圓い湖を眺め、汗をぬぐつた。北の方へ下りかけると、放射谷の深く削られた荷葉(カエウ)ヶ岳(一二五四米)や、其右に國境の乳(ミヨ)頭山(ツムリ)(一四七八米)、笊森山(一五四一米)が見えた。(ミヨツムリは此土地の訛りである。奥羽分水嶺の古い火山には山頂の廣いホマーテが多いといふ。そして其草色の大波の中に、我々は屢々此種の突起を見るのである。其は或時はコニーデであり、又或時はトロイデであり、又は單なる爆烈の跡に過ぎない事もあらう。要するに富士や飛驒山脈などの均齊な又は韻律的な地形を見た眼には、此等の山の脈絡が不調和にそしてヌーボーに感じられるであらう。)

見附田から玉川の岸に出た處は珍奇な渡場であ

ナンブイヌナヅナ・ミヤマヲダマキ・ミヤマシホガマ・
ミヤマアヅマギク等の群落の一部（早池峯山にて）

ナンブトラノヲ（早池峯山にて）

岡田喜一氏撮影

つた。水遊びをしてゐた裸體の子供達はわい〳〵言つて藤蔓の綱を傳ひ、私の乘つた小舟を對岸に渡して呉れた。玉川の流は未だ平凡であつたが、何處か只ならず碧い其色は、昔農夫の怖れであり、今尙毒瓦斯の谷として有名な水上の澁黑を思はすに充分であつた。私は賃金を拂ふと、直ちに田澤の本村に入つて行つた。其處が玉川溪谷の奥に入る關門である。私はある店で大深澤から八幡平に入る準備の品を多少調へた。

田澤湖畔の春山から田澤村最奥の部落、玉川迄は半日の行程である。其處で此日は宿屋の主人のすゝめに從つて鳩峯神社に廻る事にした。私は仕入れた相當の重荷を背負ひ、汗だく〳〵で正神峠を登つて行つた。小流を渡つて頂に近付くと漸く草地が足許から消えた。私は其内の何處かで杉の大木にもたれ乍ら、田澤湖の水面や、遠く殘雪の光る鳥海山、其左に連る突兀たる山脈、及び曇る駒形山の南方、朝日岳（一三七五米）や和賀岳（一四四〇米）などの峻峭な國境山脈を眺めた。峠の頂には祠があつたが、何の神だか分らなかつた。峠の新道は少し下から西に向つてゐる。私の進むのは日蔭の舊道で、其を下つた所に小澤がある。晝食をすまして又先へ進むと、道は丁度荷葉ヶ岳山腹の餘程下の所をうね〳〵とくどくも廻つて行くのであつた。軈て西向になると暫くして左へ下る道がある。其を過ぎて牧場めいた草地にかゝると、古い朱の鳥居が立てゐる。其先が林の中に凉しく鳴る尻高澤の流であつた。

私は流の緣の岩の間にリュックサックを隱し、杖一本持つた姿で神社の方へ登つて行つた。其麓から左の山へ、玉川支流の小和瀨川落合の少し下に越える淋しげな峠道が分れてゐた。鳩峯神社の界隈は山腹の平で、鬱蒼として大樹が茂つてゐる。其黑い蔭に池ともつかず、澤ともつかぬ緩い水が、人の香を嫌つて忍びやかに流れてゐる。あちこちの苔むした枝には山鳩が飛び交つて、僅かに空氣をそよがす。私は餘りの神々しさに氣味惡くなつて、一條の細徑が導くまゝ上の方へ急いで行つた。鳩のみならず諸々の鳥も啼聲は少く羽搏きのみ峯まで續いた。地形圖に現れた如く道の終

局は樫森（九〇三米）から西にする〳〵と伸びた尾根の先端にある。其處が田澤湖の名所寫眞にもある黑尊佛であつた。其は高さ七間許の岩の柱が十數個も山際に列んでゐるもので、岩の下には所所に奉納の鐵の小鳥居や旗などが置いてある。わざ〳〵見に來る樣な奇景でもないが、その邊の闊葉樹の林は如何にも神社の背景らしかつた。すつくと立つた米栂などもあつて、枝間から鳥海山の附近が望まれるのも惡くなかつた。

森の中の靜寂に耐えられないのと、例の默した流から湧く蚊の群がうるさいのとで、私は幾程もなく駈け下つて行つた。先刻見付けておいた下り道を辿つて、月のうす白い頃には尻高の小部落に着いた。とある馬臭い農家で水をもらつて、それから教へられた通り松の小山を目懸けて山路を分け上つた。二三町上の林の中に屋根圍ひした寢佛がある。其は長さ約三間、高さ二尺位の僧形をした巨大な火山岩質の石である。衣を着て昏々と眠つた形だ。その何等手を加へない、自然石其儘の所がうれしかつた。

再び尻高に來て、玉川へ向はうとした時は日暮に近かつた。小澤部落を通り、玉川橋の橋上に佇んで、綠藍をなす深い水の塊が切り岸を滑つて行くのを眺めて、旅はほんとに此れからだと思つた。崖の岨道は直きに地形圖に草地となつて居る段丘を進むやうになる。兩岸の森は生々した綠の色を以て、島の樣になつた水流の蛇路を靜かに包んでしまつてゐる。薄闇が濃くなつて向ふに黑森（七六八米）や男神山（八五九米）、女神山（八五二米）の尖つた森を見る頃、小廣い原で尻高峠道が左から合した。玉川部落は其から十町許であつたが、其晩泊めてもらふ豫定の中島民五郎氏の家を探す迄に、一二軒の農家に立寄らなければならない程暗くなつてゐた。

兎に角私はさうして中島氏に快く請じられた。秋田大林區署の技師某氏も公用で來られたとあつて、中島家が心盡しの酒肴に氣持好く山の話が語られた。八幡平の案内は又口小屋の豐之助を雇ふ事にして、其處迄私の荷は同人の妻女が丁度明日食糧を持つて行くといふので、一緒に賴む事にし

た。

（三）大深澤へ

八月二十二日。朝早く豐之助の妻君は背梯子を背にして來る。娘だといふ十歳位の女の兒もついて來る。太平洋岸から長い旅をして來た私の荷は元々幾らも無かつたが、田澤と此處で仕入れて大分重たくなつてゐた。其等を妻君は大抵持つて呉れる。九時頃出發。水上（みなかみ）に二天ノ瀧、中ノ瀧などの名瀧を有する湯淵澤を渡つて、黑森、男神山、女神山の裾を通つて行く。此等の山は八幡平にも劣らぬ程山頂の廣い樹森の緣（ふち）に當り、本體に似げなき急峻な山容を示してゐる。對岸には小和瀨川の大きな流が注いでゐる。豫定では男神山の麓から岩ノ目に渡つて、其支流を過り、玉川左岸の道を進んで鳩ノ溫泉を一瞥しやうとしたが、大深澤に入るには今は右岸を上り、澁黑川に架した橋を渡つて行くといふ。又、鳩ノ湯はさびれて昨今來る人も少いといふ。そんなわけで、私は飽く迄ブンナ森の廣い裾を踏んで行つた。

嘉平治森の眞東を歩む頃から谷の林は一層深みを增して來た。ブナの大木が行手を遮つて、其間を忍びやかに戸瀨澤が流れてゐる。其あたりの森は何處か一昔前の上高地の溪谷を思はせる。只、私達が磧に下り立つた時には、何處も鈍い夢の色にぼかされた平和な物の形が、曇り日の匂と共に感覺に流れこむ。玉川の水は飲めないといふので、傍の藪かげから注ぐ澤の水を使つて辨當を食べたりする。そして一服しながら此の尨大な大深澤一帶の國有林に迷宮の底知れぬ紛糾さを求める快味を想ふ。

其故此度は決して輝かしい近代的登山の場面ではなかつた。私は何等特別な野營用具、登山用具を持たない。沈默勝ちな山人の女房と、或は懶いとも言へやう、單調な森の道を北へ〳〵と進んだ。私の記憶を拾ふと、未だ新しい澁黑川の橋に到る迄は、新湯の小屋も無人の狀態に荒れてゐた事のみが殘つてゐる。

澁黑川と分れると、もう本谷は玉川と呼ぶ事は出來ない。土地の者によると其以上は總て大深澤であつて、同時に水の淸い、魚の多い峽（はざま）となるの

である。大深澤右岸の新道は水面上二三十米の上を走つてゐる。下草が目立つてふえて來る。そして見下す谷川はなほ廣い磧を持つてゐるが、其瀨瀨らぎは稍々荒々しい。

上五十曲澤を通過して磧に下り、暫く川について行く。木苺の實を貪つてゐる間に母娘にはぐれてしまひ、熊笹の埋めた感じのいゝ林、なるい坂を越えて漸く追ひ付く。赤澤を過ぎると河岸は切り立ち始めるわけであるが、小路は依然として森から森へ右岸を上り下りしてゆく。實に悠久な單調だ。私は黑石澤附近の山腹の崖、石假戸澤附近の夥しい蚊、及び其先の磧で畚岳を眺めた事を變つた物として思出すに過ぎない。澤の奥には恐しい毒水の出る事も聞いたが、どちらの澤だか忘れてしまつた。然し兎に角私達は右岸を東へ〳〵と進んで、倦怠を覺える頃、やゝ著しい上りにかゝつた。其處は湯田又川の落合右岸の山脚で海拔凡六百六十米の所、近頃出來た曳分(後生掛)へ行く林道が分岐してゐる。其上に立つと、始めて八幡平の一部と畚岳の全容とが、蟠まる黑い森の上にあり〳〵と現れた。廣い八幡平は只大きな高臺であるとより見えない。何の奇はないが、奇怪な相貌を持つて頭を振り立てた畚岳と對照する時は、喜悲劇式の淋しさを覺える。(畚岳は一畚盛つたやうな形だといふ事から來た名だと聞いた。)然し凝視する内にさうした不眞面目な印象は失せて、茲に人の入るを許さない大自然の一つの黑い手を思ふ。其内にもぐりこむといふ事を考へると、たえられない程の心苦しさと誘惑とを感ずる。

山の眺めで單調を破られた私は暫くしてから湯田又川に下りた。丸木橋が掛けてある。水は目ざましく大深澤と落合つて峽流たるの名に背かない。又口小屋は落合の直ぐそばで、大深澤むきに建てられてある。五六人泊るには充分で、豐之助が何ヶ月も棲んでゐる丈、先づ立派な構への方だ。到着したのは午後三時半頃だらう。

私はこの夜と次の全一日及び三日目の午前を此小屋で暮した。其は豐之助をつれて湯田又川の傳左衞門澤を溯り、八幡平に登らうと豫定したものだつたが、一兩日過さないと此の困難な道程は不

(てに山峯池早)ブノシリシリ

(てに山峯池早)ナヅナヌイブンナ

影撮氏一喜田岡

安だからであつた。然し來た日の夕方一寸降つた丈で次の一日は南風だつたが降らず、廿四日に至つて又降つたが、此分では當分怪しいといふ豐之助の證言と共に、豫定の多い旅先も急がれて、澤深く入る事は中止し、熊澤ノ蒸湯から端的に八幡平を訪れやうといふ事になつた。で、私は玆に大深澤の見聞に關して語る事は次の二三に過ぎない。

先づ第一、此の又口小屋といふのは田中豐之助の所有であるが、秋田大林區署では此男を山番に賴んであるので、小林區署員などは時々見廻つては泊る事がある。小屋が比較的完全なのは其所爲で、魚でも釣りながら遊んでゐるには持つて來いの所だ。魚と云へば勿論岩魚で、最もよく獲れるのは大深澤上流、及び湯田又川の一支流に慥かイヲノ澤（魚ノ澤）といつたあたりであるといふ。澤の名は此他にも數多く聞いたが、發音がよく分らないので、從つて其位置も不明であつた。湯田又川の右岸高く蟹沼といふ池があるが、其處では鮒が獲れるといふ。

湯田又川を溯つて八幡平へ出る事は最後の藪が餘程猛烈らしく、流石の豐之助も積雪時に行くのみで、私の申出には尻込し勝ちであつた。一方、本流の大深澤を溯ると一里許で二條に分れ、左の本流について行くと大瀧といふ二段連續の瀧になる。其先は兩岸が逼迫して全くの峽流に化してしまふ。この峽の事を慥かハコといつたやうだ。然し水條について水源の大深岳西南のあたりに取付く事は可能らしい。但、其谷の特徴や惡場の性質については、此谷の他は知らぬ山人の口を通して知る事は出來ない。私が試みに二十三日の午後、十町許單身溯行した處では、別に取り立てゝいふ程の溪谷ではないが、深々と森にくるまれた、山奥の汚れぬ自然に接する事が出來る。餘裕があれば之を溯つて大深岳、上倉山等を訪ね、陸中國松川溫泉に下りて、再び松川の支流北ノ又川の水源にある藤七溫泉から、畚岳や八幡平に登つて見たかつた。或は大深澤の乘越（一三八四米）から大白森（一二六九米）の高原性沮洳地を經て、葛根田川の方へ下りて見たい。然し孰れにもせよ、第一の困難は密林密叢と、其の迷ひ易い地形にある。

因に大深岳の山腹に天狗岩と地形圖に記號あるものは、豐之助も存在を認めてゐたやうである。彼の口を通して知り得た國境山脈の概況は「山岳」第十六年第二號四十七頁に記したが、今少し補足して置く。彼によると地形圖の諸檜岳は諸檜タヒと稱し、之と嶮岨森との間に源太ケ森といふ一山がある事になる。後者はヤブの最もひどい所であるといふ。又モロビタヒにはモロビではなくてオツコ（イチヰ）が多く茂つて居るさうだ。

（四）後生掛を經て熊澤ノ蒸湯へ

八月廿四日。午後から私は豐之助と別れ、雨を衝いて熊澤ノ蒸湯へ向つた。湯田又川落合の右岸をなす山脚の上から北行する林道を登る。此は大體に於て此高みを凡八百二十米の圈まで上り、其れから少し東北方に向ひ、蟹沼の北東を過ぎて千米のあたりからは殆ど上りなしの平らとなつて後生掛の湯沼小火口に達し、其西側を廻つて曳分で地形圖の里道に落合ふものである。之を玉川林道と稱し、大部分は木馬道になつてゐる。

上り始めは荷の重みが稍こたえる傾斜であつたが、やがて蟹沼の澱んだ、靜かな水を覗く頃は可成り樂になつてゐた。あたりは闊葉樹林に少しの針葉樹を加へて未だ殆ど手を付けてゐない。感じは惡くなかつた。そして俄然道が水平の擴がりを持つやうになると度々小さい澤を越す、其の何處かで好い清水があつた事を思ひ出す。雨霧に卷かれ乍らかうした林道を辿つてゐると、凡二時間許の後に一澤を越えた。もう風物は一變して、林は縮まり、草生の裸地が散見する、一寸霽れると行手には沮洳地と小山が寂しげなたゝずまひで私を迎える。道は蟲て後生掛の湯沼小火口に近づく。其附近には偃松が庭の梅の木のやうに立つて、その下に數種の高山植物と共にウマゴヤシの小さい葉が見付かつた。不思議な現象だ。然も土地が千米許で、附近に牛糞を見ることによつて解決がついた。それでも私は偃松生ふる山上の牧場といふ事を考へて少し氣が變になる。世に隱れた小火口の緣で、特に此日は雨霧が閉ぢこめてゐる。

湯沼は名の示す通り、硫黄と泥に濁つた湯を湧き立たしてゐた。地形圖には溫泉の記號があるが、

小屋の設備は何もない。道を轉じて國境に移り、北側の谷を見ると、其の燒けた土と岩の間から盛に水蒸氣が上つてゐる。此等は均しく燒山火山群の餘勢である事は說明する迄もない。曳分は三つの路の分岐點で、私の來た方には「是ヨリ玉川林道ヲ經テ生保內村ニ至ル」、是から向ふ方には「陸羽硫黃山ニ至ル」と書いてある。

私は東への道を進んだ。道の上に二匹の飴色の牛が寢てゐたのでびっくりしたが、葉のついた笹を切りとつて、牛の尻をたゝき乍ら山道を進むと面白い。曲り角に出ると、牛の先生尻眼で一寸睨(ちよいとにら)むが、巨體の隱れ場所がないので、又とつ〳〵と先へ駈け出して行つたりする。リュックサックを脊負つた俄かカウボーイが出來て我乍ら滑稽(こつけい)であつた。雨ながら八幡平の山腹以下の眞黑な森を見ては訪ね人を探しあてたやうな心安さを抱く。終に牛に案內されて陸羽硫黃鑛山の趾に來る。今は不景氣で止めたものか、がらんとした大きな小屋や附屬の機械などが雨にさらされてゐる。そこからはもう牛の案內はゐなくなる。登り切れば稍丸く廣がつた一つの谷が見える。熊澤ノ蒸湯溫泉の建物もあり〳〵と分る。私はぬかるみに滑り乍ら忽ちにして其處に下りて行つた。此處も谷とはいへ、樹木の殆ど無い、高山植物の花吹く變な所であつた。家は事務所と隣の硫黃精錬所のみが稍家らしく、他は自炊者の爲の掘立小屋と、浴場のバラックである。恐らく私の樣な姿をした訪問者は稀有の事だらう。浴客は一樣に怪しい眼を向ける。其一人に敎へられて事務所に通り、宿泊を乞ふ。丁度午後四時頃であつた。

此溫泉は鹿角郡谷內(カヅノグンタニナイ)の阿部藤助といふ人が經營してゐるもので、主に郡內の人々が自炊しつゝ湯治に來る所である。勿論極めて邊鄙な所なので、所謂旅舍の設備は全然無く、又其方法を取らない。で、私は事情を話して、事務所の人達と同待遇にしてもらふ事にする。かういふ客は私の他にも、大館の小學校敎員だといふ若い婦人が一人ゐる。其人はレウマチの療養に來て長くゐるといふので全くの所私一人丈が溫泉きつての珍客であつた。

此溫泉は色々な點で變つた所なので、次に述べ

やうと思ふが、先づかうした山奥の遊湯的都人士には必要の無いやうな所迄相當な記事を持つて掲げてある「全國溫泉案内」（全國名所案内社編纂、大正九年七月十五日發行）編者の手腕に敬服せざるを得ないのである。

餘談は扨てをき、私は事務所の人達と一緒にもてなしの暖い夕食をすまし、湯に入つたりした。浴槽は二ヶ所にあつて、下段のものは稍白く、上段のものは黒色を帶びてゐる。其黒い湯には眞黒な熊の毛の様な沈澱物が附着してゐる。然し其が湯の名前に導いたのではない。何でも昔獵師が病んだ熊のひたつてゐるのを見て溫泉を發見したのだといふ。そしてフケ湯といふ譯は、珍しい事には此湯の附近は谷一帶に水蒸氣が少し宛洩れて、地面を暖める。即ちふけるからなんださうだ。實際家の中は濕氣（しつけ）て物をぢかに置く事は出來ない。大抵吊して置くのである。疊なんか勿論駄目で、浴客は土間を小高く盛り、其上に蓆を敷いて横になる。一種の上耳古風呂だ。私は借してもらつた毛布を被つて其蓆の上に寢たが、慣れぬ暖かさの爲に熟睡が出來なかつた。

熊澤ノ蒸湯でまだ面白いのは、男性生殖器崇拜の遺習が存してゐる事だつた。此風習は陸羽國境の隨所に存在して居るらしく、駒形山の國見溫泉でも私は見た事がある。

此他溫泉で快く感じたのは事務所の人達の好遇と、浴客並に精鍊所人夫達の純朴で穩やかな事であつた。其意味で、文化に最も遠い此溫泉を離れる時は、長い旅の上にある私は、何がなし哀愁を感じたのであつた。

（五）八幡平

八月廿五日。志す八幡平を訪ねる事にしたが、空は霽れたり曇つたりして容易に定まらない。で、今日一日又無駄に費すかと思つてゐると、正午近く好調子になつて來たので、早速隣の林鑛山元山事務所の人夫二人を案内として、正午宿を出發した。

國境近くまで昨日下りた道を上り、其れから左へ硫黄採掘所（地形圖に記號がある）の方へ曲つて行く。此は今は廢鑛に歸して跡方も無い。雨に

早池峯山頂の東方賽ノ河原附近（約一八八〇米）にて
ハヒマツ・オホシラビソ・ウコンウツギ等の混生狀態

早池峯山東方賽ノ河原附近より東北望（約一八八〇米）
岡田喜一氏撮影

濡れた草を踏み分け、灌木の間をくゞつてしばらくすると、一二町でもう傾斜は緩やかとなる。樹木はイチヰ（オッコといふ）、アヲモリトヾマツ等の類が多い。道跡は分明で、初めは國境の切開かと思つたが、實は全然國境と一致するわけでもない。兎に角黑木立の間を歩いて行くに、息切れもしない。凡千四百米位から木立が低く、下草の笹も短くなる。終に偃松が現れて、北から東の方へかけ、廣さも廣し方六里と稱する黑い高原の一部が眼を惹きつけた。赤川の谷は一五三一米の八幡平北方の額と私どもの歩みつゝある平の間に奥深く隱れてゐる。

何時のまにか私達は感じよく打開けた休場に來た。其處の四五百坪は多くは沮洳地で、モウセンゴケ、ミツガシハ、イハイテフ、トンボサウの一種其他名を知らぬ桃色の花咲く草がはびこつてゐる。小さな池などもある。

私どもの行手は再び低い森又森、熊笹の平又平が限りなく續く。千六百米の圏に入る頃、所々道とは離れて國境の標木が朽ちたまゝ立つてゐる。一六一四米の三角點の櫓は一町餘も左手にして行き過ぎた。そのあたり一面の白檜、半ば立枯れの白い肌を見せて、靑空と觸れてゐる。實に緩やかな廣い山頂だ。龜の背でも之よりは急斜してゐる位だ。其の、登るとはなしに高みの一點に達しられた、不可思議な一種間の拔けたやうな氣分を、私は再び其他の山で味ふ事は出來なかつた。恐らく上越境のあたりから北に進んで數多くの平滑鉢頭の山岳を見て來た者は、此が終點であり、最たるものである事を認めるであらう。（當地方から以北に屢々岱（タイ）と書く之よりも低い特殊の地形が發達してゐるが、上床理學士によると、此は北カラフトの地形に相似であるといふ〔大正十三年春、東京帝大スキー山岳部講演會に於て〕。然し八幡平や栂森の場合は之と趣を異にする。）

私達の今迄來た道は、溫泉客の遊山や雨乞に山上の湖水長沼に行く便宜の爲に、何時からとは無く作られたものださうである。この長沼を探し當てる事はうつかりしてゐると失敗するかも知れない。（事實私は人夫を信用し過ぎて失敗したのだつ

た）一寸分り難い所で、一二の藪を越えて沼の南東に出られたのであつた。沼の水面は幾らか低い。濃い青色の水はたんまりと湛えられてゐる。緣に露出した安山岩質の赤黑い岩及び其岩屑の汀に沈み重つた色と對して、一人ならば、慥かに無氣味だ。湖水の形並に大いさは地形圖の描き方と違ふ樣に思つたが、果して私の見た沼はガマ沼で、長沼は之と離れて立派に存在する事が後に分かつた。兎に角其時はヤブがいやさに探査もせず凡一時間ばかり焚火しながら沼の岸で遊んで、來た道を戻つた。空は幸ひに定まつたやうである。

午後四時溫泉に歸りつく。若い人夫二人は僅かばかりのお鳥目にすつかり氣を好くしてはしゃぐ。夕食後事務所の内儀はタンボ餅を御馳走して吳れる。此は餘つた飯を摺古木で搗きつぶし、木の太枝に竹輪のやうに塗りつけて、爐の火で燒き、甘味噌を塗つて食ふのだ。一體、秋田縣の人は良米が豐富で比較的生活に餘裕のあるせいだか、實によく食ふ事を考へる。このやうな山奥でも、岩手縣の閉伊川谷あたりと比べると、餘程の相違で、從つて人間も裏日本であり乍ら南部人よりは明るく呑氣である。

蒸湯の附近で散歩の場所は以上の他にまだ二三ある。其内、蒸湯の谷地と菰ノ森東側の長沼の事を茲に附記して置かう。此等は次の日（二十六日）の午前中、一時間ばかりで往復して見たものである。蒸湯の谷地といふのは溫泉と菰ノ森との中間にある濕地で、地形圖にも表されてゐる。相當に廣くて一寸風變りな所だ。細徑の分岐するまゝに木立の中に入つて、歩きよささうな所を拾ひ〳〵低い鞍部を越すと、直きに長沼の南端に出られる。沼の附近はやはり沮洳地だ。小さい乍ら森に包まれて幽邃な小湖だつた。傍の立札には此沼が縣の淡水魚養殖池であるやうな事が書いてあつた。然しこんな所で事業を起して何になるだらうと思つたりした。

（二八）燒山を經て鹿湯溫泉へ

八月二十六日。遊んでゐる内に十二時半になつてしまつた。極めて低廉な謝禮の金子を事務所に置いて、私は今しがた後生掛から大沼の方へ散歩

に出かけた十數人の浴客の後を追つた。峠の上からは花輪の平野が晴れ渡つて見えた。曳分に來て見ると、散歩の人達は卒直な驚きの眼を擧げて、北側の噴氣孔を凝視してゐた。誰か一人私に蒸氣の立上るに當つて鳴り響くわけを尋ねた者もあつた。私は一緒になつて其の濛々たる烟を左にして荒澤の右岸の道を下つて行く。燒山の東なる栂森は總體冷たい針葉樹に包まれて、古城の如く立つてゐる。

澄川硫黄精錬所趾は二つの支流に狹まれた平らな地の上に殘つてゐる。其處から、事の序に、大沼まで寄道して行く。林の道がしばし續くと、軈て左手に一開きの濕原が見えて、明るい大沼の小湖が遊子の心を誘ふ。三人の連れと共に林の道から下りて、まだ衰へぬ陽射しの下に、短い草を踏んで行く。蟲の聲がしきりにする。そしてこの沼をして有名ならしめたのは、最近まで生きながらへてゐた一人の老人が沼の畔に小屋を作つて漁りつつ、一生の間、暇に任せて八幡平をさまよひ歩き、義家東征の記念と傳ふる金むくの碑を求めた、若し見付かつたら天皇陛下に獻上するのだと其狂翁は口癖にしてゐたが、終に目的を果さずして死んだ——といふ愚人の悲劇を有するによる事を思出して、思は終に自然の嚴肅な姿に至る。

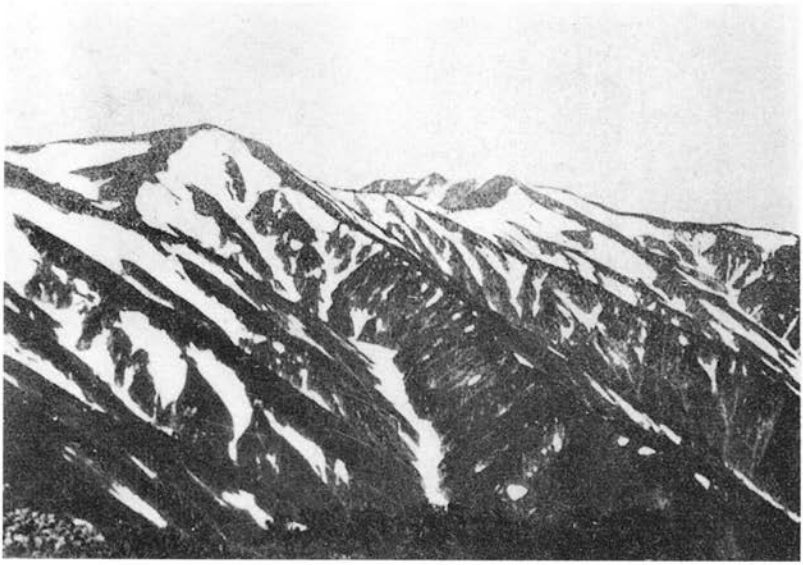
再び精錬所跡に戻つて、之からは又淋しい、然し拘束されない一人旅を歩むのだ。分岐點の立札には「鹿湯迄二里」と記してある。又「右ハ熊澤鑛山道」とあるからには、嘗ては多くの人が硫黄掘りに山に押し寄せた事だらう。今は廢頽の小屋場をあり〳〵と見せつけられて、山行の純眞さを幾分破られはしたが、それでも變つた山地の無人の旅は、所謂「日本アルプスの銀座通り」で押しあひへしあふより幾ら增しだか分らない。

疎林の間を二十分も上ると、一つの谷地が開けて、栂森の山腹も流石乍ら、後へに全き八幡平の寢姿、なほ延び上つた畚岳を眺めて、私は泌々と旅の面白さを味はつた。昨日登つた其山は巨鯨の背を水平線上に見る樣に、今は密林もなつかしき飾である。けれど何といふ大まかな摑み所のない高臺なのであらう。

谷地を離れて栂森の山腹にかゝつたが、其はらくな上りであつた。何といふ事もなく、私は又一硫黄鑛山に近付いて行つた。この鑛山事務所は一一四〇米の地點にあつて、今も尙、少し宛ではあるが、燒山火山の硫黄を採集してゐる。新しい小屋が一軒崖の緣に建てられて、二三人の人夫が中にゐた。燒山方面が見えて中々景色は惡くないので、水をもらひ旣一休する。

小屋を離れると左手に可成り構への大きい山ノ神のお宮がある。明治三十四年建といふ。兩側には硫黄鑛の柱が立ててある。それからすぐに、硫黄にまぶされた恐しげな小谷を渡り、採取裝置の傍を鼻つまみ乍ら西の小谷について行く。此谷も同じ有樣だ。然し斜面が急を加へて、道が電光形に登つて行く頃になると、小屋のあたりからぽつ〳〵現れた高山植物の群落が兀岩の間に增して來て、俄に高山めいて來る。殊にエゾツヽジの群落は諸國山岳遍歷の間に私の見た最も立派なものである。岩の多い道はやがてがり〳〵の鬼ヶ城を前に、栂森の崖を左にして、火口に近付く。其火口は略ゝ丸みをもつて硫黄の泥湯を沸き立たしてゐるが、現今は餘程淺くなつて、半ば乾いた所などある。其上に燒山の火口壁は綠の草木を被つて衰へた火口を見護つてゐる。

私は白茶けた峠を登りつめてリュックサックを下した。北北西から北西の方に當つて久し振りで遠い山——岩木山、森吉山、並に澁黑川谷を隔てた尨大な栂森を眺めた。此等の眺めはいやが上にも私の登行慾を誘つた。まだ多少時間の餘裕があるのを幸ひ、國境の切開を求めて狹い岩尾根を三角點の方に登つて行く。初めは頗る急であつたが、ぢきに最高點近くの左側の草場を步むやうになる。便宜の點から藪を搔き分けて終に三角點標石（一三六六米）を踏む。展望はすばらしい。先づ奥羽山岳の王者たる鳥海山の頂は繪の如く美しい。其右手に淡金茶色の空を背景に、ヂッグザッグのいかめしい太平山（タイヘイザン）の連嶺が浮び上つてゐる。鈍頭にして右肩を波うち乍ら左右に裾をひいた森吉山、頭部の特徵から遠くも其れと知らるゝ岩木山、其右に雲にのつた八甲田山の複雜な山塊、其



小朝日岳頂上から連峯の一部中岳（左）及び西朝日岳（右）を望む

大鳥池（朝日連峯の秘水）　　安齋徹氏撮影

等は北へと廻つて眺められる。東面は間近い栂森はいはずもがな、八幡平の高原は谷地で見たより更に長く平らに立つてゐる。南東の方岩手山は惜しや雲と樹の爲に見えなかつたが、其の遙か南方なる陸羽境の荷葉ヶ岳（此は實は羽後國に全部ある山だ）、駒ヶ岳、湯ノ森などの夫々特徴ある姿は私の眼に映つた。栂森の麓に毒瓦斯の谷として名高い澁黑川の水のひらめきさへも認められた。かうした眺望によつて私の心は矢張り生々した峯頭の禮讃に滿ちてゐた。

思はずも時を過したので氣が付いてから急いで下る。峠から下は暫くの間、見るも凄慘な兀岩や崩れの間を、誇張して言へば、轉るやうに下つて行く。遙か下に澁黑界隈の噴氣孔の活躍が物凄く見えたりする。全く頼りなくなるやうな氣のする場所である。やがて木の藪に道は入つて私は只管急ぐ。とくに月はほの白く出て、やがて其光を强く放つ。日は暮れたのだ。其時私は都合よく鹿湯溫泉に出られたのであつた。

みすぼらしい溫泉宿で、家の中はひっそりしてゐる。案内を乞ふと何の答もない。不審に思つて中に入つて見たが、猫一匹居ない。當惑しながら戸口に佇んでふと湯槽を見ると、一人の老人が湯につかつてゐる。漸くにして彼がつんぼである事を知り、色々と大聲で問答の擧句、近く舊曆の盂蘭盆なので浴客も宿の者もすつかり北方の村里に下り、彼一人留守番だといふ事が分つた。こんな弱つた事もない。其上此老人の話す言葉は又恐しい訛りで要領を得ないのだ。そんなわけで溫泉附近の毒瓦斯の谷もろく〳〵見物しなかつた。人と對しながら二人とも別々の事を考へ乍ら淋しく飯を食ひ、一夜を過したのであつた。明くる朝出發の折宿泊料は分らず、罐詰をあけさせても其値段が不明であつたり、結局いゝ加減の錢を置いて去つたのも旅には稀な場合であつた。それで、私は玆に溫泉と噴氣孔の話は殆どする事は出來ない。

（七）栂森越え

八月二十七日。午前八時四十分といふに鹿湯の陰森奇怪な溫泉地を離れる。北秋田郡の荒瀨村に越える峠道に入る爲には先づ澁黑川を渡らなけれ

ばならない。宿からの道は間もなく湯瀧の縁を下つて川床の内をあちこちと跳び越えつゝ落合に出で、其處から澁の赤黒い色を呈する澁黒川の谷をかち渡つて、小徑を分けて行く。川床のあたりで振り返ると、鹿湯の奥の澤内には蒸氣が濛々と立上つて、一種の鬼氣が身に迫るやうだつた。

九七一米の小さな楠森の山腹はブナの大木が美しい森林を形作つてゐる。心細い路は屢々小澤を過り、下草の茂みを分けて行く。露で忽ち膝から下はびっしょり濡れる。笹の葉が其上をさら〳〵となでる。大分の上りだが、魔の谷を早くも遠ざからうと心がせいて、柳澤の上手を渡るまで一息も入れなかつた。其水を幾杯も飲んで漸く邪氣を拂つたやうな氣がした。この澤にも橋はない、緩い林地を流れる水の樣はたしかに關東、甲信の山水に親んだ者には妙に感じられる。柳澤を渡つてから後は又少しづゝ上りになつて來る。今度は道に下草も繁らず、ブナを主として折々カヘデ、ムシカリ、ミヅナラ等の大木を交へた森の中を縫つて行く。路傍の小さな草木は熊笹、ミヤマシキミ、ツクバネサウ、イヌツゲ等で、餘り變つた物もない。眺望皆無、只向ふの峯の闊葉樹に包まれたのを見るばかりである。

すでに峯通りを行く樣になつたが、依然として森の國だ。其内に恐らく柳澤西股の取付から五町許東の高みであらうと思ふが、尾根の狹まつた箇所がある。アヲモリトドマツ二三本、大きなミズナラ一本が立つて、其根元にイハウチハの群れた所だ。其處から珍しくも南北が打開けた。即ち尾根の兩側の谷は深く山を削つて、北の方に黒鼠色の何處だか遠山が見える、南の方には駒形山、荷葉ヶ岳並に駒續きの連脈が見える。

然し此地點を離れると再び尾根は緩やかに左右に廣まつて木立の深い爲に何も眺められなくなる。道が南にぐっと曲り暫く行つた所に、前田村に下りる分れ道があつた。此道の方に「左ハ大又通リ」といふ札が立ててあつた。附近は休場と見えて樹幹には湯の谷へ越える者の姓名が少からず彫りつけてある。そしてもうこの邊になるとブナは少し細くなつて多少の針葉樹を混へてゐる。一

憩の後進んで次の小高い所に行くと東の方に燒山、畚岳、岩手のコニーデ及び畚岳續きの南の山稜が眺められた。勿論其等は樹幹を透して見るので、撮影すべくもない。畚岳は更に此先でも眼に入つた。私は稍下り氣味の道を歩く、と思ひがけなくも向ふから二人の旅人がやつて來る。鹿湯の樣子など尋ねられるまゝに簡單に答へて別れた。其附近から又々、駒ヶ岳、荷葉ヶ岳、乳頭山及び其手前の休火山らしい低い山と共に、端然と座した岩手山を眺める事が出來た。其後二つ三つ比較的急な上りが續き、行々木隱れに遠山の肌を隙見して行く。再び下る樣になると、アヲモリトヾマツとヒノキの一二本立つた明るい切り開いた所に出た。木の下には鐵の鳥居がある。柵を越えてしばらく行くと、三角點九一一・六米の峯の側面の崖が左手に現れる。其處からは陸羽國境の連山が明らかに眺められた。先づ左（北）から、王者の風ある岩手山は大深岳の左の撫肩越しに現れる。其れより倉澤山、內大澤森、大白森、小白森、乳頭山、イザル森、湯ノ森など、南するに從ひ豐かな優しい大濤をうつて、次に駒形火山が二つの隆起を擡げ、なほ其前に荷葉ヶ岳の三角波の寄合ふアウトラインを見せる。更に南すると、遙かに嶮しい仙岩峠以南の朝日岳、和賀岳が目に立つ。私は此景を肴に快く中食の箸を取つて、屢々雲の岩手の頭を行き過ぎるを氣遣ふ。（此行に山の見える所は私は皆記錄して置いたもので、實を云へば山を見るのが珍しい程此峠道は單調な森の內を行く。然し一面から觀察するに、此單調さは椈森が如何に廣い森の國であるか、そして如何にのびやかな山背であるかを暗示する。只、此山塊は多くの谷に深く明かに刻まれてゐる事が八幡平と異るのである。）

開地から赤水澤の源を廻つて北西の方向に轉ずる。其の何處かで又も、稍〻赤味がかつて來た岩手、突兀たる駒、噴火口らしい窪の見える大白森、及び一つまみの高點を見せた笊森あたりを眺めた。最後の山は如何にも其草色が美しかつた。下りが又上りに懸つた時には、燒山、八幡平、畚岳及びそれから大深岳までの國境連山と岩手山を

見る。再び下りになつて傾斜は緩くなる。二組の夫婦が行き過ぎた、溫泉へ行く客に違ひなかつた。やがて今迄細々と續いた道が廣やかになり、山の樣ものび〳〵として來た。けれどもう栁森の美しさは過ぎて四邊は奥深い感じを缺く。一時間程其單調が續いてから右手が切れると、間近き森吉山は始めて胸を反らして聳えた。何時のまにか高場森を行き過ぎたらしい。大分歩き疲れた私はそれから二十分ばかり進んで一つの開地に休んだ。其處には大きな二股の杉が一本と小さな杉が一本生えてゐる。仰げば空の靑いのがうれしくもあるが、水無しの峠路を半ば過ぎて、只管谷が慕はれる。

やをら起き上つて進むに、ブナを主とした森の内に追々杉の木が增して來る。うるさい小丘を二三度上下して、再び森吉山一帶の見える所で息を入れる。身體はほてつて一吹きの風を思ふ頃、駒鳥が谷を轉りかける。歩き始めると其先に又、柵があつて、馬番の記念の文字などが見えた。なほしばし過ぎて左手に駒形の連峯、又時を置いて右手に森吉の一群が現れる。かくて森吉山は益々しげく旅人の眼を誘ふ。地形圖に闊葉樹の記號の多く描かれた尾根の邊を通過してゐるのであつたが、私は間もなく新道を見出して山を左手に廻つたりした。大森は其れと知る事が出來た。其先で又々八幡平續きの山が見えた。と、しばらく下ると左手にかつと谷が打開いて、彼方、美事な安ノ瀧が現れた。

瀧は水はさう多くはないが、高さは十五丈もあらうか、黑ずんだ岩壁を數條に分れて白く落ちる。其前後もおろそかには出來ない斷崖の連續で、其緣に針葉樹が覗きこんでゐる。蓼々の音に聞き惚れ乍ら、なほ上空の燒山の白兀を併せて眺め、ブンナ森越え唯一の壯觀を飽くまで縱いまゝにした。

安ノ瀧は最早玉川の支流ではなくて、打當川の支流中ノ又澤の上手に懸つてゐるものである。そして私の旅も其谷の方へ下りて行く。大森の次の高みを越えるあたりは上り下りが多く、道の作りや氣分も惡かつた。然しやがて長い峠路も終に

小朝日岳の斷岩と蕉越の斷層谷

安齋徹氏撮影

近付き、電光形が始まると、待ち望んでゐた清水が湧く。二度目の中食を濟まして、もう餘程人臭い疎林の間を急ぎ下る。地形圖に中ノ又澤近くまで小徑の分岐を見せた地點には「向テ右安瀧道約三里、左鹿湯道約七里」と標示してある。終に岩井ノ澤に來た。面白い木橋を渡つて、三人の人に會ふ。もう盆だといふ。それから私は森吉山に登山する爲の根據地を求めつゝ歩いた。打當では森吉山が平凡に見えたので足早に過ぎて、中村に行く。雜貨店で一休してから戸鳥内に赴き、旅舍を探し當てたが、頗る不愛想なので聊か憤慨して遠く比立内まで飛ばす事に決める。やがて十四日の月は照り輝き、私は夢中になつて急いだ。さうして泊る所に着いたのは午後八時の頃であつた。

二十八日は天候が惡かつたので森吉山を放棄した。心がせいた私はカラミナイ澤國有林に入つて怪しげな路を辿り、降られつゝ、惡場を搦んだりして、赤倉澤にせうことなしの野營一夜の後、太平山を右に見て岩見山内に行つた。其處で所用を濟まして、卅一日太平山を越えて秋田市に入つて行つた。此等に就てはいづれ機會を得て記したいと思つてゐる。(大正十三年八月一日脱稿、十月十三日淨寫終)

附　記

八幡平へは大正十四年になつて東京からも行く者が現れた。登高行第六年に濱口久常氏が「八甲田山より八幡平を經て岩手山へ」を書いてゐる。私は此記事を讀み又直接濱口氏とも面談して長沼の寫眞を見せてもらつたりした。私の朧氣となつてゐた印象は茲に新しくよみがへり、且又私の誤りや知らなかつた事、新奇な事などを傳へて貰つた。(大正十五年八月追補)

○高山植物雜記

武田久吉

正誤――前回分第二十年第二號九二頁上欄六行目「大正十一年」は元年の誤。又この植物を私はタカネイハヤナギと新稱する。

十六　石倉岳の地衣。本號に掲げられた舘脇君の

「八甲田山の思ひ出」中に、石倉岳に登つて地衣を探るに時間を費したことが出て居る。實際この峯の岩壁には地衣の種類が多く、その道の人なら終日岩上に踞しても尙足りない程であらうが、吾々でさへこゝに少なからぬ時間を費してしまつた。その地衣類の中にも、殊に吾々の注意を引いたのはイハブスマやコゲノリに似た一種で、その黑褐色の葉狀體が岩面を蔽ふ狀は美觀とは形容出來ない迄も壯觀と稱して宜しからう。その狀は插入の寫眞に見る如く、他の葉狀地衣や固着地衣と混生するが遙に優勢である。此の地衣では石倉岳では子器を生じない（未だそれ程の老齡でないのか夫共他の原因かで）が同じ種類を木曾駒で採集された朝比奈藥學博士によると、これは Umbilicaria carollinaiana Tuck. と稱するもので、その種名の示すが如く北米カロライナの高山に產するが、一八八二年にこの學名が制定されて以來他の何處からも採集されなかつた稀品であるが、一九〇三年と一九一〇年に東部西比利亞に發見され、今又本邦にも產することが知られた譯で、分布上極めて興味多きものだといふ。而已ならずこの種類は本當の Umbilicaria とイハタケやイハブスマの屬する Gyrophora との中間の性質を具へる點も亦奇であるといふ。

因に記すが、イハブスマの學名は私の採集品を三好博士が Gyrophora cylindrica と鑑定されたが、朝比奈博士によると G. anthracina を正しとする由である。これは白馬附近に多いが、スバリ岳にも產すること木暮君の採集品によつて明言出來る。又 G. cylindrica にはタカネコゲノリの名があつて、木曾御岳に產するといふが確證がないらしい。この屬には尙 G. proboscidea（ミヤマコゲノリ）G. hyperborea, G. torrefacta, G. esculena（イハタケ）等數種が本邦に產する。

又前記 Umbilicaria のものは、矢張り北米に發見され、東亞に分布する U. pensylvanica といふ種類があつて、私は去る大正十年北海道の夕張山中に採集し、朝比奈博士の檢定を經てこの名が確定し、同博士によつてオホイハブスマの名が與へられた。

十七　重ねてシャクナギに就いて。本誌第十九年第一號（尾瀨號）に於て一石を投じてから、同好の方々がこの問題について興味を感ぜられたと見えて、種々の報知や注意を賜はることは深く感謝する處である。第十九年第二號八二頁に再度この問題について記した時、奥上州ではシロシャクナギが本當のシャクナギで、普通のをウラジロと呼ぶと言つた人がある由を附記して置いたが、その後大平晟氏から上州に接する越後の一部でも同樣なる旨の御通知を頂いた。その後斯かる用法は吾妻山彙（少くもぬる湯附近）や藏王地方でも行はれて居ることがわかつた。

又大平氏から越後ではシャクナギと呼んでシャクナゲと云はない由を報告されたが、本誌の愛讀者なる新潟市祝町の藤島源太郎氏から大正十五年五月八日附で健全社を通じて與へられた書中に、「先月二十五日蒜場山登山の時加治川の北岸瀧谷に宿つた時その村の人々はシャクナギの事を一般にナギと云つて居ます、シャクナギの事でシャクナンゲとは云ひません」とある。

私が今迄聞質したところでは、皆シャクナギと呼ぶ外なかつたが、別項太平氏の記文中大和アルプスではシャクナギとシャクナゲと別物とし、總稱の場合にはシャクナンと言ふとあるのも面白い。木暮君の話に上州の或る地方でもシャクナンと稱するといふが、これは所謂をかく呼ぶのか夫共シロシャクナギの方だか聞漏した。

次にシャクナギといふ名は古來の名であるか又はシャクナゲから轉じたものかといふ點について友人等の助力を得て諸書を摸索した處が、古書には概ねシャクナゲ又はシャクナンゲとあつて、シャクナギとは出て居ない。すると牧野博士が言はれる通り、シャクナゲが轉じてシャクナギとなつたものかとも思はれぬでもない。そしてシャクナゲは石南花の意で、それは『本草綱目』が傳來して、その中の「石南」を邦産のものに宛てる際、今いふシャクナギに配して、その頃この木に他の名があつたかどうかは知らないが、これを無理に石南としてしまつたのではあるまいか。さればシャクナゲ又はシャクナギはウラジロといふ名に比

すれば新來のものであるから、或る地方では之をシロシャクナギの方に與へシャクナギをば在來の名なるウラジロで呼ぶのかとも考へられる。それにしてもシャクナギといふ名が、全國的によくも廣まつたもので、カヘデに楓を誤用したのが、古來全國的に行はれたと同樣であらうか。

尾瀨號に石南にシャクナゲを配したのは、蘭山先生が最初かと記したが、實はそれよりも遙か以前に、慶長の中年初めて『本草綱目』を長崎に得て幕府に獻じた林信勝（道春）が、同書を拔寫して國訓を附し『多識篇』と名つけて慶長十七年（西曆一六一二年）に上木したものが最初の樣である。同書卷三、木部、第四（二十三頁）に

石南　土比良乃岐又云土扁良今俗云志也久奈計（ケ）異名風藥（フクヤク）

これによつて見ると、漢名石南は我がトベラに宛ててある。之を踏襲したものか、板本の『和名類聚抄』にも（卷之二十、木ノ類）

石楠草（トヒラノキ）　本草ニ云　石楠草（クサナムサ）ハ楠音南和名止比良乃木俗ニ云佐久奈無佐

とある。

こんな記事から追々と轉訛して來たものか、正保二年原板、寛永十五年補修本の『毛吹草』卷二（三枚表）三月の部の內にも「赤南花（しやくなんけ）」を揭げ、又寛永十八年板の『俳諧初學抄』には「柘南花（しやくなけ）」を、寛政七年板の『和唐材』六十三枚表に「赤南花　しやくなけ　さくなんけ　漢　石南　石南花」等と載せるのではなからうか。尙是に關して諸君から色々の說や材料を提供せられんことを希望する。

別項大平氏の記事中に、シャクナギとは笏を作る木の意で命じた名といふ一說も見えて居る。この事は私も三十年程前耳にしたが、シャクナギの材で笏を作つたかどうかは不確實であらう。

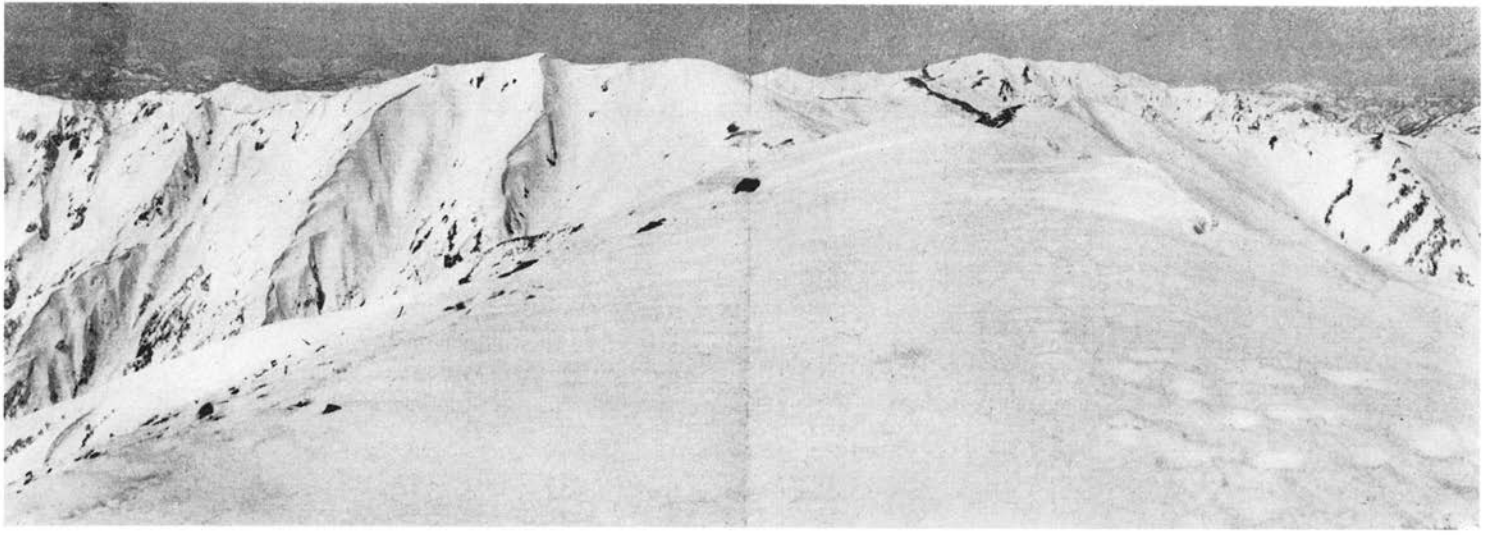
○シラネアフヒとシャクナギに就て

大平晟

一　シラネアフヒ

シラネアフヒは、御承知の通り、名親の本場白

西朝日岳↓　寒江山↓　以東岳↓



三月下旬に於ける大朝日岳絶頂と連峯の大觀（前景の左は大朝日岳右は中岳）

安齋　徹氏撮影

根山に於ては、元來生産の多からぬ上に濫採の爲め、今は殆と全滅の有樣であるが、我越後では到る處の山地に夥しく、正に内地無比かと思はれます。予が實驗した山地を擧げると、蓮華山、妙高山、南葉山、米山、黑姫山、苗場山、三國峠、清水峠、金城山、八海山、駒岳、枝折峠、守門岳、鋸山、菅名岳、飯豐山などであるが、産地により花形に大小があり、花色にも種々ある。花色は藍紫色が通例であるが、それにも濃淡がある。又藍色の勝つたもの、紅色の勝つたもの、殆ど紫色のもの、極めて淡紫色のもの、稀には白色のがある。

概して、頸城、魚沼方面のは、花大形で色濃く、古志、蒲原方面のは、小形で淡い。

米山の如きは、海岸に迫つて峙つのだが、海拔僅か百乃至二百米突邊に於て、夥しく見るのは内地としては一異觀とせねばならぬ。

シラネアフヒは、我鄕國では、概してヤマボタンと言つてゐるが、南魚沼郡三國村邊では、アメフリボタンと言つてゐる。予が三國街道の崖側に産した此花を手にして、二居（フタヰ）を通過した時、途上の兒童達が「其花採ると雨が降るで」と警告したのは面白い。

同郡湯澤溫泉の西丘中平（ナガダヒラ）には、餘程豐富であるさうで、同地の人達は、ヤマアフヒ或はユキシロアフヒといつてゐる。さうしてヤマシヤクヤクをヤマボタンと稱してゐる。

《武田附記》シラネアフヒに關する大平氏の觀察は中々面白い。出來得べくんば今少し具體的に大きや又は大さと花色と相關的の事實があらばそれをも記されたら更に有益である。今年初夏尾瀨長藏小屋に栽培されたものでは、花被の外面にウヅラ模樣が紫と白とで朧氣乍ら染出され、内面は淡紫色であるのを見た。これはヤット咲きたてであつたから、後來更に變化するのか極めることは出來なかつた。

尾瀨では三平峠の南麓と、猫又川に沿うた小平地――私が柳平と假稱したチヨツト上河内の縮圖の樣な所――それに景鶴山の南麓だとか、鳩待峠の北側に多かつた。

シラネアフヒについては、私は嘗て本誌第十

三年第二號八三頁以下に記したことがある。その際この草を北海道でヤマボタンと呼ぶと、『北齋漫畫』を引用して述べて置いたが、これは元來越後の方言であることが、大平氏の記文で知ることが出來た。これに限らず草木の北海道名と認められて居る多くは、内地から輸入されたもので、アイヌ名以外に北海道で作られた草木の名稱は少い樣に思はれる。内地の東北地方の方言を調べて見ると、實に思ひ半ばに過ぎるものがある。

尙又第十三年第二號に、シラネアフヒは各地の亞高山帶に少くない樣に記したが、その後の探究の結果、亞高山帶に少くて、却つて低山帶上部の種類として認めた方がよい樣に思ふ。それから又此の植物は、未だ北緯三十六度以南には產することが知られて居ない樣である。

二　シャクナギ

我越後でシャクナギを夥しく產するのは苗場山である。從つて其一族郎黨に屬する高石山や、鷹巢山、赤倉山に多いと言ふことも頷かれる。予は從來シャクナギに關し、赤湯附近の人達の定義(?)を傳聞し、少からず興味を抱いてゐたのであつたが、今年六月四日より三日間、赤湯溫泉に遊んで、親しく之を觀察し、其多種多樣實に他に其比を見ぬ壯觀美觀に喫驚したのである。

赤湯は元橋から二里半と註してあるが、道路は頗る嶮惡で、通常四時間餘を要する。

シャクナギの多いのは、榛澤口から鷹巢峠（上り約十町）を經て赤湯に至るの間。熊ノ澤、及び赤湯から赤倉山を經て、苗場山頂に至る區域である。

予が實驗した品種を記すると

(一)花　花冠ノ先端は濃紅、基部に至るに從ひ淡い。花冠五裂し、直徑約一寸といふ小形で、柱頭も葯も黃白色。花梗長七八分、綠白色を呈し、梢頭に八九花を叢生する。

葉　先端梢丸味を帶びたものと、尖つたものとある。葉裏は概ね褐色であるが、舊葉は稍灰白を呈するのがある。葉形概して小形である。

此の品種は頗る多く、苗場山上に亙つてゐる。

(二)花　花冠、裂片、直徑は(一)の如く小形で全體一樣に非常な濃紅色を呈し、旗瓣の內面基部に、數十の暗紅點がある。柱頭赤く、葯黃褐色。花梗短く、甚だ赤い。十二三花を叢生する。

葉　(一)に同じ。

此品種は甚だ少い。

(三)花　全體一樣に極めて淡紅色を呈し、花冠五裂、直徑二寸强といふ大形で、頗る壯觀である。旗瓣の內面基部に十數の褐點がある。柱頭黃色、葯褐色。花梗約一寸五分、紅色を呈す。八九花叢生する。

葉　裏面灰白に褐色を帶び、先端稍丸味がある。大形で往々長八寸餘、幅一寸五分位のがあるが、又頗る狹くて長いものもある。

(四)花　殆ど白色であるが、先端微紅暈を呈し、花冠(三)と同じく大形であるが、旗瓣に褐點が無い。柱頭赤褐、葯白黃。十一二花を叢生する。

葉　(三)と同じ。

此品種は隨分多く見える。

(五)花　全體白色。大形。

葉　(三)に同じ。

此の品種は少い。

(六)花　全體白色、大形。旗瓣に數十の紅點あり。

葉　(三)に同じ。

此の品種は甚だ少い。

(五)(六)は全體白花であるが、立山、白山及び信飛甲の山岳に見る、所謂シロバナシャクナギとは、全然其品種が違つてゐる。

(七)花　殆ど白色で、先端に微紅暈を帶び、花冠六裂、徑二寸餘の大形で、氣品極めて高尙である。旗瓣の內面基部に數十の黃綠點がある。柱頭黃、葯白黃。花梗一寸五分程で、淡紅を呈す。十一二花を叢生する。雄蕊十二個を有する。花冠の六裂と、十二雄蕊とは、珍品である。

葉　小形で、裏面灰白色を呈し、裏に向つて著しく反卷する。

此の品種は、極めて少い。

(八)花　白色。花期遲い。

葉　大形、幅廣く、先端丸味を呈し、裏面淡綠

色。所謂シロバナシャクナギである。

(九)花　白色、微紅暈を帶ぶ。花期遲い。

葉　稍小形で、先端丸味を呈し、裏面淡綠色。

(八)の變化らしい。

朝鮮金剛山で目に入つたシロバナシャクナギは內地で見るそれとは、花及葉の形態に於て、幾分の違ひがある樣だが、精しい比較を缺いたことを遺憾とする。

二居の獵夫で、十六歲の時から始終漁獵に從事し、付近の地理に精通し、植物趣味を有する富澤元吉君（五十二歲）の語る所によれば、同地方では、前記(一)から(七)までをウラジロと呼び(八)(九)をシャクナギと言つてゐる。(一)(二)の品種が、幹枝概して匍匐する傾きあるのに對し、(三)乃至(七)は、比較的立ち揚るのがあり、且つ樹幹も大なるものは、徑三寸以上のを所々に見た。

葉には、長短廣狹、尖れるもの丸味のものなど種々の差があるばかりでなく、裏面毛茸の色にも亦種々の變化を見るのである。シロバナシャクナギを除いては、新葉、舊葉を通じて、褐色のが普通であるが、新葉白く、舊葉褐色に變ずるもの。又全然反對に新葉褐色にして、舊葉灰白色に變ずるもの。新葉舊葉通じて、白色のもある。

葯及桂頭の色の如きは、經過時期によつて、多少の變化があるものと思はれる。

要するに、花色にも、葉の形態にも、此地に於て、非常に變化複雜を極めてゐるのを觀ることが出來る。

前記は、今回予が眼に入つた特異のものを擧げたのであつて、其他尙中間性のものが多い。

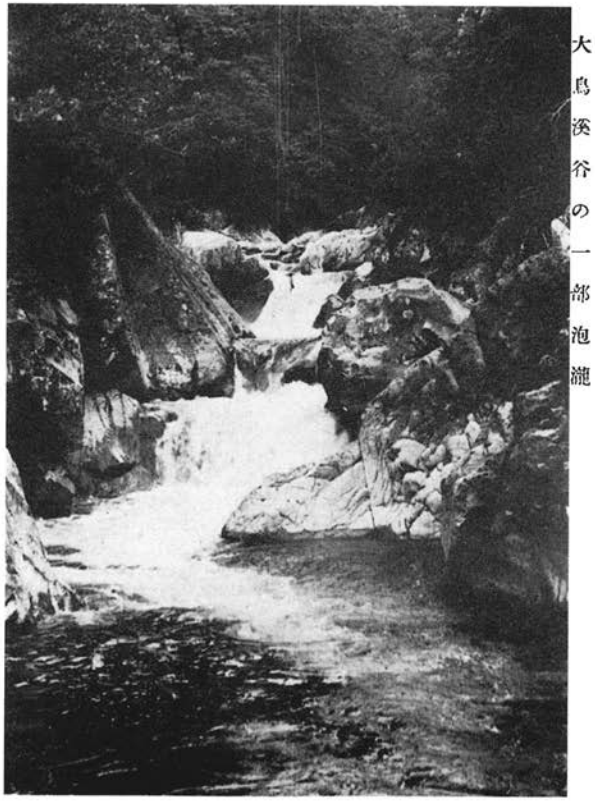
《武田附記》赤湯に於ける觀察を基としたシャクナギの說は以上を以て終るが、それに前立つて昨大正十五年十月に大和アルプス地方にての觀察を私の手元迄送り越された。已に誌上に揭げる豫定であつたのを、荏苒今日に到つたが、次に添附して大平先生の芳情を感謝する。尙名稱に關しては、本號揭載の「高山植物雜誌」十七に重ねて記した。就て見られんことを乞ふ。

△大和アルプスにて見たシャクナギ

小生が經驗せる範圍に於て、夥しいシャクナギ

寒江山（朝日連峯）から東下する侵蝕溪谷の雪谿

安齋徹氏撮影



大鳥溪谷の一部泡瀧

に接したのは、奈良縣の南部より和歌山縣の南部に亘れる山地、即ち所謂大和アルプスの地方である。殊に大臺ヶ原山頂大蛇嵜(ダイジャゲタ)では、驚くべき大群落に接し、而も樹株は概ね數百年をも經たらんかと思はれる老齢のものが多く、高一丈内外、幹の周圍一尺以上に達するのがあり、白苔之を纏ふて實に古色蒼然たる感に打たれた。眞にシャクナギの原生林的壯觀と思はれた。

其稱呼は案内從事者が、近年植物界の名稱を聞き覺えて、シャクナゲと言ふものが多いが、吉野山から那智山に亘る一帶の地方では、古來一般にシャクナンと呼び來つたとのことである。昔時笏(シャク)を作るに、此材を用ひたから、笏ノ木即ちシャクナギといふのだと語る同地方古老の話も聞いた。

高野山參詣者が魔除として、カウヤマキの小枝を束ねたのを買ひ求めて、鄕里への土産とするのと同意味で、大峰山參詣者はシャクナギの小枝束を持ち歸るのであるが、長一尺許の小枝二三本を束ねたもの、一把の代價、只今十錢で販賣してゐる。小生は、吉野山を尋ねたこと前後二回、合計六日滯在したので、同地で主として山櫻とシャクナギとを培養販賣する營業者數人に接したのだが、シャクナギは大峰山から齎らすのである。そうして彼等老練者がシャクナギに關する觀察と稱呼とに於て、隨分面白いことを言つて居り、且つ相一致した點があるから、其所說を左に記述する。

シャクナンを大別すると、匍匐性のと、立性のとある。前者は時には匍匐十數尺にも達し、葉の裏面白く、花付疎らで、淡紅色の色合は惡い。後者には枝太くて疎らの(甲)と、枝細くて密生するの(乙)とあるが、(甲)は葉大形で、裏面褐色を呈し、花付甚だ良く、色合鮮かな紅色を呈し、花冠は七裂してゐる、樹幹は比較的大きくなる。之をシャクナギといふ。(これはオホシャクナギ即ちツクシシャクナギを言ふのらしい)。(乙)は葉細く、裏面灰白色を呈し、幾分裏面に向つて反卷する氣味あり、花冠は五裂し、色合は前者よりも甚だ劣つてゐる。之をシャクナゲといふ。販賣價格(甲)は(乙)の數倍

上位である。

右の如く、シャクナギとシャクナゲとを區別し、之を總稱してシャクナンといつてゐる。

小生は、この所說を聞いてから、其後これが觀察に注意して見ると、所謂大和アルプス山彙中には、頗る複雜して各種の狀態を認めたが、開花の時期に接せぬは、遺憾であつた。成る程其後の實驗に依ると、其樹振、枝振、葉振に於て、彼等が言ふ樣の差異があるばかりでなく、其葉裏新葉の初期は白くて、翌年に至り、褐色となるもの、之と正反對で、新葉の初期は褐色で、翌年に至り、灰白色となるもの、或は始終灰白色のもの、始終褐色のものがある。葉形にも、大小廣狹の差あり、反卷の度合にも別があり、又殆ど反卷せぬのもある。この廣狹及反卷の度合と、葉裏の色合に關しては、同一品種でも、土質の肥瘠、標高の差異、日光を受くることの多少などにより、種々の變化を生ずるものかとも思はれる。

前記大臺ケ原山頂大蛇嵩のは、概してオホシャクナギである樣に思はれた。我鄕國越後の苗場山や八海山のは、彼等が所謂匍匐性の部に屬し、葉裏は、新葉の時微かに褐色を帶びてあるが、翌年に至り、銀白色となるのである。花は普通の淡紅色である。

尙三國嶺下、赤湯あたりの人達が、シャクナギに關する異說も聞いてあるが、不明瞭の點があるので、他日更に探索の期を待つ次第である。

△黑部にて見たシャクナギ

黑部の溪谷にも、シャクナギが隨分多い。葉は狹くて頗る長いのも見えるが、概して大形で幅の廣いのが多い。又葉裏は概して新葉は褐色、舊葉は白色を呈してゐる。

此處で著しく目に着いたのは、葉柄葉脈の色である。普通シャクナギの葉柄脈は、淡綠色を呈し殆ど毛茸を認めぬものであるが、黑部峽谷では、この普通形態を有するものゝ外、葉柄及葉脈を通じて著しく紅紫色を呈するのが多いのである。そうして此の種のものは、葉は大形で葉脈に毛茸を有してゐる。

花期に接せぬので、其花に何等差異を呈するか

を視得ざりしは、遺憾であつた。

「付記」富山縣石川縣地方では、一般にシャクナギと言つてゐる。

《武田追記》シャクナギの葉柄の紅色を呈するものは大平氏の言はれる通り稀である。私は野反の八間山附近で斯かるものを見たが、不幸にして花に接しなかつた。又シロシャクナギでも葉柄の紅色のものが稀にはあるもので、斯かるものゝ葉身が短い時には、一寸キバナシャクナギかと見紛ふ事さへある。私は斯様なものを先頃乘鞍岳の高山帶下部や八ヶ岳で見たし又松本でキバナシャクナギとして培養してあるのをも見たが、共に花がなかつたので今その花色について記すことの出來ないのは遺憾である。

飯豐山彙への一登路

福田昌雄

昭和二年八月六日午前二時仙臺驛發、午前十時長井線今泉驛着、自動車を飛りて南小國村字玉川着、後徒歩にて字長者原に至り藤田虎吉氏方に泊る。七日、午前中豪雨、午後長者原を發して飯豐溫泉に泊。八日、溫泉直後の湯澤を約千二百米の邊まで溯り左折して藪をへづりつゝヤゾウ泊りより綾ける尾根を越え、梅花皮澤の側に出て、尾根を下りてカヂカハと石コロミ澤との出合に出て、石コロミ澤を溯行、九百米等高線の邊り一枚岩の上に野營。九日、石コロミ澤の雪渓を踏みて石コロミ澤の頭と烏帽子岳との鞍部に出て、石コロミ澤の頭に到り、戻りて烏帽子岳御手洗の池を過ぎ、御西へ綾く尾根の最低部の殘雪の側に野營。十日、幕營地を發して大日岳御西、飯豐山を訪ひて戻る。十一日、湯ノ平溫泉まで下る。十二日、湯の平より赤谷へ出て　歸仙。

參考地圖　五萬分一　廿萬分一　小國、飯豐山、大日岳、津川、村上、新潟、新發田。

一　長者原へ

大正十四年の七月末、川入から入つて飯豐、大日を訪れた私は、その豐富な殘雪と、御西邊の美しい草原にどんなによろこびの目を見張つた事か。歸路にとつた米澤路の大日杉から嶽谷あたりまでの、靜かな谿も忘れ得ぬ印象の一つであつた。そして又、飯豐から御西から大日から眺めた、石コロミ澤の頭（會津方面では梅花皮（カイラギ）山と云つてゐた）、烏帽子岳（會津稱、檜山）の豪壯な山容は、一度は必ず訪ねてみたいものゝ一つであつた。今

年の五月、相棒の木村愿氏と磐梯山に遊んで、頂上から冬のまゝの尊嚴を保つ飯豐連山を眺て、再遊の志は深められた。

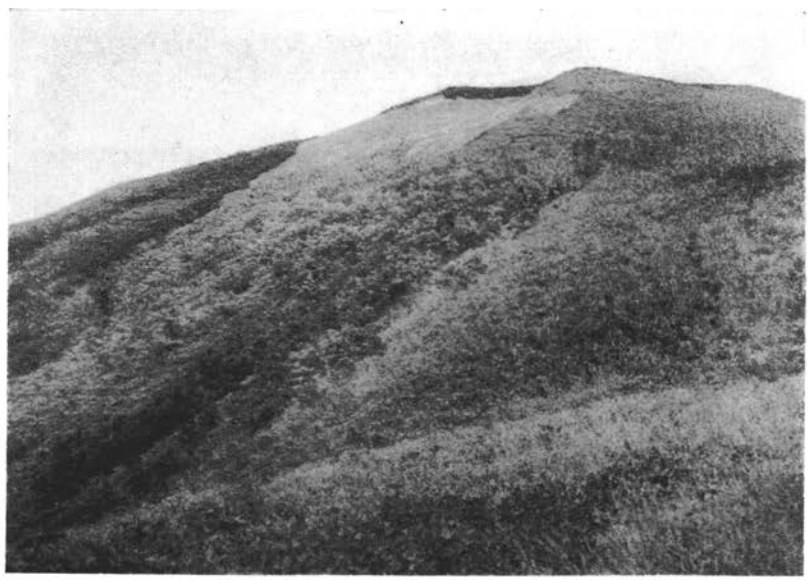
先づ計畫を立てるに當つて、沼井氏の記事を熟讀し、會員書上喜太郎氏より別宮氏製作の青寫眞を得て、克明に澤の名稱等を、地圖に轉寫した。次に赤谷驛長よりの返信により、新潟市の平野忠太郎氏の努力により湯の平溫泉より、飯豐頂上まで切開けが出來た由を知り、先遊の士の激賞する玉川口より入つて赤谷に出る事に決めた。で、飯豐溫泉より丸森峯にとりつき、シヽノマナクに出で杁差(イムリサシ)岳往復、地神、石コロミ澤の頭、烏帽子、大日、御西、飯豐を經てノコギリ目（小玉川方面ではこの尾根を總稱して、ダイグラと云つてゐる）をヌクミ平へ、梅花皮澤を溯行して羽越國境に出で、湯の平、赤谷に下る事に決めた。事實は丸森峯は今や全くの藪尾根になつた爲め、地神以北の計畫は棄てた。又梅花皮、石コロミ兩澤の溯行は、大正十五年の五月末か六月初めの頃であつたか、東北大學生故三木準氏及び佐々保雄氏等五六名によつて爲されたのであつたが、詳細は耳にする機會がなつかつた。

携帶品は四人用屋根型（木村愿、福田昌雄、福田秀夫）二人用吹き流し型（人夫用）の二張より、ピッケル、ザイル（卅米）にまで及んだので相當に嵩んだ（石コロミ澤の雪溪は急且つ長大を豫想したのであつたが、七月以來連日の降雨の爲め恐しく減じてゐた。その上豫想程の急峻でもなかつた）。でもコーンビーフと栗きんとんの鑵詰を各一鑵宛もつた。

八月六日午前二時、木村氏と私は仙臺驛から乘車した。福島で乘換、東京から來た弟と落合つて米澤に向ふ。米澤で米坂線に乘換へる。この線は米澤市の南から西の郊外を廻つて長井線の今泉驛に到る。西米澤驛は一昨年の或日、朝に嶽谷を發して十一里を歩き、疲れた足を引きづつて、たどりついたところで如何にも思ひ出で深い。小松あたりで、頂は雲に鎖されて見るに由ないが、青黑い山肌に處々雪を鏤めた飯豐の山塊を眺める。

午前十時八分、今泉驛に着く。乘合自動車はあ

只見川と大津岐川との合流點より見たる燧岳



未丈岳頂上　　黒田正夫氏撮影

るが、手ノ子迄しか行かぬと云ふので、長井町から一臺呼んで貰ふ。十一時自動車が來て小國に向ふ。膽を冷しながら宇津峠を越えて、小國に着いたのは午後の一時半だつた。こゝで長者原までの人夫を探す。人夫は朝ならあるが午後になつては、皆働きに出て了つてゐるから見付らないとの事。すると自動車が玉川迄は行くと云ふ。賃金の事で卅分程暇どつたが乘る事に決める、横根を廻つて玉川に午後二時四十五分着く。運轉手に長者原迄の人夫を探さした。やつて來た男は痩せた小兵の者。『いくらで行く』と問へば『一圓五十錢くれ』と云ふ。『馬鹿を云へ、長者原迄は二里一寸の道、一圓なら傭ふ』と云へば『いや三里餘はある、今日は歸れぬからどうしても一圓五拾錢貰らはなくては行けぬ』と云ふ。折しも夕立が降つて來たので竹屋と云ふ宿屋に行く。件の男は何時の間にやら姿を消して了つた。初日から人夫難かといささか悄氣る。餘り强降りになりさうもないので、宿の主人にたのんで人夫を傭ふ。一圓二十錢で安くもないが兎も角出掛ける。六時半頃長者原の藤田虎吉氏方に着く。かねて照會して置いたので、早速家人は人夫を呼びに行つてくれる。やつて來たのは昨年佐々木氏等と石コロミ澤を溯つた藤田春利（卅九）である。悔を後日に貽さぬ樣に。日當の事を決める。春利は案内兼人夫だから三圓五拾錢、外に國境尾根まで荷を持つ人夫は三圓として、この人夫二名の人選は春利にまかせる。

二　飯豐溫泉へ

眼を醒してみると今日も雨が降つてゐる。朝食を終へた頃から雨は愈々激しくなつたので、又蒲團にもぐりこんでゐると、春利がやつて來る。小降りになつたら、兎も角ヌクミ平のシヽ小屋まで行つて、天氣回復を待たうと云へば『では二人の人夫をつれて來ます』と去る。この頃から雨は一しほ强く、雷鳴もとゞろく。見れば大花山の崖には數條の瀧が出現してゐる。

十一時頃になつて、雨もやつと止んだ時分、春利は伊藤助百（廿五）、船山春一（廿六）の二名とやつと來る。そして打續いた日の雨と今日の豪雨とで、梅花皮澤の徒渉は六ヶ敷い（ヌクミ平のシ

シ小屋は、沼井氏の頃のは燒けて、對岸に新築したのである)、又溯行も約一キロ程の間はイハナ釣りの道が踏めるが、その先から石コロミ澤と梅花皮澤との出合迄は、增水の結果藪をへづる樣になれば、葡萄の絡んだ藪は困難だらう。それよりは今晩は飯豐溫泉に泊つて、シ、山以外には行つた事はないが、湯澤を溯つてヤゾウ泊りより來た尾根を越え、石コロミ澤と梅花皮澤の出合に下りた方が得策だらうと思ふが、如何しますと申出る。私達は相談して結局、折角樂しみにした梅花皮澤の溯行を斷念するのは惜しいが、この溯行は佐々氏等によつて爲されてゐるので、夏山の道程として湯澤溯行を試みるも一興と云ふ事になる。

こんな事で出發は午後の二時になる。旭又瀧のあたりからは陽も見えて、四時半飯豐溫泉に着き、藤田長左衞門氏の小屋に入る。アイヌの小屋に頗る似た原始的のものである。一浴して小屋の外に出て見る。日は尾根の彼方に沒して、七百米に足りない高さではあるが、山あひの風は流石に涼しい。空は全く晴れた。夕べの斷雲は五彩にいろどられて、東北から丸森峯に續く本尾根の方へと動く。

三　湯澤溯行　石コロミ澤へ

イマヅ蠅取粉をむせる程播き散らしたお蔭で安眠した。幸ひに天氣はよい。午前六時溫泉を出發する。湯澤の石の上を右に左に渡りながら登つて行く。水は靴を一二寸浸す程度なので、別に差支へなく行ける。二個所程高さ二三米の少さな瀧を搦む爲め叢の中に入つて、衣服は全く濡れる。約三十分にして澤は二つに分れる。右の澤には殘雪が認められた。向つて左の澤を溯る。澤が分れてから約一時間、湯澤の水源をなす淸水の涌出する處に達した。此處から上は涸澤になるので小憩、水を呑んだり水筒にも入れたりして出掛ける。登りは今迄に比べると大分急になる。身輕な助百が先頭に立つて行く。そして一人が次の者の手をとつて、登攀を助ける場所が少くない。涸澤になつてから十五分程で、澤が二つに分れる。右はよいが左は少しシバ藪がかぶさつてゐる。私達は右をとつた。

午前九時、溫泉を發して既に三時間を經過してゐる。二時間位で尾根に出る豫定だつたのに、未だ澤が盡きてゐない。澤の良いのに欺されて、意外に登り過ぎたのではないかとの疑を以つて、左の方へシバ藪をへづり始める。シバ藪丈けで陣竹は殆んどないので割合に樂だ。九時四十三分尾根をへづり越えて、梅花皮澤の側に出る、大きな闊葉樹が二本立つてゐて、展望の利く場所である。南微東に梅花皮瀑の全容が見える。石コロミ澤は全く雪溪となつてゐる。更に地圖上の豫定では西南にへづり下る筈だが、其の方を見るとシバ藪は密生してゐて突破し難い、而も急傾斜である。先刻疑ひをかけた如く、澤の良いのに欺されたのは事實らしい。確實にはわからぬが、どうも湯澤を千二百米位まで登つて了つたらしい。シバ藪の少しかぶさつてゐた方の澤を登ればよかつたらしい。

兎も角食事を攝つて、十時十五分東に向つてへづつて行く。稍暫しへづつて後、南に向つて藪の中の急傾斜を下り、午後十二時卅分カヂカハと石コロミ澤との出合に出る。登り過ぎたお蔭で尾根の上下に都合二時間半は損したであらう。

こゝまで來れば羽越國境までの半以上は來た樣なものである。しかし國境まで登るには少し遲い。それに雪は意外にすくないから、國境の本尾根で適當な野營地を見出す事は難いかも知れぬ。で今日は澤泊りと決めてゆつくりのびる。素裸になつて藪くゞりに熱した顏を洗ひ、第二回の食事を攝る。

午後一時四十五分、適當な幕營地が見付かつたら、そこで泊ることにして、石コロミ澤を溯行し始める。石コロミ澤は相當の水量を以つて巨岩磊々たる間を落差激しく奔下してゐる。途を左にとつて進む。この邊からは石コロミ澤の頭は仰がれぬ。巨岩を或は攀ぢ或は廻りして進む。廣からぬ澤には適當な幕營地は見付からぬ。二時卅分澤が一寸した瀧を形成した上の處に一枚岩の平なところを見付けて荷を下ろす。丁度等高線九百米のあたりであらう。稍溯つて見ても、適當な場所は見當らぬので時刻は少し早いが、今晩の泊り場は此處と決めて、汗になつたものを岩の上に擴げて、

水際に下りる。流れに浸つて見たが、冷さに一分程で飛出す。後はゆっくりした氣分で日和ぼつこをやる。人夫達は薪を集めに出掛ける。夕靄が越後の谷から吹き寄せて、ヤゾウ泊りから、オホハゲ（一千六百九十二米三のところ）のあたりまで包む頃夕飯も炊けて、谿の夕べは靜かに暮れて行く。干鱈と味噌汁きりの貧しい食事も樂しい。

靄も何時しか消え去つて、紫紺の空には星斗がまたたき、岩の手觸りもひやりとする頃焚火を盛んにして、熱い紅茶を飲む。天幕を張る餘地とてもない一枚岩の上なので、私達はシュラーフザックの中に入つたきり、人夫達は蓑をかぶつたきりで、焚火のまわりに横になる。流れの音のみ徒らに高い。

四、石コロミ澤より羽越國境へ

寒い澤風に吹かれて、熱容量の大きな岩の上に結ぶ夢は屢々破れ、午前三時頃には皆起きて了ふ。晨光はイリモンナイの雪を射て、今日も天氣はよい。

午前五時四十五分出發。やゝ溯つて流れの右に渡る。約十五分にして雪谿の上に立つ。此處は石コロミ澤とイリモンナイとの出合のやゝ手前になつてゐる。雲谿は出合のあたりで一寸きれて、あとは頂上近くまで長く續いてゐる。冷い風と生溫い風と交互に吹く中を登つて行く。午前九時既に尾根近く雪谿が細まつて消えんとする側の急傾斜に腰を下ろして、食事を攝り、卅分休憩。草の急斜面を這ふ樣にして、午前十時十分石コロミ澤と烏帽子岳との間の鞍部に達した。荷を置いて直に石コロミ澤の頂上に向ひ、十時四十三分頂上に立つ。

空は限りなく晴れて、三百六十度の展望は素派らしく展開される。吾妻、藏王、雁戸、日頃目に親しき大東、船形と覺ぼしき山、朝日、月山などが皆屏顏を顯はしてゐる。俯せば登り來し、石コロミ澤は蜒々と白く、その一度綠に消えた先には、ヌクミ平の白い河原が小さく光る。近くは杁差（イムブリサシ）より二王子岳、遠くは粟島、佐渡ヶ島まで手にとる樣に見える。南は飯豐と御西、大日と二〇九一・八米の頂が、大屋根の樣に空を劃してゐる。大日か

岩手山御澤瀑（雫石御神坂）より薄暮駒形山・笊森・乳頭・
三角山・高倉山・小高倉山等を望む

岩手山大地獄より丸森及び下倉を距てゝ畚岳・八幡平・茶臼岳・大黒森の遠望
武田久吉氏撮影

ら飯豐川に注ぐ數條の澤は全容を見せて、溯行慾を唆る。アカソブ澤の赤兀の手前、センダク平に續く尾根には赤谷道がはっきり見える。

午前十一時、頂上を辭して鞍部に戻る。大日直下の御池の平まで行くつもりであつたが、頂上から望んでも殘雪は見えないので、水がなくなつてゐはせぬかとの虞から、今晩は御手洗ノ池泊りと云ふ事にする。從つて時間に餘裕が生じたので、人夫達は先へやつて、私達はゆっくり景觀を恣にしながら行く。午前十一時卅分、鞍部出發、最初の峰は少し越後側を搦らんで過ぎ、午前二時烏帽子岳の頂上に着く。人夫達は既に目下の池のほとりに着てゐる（この池を最初は御手洗ノ池と思つたが、それは誤で、御手洗ノ池はこれより先であつた。しかし大きさは此の方が遙かに大きかつた）。二時三十分池のほとりに着く。餘りに水がよくないので、助百と春一とを泊り場捜しにやる。その結果、尾根の最低部まで行く事に決める。三時三十分幕營地着。

この幕營地は尾根より二十米位下つた處で檜山澤の側にある。この度の如く意外に殘雪すくなき時に於てすら、恐くは九月まで消えぬであらう程の殘雪を有し、而も地形懷の如くにして風を避けたる草原であり、推賞し得る好幕營地と思ふ。只枯木を得るに少し遠いのが、瑕といへばいへる。

五　湯ノ平を經て赤谷へ

八月十日。今日も晴天である、木村氏と春利は大日岳、飯豐山へ向ひ、助百と春一はダイグラを經て歸村するので、木村氏等と一緒に出掛ける。私と弟とは會遊の地なので居殘り、越後道を捜したり薪を切つたりする事にする。

木村氏は午前六時二十分幕營地發、九時四十分大日岳頂上着。途中大日尾根で熊の生々しい糞を見たといふ。頂上より烏帽子、石コロミ澤の頭の豪壯な景觀に醉ひ、十時大日頂上出發、途中食事を爲して、午後一時五分に飯豐神社着。一時四十五分本社發。四時二十分に幕營地に歸着した。

午後、風向きが變つて、羽前側の谷からしきりに雲が湧く。陽は笠をかぶつてゐる。

八月十一日。起きて見れば一面の霧である。午

前七時十分出發。地圖の通りに尾根をもどり、陣竹の藪の切開けを越えると越後側に出る。草の上の踏んだ跡をまつすぐに降り、右折して陣竹の切開けを横にへづると一寸した兀場に出る。こゝで道が不明となるが、兀場を左寄りにまつすぐに下れば、アカソブ澤源流に出で、流れの左右の藪の鉈目は明瞭になつてゐる。流れの中を暫く下れば、道は右折して澤をはなれ、立派な切開けはセンダク平左の尾根を通つて、大體地圖道通りにセンダク澤へとついてゐる。午前九時四十分センダク澤着。十時出發。あとは長い〳〵へづりとなる。切開けは相當立派だけれど、足場が惡い。泌々沼井氏等の苦闘を偲ぶ。午後一時不動ノ瀑を望む。不動ノ瀑から湯ノ平溫泉までは隨分遠かつた。折柄の雨に肌着まで濡れて、午後三時半溫泉に着く。宿は天幕張りで、湯壺とは一、二町はなれてゐる。

本尾根から湯ノ平までは全く沼井氏の記事の通りである。今年はそれが藪が苅られたといふ丈である。只センダク澤より下流には、陣竹は餘りなかつた。沼井氏は道より下方をへづられたものか。

八月十二日。蚊に惱まされつゝ一夜を明す。午前八時十分溫泉發。道は昨日に比べると鋪道の上を歩む樣なものである。午後十二時四十分鐵山猿橋着。湯ノ平まで三里一丁二十間と記されてある。二時五十分赤谷驛着。四時二十二分發の列車で新發田へと向ふ。雲は低く垂れ込めて二王子岳は姿を仰ぐに由ない。越の野には稻がもう穗をそろへて風にそよぎ、既に秋立つの感が深い。

附記

一、詳細に澤名、地名等を記入して青寫眞をつくられた別宮沼井の兩氏及び青寫眞を貸與下さつた書上喜太郎氏に深く感謝の意を表する。

二、沼井氏記入のカヂカハは、小玉川方面では、イリモンナイと稱し、カヂカハと云ふのはオホハゲ（ヤゾウ泊り右の一六九二・三米の點）より出でゝ、梅花皮澤と石コロミ澤との出合の上百米位の處で、石コロミ澤と落合ふ澤を指してゐる。

三、ダイグラを經る登山道は本年改修。大又澤を渉らぬ樣になれる由。即ち檜山澤を大又澤との出合より少しく上流にて渉り、ダイグラにとりつける樣にせる由である。

四、川入口、米澤口、玉川口、夫々澤に獨特の趣はあれど、赤谷に至つては特に前三者と趣を異にする處ある樣に思はれ

る。湯ノ平、センダク澤間の道が今少し改修されたら極めて愉快な道となるであらう。大日、烏帽子への澤登りも興多きものであらう。

五、本年の狀況に於ては、赤谷口も絶對的に人夫を必要とする程の事はない。しかし國境近くに於て少しく迷ふ事を豫想せねばなるまい。湯ノ平から飯豐本社（四ノ王子）まで十二三時間はかゝると見ねばなるまい。

六、人夫難は豫想したところであつたが、割合に惠まれた方だつた（藤田虎吉氏の盡力も大きい）。春利、助百、春一共に兵隊歸りの云はゞ村の新知識。春利は毎日萬年筆で日記をつけてゐたのには感心した。助百、春一二人も若いのに似合はず、生意氣な處は少しもなく、實直に働いてくれた。

七、屢〻記した樣に今年の雪量はすくなかつた。時期が八月であつた爲めもあらう。御西北側の大雪田の如きも見るも哀れな狀態であつた。七月初旬であつたら、梅花皮澤も餘程下流から雪が踏めるであらう。

八、石コロミ澤は豫想外に樂な澤であつた。傾斜も大して急でない。ピツケルを持つた事は我ながら苦笑を禁じ得ぬ。

○羽後の山岳の見方

羽後には、日本アルプス地方の如き、海面高を持つて居るものはない。然し彼の地方の山岳は、大體の地盤の高い上に又ぞろ、山がのし上つたと云ふ工合に、山容をなして居る登り初めの處が既に相當の海面高の處である。即ち山麓は既に高臺である。羽後の山岳は左樣でない。山麓とても、日本アルプス程の標高は持たぬ。山裾から山頂までの高さ即ち山容として眺むる時は、中央日本に鎮座する連峰に劣らぬものもないでもない。同じ岳でも、それを眺むる位置によつて、非常に見劣りする。奥羽の雄鎮鳥海山でも、其の山麓附近や、羽前の方面から望めば、前衞の低い山が眼の前に幅を効かして、視線の高度に錯覺を生ずる關係上、本隊は平凡な高盛り位しか見えず、何人にもあの山かと思はれるらしい。然し之れを秋田市の方から觀るならば、山麓にうごめく、低山性の丘陵も其の影を沒し、ヌックと南天を摩し、高度雄大、山容又富士に酷似し、自づと羽後富士、秋田富士の名稱の生るる所以で、秀靈の表徵である。遠望で山を賞せんとならば、其の見る位置によつて大差がある。

秋田市の東に聳ゆるは太平山の中岳で、最高の

奥岳は中岳の後方から連嶺を傳ふて、餘程東に寄つてゐる。秋田市から南に離れても北に進んでも、奥岳頂點は見えるが、秋田市の附近では、奥岳の尖頂の見える所が少い。中岳が恰も太平山を代表する如く、西面してゐる。其の西面振りは正面をなして、市を離れて北に行つても、南に進んでも、中岳は其の側面を見せるだけである、中岳の向きは恰も、秋田市に對して正面に正座してる樣なものである。前岳と云ふのは中岳の右手前、向つて左手前にある小岳で、其處には泊る所もある。中岳には別に堂屋もなく、奥岳には社殿も宿舍もある。此處は樹木の丈けが短く、高山の趣きがある。高さが三千尺餘でも、位置が北にあるので、植物の發生狀態で氣候に判斷すれば、中央日本の五六千尺に相當する。

それから縱走の價値のありそうなのは、秋田青森兩縣の境界をなし、日本海から本州中央山脈に殆んど直角に走つてる岳山(ダケヤマ)である。未だ多くの人に知られぬ。怪巖奇峰がザラ〳〵してゐるらしい。北秋田郡には山びとの傳說、童話や其の遺跡に富むは田代岳（早口岳とも云ふ）、溫容で、なだらかな格構で、至る所スキー勾配でもありそうなのは、森吉山である、四千七百九十八尺よりないが、氣候は、日本アルプス地方の六七千尺に相當する。之等の諸山は羽後の山岳で頭角を現はしてゐるものである、探勝の方では、男鹿半島の眞山(シンザン)、本山(ホンザン)、寒風山、其の外海の島巡り、象潟の奇礁等であるが、山岳としては先づ以上の通りであるが、鄕國でありながら、まだ私の見てない仙北郡地方に行けば、駒ヶ岳とか、其の他色々な隱れたる雄物があるであらう。（山本德三郎）

○瀧谷溫泉の復活

飯豐山越後口に當る瀧谷溫泉場は十數年前廢滅に歸し、從て此の方面から登山するには、舊溫泉場に至るにすら困難と危險さへ經驗しなければならないと云ふ狀態であつたのは甚だ遺憾な事である。近年登山熱の勃興と共に、湯治客といふよりも寧ろ登山客を當て込むだらしいが、とに角この

八甲田石倉岳の岩上に地衣殊に Umbillicaria carolliniana の密生せる狀

上圖の一部を更に廓大して示す

武田久吉氏撮影

溫泉も本年は復活することゝなり、去る七月十五日を期して開場するといふことであつた。それと共に飯豐の登路も刈拂つたとかいふ噂であるが、本年はどの位の程度に於て之を行つたか明でないから、登山者は赤谷停車場にでも照會して、現狀を確めた上でなければおいそれと出掛けられないが、何はともあれ結構な話である。飯豐登山諸道に冠たるこの道があけば、飯豐山の核心に喰ひ入つて、此の山塊を研究することが出來、溪谷と山稜の雙美を觀察することも容易となる譯である。それと共に此の溫泉經營者も登山客の便宜を計ることを忘れないで、案内者の養成や人夫の周旋にも心を用ひて貰ひ度いものである。

瀧谷溫泉の名は他縣にも類が少いようだし、特徵のある良い名稱であるに關らず、何と思つてか今はこの名をやめて、湯ノ平溫泉といふ平々凡々たるものに改めたそうである。それから推して經營者の頭腦も幾分疑はれないでもないが、斯かる溫泉場が善良な發達を遂げると又面白からぬ道を辿るとは、一方に於てそれを訪ねる人々の誘導の良否にも關係することであるから、兩々相俟つて登山根據地として理想に近い發達を遂げさせ度いものである。

（武田）

○閼伽井嶽と龍燈

増淵吉長

閼伽井嶽は磐越東線（平——郡山）赤井驛の西北方にある標高六百〇五米に過ぎぬ低い山で、又景色も大してよくはないが、龍燈と稱する正體不明の光が出るので有名である。これは不知火程には問題となつて居ない樣であるが、特志家には充分研究の餘地がある。正體についても色々の說があるが何れも單なる當推量で、或は電氣的のものであらうと云ひ、又山上の寺の橫手迄來て消える爲、浮ばれぬ死者の靈が濟度されんとして來るのであるとさへ言はれてゐる。私はかねて龍燈の名は聞いて居たが是非一度見たいと思つて閼伽井登山を試みたわけである。

上野を朝の八時に出て(昭和二年八月十八日)、常磐線を行くと、午後の二時頃には平に着く。此處で郡山行に乘換へると、もう次の驛が赤井で、關伽井嶽は驛の前面に聳え一見してそれと知られる。この邊も常磐炭田の一部で山麓には二三の小炭坑がある。それで驛から麓までは貨物の引込線と「トロ」があり、又自動車もある樣であつた。「トロ」には賴めば乘せてくれると聞いて行つたが行程僅かに二十町であるから、先方の時間の都合を待つより歩いた方がましである。「トロ」の終點の右手には品川白煉瓦赤井工業所と云ふ看板が見える。こゝを少し行くと山路にかゝる。一體この邊は平附近の人が用事で來るか、又は信心家が山頂の藥師堂に參拜する位の外は、あまり都會人士は寄りつかないとみえて、登山の設備は皆無と云つてよい。又設備をしたとしても、それを利用する樣な人は恐らくあるまい。唯麓に講中の休む茶店が一軒眼についた。この先から段々上りになり、「從是三十六丁」と記した石が立てゝある。道は廣いダラ〳〵登りで、頂上迄馬が通ふ。その兩側には密接してはゐないが、下から上迄中位の大さの松がずつと續いて、風致保存林と書いた杭が所々に立てられてある。この松並木は驛から見てもよくわかり、あれが登路であらうと思はせる。木間より眺めると、右も左も唯一面に起伏した山の波で、俗に九十九谷と言ふ樣な種類の景色に似て居る。

大分登つた頃、左側に瀧不動に下る細道がある。瀧と云ふのも名ばかりで、筧で引いた水が岩の上から落ちてゐて、その下に粗末な家が一軒あるのみであつた。これから更に下る細道があつたが、この處で止めた。元來この山は枝道が極めて少い。それに道があまりよいので、左右の景色を見なければ、何處かの田舍の街道を歩く樣な氣がする。頂上に近づくと右手に不動明王、兩童子その他の石像が七つ八つあつて、竹の先から水が出て居る。こゝらへ來ると段々木が茂つて來て、やがて山門に達する。山門のすぐ上が醫王堂で、渡り廊下で坊と續いてゐる。

寺は常福密寺と稱して、新義眞言宗、智山派に

屬し、本尊は藥師如來である。問題の龍燈はこの藥師如來を安置した醫王堂の横手に出ると云ふ。寺の前は廣々とした庭で、前面は眺望がよい。坊は御籠料として一圓出せば泊めてくれる。今宵はこゝで一夜を明す事とした。

坊は講中その他御籠りをする人の爲、特に泊める樣に建てゝあつて、電燈の設備もあり室内は勿論、境内には五つ六つ外燈がつけてある。寺の横手を少し下ると弘法水と呼ぶ井戸があつて、此處から下の方に相當によい道が通じてゐる。後で聞いたら之は何やら云ふ炭坑に行く道だそうである。當日の參拜者は私の外に唯一組、しかもその人は以前當山の弟子であつた人で、東京の身寄の人を案内して來たのだと云ふ。

しばらくして風呂に入ると偶然その坊さんと一緒になつたが、一言二言話しをするうちに、色々な事を聞かせてくれた。その人の話によると、この風呂の水は裏から流れ出る水を筧で引いたもので、これと下の井戸とが主な水源であるらしい。又龍燈と云ふのは形は寶珠の玉に似て蠟燭の光の樣なものが夜中の十二時前後に、フワリ〳〵と飛んで來るのであつて、この時間に醫王堂の横手で根氣よく注意してゐると見えるそうである。しかし之は霧の深い夜や、月光の强い夜は駄目であると云ふ。それに左程高く昇らないと云ふ事であるから、見に行く方は場所を注意しないと、木の蔭や屋根の後になつて、見落す恐れがある。又或る書物には無數の光が出る樣に記されてあつたが、坊さんの話では一晩に一つしか出ないと云ふ。

又この寺の後から可成奥へ行くと、水石山と言ふ處がある。この名の起つた由來は次の如くである。この山は閼伽井嶽より少し高いが（七百三十五米）、山上に一つの大きな石があつて、その石の表面の凹みに、一尺四方位（この位と云ふ坊さんの手眞似より推定す）常に水が溜つてゐて、如何なる旱魃の時でも決して無くならない。そこで雨乞をする時、その水を少し取つて來るのであるが、中々御利益があると言ふ。

食事は寺の事であるから、一切精進料理で、十二三歳位の男の子が、折目正しい袴をつけてお給

仕に出る。夕食をすませて休んで居ると、最早薄暗くなつた頃、チリン〳〵と鈴を鳴しながら登つて來た者がある。しばらく醫王堂の前で讀經してゐたが、やがて坊へ來て、一夜の宿を乞ふた。見れば未だ若い男で巡禮姿であつた。これで泊り客は都合三組になつた事になる。

夜更けてから外に出てみると、前面の山には、點々として電燈が見える。之は皆炭坑で、この附近には半里位間をおいて四つ五つ炭坑がある。時計を見ると、十一時頃であつたので朧げな電燈の下を本堂の方にと足を進めたが、その夜は早くから月が出て、皎々と冴えた光を投げてゐる。これでは折角の龍燈も駄目ではあるまいかと危んだが、果して思つた通り、一時頃迄目を皿の様にして待つたが、遂に見る事が出來なかつた。

これで閼伽井登山の目的も、まんまと失敗に歸したわけである。もう一日待つて見ようかと云ふ氣も、無い事はなかつたが、月の出も同じ様だし一日延すのも退屈であるので、又來る機會もあらうと、その翌朝早々に寺を辭した。かくして折角奇を求めた登山も、平凡の中に終りをつげ、同時にこの紀行文もこゝで筆を擱く事にする。歸途は東北本線に出ようと郡山に向つた。

大鳥嶽と只見川溪谷

長谷川孝一

私は昨年四月下旬未だ見ぬ宿望の山として、御神樂淺草の山々に登らうと友と二人で一心に準備したことがある。しかし其の時同行者の都合惡しく、爲に自分は單獨旅行を中止したのであつた。其の後本年になつて六月の小集會の時はからずも此等の山々が藤島氏によつて登られたことを知つた。靜かな深い山、未だ歩かれてゐない其の溪谷の美しいさが、深く頭に殘つたのであつた。それで私は今年（大正十五年）仲間の者は相變らず穗高や槍ノ北鐵尾根等の登攀に沒頭してゐたが、一人靜かな道程を作つた。それが今度の只見川行で、私にとつては寂しくも又緊張した山行であつた。

栃尾又

八月六日夜、穗高から歸つた田中君が同行する筈であつたが、結局一人上野を立つことになつた。天候は大丈夫らしい。飯田町驛と違ひ登山者

右　飯豐川（鐵山猿橋附近）

左　センダク澤（最奥の山は烏帽子岳）

中央　烏帽子岳中腹より見たる石コロミ澤ノ頭

右　藪尾根二〇〇米の地點より石コロミ澤を望む

左　石コロミ澤とイリモンナイとの出會より石コロミ澤ノ頭を望む（正面の澤は石コロミ澤）

福田昌雄氏撮影

らしいものは一人も居なかつた。翌朝長岡で乘替、小出に九時卅分着。今この鐵道は越後湯澤まで開通してゐる。今日は三里歩けば栃尾又溫泉に達するので驛前からぶら〳〵歩き出す。

午後二時卅分大湯に着いて東榮館に泊ることにする。此處は越後と福嶋の國境に近い靜な溫泉場で、日光から尾瀨を通つて越後に出る人、越後から日光或は會津に越える人々の爲には絶好の湯場であらう。夜は高頭さんとよく駒や平岳附近を歩いたと云ふ宿の若主人と十時過ぐるまで附近の山話に耽つた。

今度は何處に這入りますかときくので大烏嶽から只見川に降りて銀山平須原口まで出て見たいと言ふと、其れは面白いでせう、案内人は手に入りましたかとのことに、實は來る途中で銀山平に出かせぎ（鑛）に行く人と二人切りだと話す。何しろ惡い場所だからお氣を附けてと注意されて床に入つた。

大烏未丈へ

八月八日晴。午前五時頃同行してくれると云ふ藤井大治郎君の泊つてゐる下の座敷へ行くと、もう天氣がよいから出ませうかと云ふので早速出發することにする。食料は銀山平須原口に出るまでの分を用意した。六時東榮館發、佐梨川の釣橋を渡ると、大湯から七、八町を離れた栃尾又溫泉への道に出る。栃尾又から三ッ又口小屋へ行くには、溪に沿うて堤神樂山から來る大きな尾根をからんで次第に登る。展望は開けてゐない。それでも尾根の頭に近くなつて來ると殘雪の多い駒ヶ岳が目の前に美しく雄大に聳える。目指す大烏未丈嶽は栃尾又からは勿論、此處に來てからも其の姿を現さなかつた。三ッ又口ノ小屋へは此の尾根を踰えて黑又川の一支流熊ノ澤に下つて行くので、數回徒渉をする。一寸壁混りの面白い谷だ。

九時卅分熊ノ澤の落合三ッ又口に着く。大湯から三時間半。道は石混りで歩きよいとは言へない。此の邊の黑又川の兩岸は實に美しい立派な岩壁の連續であつた。同行の藤井君は岩魚取の名人ださうで、大きなのが見えると始終流れを見ては杖を振つてくやしがつてゐた。いよ〳〵此處から

未丈の登りとなる。宿望であつた未丈ヶ嶽は此處から仰ぐと少しも他の山々から見たやうに美しい尖峰ではなく、又二〇〇〇米以下の峰である爲か殘雪一つなかつた。たゞ尨大な何となく深い感じのする樹林の山であつた。三ッ又口から百米突も登るとすぐ下に小屋が小さくなつて見える。此の小屋は一名萬助小屋で通つてゐるらしい。これから夏季水量が少なくなると、近鄕の岩魚取りが落合ふ場所だと藤井君が言ふた。小屋は其時分には何でも揃つてゐるといふ。未丈の登りは割合急な瘠尾根を一直線に頂上に向つてゐる。太陽はぢり〳〵照り付けるが、兩側の深い澤から吹き上る冷たい風に暑さを忘れる。藤井君に澤の名を尋ねたが知らないと答へた。登るにつれて、右方駒、中ノ岳の展望がすばらしい。殘雪は見事に山肌を飾つて、中腹邊には大きな雪溪が指摘される。最も左方で枝折峠の上に雄大な岩稜を兩肩の如く高く怒らしてゐるのは荒澤山である。成程實に立派な山だ。藤井君は未だ荒澤には誰も登つた者はないから面白からうと言ふ。今日の行程としては未丈嶽を極めて只見川の溪谷に降るのである。始めてのことであるから行ける所までと言ふので呑氣であつた。左下の澤では盛にうぐひすが囀つてゐる。この登りに水のないのは閉口であつた。栃尾又から三ッ又までの間に水を呑んでしまつたので、それを補充しやうとしても、黑又川の岩壁が高いので汲むことが出來ず、空しく水筒を手にして歸つて來た。藤井君に據ると頂上の少しく下の所に水が出てゐると云ふので安心した。午後一時四十分頃水の出てゐる所に來る。此處までゞ尾根を登りつめたわけで三時間半を要した。未丈の頭がすぐ裏に見える。途中左手に巨大な三つの岩がある。此は地圖に記入してないが、未丈の三ッ岩と言ふのである。そこの岩窟ではよく熊を見ると藤井君は言つてゐた。私等は其處で中食をすることにして、荷を下ろして物好きにも一番手前の岩の頭まで行く。大きな石楠花が密生してゐるので枝の上を渡つた。岩頭は越後平原と守門・淺草・鬼面等の絶好展望臺である。下をのぞくと岩が抉れてゐるので目が眩みさうだ。三ッ又口から此處に

引き上げてゐる澤には、雪溪の殘骸らしい大きな殘雪が澤に跨つてゐる。二人が中食してゐると、すぐ前の二つ目の巨大な岩頭に三尺以上もある大鷲が顯れた、そして私等を見付ると忽ち物凄い羽搏の音を殘して飛び去つたが、私等が未丈嶽の肩（大鳥峠）に達した時、再び三ッ岩の上に大きな輪を描きながら舞ひ下りやうとしてゐた。「成程大鳥がゐるね」と私が言ふと、藤井君は「きつと巢をかけてゐるんです」と云つた。

午後二時未丈嶽頂上着、大鳥峠から十五分位である。數年前大鳥銅山發掘當時は數百人の人夫が入り込み其の後又伐採の爲に人夫が未丈を越えたので、大鳥越或は大鳥峠と云はれるやうになつた。峠には山神の石祠があつた。其の後大鳥越は銅山廢坑の結果道は惡くなる一方であるとのことである。未丈嶽の三ッ又側（越後側）は樹林の密生で、只見川側（福島側）は美しい草地である。そして頂上の福島側には大きな雪田があつた。頂上に立つて始めて枝折峠を下瞰し、駒・中・荒澤の諸山を始め利根川上流の山々や、只見の大溪谷から南會津郡の山々、及び遠く守門山方面が一望の中におさめられた。北を見ると直ぐ目の前に一つの大きな隆起が聳えてゐる、これが地圖に一三六九米と記されたもので、下大鳥嶽の名がある。只見川に出るには、未丈から大鳥澤を降るか又は下大鳥嶽の手前で本尾根から東に分岐した支脈を辿るかの二途がある。後者は地圖に明記されたもので、私等は之を取つた。途中地圖にも出てゐる無名の沼がある。此の沼までは未丈からも下大鳥からも奇麗な草地の尾根續きである。尾根の分岐點三つ又から下大鳥へは二十分位で行ける。池に着いたのは四時で、尾根には三ヶ所ばかり殘雪があつた。何れも只見川の方の日蔭の所である。池は極く少さなもので周圍僅に二町位。周りに浮草や葦が密生してゐた。名は誰も知らないが、銅山や伐採の人夫が大鳥の池と呼んでゐたとかで、藤井君は大鳥ノ池として置くがいゝでせうと提言する。大鳥澤落口には銅山小屋が必ず殘つてゐやうといふので、今日は其處まで行くことにする。降りは陣竹と雜草とで一人では迷いやすい。兎に角案内な

しでは隨分注意して進まねばならない所がある。五時半頃一一七九米邊迄降ると、只見川の水音が耳に入つて來た。もうすぐだなと元氣になつて邪魔になる陣竹をかきわけて行くと、道は此處から東南に派出した尾根に沿うて、大鳥澤落口の方に下つて行く。しばらくして突然道が二尺幅位にひろまり、只見川が木立の間に隱見し、水音も次第に大きく耳に響く、やがて大鳥澤の水音も聞えるやうになり、五時四十五分大鳥澤の落口に小屋を見出して、先づ荷物を其處へおろしたまゝ只見川の流を見に行く。先着の藤井君は岩魚捕りに出懸けたらしく荷だけが置いてあつた。それで約束の通り私は早速夕食の準備に取り懸る。惡いとは思つたが小屋のかぎをはずして中に入つた。小屋は北アルプスの大黑銅山の建物によく似てゐた。中は數年前使用したらしいものが色々取り散されたまゝであつた。物々しい熊狩りの道具なども揃つてゐた。九尺位の槍が三本もあつた。米研ぎに大鳥澤に行く。この澤は壁のない幅廣い流れであつた。兩岸は陣竹の密生で一歩も足を入れられない。今自分の居る邊から一丁位下で大鳥澤は只見川に合流してゐる。飯盒の米も煮えて湯を沸かしてゐると藤井君が「一匹も取れない」と言つて小屋に這入つた。そして今度は其處らを探して蚊帳の古いのを持ち出し網を作つた。何しろ岩魚がピン〳〵ゐると一人でさわいでゐた。

夜は大鳥澤と只見川との水音とが一しよになつて聞える外には物の音もない。疲れた二人は十時頃寢に就いた。

夜半にふと目がさめるとぽつ〳〵と雨が降つてゐる。私は極度に不安になつて來た。明日の行程は大鳥澤落口から須原口まで只見川を遡るのである。それがどのやうな谷か未知であるだけ心配でたまらなかつた。その内にとろ〳〵と少し寢たと見えて、今度はざあといふ押し流すやうな大雨の音に私も藤井君も目がさめた、時計は午前二時を指してゐた。今日は滯在かも知れないとやゝ腹をきめてまた〳〵とろ〳〵寢入つた。

八月九日、雨。午前五時起きて火をたく。藤井君が戸を開けて「やあ出た〳〵」と云ふので、自分

も外を見る。只見川は物凄いばかりに增水してゐる。大鳥澤は未だ水も青い、併しすぐ押出して來るから早く向ふ岸に徒渉して置かなくてはと藤井君が急がす。然し未だ起きたばかりで飯も炊いてゐない。幸に昨日米を研いであつたのが何よりだつた。增水の爲にもう河の水は濁つてしまつた。止むなく水筒の水を使用して飯をたいた。六時半頃朝食を喫してゐると、藤井君が氣に懸ると見えて大鳥澤の偵察に出る。暫くして歸ると「もう駄目だ」と云ふ。私はすつかり不安になつてしまつた。それでも一番惡い場所に來て悄氣てゐてはと思つて「兎に角今日は滯在」と決めて水のひくのを待つことにする。此處から須原口まで二里弱ではあるが、相當惡場と見て私は三時間の行程と積つたものゝ、今日のやうな大雨で增水しては危險であらう。しかし元の道を引き返すことは問題にならないと思つた。藤井君の話では、大鳥澤の水は雨が小止にさへなればすぐ減くが、只見川の方は今日一日位滯在しても、水量に變りはないとのことであつた。私等は出發の用意をしたまゝ悄然としてなすこともなく只見川の流を眺めてゐた。

雨中須原口まで

時は猶豫なく過ぎて午前十時となつた。其間することもないので藤井君は例の蚊帳の網を持ち出して魚捕りをやる、忽ちカジカや岩魚を二三十疋も掬ひ上げたので、私は早速陣竹を削つて串を作り、鹽燒にして食べた。大鳥澤を見ると大部水量が減つたやうに思へる。藤井君は「きつと峯の方は雨が止んだらう」と云ふ。十時半頃只見川は相變らず物凄い濁流であるが、大鳥澤の水は青く澄んで昨日米を研いだ石も頭を出して來た。今の中だと云ふので二人は小屋を飛び出す。雨も小止みとなつてゐた。

十一時、陣竹をたよりに七八間川下に下つて、只見川との合流點より二三十間上手の所を腰まで這入つて徒渉した。水はかなり冷たかつた。

これで案じた程のこともなく、徒渉は無事に濟んだがもう道と云ふ道はなかつた。陣竹を押し分けて只見川の岸に出る。賴む所は數年前八崎沼まで行つたと云ふ藤井君の記憶のみである。雨は一

入降り增さつて來たやうだ。兩岸の密林は盛に往來する眞白な雲霧の中に隱見する。二人はひた〳〵と水に浸りながら岸沿ひに進んだ。可なり廣い磧らしいが今は一面の水である。水の深い所は之を避けて岸に上り、陣竹を押し分けて迂回した りした。

午後一時頃そろ〳〵岩壁が現れて來た。すさまじい濁流が其壁の下を洗つてゐる。岩壁をさけて斜面の通れさうな所を一歩〳〵とへづつて行く。岩沿ひの道といふのも時々さしひきする水の中に現れる。陣竹を押し分けた道らしいものもある。總じて此谷は思つたより明るい廣い渓谷であつた。進むに從つて次第に岩壁は兩岸に現れるが、地圖に赤川と記入してある川の字のあたり、即ち一〇七六米突の三角點ある峰の直下附近までは、別に巨大な壁もなく、陣竹或は岩の上を行くのである。この邊には數日前の大水におし流された巨木が七八間も高い岸上に投出されてゐた、草などは三十間位上まで横にねてゐる。私等は其の上を行く。午後一時四十分流れが著しく丸山側に折れてゐる所に來た、一〇七六米三角點の直東らしい、樣子が地圖とは大に違つてゐる。岩壁をへつれる丈へつつて行くと突然高さ七十尺位な竪壁が行手の流の折れてゐる角に現れる。向ふ岸も同じ樣な大きな岩壁で、川はすごい音を立てて流れてゐる。時々ゴトン〳〵と云ふ音が水中に聞える。餘程大きな石がコヅキ合つてゐるらしい。雨は依然として止まない。地圖を出して見るが私等はどの邊をへづつてゐるのか一向に判然しない。この岩壁は上に廻つて陣竹を押分ける事にする。斜面が急で一歩も油斷は出來ない。一時間も陣竹と戰つて百米近く登つた。見當がつかなくなると流が木立の間から見えるので岩壁の上迄覗きに行つたりする。もう三時を過ぎた。晴れてゐれば今頃は八崎沼まで行つてゐるのだと藤井君は言ふ、この分では晩迄に八崎沼へ出られるか心配になつてくる。又登ると前方に瀧が落ちてゐる。その落口に大石が危くのり出してゐるので、其の上を廻る事にした。一つ〳〵足場を切らなければならない程に惡い場所である。此處が後に地圖で判斷して瀧澤の

出合であることがわかた。大鳥澤の落口と曲淵との丁度中間と云つてよい。此處は瀧と其の下に七八十尺の岩壁が二箇所も連續してゐる惡場で、須原口までの間の一番の難場だと後で聞いた。須原の人達は八崎のマキクラ(一名八崎沼の裏マキ)と呼んでゐる。瀧の上を無事に通過してから一先づ只見川に降りて見ると岸通り行けそうなので、それに沿うて進む。袖澤らしい大きな澤が左から來てゐるのが見られた、上流一帶が非常に明くなり兩岸の山も少しく低くなつた。全身濡れぬ所もないので寒さにガタ〳〵ふるへ出す。少しく休んで食事をした後藤井君が偵察に行く。やがて歸つて來て何時になると開くのでもう五時に近いと答へる。岸に沿うては到底今日の內に沼までも出られない、すぐ先にも壁があると話した。私はひどく疲れたので荷を全部藤井君に持つてもらふことにした。元氣な藤井君は之でも荷が輕過ぎると云つて、どん〳〵又陣竹を分け始める。相談の結果川傳ひはやめて丸山方面を目指して陣竹の中を登ることにしたのである。五時頃倒木の間をくゞり拔け陣竹を押分けて、漸く辿り着いた所は、丸山北方の草地で、其處から再び只見川に向つて陣竹を分けてゐるとかすかな道跡を見出した。其中に二尺幅の立派な道が丸山の方から降りてゐるのに合する。小躍りして速力を早めた。只見川の水音がかすかに耳に入る。(○丸山北方の草地とあるは恐らく誤なる可し、一時間足らずの間に陣竹を分けて五六百米を上下するは不可能の事と信ず。)五時三十五分先頭の藤井君が八崎沼を見付けた。夕闇が迫つてゐるので殘念ながら横目に見て行く。楕圓形をした長さ四五丁幅一丁位もあらうと思はれる沼である。道が非常によいので足も捗り、六時頃仕入澤に來た、水量の少ない三筋四筋に分れて流れてゐる澤で、其間に木立が林をなしてゐる。仕入澤から五十米も山足をからんで行くと須原口銀山平が前方に展開した。北又川がすぐ下で只見川と合流してゐる。六時卅分北又川の岸で須原口の一番の奥にある家を叩いて今夜の宿を願つた。星作と云ふ人の家で十二三人の家族である。今非常に蠶で忙しい。私を見て今頃何處から來られた、

日光からかと聞くので、大鳥澤落口から只見川に沿うて來たと答へたら驚いてゐた。それでも心よく泊めてくれたのは嬉しかつた。私等が此處に着いた時、上流の方で川流れがあつたと云つて騒いでゐる所であつた、そして星作の若主人が間もなく歸つて來て、とう〳〵駄目だつたと云つてゐた。外は雨も止んで日光の方の空が明くなつて來た。（一九二六、八、一九）

○左岸と右岸及び瀑と瀧

河の左岸と右岸及び瀑と瀧との區別に就ては、曾て本誌第十五年第一號に書いたことがあるが、河の左岸と右岸を定めるには、下流に面して左を左岸とし右を右岸とすることになつてゐる。故に河を下る際にはよろしいけれども、反對に河を溯るに當りて漫然と左岸右岸の文字を使用する時には、讀者に大きな不都合を來さしむる場合がないとも限らないから、若し此等の文字を記文中に使用せらるゝ折には、嚴に其約束に從はれたいものである。

瀑の字には飛泉とか又は懸水といふやうな意があつて、岩頭から一躍して落下するタキは、よろしく皆瀑の字を用ふ可きであらう。例を日光に取れば、華嚴、裏見、方等、盤若等は飛泉であり懸水であるから瀑の字を使用するのが正しい。然るに瀧の字には飛泉や懸水の意は無く、瀨と同じく奔湍の意を持つてゐるに過ぎないから、決して瀑と同じではない筈である。卽ち岩面を瀉下するものがそれで、湯瀧や霧降瀧などが之に相當してゐる。勿論時には孰れに屬せしむ可きや判斷に困しむやうな場合もあらうが、大抵は區別し得るものであるから、これも字義通りに區別して使用した方が、頗る便利であらう。此頃はタキであれば飛泉でも奔湍でも瀧の字を使用するのが一般の傾向らしいが、本誌上ではこの區別を立てゝ讀者に溪谷の模樣を知らしむる一助としたいものである。地圖に瀧とあつても實際は瀑である場合には、遠慮なく瀑と訂正して不都合はあるまいと信ずる。

（木　暮）

雜報

○秩父宮穂高連峰御縱走

『山の殿下』秩父宮の日本アルプス穂高縱走の御壯擧につかせらるゝ日は來た、二十一日午前十一時三十一分殿下には松本驛に御着、先着の渡邊御用掛を始め槇有恒、早川種三、岡部長量諸氏のお出迎を受けさせられて直に筑摩鐵道にお乘換、同三十五分松本發島々驛に向はせられた。殿下には登山服に純白の運動帽を召され先年歐洲アルプスの氷の壁やマッターホルンの難險で御使用遊ばされた御愛用のピッケルを御右脇に抱へさせられ御姿りゝしく拜された。この日紺碧の空はあくまでも晴れ殿下を迎へ奉る北アルプスの前衞常念岳はヒラミット形の山頂鮮かに聳え、尾根續きに有明その他の諸峰もえりを合せひだを正して車窓遙に展開する。殿下には渡邊御用掛や槇有恒氏を顧みさせられ先年中房、燕方面から槍ヶ岳に縱走された當時の御想ひ出や昨年歐洲アルプスを御踏破遊ばされたみぎりの壯快な登山談を交はされつゝ途中にて供餐を召され、午後零時十四分島々驛に御着、直に縣廳差し廻しの自動車に召され島々谷登山口御着こゝで自動車をすて松本營林署で設備したトロに召された。トロは長さ一間幅三尺高さ四尺のお粗末なもので殿下を中に前と左右に前田事務官、渡邊御用係槇、岡部、早川の諸氏が陪乘し、漸く膝を組交す程の窮屈さである。岩に激する水は瀧となつてその響が御一行の談話もかき消すうちにトロは岩魚止に着、ここにトロを捨てゝ御一行はいよいよ登山の列を作られる。殿下には自らリュックサックを背負はせられ爪先あがりの峠道に山行の歩みを運ばせられたやがて谷はゆきづまりとなり霞澤岳の尾根を溪流と分れてジグザグの急坂をよぢ德本峠の頂上に立たせられたのは暮易い山峽に夕もや立こむる六時近くであつた。

二十一日午後六時五分槇有恒氏を先頭に德本峠から上高地の谷へと向はせられた殿下の御歩調は非常に早くジグザグのまはり道を縫つて下られる、まるで東京のペーブメントの上を歩くやうに樂にお歩きになる間もなく夜が一行を包んだ。午後七時無事河童橋の手前小梨平に差しかゝると年若い村の娘達が整列して殿下の御通過を奉迎してゐる。午後八時殿下は上高地清水屋旅館御到着千葉長野縣知事の御案内で新館二階八疊の間にいらせられた、一旦廊下に敷きつめられた白布も全然取拂ひ御部屋も極めてお粗末なものですぐこれに隣合つて前田事務官、渡邊御用掛の部屋に續いてゐる。殿下には直にお召換の上温泉につかつて疲れをいやされた。晩餐後は直ぐリュックサックの中から地圖をお取だしになり槇、早川、岡部氏等と二十二日以後のプランの作成に御餘念がなかつた。

二十二日上高地で休養の一日を過ごさせられた秩父宮殿下には二十三日いよ〳〵アルプス御縱走の壯途におつき遊ばされた殿下には午前三時キッカリに御起床殘月が物すごく上高地一帶のけい谷を照しクッキリとした星座を一つ殘らず洗ひだしてゐる、豫期

した以上の好天氣に惠まれて殿下始め隨員一同の胸は早くも躍つた、殿下には直に御宿での最後の御朝食をお攝りになると登山服にお召更へになり御自ら忙しく出發の御用意を遊ばされた、やがてそれが終ると槇氏と最後のお打合せがあつて清水屋新館玄關に下り立たせられた、殿下のリュックサックは他の者のたれよりも遙に重いがそれを輕々と背負はせられたヒッケルのつき方もすこぶる見事に四時十分槇氏の案内で穂高入のスタートを切らせられた。殿下に續いて渡邊御用係、早川、岡部の諸氏見送りの千葉長野縣知事外一行四十餘名は提燈の火と月明りを頼りに河童橋たもと、穂高南登山口からコースにいらせられた、こゝでお見送りのものは殿下の御一行十名とお別れした。殿下一行は岳川谷を上り九時四十分奥穂高と西穂高の中間にある大キレットに御到着、ここから殿下にはいよ〳〵壯快な岩上りを決行遊ばされることとなり一行を二隊に分ち、第一隊は槇有恒氏が先頭となり第二位は殿下三位に岡部氏が位置し、第二隊は渡邊御用係早川氏である。殿下御使用のロープは絹製のもので昨年マッターホルンで御使用になつたものである、この山頂傳ひは穂高連峰中でもつとも難コースとされて居るもので殊にジャンダーム付近はスキスのアルプス中にも多くないと思はれるほどである、十一時二十分「ジャンダームのピーク」の手前で昼食をきつし一氣にザッテルに向つた、この日朝來の快晴で右溪谷を隔てゝ笠岳、双六等殿下が近く踏ませられるコースを望み、遠く燕師岳から立山の方面まで展げて居たが、ザッテルを出發した頃から上高地の谷方面から一團の雲霧が奥穂高の付近にまつはるかと思ふとやがて霧雨が降りだし、間もなく凄然たる雷鳴を伴つた、槇氏は「ヒッケルを外して下さい」と殿下に御注意申あげる、アルプスの岩場ではヒッケルの鐵部に感電して震死する例が多いのだ、續いて三四回電光と共に物すごい雨が穂高の岩壁を覆すかと思ふほど鳴りとどろく、その時岡部氏は手について居たヒッケルに感電して手がしびれたといふ。雷鳴が激しくなるに連れ急雨がさつと降り注ぐ、山頂の岩場のこととて身を隠す陰もない、一同はしのつく雨にさらされたままヒッケルを岩陰にかくしてうづくまる、雨は容易に晴れさうになく益々はげしくなる、雨具もかうした場合には用をなさず全くぬれ鼠のやうになり寒氣は身ぶるひを催す、かうした間でも殿下には少しもひるまぜられる模樣もなく「穂高でかうした大雷雨にあふことはいゝ經驗だ」と仰られる、まことに雄々しくも尊い次第である。待てどもやむ模樣もない、少し小やみになつた隙を見て槇氏は『さあ、でかけませう』と促し、暫く山頂を通過するか、飛騨側をからむかについて攻究した末斷然山頂縱走に決して進む。かくてジャンダームの東ピークの降路にさしかゝつたが縱走路中の最難場に來たので、先頭の槇氏は『殿下、暫くお待ち下さい』と申あげて岩壁のわれ目にピトン（岩登り用くぎ）を打ち込み、更に捨なはと補助ロープを使用して無事この難關を通過することができた、更に奥穂高ジャンダームとザッテルの手前『一枚岩』も捨なはを使用し、かくて降る雨をついて一行無事奥穂高の絶頂を極めさせられたのは丁度午後五時であつた、このとき降りしきつた雨は晴れアルプスの盟主槍岳のほこ先はくつきりと雲表に浮んだ、かくて午後五時四十分涸澤小舍（穂高小舍）に安着さ

れた、貴き御身をもつてかゝる惡天候と戰ひ奥穗高の頂上を極めさせられた勇敢な御行動は全く感激そのものであつた。

秩父宮殿下には二十四日は午前九時穗高小舍を御出發遊ばされ九時半には奥穗高頂上に御到着になつた、この頃から今まで千切れ雲もなくまれに晴渡つた空はうす曇の低雲におほはれ始め、午前十時過ぎは雨と變り時々僅な晴間を見る位、午後二時過ぎには二十三日に劣らぬ降雨となつたが殿下には『八月末になれば午後は雨がくるものだ』と槇氏に語らせられつゝ少しも懸念される御模樣もなく動き易い岩石とハヒ松とで出來上つて居る奥穗高、前穗高への縱走路をやす〳〵とお越しになり、時としてはピッケルを小わきにはさみ片手をポケットに突込まれる程の御落着きを示し給ひつゝ前穗高に御到着、縱走にて頂上を極めさせられた後降りやまぬ雨の中をずぶぬれにならせられつゝ前穗高北側の急峻な雪渓を淵谷に向つて降られ平地に御下りになつた、こゝから再び淵澤小屋に登らせられ午後四時十五分御歸着遊ばされた、二十三日の難コースの上に更に前穗高に登らせられたのであるが殿下は少しのお疲れの色も見せ給はず第一流の登山家ぶりを示された、お伴の渡邊御用係が却て殿下に時々待つていただく位でその御健脚振りには御一行の總ての人々を驚かせた。

秩父宮殿下穗高逆縱走の第二次行程につかせられる二十五日は日本晴れの青空である、殿下には午前五時に淵澤を御出發遊ばされた、淵澤岳から北穗高の山稜は「淵澤の咽喉」と呼ばれる難場であり鎖の鎖が下つてゐる、殿下の一行は案内の庄吉を先頭に切り立つた斷崖にかゝつたが一歩踏みはづせば命の問題である、殿下には一投足に手がかり足がかりをテストして巧みにこの惡場を下り小あん部に着かれた、ここから北穗高までの山稜はジクザクの尾根で然も岩は穗高特有のもろい構成に成り穗高における多くのアクシデントを生む原因となつてゐる。殿下には普通の縱走路でも危險な難場は特に縱走路を避けて山上專ひに通過せらる。穗高のピークの手前は特に「チムニー」の難場を通過せられることとなつた、このチムニーは約二十尺の直立岩の割れ目でこの割れ目に身體を横にいれて手と膝を利用してよぢ上られるのでロッククライミングの技術として特色のあるものである。かくて九時過ぎ穗高最難關中の一である北穗高（三〇三三メートル）の頂上に立たせられ暫時御休憩の後大キレットの下りに差かかられる、こゝは數百尺の大斷崖で殊に落石の危險の多い個所で殿下には槇氏とアンザイレンされて下られる。この頃から常念岳邊りから霧を吹あげ南岳の大キレットを下らせられる頃は四邊の展望を許さずクラックの難場をよぢ登り二時三十分南岳の山稜の一端に御到着。こゝにて槍屑からのお出迎が來てゐた、かくして三時中の岳大喰岳を經て三時三十五分アルプスの盟主槍ケ岳の岩壁に接した「一萬尺」の槍の屑小屋にいらせられた。

穗高連嶺の逆縱走を終へさせられ更にこのコースの最後を飾る大槍の登攀を無事終らせられた秩父宮殿下には一萬尺の槍屑小舍に御一泊翌二十六日は前日に勝る快晴である。この日殿下には岩登家のセンセーションの中心となつて居る小槍登攀を決行遊ばされることとなり午前六時半小舍を御出發大槍のロック・ピークが北口千丈澤の大斷崖を切りさげて居る岩場のトラヴァースして七

時小槍のザッテルに到着、こゝから一行六人を二隊に分け登山術の眞髓たるロッククライミングの凡ゆる技術を應用した登攀は開始された。殿下一行の選ばれたコースは大槍に續く稜角の東側からアンカレーヂに達し左に稜をまいてフェースをよぎるもので緊張した激勵の聲はバーチーの間に交される、先頭の槇氏は「殿下暫くお待ち下さい」と合圖すれば殿下にはアンカレーヂで確實なリレーを遊ばされつゝ「槇さんロープはまだ澤山ありますよ」と答へられ、トリコニー鋲の觸角に岩登りの快味を味はせられ輕快かつ確實にあらゆるテクニックを應用され頂上に達せられたのは八時十分であつた。日本アルプスのコース多い岩場の中でも最も難關とされて居る小槍の頂上を極めさせられたことは我國の岩登りの歴史のエポックを作つたものである、下降のコースは西側のフェースにピトンと「捨なは」を利用して九時屑小舍に御歸還遊ばされた。殿下には直に屑小舍を出發し双六に向はせられて一泊される御豫定である。（松本經由電話）

日本アルプス御踏破中の秩父宮殿下には二十七日午前七時双六池小屋を御出發に相成り御機嫌麗はしく午後一時二十分笠岳小屋に御安着遊ばされた旨岐阜縣廳へ通報があつた。

笠岳（二八九七メートル）の頂上近く小笠よりの山稜の小屋に殿下御登山最後の夜を明かされた二十八日は一氣に平湯溫泉に下られる日で、七時半出發、尾根傳ひに笠岳の頂上を極められ、それより尾根傳ひに錫杖岳を右に見て九里屋谷を下り途中錫杖の大岩壁を見上る澤にて御休憩、更に一氣に蒲田溫泉に下られ今田旅館にて御晝餐遊ばされた。最初の豫定では栃尾の小學校で御晝食のはずであつたが殿下が今回の御登山に際し前記今田旅館の主人今田重太郎が穗高御縱走の案内を勸めた外六人の男兄弟がことごとく山案内を勸める珍らしい家族であることを御存じあり不意に殿下の思召で同家で晝食のことゝなつたのである、今田兄弟は無上の光榮に感泣してゐた、午後二時前田伯、大野知事、牧野代議士等蒲田まで御出迎へ申し、更に蒲田川に沿うて栃尾小學校に立ち寄られ船津女學校生徒始め數里の山越えて殿下を拜さんとするもの路傍に列ぶ中を一々御會釋を賜りいづれも御勇姿を拜して感激した。かくて栃尾より自動車に召され午後四時半平湯溫泉中村旅館にいらせられた、廿九日は平湯を御出立になりそれより飛騨の勝境と呼ばれる高山の昔ながらの町にいらせられ有名な國分寺の建築や國寶小烏丸の名刀などを御覽になり晴天なれば アルプスの展望臺である城山にならせられ殿下が御踏破遊ばされた穗高連峰その他のパノラマを御賞觀あらせられる豫定である。（自八月廿二日至廿九日東京朝日新聞）

○淺間山爆發

十二日午前八時四十分淺間山は大雷のやうな音響と共に近年まれなる活動を開始し、黑煙もう〳〵として立ち上り地方の人々を驚かせた、約十三分間で音はやんだが黑煙は輕井澤の北方小滝方面の地上をかすめてはひ回り、十時過ぎも尙噴煙は猛烈に續けられて居る、このため前橋地方は十二日午前九時過頃盛んに降灰あり、往來する者はカツモリをさゝねば通行不可能となり、一町の

る見を(點高最山吉森)岳向りよ前社神の岳前

一ノ又小屋よりニ時間半登りたる地點より

る見を岳前

社神の岳前

阿仁と三枚との間よりる見を山吉森

前岳の神社（藥師佛の石像を安置す）

書上喜太郎氏撮影

先は見えぬやうに暗黑となり物凄かつたが、四十六分間降り續き九時五十一分に至り漸くやんだ、前橋測候所の觀測によると一坪に六十四匁の降灰あり、かくの如きことは幾十年來にない珍しい現象である。なほ高崎桐生、宇都宮地方にも同樣降灰が甚だしかつた。(十月十三日東京朝日新聞)

○下野山岳會設立

會員青木軍二郎氏の通信に據れば栃木縣廳にては本年四月に下野山岳會を設立し、事務所を同廳林務課内に置き、九月十日には山岳講演會を催し、横幹事の「最近登山の傾向に就て」と題する講演及活動寫眞の餘興あり、非常の盛況を呈したるよし。尙ほ同會にては縣下山岳の質疑登攀等に關しては出來る丈の便宜を取り計らふとの事なれば、一般登山者に取りても好都合のこと多かる可し、左に規則書を戴せて會員諸君の一覽に供す。

下野山岳會規則

第一條　本會は下野山岳會と稱し事務所を栃木縣廳林務課内に置く

第二條　本會は山岳趣味の養成普及を計り質實剛健の氣風を涵養するを以て目的とす

第三條　本會は前條の目的を達するため左の事項を行ふ

一、會員の登山會の開催

二、會員相互の知見交換會の開催

三、山岳景勝地の開發、紹介

四、山岳に關する講演會の開催

五、其の他目的達成上有益と認めたる事項

第四條　本會の會員は栃木縣在住者たることを要す

本會員を分つて左の二種とす

A　學生及生徒

B　學生、生徒以外の一般人

第五條　本會々員たらむとする者は所定樣式の入會申込書を本會に差出すへし

第六條　本會々員には會員章を交付す

第七條　本會に會長、副會長三名、幹事、書記若干名を置く

會長には栃木縣知事を、副會長には栃木縣内務部長、警察部長、學務部長を推戴す

幹事、書記は會長之を囑託す

會長に於て必要と認むるときは顧問若干名を推薦することあるへし

第八條　本會の經費は左の收入を以て之に充つ

一、會　費

二、寄　附　金

登山會、知見交換等に於ける經費は參加會員の負擔とし開催の都度其の概算を會員に通知するものとす

第九條　本會々員は毎年左の通會費を醵出するものとす但し入會の際は其の年の會費は入會と同時に納むるものとす

A會員は五十錢

B會員は壹圓

所定の期限迄に會費を納めさるときは脱會したるものと見做す

第十條　本會の會計年度は四月一日に始まり翌年三月三十一日終るものとす

第十一條　經費決算は會計年度終了後三ヶ月以内に之を完了し會員に公示す

○會員通信

△拜啓。森吉山―鹿ノ湯―八幡平―岩手の計畫も調査不足と天候不良の爲、森吉山だけしか行けず、先づ美事失敗でしたが、時間行程等參考迄に御報知致します。

十月二十一日（大正十五年）夜仙臺發。二十二日午前九・五五奥羽本線二ツ井驛下車、一〇・二〇自動車にて出發（途中米内澤にて四十分停車）午後一・三〇阿仁銀山着、同事務所にて休憩。二・三〇發、小さな峠を二つ越し、四・三〇三枚を過ぎ、五・三〇一ノ又伊藤七助氏小屋着、小屋とは云ひながら古河林業部のものとて室も數個ありて立派なものです。其夜は其處に一泊。二十三日午前六・三〇發、これより上は古河林業部の經營地とて私設林道あり、重に一ノ又の北の尾根を行く。やがて廣い森吉山の頂上が見える。一〇・二五古河所有林との境界石標。こゝは神社より北に當り、殆ど頂上の一角に取り着いた譯なり。それより南に少し上り進み、一一・〇〇神社着。祠は前岳の頂上に在り、廣さ四疊半位、トタンにて圍み堅固なり。一一・三〇神社前、午後一二・二〇向岳頂上（森吉山最高點）、石積及石造小社あり、朝よりの烈風漸く勢を増し雲行頗る險惡となる。氣溫攝氏十度。弁食。一・二〇發、初めはこれから東面打當内への小路を辿りて一二八〇・五米の三角點ある峯に登り、藪の工合によりては割澤森を踰えて高場森附近の鹿湯路に出やうと思ひしも、打當内へは今は向岳の西部から下るので、地圖の東廻りの路は全く跡を絶ち、しかも獸の路や水の路が人を迷はすやうに縱横に走つてゐるので、正路が無いと斷ずるまでには隨分時間が掛り、そして路がないとすれば藪を潜つてまで猛進する元氣の持ち合せなく、神社へ歸つて一泊しやうと決したのは最早四時に近き頃にて、折しも雷鳴數度、忽ち篠突く豪雨襲ひ來り、向岳頂上に歸着した時は最早暗くなりかけ、全身濡鼠の如き有樣となり、又雨中に半白の兎が電光のやうに跳び交ふを見ました。氣は急げども暗いので足は進まず、且つ尾根廣く小路高く方向を誤る恐れがあるので、神社近くとは思ひ乍ら野營してしまひました。夜中雨は雪に變りました。二十四日。夜が明けるとあたりは一面の銀世界、まだどん〳〵降つて居ります。然し神社は直ぐ判つたので兎に角其處へ引越しをしました。其日は一日雪で私達の仕事は濡れた着物を乾すことでした。執拗な天氣は二十五日になつても霽れず、今日は雨、しかも吹き降りなるも下山と決し、午前八・四〇出發。九・一〇官林分岐點、午後一二・三〇一ノ又、二・五〇阿仁銀山着、三・〇〇自動車にて出發。二ツ井から夜行の汽車にて歸仙しました。（書上喜太郎）

△小生七月二十五日より三十一日に亘り白峯三山の山旅を致候。鰍澤にて一休みの後、出頂の茶屋や飴の茶屋を經て西山に出で、

大門澤より農鳥、間の岳、北岳と登り、野呂川廣河原に下り、鳳凰山を越へ韮崎に出で歸京仕候。

其間終始雷雨に脅かされ閉口仕候へ共、農鳥、間の岳間の石室よりの夕景と間の岳頂上の眺望は北岳の御花畑と共に忘れ難きものに有之久し振りに高山氣分を味ひ申候。尙間の岳石室にては松本の矢澤米三郎氏と神田の岩波書店主岩波茂雄氏に會ひ申候。(野口末延)

△八月二十八日滑川驛前にて。

劍澤は兎に角成功致しました、別宮、岩永は二十日宇奈月發櫟平泊二十一日東谷泊二十二日の午少し過ぎ棒小屋の小屋場着、河原で休んで居る間に一日遲れて出發した長次郎がやつて來ました。そしてその夕方には東信道から來た冠、石井、田中三氏の一行と一所になりました。そして二十三日には十字峽を通つて一同で神潭泊。それからいよ〳〵本舞臺にかゝりました(別宮)。二十一日御前澤落口上手より籠渡しにて東信道に移り、赤澤を横ぎり赤澤の壁の上で尾根を越え、鳴澤の上を廻つて新越澤の二俣で泊り、二十二日二〇六七米突三角點の下を廻つて棒小屋澤二俣で中食、それからコンターに添うて更に急崖を下り棒小屋の小屋場にて別宮、岩永兩君と會合して劍澤入を致しました、東信歩道に二十四程の群猿の遊べるを見たのは奇觀でありました(冠)。二十四日朝神潭上に架橋して左岸をへづり黑部別山尾根より劍澤落口に出で、これより藪をへづり空澤下にて一泊、翌日は空澤下迄行きて一泊し、劍澤大瀑を見たときは一同歡喜の聲を發しました。その翌日は黑部別山を約八時間藪クヾりをして、ハシゴ坂から劍澤出合に一泊、劍澤乘越を經て此處迄來り黑部西瓜を食べながらメートルを上げて居ります(岩永)。

△私共兩名は去る大正九年七月女教員の團體を率ゐて白馬登山をいたし候てより以來、公務のため夏となつても憧憬の日本アルプスの山々へも御無沙汰がちの所、今春來都合をつけおき、女子專門學校生八名に高等女學校生七名に女教員貳名を一團とし、去る七月十四日午後六時三十分大阪發名古屋乘換夜行、十五日前五時二十分松本市着朝食登山用品購入、前九時二十分信濃鐵道松本發有明下車自動車乘用有明溫泉着晝食、五名の人夫を伴ひ午後〇時半有明溫泉發、中房溫泉泊。十六日前五時三十分出發合戰澤の尾根を登攀、十一時燕岳小舍着晝食、午後燕岳頂上を極め南に向つて縱走、大天井岳を經て午後六時三十分西岳小舍着泊。十七日前八時三十分發東鎌尾根の喜作新道の窓の難場も無事突破、午後三時殺生小舍を經て肩の小舍に着泊。十八日早朝濃霧の中を槍の尖峯を女學生團體を率ゐて登攀のレコードを作り前九時三十分肩の小舍發坊主小舍より大雨の中を槍澤の雪渓を下り、赤澤の小舍にて晝食午後五時半上高地溫泉に着泊(一行健脚にして女學生なれども一人の跛足をひくものなし)。十九日上高地滯在休養、二十日前七時溫泉發、宮川池に立寄り十時半德本峠頂上、正午鎌留小舍晝食、島々谷を下り午後五時島々口より電車乘用松本歸着、淺間溫泉小柳旅館泊。二十一日前八時四十分松本發名古屋乘換午後八時三十分大阪歸着無事解散仕候。(昭和二年七月二十二日　會員朝輝記太留、竹下英一)

△前略。七月は意外の惡天候の爲め千丈澤入りを中止して烏帽子

より針ノ木へ尾根傳ひに出たり、部の新らしい人々と燕、槍や朝興、仙丈等を歩いて仕舞ひました。そして八月に入つては天候もどうやら決り、水量も可なり減つたと思はれるので十五日急に思立つて夜行で東京を發ち、十六日は島々より奈川渡、澤ノ渡を經て夏小屋の先で幕營、翌十七日は安房峠を越して平湯より栃尾に出て一泊しました。翌日はいよ〳〵辨次といふのを案内として憧憬れの笠谷、金木戸川より黒部への旅へと出掛けました。コースは大體左の通りです。

第一日　笠谷を溯り一三〇〇米附近岩小屋泊り。
第二日　笠谷を上りきつて頂上小屋泊。
第三日　打込谷を下り金木戸出合岩小屋泊り。
第四日　金木戸川を溯り、奥拔戸岩小屋泊り。
第五日　蓮華谷、九郎右衛門谷？　黒部乘越より三俣蓮華岳を經て鷲羽乘越より黒部原流泊。
第六日　出水平、藥師澤を經て立石泊。
第七日　黒部川を下つて平ノ小屋泊。
第八日　平ノ小屋より内藏助澤出合まで往復。
第九日　針ノ木峠越え大町へ。

右の中笠谷は思つたより良く、打込谷、金木戸川は中々惡い處がありました、黒部も藥師澤出合の少し下に鑛山が這入つていて藥師澤出合のすぐ上の本流に蓬萊橋などといふのが架けてあるのには一寸驚きました、そして三四軒小屋が建てゝありました。金木戸も黒部も共に鱒に惠まれた愉快な旅でした。

又藥師の直下附近は未だ黒部本流に雪橋があり雪崩の物凄さをマザ〳〵と見せつけられました。（田中菅雄）

△先月二十一日當地を發して木曾に向ひ、先づ駒ヶ岳に登つて山頂の小屋に四泊し山中各地を探勝の上上松に下りて御嶽に登り山中に二泊の上飛驒側に下りて嶽ノ湯（濁川温泉）に投宿、翌日胡桃島に下り宮ノ前より鳥居峠を越して上ケ洞に到りて一泊、約十年前に開けたりとかいふ新道によつて飛驒側より乘鞍に登り頂上と八合目とに泊つてこれも山中諸方を探勝、第三日目に信州側番所原に下り奈川渡より自動車にて島々に出て、更に自動車を驅つて松本に入り近頃開通したる下諏訪行自動車にて二十數年目にて甕尻峠を越し下諏訪より更に自動車にて上諏訪に達して一泊、昨日當地に歸着致し候。この二週日の旅行中天氣都合甚だ宜しく夕立には四回程遭ひしもいつも重要ならざる場合のみにて旅行には一向に差閊なく又山中の小屋にては常に優待され一度も不快な目にあはずして無事目的を達し候。木曾駒山中の廣大にして植物の生棲狀態の面白きには驚き候。有名なる濃ケ池（即ち縞池）及び地圖に明記なき駒飼池は素人目にはカールの樣に見え殊に縞池の推石は二段になり居る樣思はれ候、然し近來この附近に小屋を設け周圍の植物を殘賊して大に風致を害したるは惜む可きものに候。聞く所によれば、今秋中岳と寶劍岳との中間にも小屋を新設する計畫の由にてかくては美しきハヒマツも益々稀少と相成るとかと心外に存じ申候。御嶽は不景氣の故に登山道者の數少く山中至つて靜にて大層落付きたる氣分になり得しも意外に候。濁川温泉は山の湯として正に第一流の極印を押すも苦しからず附近にある繞ノ瀑等の瀑布と密林は如何にも見事にて、目通り直徑一米に餘るタ

ウヒの巨木を初めテウセンゴエフ（即ちホンゴエフ）やヒメコマツ（學者の言ふゴエフマツ）の生育狀態ヒノキの純林等吾の目を喜ばすもの少なからず、木曾の森林の美事なるに驚き居りしも今は昔の夢となり候樣覺え候。乘鞍の上ケ洞道は驚く可き緩傾斜の森林を徐に上る內いつか高山帶に入り御花畠を經て最高點に達するは易々たるものにて諸高山の登山路中第一流の平易なるものと申す可く森林も相當宜しく候尤も御嶽の嶽ノ湯道のものには比す可くも無く候。乘鞍山頂の廣くして複雜なるも寔に面白くこれも時期を變へて再遊の豫定に候。是等の高山探險の結果、日本の高山は絕頂迄ハヒマツに蔽はる可き筈のものにて山岳的（或は地勢的）にハヒマツの蔓延せざる地のみに高山性草本叢草本が生じ歐洲アルプス等に見る所の眞正の草木帶は本邦には無之ものといふ小生の所說を確定することを得候。その委細は何れ歸京拜芝の上申上ぐ可く候も大要を一寸御耳に入れ置き候。當八ケ岳も最早全くの秋景色にて氣溫も日中六十度前後朝は四十三四度に下り候。これよりこの山巒各地を巡りて高山の秋色と秋晴の眺望を擅に致す爲め本月下旬頃迄滯在の心算に候。（九月四日信州八ケ岳赤嶽鑛泉にて武田久吉）

△拜啓。小生次之通り下野山岳會主催登山會參加仕候。男體山行。七月二日中禪寺宿泊。三日中禪寺—男體山—志津—御澤—菖蒲ケ濱—宇都宮歸着。

那須岳行。七月十六日那須山樂宿泊。十七日湯本—那須岳—三斗小舍—板室溫泉—宇都宮歸着。

白根山行。七月三十日湯元宿泊。三十一日白根登山—即日宇都宮歸著。

鬼怒沼行。八月二日湯元宿泊。三日湯元—金田峠—噴泉塔（噴泉僅一尺餘にして附近破壞の跡あり）—新道（噴泉塔、川俣溫泉間一里二十二町の標木あれど實側二里强の由、二時間を要す、去る六月中開通せしものなり）—川俣溫泉宿泊。四日川俣溫泉—八丁湯（目下營林署小舍及び野天風呂あれど、明年より川俣本村部落に依り溫泉宿經營さるゝ由。尾瀨間の途中宿泊地として至便ならん）—鬼怒沼（生憎雨にて展望無し）—川俣溫泉宿泊。五日川俣溫泉—黑部—川治溫泉宿泊。六日川治溫泉—今市—宇都宮歸着。

庚申山行。八月二十日足尾和泉屋宿泊。二十一日足尾—庚申山—原向驛—宇都宮歸着。

下野山岳會は去る四月栃木縣廳林務課內に設置され、會長に縣知事、副會長に內務、警察、學務三部長を推し、林務課員全部の熱心なる應援有之可く、今後縣下山岳地方の御質疑に關しては出來る丈の御便宜は取計ひ申可きとの事につき御照會可然候會員資格は縣在住者たる事を要して今後益ゝ斯界の爲め登高行致度候間、御鞭韃御指導被下度願上候。（宇都宮青木軍二郎）

會報

○第三十七回小集會記事

昭和二年九月十八日、午後一時麴町區紀尾井町清水谷皆香園に於て小集會開催、司會者冠幹事。當日の講演左の如し。

利尻山と二並山　岡田喜一氏

氏が本年七月廿七日、上野驛發北海道より樺太に遊び、それより利尻島に渡り、利尻山に登攀せられ、更に禮文島を周り二並山を極められたる御話であつて、北邊の植物の分布、昆布採取の狀況、利尻二並登山の模樣など精細に述べられ、十數葉の寫眞と共に來會者の興味をそゝることが多大であつた。

劍澤入り　冠松次郎

去年劍澤の廊下の上半を探勝せる別宮、岩永、冠の三氏は今夏黑部川の十字峽より奥の神潭の上流に於て黑部本流に架橋し、崖壁の横を登り、草崖より森林に出で、更に劍澤落口の右岸の棚の上に降り、その釜と瀑を見、落口より數丁上手の草地に露營、翌日はその二町程上流の劍平の廣場に露營、それより廊下狀の深流急川を架橋とロープにより劍澤中央部の劍の大瀑の瀑壺まで溯り、野營地に戻り一泊、翌日は狹き空澤を攀ぢて黑部別山へ上り、午前七時半より午後四時迄闊葉樹と陣竹の藪を潜り、約八時間難行の後漸く黑部別山の頂點に達し、ハシゴダンを降つて劍澤の出合に泊り、劍澤を稱名川に乘越し地獄谷を横ぎり、追分弘法の茶屋を經て下山したる行程について述べられた。その壁、奔流、瀑等の寫眞は未だ曾て世に出たことのない始めてのものであつた。

當日の來會者は、田部重治、冠松次郎、藤島敏男、木暮理太郎、烏山悌成、別宮貞俊、岡田喜一、大熊保夫、山崎武士、芋川稔一、岩田一二、川崎吉藏、高畑棟材、山田力、山本幸雄、星野光之助、伊藤新三、大賀智、深山東一郎、西川國彥、柳澤

悟、佐々保雄、渡邊漸、山下一夫、磯貝藤太郎、山口成一、神谷恭、木村久太郎、小松喜一、岩永信雄、山崎和一、野口末延、山崎金次郎、吉原貞一の三十四氏にして、他に會員外の來會者が十數名あつた。

○事務所移轉

本會事務所は都合上是迄新潟縣三島郡深才村深澤に置きて事務を執り來つたが、不便が少なくないので、今回東京市芝區高輪南町三十番地に移して、會計取扱所と合併した。從つて爾後本會に關する事項は、編輯の件を除き、すべて前記宛に御照會を願ひたい。但し圖書其他出版物の御寄贈は編輯所宛にして下さる方が便利である。

○新入會員紹介

昭和二年六月十九日及九月十八日の幹事會にて入會を許可され、正規の手續を經て、會員となられた方々を左に紹介する。

	會員章番號
同	
同	
同	
同	
同	
同	
同	
同	
同	
同	
同	
同	
同	
同	
同	
同	
同	
同	
同	一
同	
同	

同　同　同　同

○會員章再交附

會員章紛失の屆出により、規定に從ひて、左記會員に新番號を登錄した。

一〇二九（舊八八二）東京市　大山爲之助氏
一〇三二（舊八三一）兵庫縣　加藤俊治氏
一〇三四（舊八八〇）東京市　深山東一郎氏

從つて會員章八三一、八八〇、八八二號は何れも無效となつた。

○會員の訃報

本會創立當時からの會員であつた工學博士比企忠氏は、病氣の爲六月二十三日永眠されたとの報に接した。本會は同氏の訃に對し謹んで哀悼の意を表する。

○退會者報告

左記の方々は退會屆を出されたので、本會は其手續を了した。

昭和二年七月五日申出（五〇三）東京府　森井喜一郎氏
同　八月二十四日（八〇九）名古屋市　鬼頭信太郎氏
同　九月三十日（六五〇）横濱市　Treichler. H.
同　九月三十日（三七〇）京都市　都路華香氏

○會務報告

昭和二年九月十八日午前十一時より麹町區紀尾井町清水谷皆香園に於て幹事會開催、左の件に就て議決した。

一、事務所移轉の件
一、大會開催に就ての件
終つて入會申込者の銓衡を行つた。

出席幹事　木暮、鳥山、別宮、冠、高頭（委任）、藤島（委任）、槇（委任）。
評議員　田部。

○交換及寄贈圖書目

大利根水源紀行　群馬縣山林會
ツーリスト　シャバン・ツーリスト・ビューロー
山狂　第二卷　東京登山會
北アルプス餓鬼岳登攀の記事あり。
山とスキー　第七十五號　山とスキーの會
新高登山のしをり　第二號　臺灣山岳會
瀨野尾鬱氏の南湖大山登山の記事あり。
會報　第四年九十號　臺灣山岳會
管見錄　三年八號　サンシャイン旅行會
會報　第四年九號　大阪管見社
赤石山登山案内　四枚のパンフレット　關東山岳會
旅行　第十七號、第十八號　信濃赤岳會
アルカウ趣味　第十四年第九號　東京旅行クラブ會報
東京登山會會報　第三年十月號　日本アルカウ會
旅　第七年十月號　東京登山會
山嶺　第六年十號　東京アルカウ會
キヤムピング　九月號、十月號　東京野歩路會
歩跡　一年五號　ジャパン・キャンプ・クラブ
La Montagne, No. 204.　テクリ會
Atlas of Sweden
The Mountaineer, Bulletin, Vol. XIX No. 10.
Trail and Timberline, No. 106.
Natural History, Vol. XXVII No 3.
Rivista del Club Alpino Italiano, Vol. XLVI. Num. 7-8.
Revue Alpine, Vol. 28-No. 2.
Bird-Lore, Vol. XXIX. No. 4.
The Geographical Journal, Vol. LXX-No. 2, 3.
Die Alpen Les Alpes. Le Alpi, III-No. 8, 9.

○本會規則抜萃

第二條　本會ハ山岳ニ關スル研究ヲナスヲ以テ目的トス
第三條　本會ハ第二條ノ主旨ニ基キ機關雜誌『山岳』ヲ發行ス又時宜ニヨリ別ニ臨時又ハ定時ノ出版物ヲ發刊スルコトアルベシ
第五條　本會ハ會長ヲ戴カズ幹事若干名ヲ置キテ一切ノ會務ヲ處理セシム
第十條　本會會員ヲ別チテ正會員及ビ名譽會員トス名譽會員ハ幹事會ノ決議ニヨリテ推薦セラルルモノトス
第十一條　正會員タラント欲スル者ハ會員三名ノ紹介ヲ以テ住所、姓名、年齢及ビ職業ヲ記シタル申込書ヲ事務所ニ送

付スベシ、但シ紹介者ノ一名ハ本會評議員タルヲ要ス
（入會申込用紙ハ事務所ニ備付ケアリ）

第十二條　入會ノ許否ハ幹事會ノ決議ニヨルモノトス

第十三條　入會許可ノ通知ニ接シタル者ハ直ニ入會金五圓ニ會費ヲ添ヘ拂込マルベシ

第十四條　正會員ハ會費年金六圓ヲ毎年二月末日迄ニ納付スベキモノトス

第十五條　正會員ニシテ一時ニ金百圓以上ヲ納付シタル者ハ爾後會員籍ヲ有スル間ハ會費納付ノ義務ナキモノトス

現任幹事八名

別宮　貞俊　藤島　敏男　冠　松次郎　木暮理太郎
槇　有恒　高頭仁兵衛　鳥山　悌成　沼井鐵太郎
（在臺灣）

評議員十七名

小島　久太　武田　久吉　高野　熊藏　近藤　茂吉
中村清太郎　三枝　守博　辻本　清丸　田部　重治
山川　默　及現在幹事八名。

○投稿規定

一、會員は勿論會員外の何人も投稿隨意のこと。

一、用紙は半紙又は半紙半枚大、天地左右をあけ、毎紙片面のみに字體明瞭に認め、各行二十二字詰とし、毎紙同一行數のこと
（但し原稿用紙は事務所へ申越し次第直に御送りします）

一、、。「」（）等は各一字畫宛とし、行を更むる時は一字下げのこと。

一、地名には片假名を振り、漢字不明にして當字をなす時は、その旨を括弧内に明記す可きこと。

一、スケッチは複製の際誤記、脱漏等の虞あるを以て、豫め本誌面に適せる大さに調製ありたきこと。
（但し其儘寫眞版に附し得るものは大さ隨意）

一、原稿は左記宛御送付のこと。
東京市本郷區駒込蓬萊町三一　「山岳」編輯所

尙ほ編輯に關する用件は總て前記宛御照會のこと。

正誤

本誌前號雜錄欄六十九頁上段十三行目
故原田博士（維四郎）とあるは（豐吉）
の誤に付き訂正す

附錄

秋田沿革史に現れたる山岳資料

秋田沿革史は秋田縣士族橋本宗彦氏が編纂したもので、上下二卷より成り、上卷は明治二十九年十一月廿三日、下卷は同三十一年十一月廿三日にいづれも秋田縣土崎港町下酒田町八番地橋本宗一氏方から出版されたものである。其內容は主として該地方（佐竹氏の封）舊藩時代の史乘並に明治維新より明治十六年に至る事蹟を、古文書並に編著自らの見聞に據つて曆順に從ひ列記したもので、其精細なる事正に地方史資料としては出色の出來てあると思ふ。序文によれば編者は明治二年起草したとあるからには、其努力は感服するの他はない。因みに編者は有名な學者大山重華氏の長兄である。又此書の印刷は秋田市茶町菊ノ町十八番地秋田株式會社に於てなされたもので、粗末な西洋紙菊版を用ひ、上卷六二六頁、下卷九七三頁、黑布目厚紙の裝幀を有する。

此書の內に山に關した資料を多少發見する。此等は高頭氏の日本山嶽志に大部分は洩れたものであるから、一應紹介の勞を取るも強ち無用の事に非ずと思ひ、玆に拾集し得た資料を提供するのである。一言斷つて置きたいのは誤字振假名のなまり等であるが、此等は矢張原文尊重の意味で修正しない事にした。宜しく御判讀を願ふ。（沼井鐵太郎）

資料目次

出羽國分割……二頁
出羽郡名由緒……三
義宣神社ニ捧ル誓文……三
金銀山開堀運上銀ノ由來……四
大平山下狩……四
南部堺切支丹宗徒ヲ狩ル……四
狼狩リ……四
男鹿嶋鹿殖產事由……五
男鹿嶋鹿狩……五
保呂羽高岳兩社再興……五
追鳥……五
鹿狩……五
國社ヘ社料ヲ寄附……五
鹿狩……五

射鳥……五
鹿狩……五
秋田藤ノ實況奇談……五
鹿狩……六
鹿狩……六
保呂羽山社燒失……六
保呂羽山成ル……六
鹿狩黑白鹿ヲ得ル……六
保呂羽山成ル……六
雪見御殿立ツ……六
大震象瀉埋ム……六
男鹿大地震慘狀諸調……六
院內銀山盛リ……一〇
放牧……一〇
保呂羽山別當燒失……一一
大平山登山ヲ止ム……一一
禁裏守護上洛ニ付條目の內……一一
男鹿鹿狩解放……一一
秋田縣郡村名所誌……一二
羽後國秋田縣地誌提要……一六
國社……二〇
御國十二社……二一
三國社……二一
保呂羽山八澤木神社ノ緣起……二一
仙北郡神宮寺嶽……二二
秋田郡男鹿天王船越湖水、八郎瀉越、男鹿嶋本山眞山……二二
大館釋迦內村ノ古戰場古事……二三
田代山……二四
十二處獨鈷村……二四
小田瀨山ノ變地……二四

（○以上目次は大部分原著目次の名稱に從つた）

上卷

天皇（後水尾 明正）二十一世◎義宜ノブ【將軍】家康　秀忠　家光

○抑モ出羽ノ國ハ元明天皇ノ御宇和銅五年陸奥越後ノ二國ヲ割キテ出羽ノ國トス。

○又郡名ノ如キ古書ヲ案スルニ和名抄等ニ出羽十一郡トス由利ヲ加ヘ十二郡即チ最上、田川、村山、置賜、飽海、雄勝、平鹿、出羽府、河邊、秋田、山本、由利之ナリ。然ルニ仙北ハ郡ニアラス烏海山ノ北ナルヲ以テ仙北ト唱ヒタルモノニシテ今ノ雄勝平鹿山本ヲ總稱セシモノナラン、佐竹家遷封ノ際家康ヨリ下附セラレタル判物書ニ秋田仙北兩所進置トアリ、之ヲ分別スレハ雄勝平鹿山本豐嶋秋田檜山等ノ六郡ナリ、而シテ正保年中（維新迄二百二十四年）出羽十二郡ノ圖ヲ檢スルニ佐竹領內六郡ノ內檜山豐嶋ノ二郡アリ寛文四年（維新前二百年餘）鄕村高辻帳催促ノトキ幕史右筆久保吉右衞門正永ノ問ニ對シ藩士黑澤太左衞門辨明シテ曰ク、豐嶋ニ戶嶋玄蕃ナルモノアリタリ又檜山ハ秋田城之介居城トシルアリシニヨリ自然其地名ヲ唱ヒテ郡名トナシ來リ其誤謬ヲ傳ヘテ現今ニ至ルト陣ジ豐嶋郡ヲ河邊ト山本郡ヲ仙北ト檜山郡ヲ山本ト郡名ヲ改正センコトヲ幕吏ニ請フノ所聽許セラレ初テ郡名ノ確定スルヲ得タリ。（出羽府ハ郡ニアラス和同元年出羽郡ヲ建ルトアルモ同五年ニ國名トナリ郡ノ數ニ入ラス現時ノ郡數ニ適合ス）又最上村山置賜飽海田川由利ヲ羽陽トシ秋田川邊仙北雄勝平鹿ヲ羽陰トス云々。

（四十六頁）

○是ヨリ先キ左ノ誓文を各神社ニ奉呈セラル義宣公ノ心事知ルヘシ。

敬白大願文事

（○前六條略）

一、大峰愛宕富士日光湯殿山月山保呂羽權現年々信心可奉勵事

（○後二條及一文略）

慶長七年壬寅六月八日

信心護持願主
清和後胤源義宣朝臣

（四十八頁）

○慶長十二年院内銀山運上銀駿府將軍家康ニ献ス家士信太兵部少輔其使節タリ以降年々之レヲ納ム。而シテ此銀山開堀ノ原因タル、伊勢國人林治郎左衞門會津ノ住人渡部勝左衞門仙北ノ住人石山傳助越前敦賀大谷吉次ノ家臣村山宗兵衞等慶長五年關ケ原ノ戰ヒ負ケテ本藩ニ遁レ來リ、雄勝郡小野村ノ知人佐々木某方ヘ潛伏セシ折柄、村人ノ語ルヲ聞キテ此村ノ山ニ砂銀ヲ堀リ出ス所アリト、因テ其山ヲ普請シ同八年頃ヨリ十年ノ冬季マテ密ニ砂銀ヲ採リ居リシニ、村山宗兵衞ナルモノ或夜靈夢ヲ得、獨リ小野村ノ山ヲ出テ是ヨリ西ニ方ル寶龍館ノ奥山ニ入リ、長倉ト云フ里ヲ過キテ又入ルコト二里餘、而シテ靈夢ノ如キ銀鉱ノ萌ヲ發見シ○小野村ニ歸リ渡邊、林、石山等ノ三氏ニ其奇異ナルヲ語リ、同十一年ニ至リ數十人ノ坑夫ヲシテ堀ラシムルニ、同秋ニ至リ銀鉱ニ當リ、之レヲ問ヒ吹キセシニ全ク銀鑛ナルヲ以テ、當時執政澁江内膳政光ニ告ク、直チニ義宣ニ上言シ、則チ政光ニ命シテ彼ノ村山宗兵衞外三名ニ其山先タルヘキ證文ヲ下附シテ追々開山セシヲ以テ、將軍家ヘ具申シ開堀ノ免許ヲ得タリ云々。（五十三頁）

○寛永元年九月二十一日二十二日大江平山下タ狩ヲ催サル、時ニ足輕九百人町人足三百人ヲ出シテ鳥獸ヲ追ヒ卷キ捕ヘシム。（七十一頁）

天皇（後光明院）　二十二世◎義隆　【將軍】家綱

○寛永十六年正月切支丹宗徒南部境ノ山ニ籠ルヲ以テ、大館給士中田又右衞門、安士三左衞門、杉山彌右衞門足輕二十人ヲ卒キテ籠谷村ニ出張リシ、南部ノ檢使ハ同領大地村ニ在リ、同十四日ヲ期シ宗徒ヲ狩ルヘキ旨同使ニ示シ合セタリシニ、前夜南部ノ者故ナク三百餘人押シ掛ケ來タルヲ以テ止ムヲ得ス我カ三士槍ヲ用テ袈砂掛坂ニテ追ヒ返シタリ云々。（七十六頁）

天皇（靈元）　二十三世◎義處（スミ）　【將軍】綱吉

○元錄三年六月二十五日下刈ニテ狼狩リ。（九十二頁）

天皇（中御門）　二十四世◎義格（々）　【將軍】家宣　家繼

○寶永三年正月十六日男鹿嶋鹿狩アリ、而シテ該島鹿ノ產タル秋田家領セシ頃之ヲ狩リ盡シタルモ、遷封ノ後義隆ノ當時鹿雌雄四足ヲ放チ、從來武具ノ用ニ供スル皮革ヲ得ンコトヲ圖ラレタリ。（九十五頁）

○正德二年正月男鹿嶋ニテ鹿狩リ三千余頭ヲ銃射ス。（九十六頁）

○正德四年三月國社保呂羽山高岳山中絕セルヲ再興ス。（九十六頁）

天皇（中御門）　二十五世◎義峯　【將軍】吉宗

○享保元丙申年十二月男鹿嶋ニテ追鳥ヲ催サル。（九十七頁）

○享保六年男鹿嶋鹿狩獲ル所二千七百余頭。（九十七頁）

○享保十一年國社御嶽山高岳山等ヘ社料高三十石宛ヲ寄附セラル。（九十八頁）

○享保十五年正月男鹿嶋鹿狩獲ル所八千余頭。（九十八頁）

○寛保元年辛酉九月大平山ヘ射鳥ノ命ヲ得田崎忠四郎外十三人派出。（九十八頁）

○寛延二年三月三日男鹿嶋鹿狩五千七百余頭ヲ獲タリ。（九十九頁）

○義峯或年三月十五日月並賀表登城ノ際大廣間大名數名參列各々其領國內名產等ノ雜話アリ、義峯予カ領內ニテ鰰ハ元ト水戸ヲ領セシ時同國ニテ大ニ漁セリ、遷封后ハ秋田ニテモ後更ニ之ヲ漁ス、然ルニ比內ノ內長木澤ノ蕗ノ太サ七年竹ノ如クニシテ各方ノ長柄傘ニ同シト、然ルニ松平安藝守太ニ笑ヒ、世ニ左ノ如キモノアランヤト皆ナ同ク嘲哢、公忿然トシテ已ニ大事ニ及ントスルモ人アリテ之ヲ止ム。歸營ノ後近侍大嶋左伸那可采女ニ云々ト語ラレ、如何ニシテ此ノ空言ナラサルノ耻ヲ雪ンヤト、兩士之ヲ承ハリ實ニ易キ事ナリ、他日圖ル處アルヘシト則チ密ニ秋田ニ早飛脚ヲシテ長木澤ノ落ヲ採リ速ニ江戸ニ差シ送ルヘキ旨ヲ報ス、因テ秋田ニテハ急キ採リ江戸邸ニ奉ル、然シテ幕府大目附筧播磨守

ヲ請ス其他大廣間大名數名ヲ招キ、其座布内床ノ間ニハ大落ヲ鉢ニ植ヘ、又料理ニ其蕗ヲ用ヒ大ニ饗シタリ、酒盃中バニ至リ那珂氏坐中ニ出テ過日主人ノ噺シタル長木澤ノ蕗ハ秋田ノ名産ナルヲ陳ベ、而モ敬テ貴君方ノ詈言ヲ憤リ今日其遺趾ヲ報セントスルニアラスト、干時最前殿中ニテ笑ヒタル方々ニハ大ニ過言セルヲ悔イシ面色ニテ其不敬ヲ謝シ全ク其虚言ナラサルニ驚ケリ。（九十九頁）

天　皇（桃園）二十六世◎義　眞【將軍】家重

○寶暦元辛未年正月十五日男鹿嶋鹿狩凡九千二百二十ヲ獲。（百頁）

天　皇（桃園）二十七世◎義　明（ハル）【將軍】家重

○寶暦四年二月二十九日男鹿嶋鹿狩五千百六十ヲ獲。（百一頁）

天　皇（後桃園）後櫻町　二十八世◎義　敦（アツ）【將軍】家治

○寶暦十三年三月國社八澤木保呂羽山羽宇志別神社燒失。（百二十三頁）

○明和六年六月四日國社保呂羽山社造營成ル。（百二十六頁）

○安永元壬辰年二月五日男鹿嶋鹿狩二萬七千百頭黑白ノ鹿二頭ヲ得タリ。（百二十六頁）

○安永四年羽宇志別神社造營成ルヲ以遷宮。（百二十六頁）

○天明元辛丑年十一月六日廣面村ノ内字赤沼ニ別亭ヲ設ケ之ヲ雪見御殿ト唱フ、則チ東方沼ヲ前ニシテ滿水夏時ハ納凉冬時ハ太平山ヲ望ミ、雪中一ノ佳景ナリ。（百二十七頁）

天　皇（光格）二十九世◎義　和（アサ）【將軍】家齊

○文化元申子年六月四日羽州島海山地震山崩レテ由利郡象潟埋沒タメニ風景ヲ失フ。（百三十頁）

○文化七年八月二十七日午ノ刻大ニ震フ、男鹿嶋殊ニ甚シク寒風山崩レ大石轉動其響轟恰モ雷ノ如ク四邊民屋潰壞タメニ壓到死傷者百數十人、時ニ義和江戸ニ在リ此災ニカヽルヲ以テ其ノ困難ヲ問ハル、而シテ死者ノ靈魂ヲ祭ラントシ寒風山ノ南半途ニ石碑ヲ建ツ、之ヲ地震塚ト云フ、當時幕府ヘ御屆等

左ノ如シ。

（宗彦云是レ即チ噴火セシナラン頂上燒石今ニ存在ス）

又男鹿ノ古老ノ言ヲ聞クニ地震ノトキ土臺ヲ回シ建テタル家ハ倒レス只石ニ柱ヲ乘セタルモノハ震動シテ柱ノ地ヨリ離ルヽトキ石ヨリ柱ノ外ツレタルニテ多ク潰レタリト云ヘリ因テ其後土臺ヲ附クルヲ要スルト心得アルヘキ事ナリ。

文化七庚午九月十六日江戸表ニ於テ御用番御老中土井大炊頭ヘ御留守居森川東兵衞ヲ以テ左ノ如ク御屆

私領分出羽國秋田郡男鹿之內去月二十七日山燒ト相見得地下鳴動晝時過ニ至山崩大地震ニテ秋田郡山本郡村々之內凡千軒餘潰家並怪我人等有之趣申來候委數儀相知不申候得得共此段致御屆候猶委細之儀ハ取調之上追而御屆可申上候以上

九月十六日　佐竹右京大夫

一、先月二十七日男鹿寒風山鳴動致シ大震ニテ不少潰家有之死人怪我人不少男鹿御百姓共可及難儀被思召依之爲御救之人參可被下置被仰出ニ付右人參今日秋田ヘ被差下候。

一、松平伊豆守殿（御用番御老中）ヘ先頃御領分男鹿山燒崩大地震ニ付潰家等追々御取調之趣御屆左之通。

私領分出羽國秋田郡男鹿之內去八月二十七日山燒崩大地震ニテ秋田郡山本郡村々之內潰家幷怪我人馬等取調之覺

一、潰家　千四百三十二軒
一、破損家　四百八十軒
一、社潰　壹ヶ處
一、寺潰　拾壹ヶ處

一、潰燒失家　六軒
一、土藏潰破損共　二百四十八ヶ處
一、板藏潰破損共　拾ヶ處
一、死人　六十一人內（男十七人　女四十四人）
一、怪我人　百二十二人
一、殞馬　拾四疋
一、怪我馬　三疋
一、堤破　三ヶ處

右之通御坐候此外田地所々砂埋或地裂等ニテ收納不相成場處モ有之候得共損亡高之儀者收納之上追テ可申上此段御屆候。以上。

十月二十四日　佐竹右京大夫

右之通御留守居關口半八ヲ以テ被差出候處御落手之旨御挨拶。

（右ハ后記ノ內ヨリ江戸表ニテ取捨ノ上御調製セラレシナラン）

又郡別御屆書ノ覺書

一、潰家　合九百三十三軒內六軒燒失
一、半潰家　合三百八十五軒
一、大破損家　合三百八十一軒
一、潰土藏　合二十六
一、半潰土藏　合十九
一、破損土藏　合四十五

一、潰板藏　合五
一、半潰板藏　一
一、破損板藏　一
一、潰板小屋　一
一、半潰板小屋　一
一、潰小屋　一
一、半潰小屋　合十八
一、破損小屋　合二十七
一、死人合五十九人　內十六人男（四人七歲以上／十二人七歲以下）
內四十三人女內（三十四人七歲以上／九人七歲以下）
一、怪我人　合百二十二人
一、殞馬　合十四疋
一、怪我馬　合三疋

山本郡ノ內

一、潰家　合五十一軒
一、半潰家　合五十五軒
一、大破損家　合三十七軒

諸寺院

一、大破損寺　合十一寺
一、同社　合五社

一、同修驗　　拾軒

右之通ニ御候ニ付御屆致候

此調書ハ御國許ニテ調ヘタルモノニテ前ノ通リ取捨ノ上ニ御屆ナリタルナラン。

文化八年辛未正月二十二日御用番御老中土井大炊頭殿へ去年中御損亡御屆ハ左ノ如シ。

私領内出羽國秋田領田畑植付ヨリ去夏中迄作並宜相見得候所初秋之頃ヨリ雨續ニテ實入兼刈立時節相後雪下ニ相成候ニ付去作不熟損亡之覺（御留守居安田五郎兵術ヲ以差出）

高七萬九千九百石餘

内、六萬四千六百石餘　田方

内、壹萬五千三百石餘　畑方

合

右ハ去秋中御屆申上候領分出羽國秋田郡男鹿村々山本郡村々之内去ル午八月二十七日大地震ニテ田畑所々砂埋或ハ地裂等ニテ損亡高ニ相成候分。

右之通ニ御座候依之致御屆候。以上。

正月　　佐竹右京大夫

（百三十七頁乃至百四十頁）

天皇（仁孝）三十世◎義厚（ヒロ）【將軍】家慶

○文政十一年十月十二日院内銀山大盛ニ付山神ニ家紋ノ幕ヲ納ム。（百五十一頁）

○天保十四年七月松前ヨリ馬二十疋ヲ購求シテ男鹿嶋ニ放牧該注進者拂戸村渡邊斧松氏ナリ。

（百五十六頁）

天皇（孝明）三十一世◎義睦（ツカ）【將軍】家定

○嘉永六年癸丑年正月三日八澤木村保呂羽神宮守屋左源治宅燒失、祭事參詣者止宿人百七人燒死負傷者三十九人不慮ノ死傷セシムルヲ以テ左源治ハ國境ヲ追放ス。（百五十八頁）

天皇（今上）　三十二世◎義堯（タカ）【將軍】慶喜

○萬延元年四月御會處ヨリ左ノ通リ達セラル。

六月ヨリ八月マテ大平山登山不相成儀ハ前以被仰渡候通ニ候間尙モ心得違無之樣下々ニ至マテ急度可申付候。

但シ毎年七月十三日ヨリ同二十八日マテ祭禮中ハ登山御構無之候。

一、近來失櫃山迄男女大勢登山致通夜罷在猥ケ間布義モ有之樣ニ相聞、得不濟事ニ候。以來固ク被差留候故心得違無之樣可申付候。尤モ同所ノ義毎年六月ヨリ八月迄登山被差留候。

右登山ノ義六月ヨリ八月マテ差留ラルヽモノハ、田地ノ作付後七月末迄稻作モ出來上ルヲ以テ、其以前ハ人民多ク登山スルトキ雨天續ノ事アルヲ恐レ斯ク差止メラレタルモノナリト。

（百七十九頁乃至百八十頁）

○元治元年八月十六日義堯兵器ヲ整ヘ殊ニ大砲六門ヲ牽キ又鬼（獵師）百餘ヲ引卒上京セラル。云々。

（二百十五頁）

（○以下四百頁は地方戰史の記錄である。官軍たりし秋田藩は此間佐幕黨たりし仙臺、米澤、南部等大藩の包圍攻擊を受けて一時四面楚歌の悲運にあつた。記錄中現れた山名等は少くないが、皆低い所なので我々の興味を惹く事は尠い。よつて充分なる穿鑿は後日を期し、玆には一切を省略する事とする。）

下卷

（○下卷は主として維新改革の事情を示したものである）

○男鹿山ノ鹿狩禁止取消左ノ達アリ。

男鹿山ノ鹿私ニ狩取候儀禁止候段當四月中布告ニ相及候所今般御取消ニ相成候條其旨可相心得事

壬申十月

秋田縣

（二百六十二頁）

○秋田縣郡村名所誌ハ明治七年傳習學校教員（○大平學校ノ事）タリシ時學務係ノ命ニヨリ大山重華ノ艸スルモノニシテ管内ノ概況ヲ知ルノ便ヲ得ルニ足ラン（○縣遂ニ此名所誌ヲ教科書トセズ）

（○この書は明治初年の物として注意すべき點が少くない故、次に全文を其儘轉載する事にする。）

凡コノ秋田縣下ニ生ルレバソノ本土（ウブスナ）ノ地理風土知ラステ居ルハ不學ニテ最耻カシキコトゾカシ、又其ウブスナノ風土ヲモ知ラムトナラバ皇國ノ地理ナトヲ知ラズテハ得アルマシキ事ナレバ聊コヽニイハントス、抑帝國大日本ハ太平洋ノ西北ノ隅ニ在リ都ル嶋國ゾ、魯西亞朝鮮支那國トノ國々ナトニ堺シテ維新コノカタ國内ヲ八十四州ニ區別シテ、畿内五ケ國東海道十五ケ國ニ東山道十三ケ國ナリ北陸道七ケ國アリ山陰ト山陽兩道ハ八ケ國サテマタ六ケ國ナルハ南海道ナリ西海道九ケ國アリテ北海道十一ケ國トナス、今コノ羽後國（ウヂノクニ）タルヤ東山道内ノ一ケ國元明天皇ノ御代和銅五年ニ陸奥國ヲ割リテ置（ハ）レシ出羽國（デハクニ）然ク稱（イ）ヒケルヲ明治二（フタ）トセトイフ年ニ二分シテ羽前羽後トイフ、サテコノ羽後ノ七郡ハ雄勝（ヲ）仙北由利秋田平鹿川邊ニ山本ソマタ陸中國ノ鹿角ヲモ加ヘテ總テ八ケ郡（グンコ）是ヲ管轄スルハ秋田縣、ソノ地勢ヲ考ヌルニ南東北ノ三方ハ羽前陸前陸中ヤ陸奥ノ四ケ國ニ堺シテイツレモ大山脈ニテ取圍ミ西一方ハ渺乎（アヲウナバラ）タル青海原ナルガ是ハ所謂日本海、内地ハ連山波濤ヲナシソノ内平地モ處々ニアリ大小河流數千條共ニ流レテ田畑ヲ滋潤（ムツコク）ス遂ニ海ニ落ツ、マタ海岸ハ彼方（ヲチ）此方（コチ）港ノアリテ船カヽリ氣候ハ寒多ク暑少シ、サテ管内街道ノ道程ハ南羽前ノ堺ナル雄勝郡ノ杉峠北陸奥ノ堺ナル秋田郡矢立峠コノ間大凡六十ト四里二十八町餘、マタ東陸中ノ堺仙北郡生保内ノ峠ヨリ西由利郡松ケ崎マデ二十有三里二十餘町アリ、コノ地ハ海岸ニ沿ヒテ狹クハアルナレド小船ヲ繫ク港ナリ、

管下八郡村々總數一千百二十八、ソノ歳額ヲ算フレバ草高凡五十有一萬四千四百石、現石ニテハ二十有二萬ト九千三百餘、マタ戸口ヲ算フレバ戸數十萬八千ト四百五十餘ニ人口ハ五十八萬七千餘、コノ内貫屬人口ハ三萬ト六千七百餘ニテ、大小神社總數ハオヨソ三千アマリアリ、其内羽後一ノ宮ハ大物忌神社トテ延喜式内ノ社ニテソノ所在由利飽海兩郡ニ跨リシ鳥海山、寺數オヨソ八百餘、サテソノ廳ヲ設ケシハ秋田町第一大區ノ一小區、其結構ハ美麗ナリ然モ管内廣ケレバ横手大館二ケ所ニゾ支廳ヲ設ケ置カレタリ、イデ秋田町ノ緯度數ハ北緯三十九度四十有二分英吉利ノ「グリーンッチ」東經ハ百四十一度七十分、其町數オヨソ百有七十餘町ニテ戸數ハ八千三百ト八十アマリ人口ハ三萬六千四百人、城ハ一箇ノ山ノ上高サハ凡十丈餘、國内五十餘城ノ内ニシテ名ケテ矢留城トイフ、是ハ所謂秋田城ソノ郭中ニ一社アリ八幡神社ト稱ヒケルハ秋田縣社ノソノ一ツ今現ニ中教院アリテ人民ヲ教導シマタ社頭ヤ寺院ニモ説教アリテ聽聞ノ老弱男女數百人、傳習學校洋學校造立アリテコノカタハ生徒日々數百人讀書ノ聲ハ天ニ響キ地ニ轟ク實ニ是文明開化ノ基ナリ、又病院アリテ病者ヲ療シ種痘處モアリテ痘ヲ種ウ、城ノ下ニハ川アリテ旭川トソ名ケタル俗ニハ保戸野河トイフソノ水源ハ仁別山流ル、水ハイト清ク恰モ鏡ノ如クニテ遂ニ御物川ニハ落合ヒヌ、町ノ南ノ端ニハ渡リ場アリテ俗ニコレヲ新川ノ渡リトイフコノ川卽チ御物河、コレヲ渡レハ新屋村戸數ハ凡ソ千軒余當所ノ北ノ地續キハ甚タ廣キ沙漠ニテソノ内最モ高キ地ヲ勝平トイフ高サ十丈ハカリニテ此山ノ沙底ニ酷暑トイヘト氷アリ、コヽニ管内山々ノ多カル中ニ名高キハ鳥海山ヤ駒ケ嶽森吉山ニ大平山八幡平ヤ田代嶽五野宮嶽ニ御嶽山イツレモ神人マシマセリ、其他高山アリケレト一々記スニ暇ナシ、サテコソ諸方ノ山々ハ源泉混々ト晝夜ヲ舍テスニ流レテ溪ヤ或ハ瀑布ヲナセリケル、然トモ瀑布ノ高キハ八森山ノ白布瀑布峰吉川村ノ峰ノ瀑布、門前村ノ大瀑布ヤ阿仁山中ノイロハ瀑布イツレモ落チテ川々ノ水源トコソハナリニシカ、今ソノ川ノ數多アル中ニ最モ大キナル御物川トソイフナルハ其水

源ハ雄勝郡東安山ヨリ流レ出テ其他諸方ノ川々ノ落合ヒ遂ニ海原ニ注クコノ川長サ三十里、ソノ海口ノ名ヲ問ヘバ土崎港トイヘリケル最モ繁花ノミナト町戸數ハ二千百六十人口九千四百アリ大船小船檣ノ並ヒシ樣ハ林カト疑フバカリナリ、サテマタ一ツノ大川アリコレヲ米代河トイフ俗ニ能代河トイフソノ水源ハ陸奥國ノ二戸郡ノ田山村ソノ他阿仁諸山ノ川々ノ落テ能代港トナリニケリ斯テソノ長二十五里コノ地マタ最モ繁花ニテ戸數凡二千百人口一萬七百人河口ハ常ニ數百ノ入船出船絶間ナシ、マタ子吉河トイフ川ハソノ水源ハ鳥海山由利一郡ノ山々ヤ雄勝郡ノ彼方此方ノ諸山ミナモトトナリ落テ古雪港ニ流レ來テ遂ニハ海ニ注リニケルコノ河長サ十八里、マタ溫泉ノアリテ管内ニ多カル中ニ大瀧ヤ小安湯本ニ鶴湯等トモニ病者ニ利益アリマタ山々ニ金屬アリコレヲ堀リ出ス所ヲバ鑛山トコソハ名ケタレ抑鑛山ノ名高キハ大葛金山阿仁銅山銀山マタ鉛山太良山ニモ鉛アリ院内銀山小坂ニモ銀山アリ尾去澤ニ銅出ル山アリシ廣久内玉川ノ湯本下ニハ鐵砂山幸屋渡ヤ萱草ノコノ二ケ處ニハ石炭山河原毛山ト大深嶽コノ山々ニ硫黄出ツ、サテマタ原野ハ處々ニアリ其内最モ廣ルキハ金光寺村ノ廣野ニテ南北三里東西ハ一里アリトソ更ニ又是レヨリ廣キハ大野臺東西三里南北ハ其長凡ソ七里アリ、コヽニ管下ニ名ノ高キ名處古跡ハ多カレトソノ内一二ヲ書イ摘マハ、矢橋村ニハ日枝社神殿最モウツクシヽ春ノ頃ニハ境内ニ數百ノ櫻咲匂フマタ同村ノ善良寺明治元年ノ戰爭ニ討死シタル官軍ノ遺骸ヲ葬リシ所ナリ、寺内村ノ高清水世ニハ希ナル清水アリマタ同村ノ古四王社ソノ勸請ヲ尋ヌルニ崇神天皇ノ御代ナルガ四道將軍ノ其一ツノ大彦命東國ニ發行アリシソノ時ゾ、大同年間ニ田村麻呂奏聞ノウヘ再建ス、マタコノ村ノ兩津山コヽナル社頭ハ招魂祠明治紀元ノ戰ヒノ官軍戰死ノ忠魂ヲ慰メ祭リシ所ナリ、サテコソ風景ノイトヨキハ海ニ突キ出シ半嶋男鹿乖岸絶壁譬フルニモノナキ中ニ妙ナルハ孔雀ガ窟大山橋マタ小山橋ナドソノ外ニ數千ノ巖石海ニ浮ク、マタコノ嶋ノ戸賀ノ灣ハ波穩ナリケレドソノ近傍ニ暗礁アリ、次ニ八郎潟トイフナルハイト大キナル湖水ニ

テ南北凡七里餘ニ東西オヨソ五里バカリソノ東邊ノ三鞍鼻コヽソ所謂袖ガ浦コレヨリ西方ヲ眺ムレバ半嶋男鹿ノ本山ヤ眞山寒風ノ山々モ澄ミワタリテゾ見ユルナリ、マタコノ潟端ノ新關ハ數百萬ノ桃林實ノ賣出イト多シサテモ奇ナルハ切石村海ヲ距ルコト四里ニシテ鹽氣ヲ含ム井戸アリテ俗ニコレヲ鹽井トイフ、マタ小繁ノ渡リニハ七坐山ト世ニトナヘ風景ノヨキ石山ニテコヽニハ天神ノ社アリ、次ニ田澤ノ槎潟俗ニ所謂田子潟水最澄ミテ千尋ノ底ノ小石モ數フヘシ、マタ鹿角郡ノ十灣田潟是モ大キナル湖水ナリ、次ニ世間ニ希ナルハ大谷村ナル梅ノ木ハソノ幹尤モ太クシテ枝數十間ニ蔓延ス、金澤村ノ八幡社ハ寛治年間清衡ト武衡コヽニ籠城シ遂ニ義家公ニ亡サル今モコヽニ當時ノ燒米土中ニ在リ、マタ鎌倉權五郎景政カ烏海彌三郎友久ニ射付ケラレタル左目ヲ洗ヒシ川ハ厨川、サテ小野村ノ桐木田出羽郡司ニテ下向セシ小野良實ノ住所ニテ小野小町ノ生レシ地今モ小町ガ植エタリシ芍藥ナトモ尚存ス、鹽越村ノ象潟ハ古來名高キ湖水ナルヲ文化元年鳥海山噴火セシ後又地震コノ時全ク埋リテソノ邊ナル蚶滿寺地下ニ沈沒セシトイフ、八澤木村ノ保呂羽山波宇志別神社トテ延喜式内ノ社ニテ秋田縣社ノソノ一ツソノ外名所古跡ハ多ケレド處狹ケレバ略キタリ、今ハ繁花ノ町々ヲ一ツ二ツ書イ摘マバ先ツ横手町戸數一千八百餘人口七千九百餘ニ、湯澤町ナル人口ハ五千九百三十餘戸數ハ一千二百餘ニ、岩崎町ノ人口ハ一千八百四十ニテ戸數ハ三百九十アリ、本莊町ノ人口ハ六千七百五十ニテ戸數千五百八十ニ、大館戸數ハ一千ト六百餘アリ人口ハ三千九百八十餘、鹽越港ノ人口ハ二千四百五十餘ニ戸數五百七十餘、矢嶋町ナル人口ハ二千二百四十餘ニ戸數四百七十餘、大曲村ノ人口ハ二千七百家數ハ五百ト四十アマリアリ、角間川ナル人口ハ二千四百ニ家數ハ五百二十ニテ、檜山町戸數三百九十餘ニ人口二千アマリアリ、刈和野戸數三百餘人口一千七百餘、十二所戸數四百餘ニ人口大凡一千ト九百八十アマリ、サテモ花輪ノ家數ハ五百八十アマリニテ其人口ハ三千ト九百アマリアリシトゾ、サテモ管内産物ハ天造人工種々ト有ルカ中ナル二ツ三ツ取リ摘ミテ書カムニハ

能代春慶塗物ヤ材木寸甫玖。瑰花、大館曲器材木等、横手木綿ニ茶ヤ莨、田村ノ燃土マタソノ灰、矢橋村ニハ人形ヤマタ粟飴ヤ石腦油、寺内陶器瓦等、本荘桑酒鍋釜ヤ、鹽越鋏、長野酒マタ紙類ノ産モアリ、新屋麪類玫瑰花箒筵ヤ鹽ノ産、五十目村ノ鉄器類ソノ他材木下駄足駄、水無村ヨリ砥石出ツ、阿仁銀山ノ産物ハ金銀銅ヤソノ外ニ木葉石ト孔雀石、脇本村ニハ切石ヤ心太草ヤウルミゴ、鰤、北浦ハ海苔ヤ、和布ヤ鮑籃、龜田材木寸甫等、毛馬内村ニハ細布ヤ霰餅アリ、矢嶋ニハ材木莨麻苧ヤ栗、八森村ニハ石腦油鮑鰤金銀出ツ、飛根荷上場籃ト麻絲、曲農船趣。兩村ハ白魚ヲ産スルイト多シ、七日市ニハ畝織ヤ八丈嶋ヲ織リ出ス、米内澤ノ小石竈、一日市村ニハ紅花アリ、角館町ノ産物ハ樺印籠ヤ菅笠ヤ麻布紫薇莨等、刈和野村ニハ簑ノ産、生保内村ノ蚊屋地布、湯澤ノ産物硫黄ト茶、稲庭村ノ干溫飩、花輪紫茜ノ絞、舟ガ澤ニハ蕨ノ粉、長木ガ澤ニハ疑冬アリテソノ葉ノ經。リ三四尺莖ノ高サハ五六尺、薪ノ名産北浦ヤ馬場目澤ト仁別澤、長木ガ澤ニハ杉アリテ何レモ多ク切リ出セド盡ル期ナキハ奇妙ナリ、秋田町ナル産物ハ名ニ負ヒタリシ畝織ヤ平袴地ヤ黄八丈白絹羽二重銅器類草履皮緒ヤ眞綿等マタ以前ヨリ養蠶ノ業モ開ケテアリニシヲ然モ此頃一般ニ盛リニナリテ蠶種ヤ生絲眞綿ヲ産セサル所ハ更ニ無リケリ、ソノ他管内八郡ハ馬ヲ産セサル處ナシ是モ秋田ノ名物ゾトカクイツコノ在ニテモ物産多キハ國ノ爲人々勉强サヘスレバ何物ニテモ作リ得ベシ必ズトモニ勤ミネカシ。（二百九十七頁乃至三百一頁）

羽後國秋田縣地誌提要

形勢　連山東北ヲ蔽ヒ土頗ル荒曠民居稀疎寒多ク暑少シ但沿海港泊アルヲ以テ運輸ニ便ナリ。

疆域、郡數、戸數、人口、歳額、縣治、軍鎮、學校、名區、驛路、港灣、岬角、暗礁、略ス。

名山

烏海山由利郡山下小瀧村ヨリ絶頂迄六里又同郡矢嶋城内村ヨリ絶頂迄凡六里　太平山秋田郡山下山谷村ヨリ絶頂迄四里十八丁　森吉山同郡山下荒瀬郷打當村ヨリ絶頂迄三里　田代山同郡山下早口村ヨリ絶頂迄三里

本山同郡男鹿山下門前村ヨリ絶頂迄一里二十八丁　岩谷山河邊郡三内村ノ支郷沙子淵村ヨリ絶頂迄十四丁三十四間　稲村嶽由利郡鳥海山ノ西北ニ有リ人行不通ノ所里程不詳山下横岡村ヨリ絶頂マテ三里ト云傳有リ　田代山山本郡山下田代村ヨリ絶頂迄一里餘　鏑嶽雄勝郡山下役内村ヨリ絶頂迄三里半險阻羽前最上郡境　御駒山同郡山下檜山臺村ヨリ絶頂迄五里半險阻ノ所二ケ所自然登リ三里陸前栗原郡境　時宗嶽同郡山下岩井川村ヨリ絶頂迄三里半二里ノ間險阻一名大森ト云陸前膽澤郡境　高松嶽同郡山下高松松泥湯温泉ヨリ絶頂迄四里自然登ニテ險阻無　小安嶽同郡山下川向村ヨリ絶頂迄二里半一里ノ間險阻也　東鳥海山同郡山下相川村ヨリ絶頂迄一里但十八丁ノ間險阻　八方嶺平鹿郡山下黒澤村ヨリ絶頂迄三里一里ノ間險阻但陸中和賀郡境　御嶽山同郡山下大松川村内袖山ヨリ絶頂迄一里十丁一間ノ間急ナリ　白木嶺同郡山下小松川村ヨリ絶頂迄一里　保呂羽山同郡山下八澤木村ヨリ絶頂マテ一里八丁　明澤嶽同郡山下明澤村ヨリ絶頂迄十八丁登急ナリ　駒形嶽仙北郡山下生保内村ヨリ絶頂迄三里半二里ノ間險阻　阿彌陀嶽同郡山下白岩村堀内澤ヨリ絶頂迄五里但一里半險阻陸中和賀郡境

朝日嶽同郡堀内澤ヨリ絶頂迄五里但一里半險阻一名内木香ト云　大深嶽同郡山下田澤村ヨリ絶頂迄三里半但十六丁三十間險阻陸中岩手郡境　藥師嶽同郡山下大田村ヨリ絶頂迄三里陸中和賀郡境一名奥樂子ト云　大佛嶽同郡山下檜木内村ヨリ絶頂迄三里秋田郡境　國見嶺同郡山下生保内村ヨリ絶頂迄一里半險阻陸中岩手郡境　神宮寺嶽同郡山下神宮寺村ヨリ絶頂迄十八丁但七八丁ノ間登急ナリ　寒風山秋田郡男鹿檜澤村ヨリ絶頂迄一里　馬場目嶽同郡山下落合村ヨリ絶頂迄三里半　七座山秋田山本郡境山下小繋村ヨリ絶頂迄十八丁位

原野、略ス。

大川

御物川雄勝郡銀山町東安嶽ニ出役内川岩崎川横手川玉川戸嶋川ヲ合セ平鹿郡仙北郡河邊郡ヲ經テ北西ニ流レ三十餘里秋田郡土崎港ニ抵リテ海ニ入ル幅廣キ所二丁四十間　能代川俗米代川ト云水源陸奥二戸郡田山村ヨリ出陸中鹿角郡ヲ經テ大湯川毛馬内川ヲ合シ羽後秋田郡ニ至リ阿仁川藤琴川ヲ合シ西流シテ海ニ至リテ海ニ入ル長サ二十五里幅最廣キ所一丁四十間餘　子吉川由利郡鳥海山ヨリ出鮎川石澤三條川薬師川ヲ合セ同郡矢嶋本莊ヲ經西流シ古雪港ニ至リテ海ニ入ル其流十八里餘幅最廣キ所一丁四十間　岩見川河邊郡岩見村鵜養山砂子淵山秋田郡太平山ヨリ出三内村戸嶋村柴野村ヲ經テ御物川ニ入　大又川秋田郡荒瀬村仙北郡境立又ヨリ出小又川小阿仁川ト合シ米代川ニ入　小阿仁川同郡羽根山村河邊郡龍ケ峰ヨリ出大阿仁川ト合シ米代川ニ入水源ヨリ十一里餘ニシテ大錠小錠ト云アリ高岩峡ヲナシ水流駛急ナリ　藤琴川山本郡藤琴村太良山ヨリ出米代川ニ入ル　白雪川由利郡鳥海山谷々ヨリ出安沼川鳥越川ヲ合セ白雪

川トナル平常水勢暴也急雨漲水大石ヲ轟流ス畑村立井地村ヲ總テ芹田村ニ至リテ海ニ入　岩崎川雄勝郡御助山陸前栗原郡ニ出稻庭川寫尻小川ヲ合シ小館村ニテ玉川ニ入　玉川同郡田澤村大深嶽陸中岩手郡境ニ出小和瀬川大先立川生保内川鰍瀬川齊内川ヲ合セ神宮寺村ニ至御物川ニ入　横手川平鹿郡黑澤村三森ヨリ出大松川筏川ヲ合シ角間川村ニテ御物川ニ入

池沼

八郎湖秋田山本雨郡ニ跨ル南北七里東西三里　田澤湖仙北郡田澤村東西二十五町南北三十三町　淺内沼山本郡淺内村方一里餘

瀑布

湯瀑布雄勝郡高松村川原毛湯本高十六丈五尺幅一間高松川ニ注ク　女瀧澤瀑布同郡畑等村小安湯本高十四丈幅二間稻庭川ニ注ク　鎧瀑布同郡岩井川村時宗澤高十一丈幅八尺廣當川ニ注ク　白糸瀑布仙北郡峰吉川村峯ノ山下高四丈幅三間流末田水ニ成　檜内澤瀑布同郡生保内村檜内澤高十丈幅三間流末生保内川ニ入　大瀑布同郡白岩前郷村鯱足澤高五十丈幅二間外十餘所高十丈ヨリ五十丈ニ至ル流末皆玉川ニ入　高瀑布同郡田澤町濁リ澤高十丈幅一間半流末玉川ニ入　長八瀑布河邊郡岩見村岩見川ノ源高十丈幅一丈外一所高十一丈幅八尺　釣瀑布秋田郡八田村金山澤高十二丈五尺幅二丈流末太平川ニ注ク外一所高丈五尺　鶏鳴瀑布同郡山谷村皿見内高十六丈五尺幅一丈六尺太平川ニ注ク　大瀑布同郡男鹿門前村高十八丈幅三間外一所高十二丈幅二間末流皆海ニ入　大瀑布同郡小又村高十丈幅三間二尺流末堀川ニ入　白糸瀑布同郡荒瀬村高五十丈幅廿間外三所高十五丈ヨリ二十丈ニ至ル流末皆大又川ニ注ク　四十八瀑布同郡小雪澤村地形ノ内小卷山ヨリ流ル高十丈幅五尺巖石嵯峨ノ間ニ注キ又流レテ瀑布トナリ或ハ五歩或ハ十歩一道ノ水ニシテ數十ノ飛流ヲ連ヌ俗ニ之ヲ四十八瀑布ト稱ス　七倉ノ瀑布同郡小澤田村七倉山ニアリ七峰高聳ノ間ヨリ各一道ヲ懸ク皆高サ七丈幅二間程流末同シク小阿仁川ニ注ク　白布瀑布山本郡八森村高サ十五丈五尺幅四丈五尺流末川トナリ海ニ入　七ツ釜瀑布由利郡百宅村山中岩石七級ヲナシ各八九尺ヨリ一丈餘ニ至ル級毎ニ瀑布アリ瀑布コトニ坎アリ俗コレヲ七ツ釜トイフ　白瀑布同郡同所七ツ釜ノ流ヲ合シ百宅村法體川ニ注ク高十五丈位幅二間位　赤瀑布同郡下川内村大栗川ノ源□□□高十六丈位幅二間位外一所流末高十七丈位幅三間位　牛瀑布同郡畑村白雪川ノ源高サ十七丈餘幅三間位　法體瀑布同郡百宅村立根川ノ源高サ十六丈巾五間　檜山瀑布同郡下直根村又瀧ノ澤瀑布ト云高サ五十丈幅三間河熊川ニ注ク　白糸瀑布同郡鳥海山ノ西北ニ有險峭人行不通高幅詳ナラス中央ニ岩石有テ二段ニ落ツ滿漲ノ時ハ二里餘ヲ隔テ之ヲ見ル流末横岡村本郷村ヲ經奈良川トナル　奈曾ノ瀑布同郡小瀧村ノ南西ニ有白絲瀑布ノ流末ナリ高七丈幅

溫泉

湯本村秋田郡男鹿○鹽氣ト硫氣トヲ混ス小瘡金瘡揚梅瘡火傷ニ宜シ大瀧村同郡○湯源四ケ處皆硫氣ヲ混ス症氣留飲諸瘡金瘡等ニ宜シ湯臺村同郡森吉村支郷○硫氣ヲ混ス痂癩ニ宜シ黑湯仙北郡生保内村○鹽氣ト硫氣トヲ混ス痂氣ニ宜シ小友湯同郡外小友村○硫氣ヲ混ス眼病疥瘡ニ宜シ田澤村同郡○鹽氣ヲ混ス痂氣ニ宜シ鶴湯同郡田澤村○硫氣ヲ混ス眼病打傷刎傷に宜シ蟹湯同郡同村○硫氣ヲ混ス痂氣眼病刎傷ニ宜シ鴻湯同郡同村○鹽氣ヲ混ス痂氣ニ宜シ酢湯同郡上椿木内村○硫氣ヲ混ス疥ニ宜シ泥湯雄勝郡高松村○鹽氣ヲ混ス痂氣ニ宜シ河原毛湯同郡同村○硫氣ヲ混ス眼病疥瘡ニ宜シ湯臺湯同郡役内村○湯源二ケ處共ニ硫氣ヲ混ス一ハ眼病疥瘡ニ宜シ一ハ痂氣脚氣ニ宜シ小安湯同郡畑等村○鹽氣ヲ混ス痂氣ニ宜シ

大社、巨殺、物産、鑛山、略ス。

陸中國之内鹿角郡

村數、戸數、人口、歲額、(以上明治五年ノ調ニ依ル。)名邑、驛路、略ス。

名山

青サマ嶽鹿角郡山下蓙畑村ヨリ絶頂迄二里半四岳嶽同郡山下大湯村ヨリ絶頂迄四里半大國平同郡山下蓙畑村ヨリ絶頂迄七里餘五ノ宮嶽同郡山下小豆澤村ヨリ絶頂迄三里八幡平同郡山下谷内村ヨリ絶頂迄六里頂上方六里硫黄山同郡山下谷内村ヨリ絶頂迄七里

大川

大湯川陸奥三戸郡境鹿角郡大清水ヨリ出ツ毛馬内川ヲ合米代川ニ入ル毛馬内川鹿角内砂子澤ニ出ツ大湯川ト合シ米代川ニ入ル米代川陸奥二戸郡田山村ヨリ出ツ大湯川毛馬内川ヲ合セ羽後秋田郡ヲ經同國山本郡能代港ニ出海ニ入ル水源ヨリ流末マテ二十五里

池沼

十灣田湖陸奥三戸郡ニ跨

瀑布

銚子瀑布（鹿角郡大湯村大湯川ノ源高サ十六丈三尺幅二丈餘）中瀑布（同郡同村銚子瀑布下流高サ三丈幅三丈餘）浦志内瀑布（同郡浦志内ニアリ高サ五丈幅七尺下流浦志内川ト稱シ米代川ニ注ク）曾利瀑布（同郡谷内村高サ十丈幅一丈流レテ谷川トナリ米代川ニ注ク）七瀑布（同郡藤原村壁巖數丈七段ニ張リ落ツ故ニ名ク下流毛馬内川ニ入ル）

温泉

大湯下ノ湯（鹿角郡大湯村○硫氣ヲ混ス脚氣仙氣ニ宜シ）大湯川原（同郡同村○礬氣ヲ混ス瘡毒ニ宜シ）熊澤村（同郡○硫氣ト礬氣トヲ混ス痰咳痼氣ニ宜シ）湯瀨村（同郡○礬氣ヲ混ス痼氣ニ宜シ）

物産、鑛山、略ス。

右明治六年五月調。（三百一頁乃至三百十四頁）

附錄

領内神社寺院修驗等調

國社

平鹿郡

保呂羽山羽宇志別神社　社領高二百六十五石

神主　大友正木　守屋飛彈守

本田高社領百六十二石五斗　五人御扶持　大友正木　同上　同上　守屋飛彈守

平鹿郡

御嶽山鹽湯彦神社　社領高三十石　本田

神主　同前

山本郡

高岳山副川神社　社領高三十石　本田

以上三國社ト稱フ

三國社神樂役　平鹿郡八澤木村　鈴本出雲　同横手山内村　三梨遠江正
秋田郡浦大町村　鈴木越前正　（○以下略。附錄九十五頁及九十六頁）

御國十二社

保呂羽山（八澤木）　本山（男鹿）　眞山（男鹿）　三輪（杉ノ宮）　若宮八幡（太平）　熊野（六郷）　八幡（金澤）　天王（船越）
愛宕（院内）　觀音（藤倉）　古四王（寺内）　天神（北野）
合計　十二社　（附錄百二頁）

○三國社（保呂羽神社　三嶽山神社　高岳山神社）

農耕ノ時ニ際シ苗植付ニ雨ナク又夏時苗實入ントスルニ際シ雨霽レス天候不順ナル時ニ方リ御刀番ハ御代參トシテ三國社ニ雨乞又ハ晴天ヲ祈願スル例ナリ古來其御靈必スアリ。（附錄二百三十八頁）

○平鹿郡

（○保呂羽山八澤木神社の緣起）

八澤木神社ハ八澤木村ニアリ八澤木トハ澤八ケ處ニ有ヲ以テ唱フトモ又木ノ澤山ナル故名クト或ハ夜刃鬼ト云、其緣記ニ天平寶字元年酉八月十五日平鹿郡夜刃鬼ノ城主大友右衞門藤原吉親夢ノ告ケアルニ因リ西ノ方山嶽ニ分ケ入リ山中ニテ一人ノ獵師ニ逢フ其名ヲ問フニ由利ノ住人遠藤藤治大郎ト答フ吉親云フ予嶽ニ上ラントスルニ道ナシ御邊案内セヨト遠藤心得タリト兩人嶽ニ行ントスルニ道ナシ大木茂リ嶮岨深ク空見ヘス又麓ニ歸ラントスルモ叶ハス然ルニ墨染ノ衣ヲ着タル老僧一人忽然ト顯レ金色ノ光リアル木ノ中ニ佛像アリ是卽世界ノ獨尊釋迦如來未世衆生ヲ濟渡センタメ天笠佛生國ヨリ飛降リ日本和州吉野郡金峰山藏王權現ト顯ス今又此山ハ東方ハ虛空蒼々トシテ明星ノ光リ指出テ下居石垣ニシテ罪障懺悔ノ汗ヲ流シ南方ハ峨々ト聳ヘ梢ヲ吹ク風索々トシテ五衰三熱ノ眠ヲ醒ス西方ハ滄海

漫々トシテ夕日ノ影長閑ニテ海水天ヲ浸シ北方ハ谷深クシテ水聲一切衆ノ塵俟ヲ洗フ此峰ニ社檀ヲ創建シ尊崇セヨ一度參詣ノ輩ハ七難三毒ヲ消滅ス利生ヲ蒙ランコト疑ヒナシ汝等此谷ヲ下ラハ必ラス麓ノ山路ニ行クヘシ我ハ此山鎮護地藏菩薩ト勿チ消失セ玉フ、兩人不思議ノ思ヲナス敎ニ從テ麓ノ道ニ下レハ即チ里ニ出テケル其後兩人彼ノ峰ニ大伽藍ヲ建立ス山號ヲ如何ニト詮議スルニ彼ノ靈地ニ鷲ノ羽多ク飛來ルヲ以保呂羽ト稱スヘシ又兩人始テ山ニ通夜セシ時東次郎ハ圓キ器ニ飯ヲ入テ來ル大友ハ角ナル器ニ飯ヲ入レ來ル互ニ疲ヲ凌グ其時御鉢ト名付ケ權現ノ寶前ニ供フル例ニテ今ニ圓器ハ遠藤由利ノ洗米入角ハ秋田洗米入トス、御殿山ハ高山ニシテ社掌ノ金蜂山ト岩城權之介ノ書ナリ又鞍石アリ又秋田別當ハ大友治部少輔守屋遠江守等ナリ龜田由利別當遠藤孫太夫ナリ。（附錄二百四十六頁）

○仙北郡神宮寺嶽

神宮寺嶽ハ神宮寺村ヨリ川ヲ隔テアリ往古阿部貞任同宗任ノ籠ル地ナリト地形平陸ヨリ大川ヲ隔テ數十丈ノ高嶽ニシテ頂ニ八幡社アリ西南ハ山續キ籠兵出沒自由ノ要害ナリ。（附錄二百四十七頁）

○秋田郡男鹿天王船越湖水

天王、船越ノ湖水ハ八里潟云村老云フ一季一度春ノ雪汁水ニ南潟岸海ト十歩程モアリ此水乘リ通リ海上潮ト分リテ鳥海山ノ麓ヘ打付ル其勢盛ナリ又海潮湖水ニ入ル其鳴ル事夥シサレト往古ヨリ十歩程ノ海ヲ隔ルノ地ハ破ルヽナキハ不思奇ナリト云又昔ハ湖水ノナカリシ時此處ハ山ナレハ近キ里人三人木樵リニ來リ其内八郎ト云者一人澤ノ邊ヘ下リ魚ヲ三ツ採リ三人ニテ喰ントシヒ是ヲ燒キシニ其香ハシキ堪ヘカタク兩人未タ來タラサルニ魚一ツ食シタルニ其味並フモノナク堪ヘ兼ネ殘リ二ツノ魚モ食フニ咽ノ喝ル事限リナシ八郎澤水ニ臥シ浸リテ呑ミ流レノ盡クルマテ呑ミ干サント臥居タリシ折柄二人ノ木樵リ來リテ八郎カ姿ヲ見ルニ其容體變リ二人ニ向テ前ノ事實ヲ語リ今大蛇ニ成ルヘシ早ク里ヘ歸ルヘシト云シカ見ル内ニ變リテ二十尋餘ノ大蛇トナリ峰々谷々ヲ崩シ此湖水トナレルナリト故ニ八

郎潟ト唱フト然カアランカ今ニ家財類又ハ大木等ノ埋ミアリテ時トシテ現出ス八郎住處ト云フテ天王村社堂ノ邊湖水ニ淵アリ往來船漁船共ニ此淵ヲ乘リ通ルコト能ハスト○仙北郡田澤村山中ニアル田澤潟ハ此八郎カ妻神ナリト毎年二月十二日田滿潟ヨリ八郎發顯シ同日秋田茶町商古川惣右衞門ナルモノニテ一泊シ翌十三日八郎潟ニ歸ルト云フ因テ年々十月十五日ヨリ二月十一日マデ田澤潟ニ行テ二月十三日ニハ歸ルト其日ハ潟ノ氷リ必ラス解クル故ニ八郎潟越ト今ニ唱ヘルナリ男鹿嶋本山眞山兩山ハ舊跡ノアル處ニシテ本山ハ漢ノ武帝ヲ祟メ祀リタルト云石階等大ナルモノアリテ人工ノナシ得ヘキアラスト見ヘタリ西ハ海面蒼々戸賀ノ澗アリ商船出入多シ北ハ水面ニ少シク出タル嶋アリ水嶋ト云畠ケ村ノ西北ニ方ル此嶋ハ海藻ノ類多シ又字蘆ノ倉トテ本山ノ西直下ナルニアリ又山橋長サ十丈同所ニ孔雀カ窟アリ其北方蝙蝠カ窟アリ又帆掛、龍頭、アサカ嶋等ノ風景ハ門前村ノ方ニアリ皆ナ小舟ニテ此風景ヲ眺ム。(附錄二百四十七頁及二百四十八頁)

○大館釋迦內村ノ古戰場古事

往吉最明寺時賴公此釋迦內村ニ釋迦佛ヲ納メ寺ヲ建テ初七日山ト號ス時賴奧州津輕ヘ通リ玉フニ白澤村ノ邊ニ鎌倉海道ト云フ古キ路形アリ釋迦內ノ南ニ故館アリ母衣縣御前ノ往所ト云同村ニ亂川ト云アリ津輕ト比內ノ故戰場ナリ津輕勢ハ陣場臺村ニ陣ス右村ノ近邊寄合澤ニ諸將寄合軍評議ス此內勢ハ萩長森ヘ物見勢ヲ居置キ津輕勢ハ亂川ニテ戰フモ萩長森ノ物見勢ニ後ロヲ絕タレ散々ニ敗レ長ク走ルト今ニ其所ヲ長走村ト云陣場臺ノ邊ニ劒カ臺ト云アリ津輕勢鍔ヲ割ラレ切羽ヲ碎キ鎗ヲ打落サレ悉ク死亡シタル所ナリ今ニ鎗ノ折レ鍔等土中ヨリ出ルコトアリト云又長走村ノ產神尻合ト云奧羽ノ丈媛ヲ祭ル乃尻合石トナル今多茂木大明神ト祭祠ス別當成就院ナリ又白澤村近傍城カ倉山アリ頂ニ三ツ倉アリ杉少シク生ヘ而モ皆庇アリト天狗ノ住居ト云又男神女神ト云山アリ修驗等大嶽ヲ回山スカタキトキハ城ケ倉ト男女神兩山ヲ登山スト又大館鳳凰山アリ昔該鳥降ルヲ以名付クト鬼城淺利氏ノ居城ナリト

云ヒトリ澤ト云所ニ鬼ノ住居スト岩神權現ノ社アリ。（附錄二百四十八頁及二百四十九頁）

○田代山

田代山ハ靈山ニシテ花畑並ニ田アリ人ノ耕作セル如シト烏帽子山又雷山ト云アリ雷山ハ人跡絶ヘ山靈嚴シキ故登山スルコト能ハスト。（附錄二百四十九頁）

○十二處獨鈷村

牛轉ハシ山ト云アリ淺利氏ノ館ナリ其時代松二本アリ大日堂アリ此內一ノ社ニシテ浮嶋アリ其池正月十六日火災ヲ告クル池ノ水ニ赤キ方角ニハ火災アリ故ニ比內中之ヲ試ミ謹シムト云大日堂ハ應永二戊戌年建立ナリ。（附錄二百四十九頁）

○小田瀨山ノ變地

小田瀨山ハ秋田郡沖田面村支鄕小田瀨ナルニアリ延享二丑年二月中旬山中鳴動甚シク山中洪水ニテ往來止ム是ハ里森越ト云フ阿仁ヨリ淺見內ニ越ユル處ナリ土民四五日此變ヲ見屆ケ其赴ヲ代官平井治右衞門ニ訴フ平井氏ハ藩主（佐竹家）ニ申立撿使役丹內藤右衞門組ニ命ス之ヲ實撿セシムルニ當山二ツニ割レ頂ノ橫木ハ流レ倒レテ水流ヲ止メ殘土ハ自ラ土手トナル故凡ソ三百八十間餘ノ潟トナル深サ計リ難スト。（附錄二百四十九頁及二百五十頁）

（完）

注意　文中文字の右傍に○を施せるは原本の文字に從ひたるものにて誤植に非ることを示す。

校正者識

昭和二年十月二十八日印刷
昭和二年十月三十一日發行

【定價金貳圓五拾錢】

著作權所有

編輯兼發行者　新潟縣三島郡深才村深澤　高頭仁兵衛
東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷者　島連太郎
東京市芝區高輪南町三十番地

發行所　日本山岳會
振替口座東京四八二九番
東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷所　三秀舍
東京市神田區表神保町

發賣所　東京堂

山岳特別號殘本販賣

奥上州號　山岳第十六年第三號
本欄及雜錄二百十二頁　圖版十　挿畫二十五　定價金貳圓五拾錢

尾瀨號　山岳第十九年第一號（殘本極僅少）
本欄及雜錄百三十頁　圖版二十八　定價金壹圓五拾錢

奥羽號　第一　山岳第二十年第三號
本欄及雜錄百七十五頁　圖版十四　定價金貳圓

黑部號　山岳第二十一年第二號
本欄及雜錄百八十四頁　圖版三十一　地圖一　定價金貳圓五拾錢

右孰れも少數の殘本あり御用の節は左記に御註文被下度候（御照會は往復葉書又は返信切手附にて願ひます）

東京市芝區高輪南町三〇

健全社書店

振替口座東京三二〇五二番

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XXII 1927 No. 1